

2023(令和5)年度

障害者スポーツを取巻く 社会的環境に関する調査研究

競技団体の実態、大学の現状、ユニ★スポ体験の効果、選手のキャリアに着目して

第1章

障害者スポーツ競技団体の実態調査

第2章

大学における障害者スポーツの現状に関する調査

第3章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

第4章

障害者スポーツ選手のキャリア調査



はじめに

YFMS 障害者スポーツ調査研究プロジェクトリーダー
藤田紀昭

東京 2020 パラリンピックが終わって 3 年が過ぎようとしている。関係者の中には「パラバブルの崩壊」を危惧する声がかねてよりあった。しかし、企業の支援や自治体の事業や予算などの一部に後退はみられるものの、恐れていたほど大きな縮減は今のところみられない。パラスポーツへの関心が一時的な盛り上がりではなく、人々の意識に根付いた結果だと信じたい。もしそうだとすれば東京パラリンピックのレガシーとして胸を張ってもよいのではないだろうか。

パラリンピック自国開催のレガシーはその国の法制度の状況、パラスポーツの実態や共生社会実現の進捗状況、国民の意識の在り方やレガシーを語る時期によって異なるものである。仮に共生社会が完全に実現した社会があるとするれば、パラリンピックの目的からみて、その国で大会を開催する意義はあまりないし、レガシーとして、新たに残るものも少ないはずである。立派なスポーツ施設をつくった直後は素晴らしい有形のレガシーであっても、その施設が毎年大きな赤字を出すことになれば負のレガシーと言わざるを得なくなる。

この点で日本は大会招致決定の 2 年前にスポーツ振興法が全面改正され新たにスポーツ基本法が制定され、その中でパラスポーツの振興と強化が謳われ、パラリンピック開催による果実を実らせ収穫する準備ができていたと言えるかもしれない。もし、2016 年の大会招致が成功していたら、ここまでの成果があげられたかどうかはわからないところである。

さて、本研究プロジェクトは大会招致が決まる前年の 2012 年に発足した研究グループである。それ以降、わが国のパラスポーツの状況を調査し、報告してきた。決して十分とは言えないが、エビデンスベースでその変化を残してきたことにはそれなりの意義があると考えている。具体的には選手のスポーツキャリアの変化、競技団体の変遷、パラリンピアンへの認知度の推移や、パラリンピックのテレビ放送やパラ選手を使った CM などメディアにおけるパラスポーツの取り扱いの変化、そしてパラリンピック教育の成果などである。先述の点からすると、これらの調査結果自体が東京パラリンピックのレガシーと言えるかもしれない。

今年度の報告書は競技団体調査、大学関連調査、ユニスポ調査、パラ選手のキャリア調査の結果が主な内容となっている。2024 年 2 月 17 日には競技団体調査の結果をもとにしたシンポジウムを開催したが、日程の関係で本報告書には掲載できなかった。シンポジウムの詳細は次年度報告書に掲載予定である。

本報告書の第 1 章 障害者スポーツ競技団体の実態調査ではパラリンピック競技団体:28 団体、パラリンピック競技以外の団体:36 団体、デフリンピック競技団体 14 団体の計 78 団体を対象とした実態調査(回収数は 71 団体)の結果を掲載している。具体的には組織形態や事務局機能、組織の構成と運営、実施事業等について調査し、パラリンピック競技団体、およびデフリンピック競技団体では、全ての団体で法人格を取得していたことなどを報告している。

第 2 章 大学における障害者スポーツの現状に関する調査は 2014 年以来 9 年ぶりの調査となる。前回までは体育・スポーツ系学部を中心に調査を実施したが、今回は全大学を対象とした調査であるため前回までの調査との比較はできない。スポーツ系学部のある大学に障害のあるスポーツ選手が比較的多く在籍していることなどが報告されている。本章には 2019 年に実施した日本体育大学附属高等支援学校のその後についてヒアリング調査を行った結果を併せて掲載している。

第 3 章 ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査では、「ボール提供の有無」と「その後の実施状況」、体験学習内容が子どもたちの意識や行動変容に与える影響についての効果検証を行った。また、2019 年から実施してきた本調査のまとめの報告となっている。

第 4 章 障害者スポーツ選手のキャリア調査では、今年度 26 名の選手のインタビュー調査を実施した。内訳は肢体不自由の選手 14 名、視覚障害の選手 12 名で、昨年度まで十分お話を聞くことができなかった視覚障害の選手を重点的に調査した。視覚障害のある選手の多くが特別支援学校やリハビリテーションセンターの部活動として競技を始めていることや東京パラリンピック招致決定後に社会人となった選手に学校卒業後そのまま選手雇用される人が多いことなどが報告されている。さらに、パラスポーツ開始を中心としたスポーツキャリアパターンとして 12 のタイプがあることを明らかにした。今後は障害種別ごとにどのタイプが多いのかみていきたい。

本報告書をご覧いただいている皆さんには忌憚のないご意見、質問等をお願いしたいと思っております。そして何より調査にご協力いただいた多くの関係者の皆さんに心より感謝します。貴重な時間を使って調査票に記入をしていただいたり、インタビューに答えていただいたり、皆さんの協力なしでは本調査プロジェクトは成り立ちません。心よりお礼申し上げます。今年度で本プロジェクトは発足 12 年目、干支が一回りしたことになります。この間、ヤマハ発動機スポーツ振興財団および職員の皆様には一方ならぬご支援をいただきました。財団関係者は立場からすれば身内ということになるかもしれませんが、財団および職員の皆様の支援なしには調査の遂行はできなかったこともまた事実です。とりわけ、本プロジェクトの元担当者の

尾関雅之氏、山本純生氏、尾鍋文光氏、そして現担当者の大庭義隆氏にあらためてお礼申し上げますとともに、今後のご協力ご支援をお願いしたいと思います。

		調査方式	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)
大学	障害者スポーツ環境	定量的調査	○		○									○
	先進的取り組み	定性的調査					○	○	○	○				○
選手のスポーツキャリア	パラリンピアン のスポーツキャリア	定量的調査		○										
	ジャバラ選手の スポーツキャリア	定量的調査				○								
	障害者スポーツ選手 のスポーツキャリア	定性的調査			○					○	○	○	○	○
	コロナ禍における アスリート活動状況	定性的調査									○			
指導者	パラリンピック 指導者の現状	定量的調査		○										
	障害者スポーツ コーチ、スタッフの現状	定性的調査			○									
競技団体	障害者スポーツ 競技団体活動の実態	定量的調査		○					○					○
	障害者スポーツ 競技団体の現状	定性的調査			○									
地域現場	地域現場の実態	定量的調査 定性的調査						○	○	○				
	パラリンピアン の社会的認知度	定量的調査			○		○		○			○	○	
メディア	パラリンピックTV放送	定量的調査					○					○	○	
	障害者SP関連CF状況	定量的調査						○					○	
ケーススタディ	チャレンジ！ユニ★スポ	定量的調査 定性的調査								○	○	○	○	○

■目次

はじめに	1
第1章	
障害者スポーツ競技団体の実態調査	
調査概要	8
要約	9
調査報告	11
1 組織形態と事務局機能について	12
2 組織の構成と運営について	24
3 実施事業	54
4 パラリンピック競技団体の施設利用状況	67
5 資金計画	79
6 その他	80
7 まとめ	87
8 シンポジウム開催レポートのご紹介	92
第2章	
大学における障害者スポーツの現状に関する調査	
調査概要	94
要約	96
調査報告	99
1 回答大学の概要について	100
2 障害学生の在籍状況・支援について	102
3 入学試験における障害者スポーツ選手への対応について	113
4 障害者スポーツ選手への金銭的支援について	116
5 運動施設について	120
6 アスリートの競技力向上について	133
7 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割の重要度について	135
8 大学連携協定およびオリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施について	139
9 まとめ	149

10 視察報告	151
第3章	
ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査	
1 チャレンジ！ユニ★スポについて	156
2 プログラムの特徴	156
3 調査目的	157
4 調査方法	157
5 教材提供の有無による差異(調査1)	158
6 学校規模による差異(調査2)	163
7 追跡調査	166
8 まとめ	170
第4章	
障害者スポーツ選手のキャリア調査	
概要	174
パラスポーツ選手のスポーツキャリアパターンについて	176
キャリア調査インタビュー一覧	180
選手別インタビュー	189
附録 ユニ★スポ調査票	291

■障害者スポーツ・プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学スポーツ科学部	教授
メンバー	小淵和也	(公財)笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	政策ディレクター
	河西正博	同志社大学スポーツ健康科学部	助教
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	教授
	河合純一	(公財)日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会	委員長
事務局	大庭義隆	(公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団	

第1章

障害者スポーツ競技団体の実態調査

調査概要

(1)調査目的

障害者スポーツ競技団体がおかれている状況や課題を整理し、改善のための活動に資する基礎資料を得ることを目的として 2009 年より定点的に実施してきた。本年度は東京 2020 パラリンピック大会が終了し、パリ 2024 パラリンピック・東京 2025 デフリンピックの開催を控えるなど、障害者スポーツを取り巻く環境が大きく変化している状況を踏まえ、デフリンピック競技団体も対象に加え、障害者スポーツ競技団体の実態を調査することを目的とする。

(2)調査内容

主な調査内容は以下のとおりである。

- ・ 組織の形態と事務局機能
- ・ 組織の構成と運営
- ・ 実施事業

(3)調査対象

公益財団法人日本パラスポーツ協会のパラスポーツ競技団体協議会に登録のある障害者スポーツ競技団体 78 団体（2023 年 6 月現在）

（内訳）パラリンピック競技団体（以下、パラ競技団体）：28 団体

パラリンピック競技以外の団体（以下、非パラ競技団体）：36 団体

デフリンピック競技団体（以下、デフ競技団体）：14 団体

(4)調査期間：2023 年 7 月～2023 年 10 月

(5)調査方法：アンケート調査（郵送およびインターネット）

(6)回収結果：障害者スポーツ競技団体 71 団体（回収率：91.0%）

（内訳）パラリンピック競技団体：27 団体（96.4%）、パラリンピック競技以外の団体：31 団体（86.1%）、デフリンピック競技団体：13 団体（92.8%）

(7)調査協力：公益財団法人 日本パラスポーツ協会

要約

- ◆ パラ競技団体、およびデフ競技団体では、全ての団体で法人格を取得していた。その法人形態は、「一般社団法人」が最も多く、パラ競技団体では59.3%、デフ競技団体では76.9%だった。非パラ競技団体では約4分の3が法人格を持っていた。
- ◆ パラ競技団体では、全ての団体で「専用の事務局を設置」していた。非パラ競技団体、およびデフ競技団体の事務局は「団体役員の自宅に併設」が最も多かった。
- ◆ パラ競技団体に職員を雇用している団体は約9割だった。一方で、非パラ競技団体に職員を雇用している団体は16.1%、デフ競技団体では7.7%だった。
- ◆ 障害者スポーツ競技団体の理事・役員数の平均値は11.8人、中央値は9人だった。そのうち、「障害当事者」の理事・役員数の平均値は2.6人、中央値は2人、「女性」の役員・理事数の平均値は3.4人、中央値は2人だった。
- ◆ 障害者スポーツ競技団体の職員数の平均値は4.1人、中央値は2人だった。そのうち、「障害当事者」の職員数の平均値は0.3人、中央値は0人、「女性」の職員数の平均値は1.9人、中央値は1人だった。
- ◆ パラ競技団体の競技登録者数は、総計5,011人、平均値218人、中央値120人、非パラ競技団体の競技登録者数は、総計7,538人、平均値377人、中央値136人だった。一方で、デフ競技団体の競技登録者数は、総計196人、平均値33人、中央値13人だった。
- ◆ (健常者向け)一般スポーツ競技団体との連携・協力は、パラ競技団体に約9割、非パラ競技団体に約7割、デフ競技団体に約半数だった。医療施設(病院・リハビリテーションセンター等)との連携・協力は、パラ競技団体に約3割、非パラ競技団体に約2割、デフ競技団体では連携・協力はしていなかった。
- ◆ 障害者スポーツ競技団体の実施事業では、「広報」「スポーツ大会の開催」が8割を超え、特に「スポーツ大会の開催」は、パラ競技団体に92.6%、非パラ競技団体に83.9%、デフ競技団体に69.2%と多くの団体で実施していた。一方で、「ボランティア養成」は23.9%、「クラシファイア講習会」は11.3%と3割以下で、特に「クラシファイア講習会」は、パラ競技団体に25.9%、非パラ競技団体に3.2%、デフ競技団体では実施していなかった。

- ◆ パラ競技団体において、ナショナルトレーニングセンター(NTC)を、現在または過去に利用している(いた)団体は9割を超えた。ハイパフォーマンススポーツセンター施設(国立スポーツ科学センター:JISS)を現在または過去利用している(いた)団体も約4分の3だった。競技別強化拠点を現在利用している団体は約7割だった。
- ◆ 障害者スポーツ競技団体の直近5年間(2018年度~2022年度)のスポンサー数(支援企業、協賛企業などを含む)は、パラ競技団体ではスポンサー数に大きな変化はみられないが、非パラ競技団体では5年間でスポンサー数が倍増した。

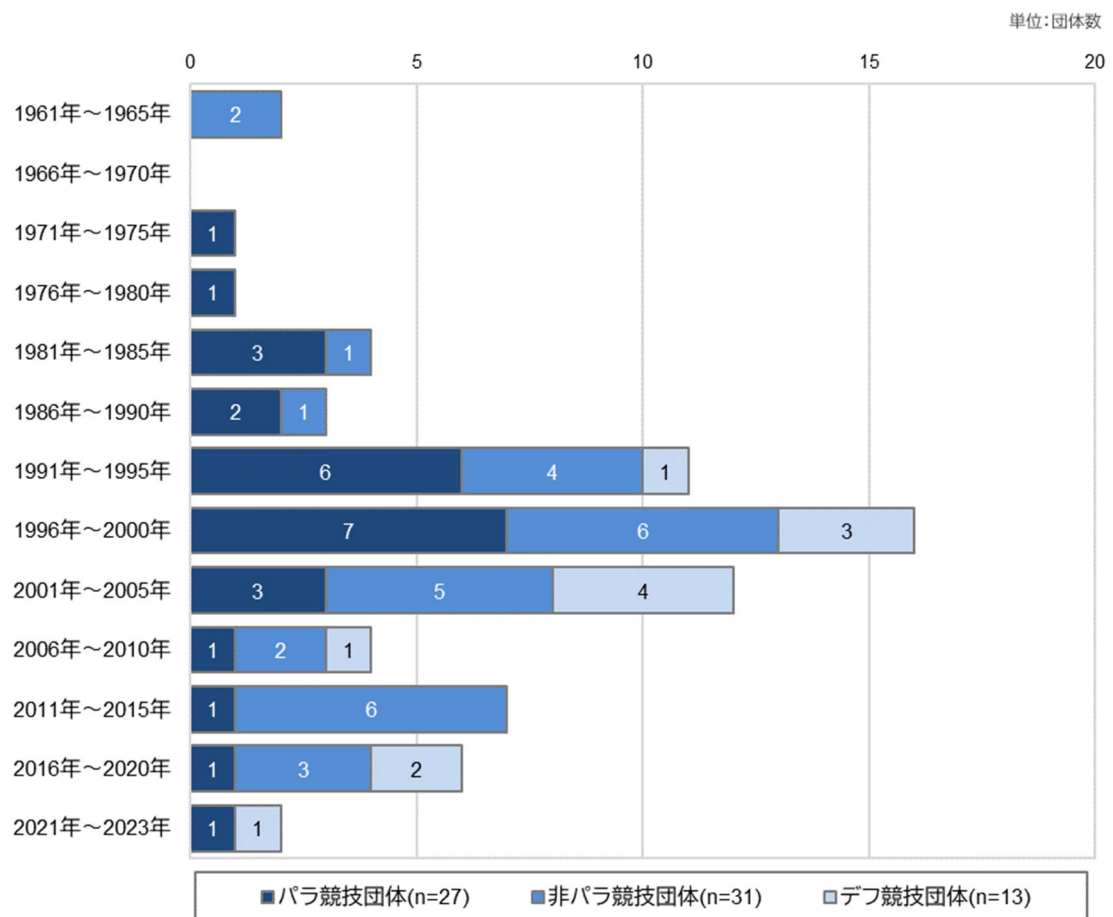
調查報告

1.組織形態と事務局機能について

1-1.活動開始年

障害者スポーツ競技団体の活動開始年をみると、「1996年～2000年」が16団体と最も多く、ついで「2001年～2005年」の12団体、「1991年～1995年」の11団体であった（図表1-1）。

図表1-1 障害者スポーツ競技団体の活動開始年



1-2.組織形態

障害者スポーツ競技団体の組織の形態についてみると、法人格を取得している団体は88.7%(63 団体)であった(図表 1-2)。そのうち、パラ競技団体、およびデフ競技団体は全ての団体で法人格を取得、非パラ競技団体では74.2 %の団体で法人格を取得していた。

法人格を取得している団体の法人形態をみると、「一般社団法人」が約6割、「NPO法人」が約4分の1であった。いずれの競技団体においても「一般社団法人」が最も多く、デフ競技団体では76.9%、パラ競技団体では59.3%、非パラ競技団体では47.8%だった。

パラ競技団体における法人格の取得状況をみると、2009 年度に法人格を取得していた団体は30.4%、2013 年度は42.9%、2017 年度以降100%となっている。非パラ競技団体における法人格の取得状況では、2017 年度は61.5%、本調査で74.2%と法人格を取得した団体が増加した。

図表 1-2 障害者スポーツ競技団体の法人格の有無と法人形態

	組織形態	全体		パラ競技団体		非パラ競技団体		デフ競技団体	
		n	%	n	%	n	%	n	%
2023 年度	法人格を取得	63	88.7	27	100.0	23	74.2	13	100.0
	法人形態								
	NPO法人	16	25.4	6	22.2	9	39.1	1	7.7
	一般財団法人	5	7.9	3	11.1	0	0.0	2	15.4
	公益財団法人	3	4.8	0	0.0	3	13.0	0	0.0
	一般社団法人	37	58.7	16	59.3	11	47.8	10	76.9
	公益社団法人	2	3.2	2	7.4	0	0.0	0	0.0
	その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	取得していない	8	11.3	0	0.0	8	25.8	0	0.0
	取得予定								
予定あり	3	37.5	0	-	3	37.5	0	-	
予定なし	5	62.5	0	-	5	62.5	0	-	

【参考】

2017 年度	法人格を取得	43	81.1	27	100.0	16	61.5	
	取得していない	10	18.9	0	0.0	10	38.5	
2013 年度	法人格を取得			9	42.9			
	取得していない			12	57.1			
2009 年度	法人格を取得			7	30.4			
	取得していない			16	69.6			

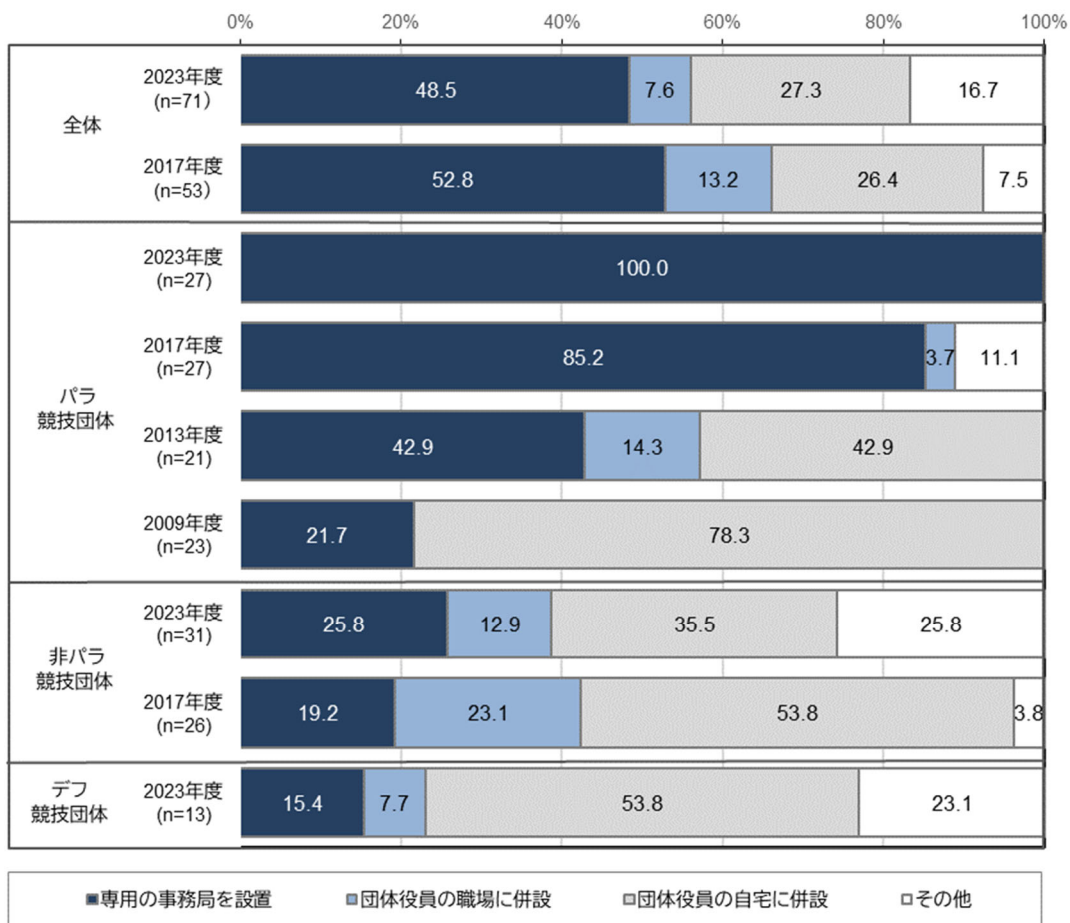
※調査対象は2009年度と2013年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は2017年度、「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

1-3.事務局の設置形態

障害者スポーツ競技団体の事務局の設置形態について過去調査との比較でみると、パラ競技団体では「専用の事務局を設置」が100%だった(図表 1-3)。デフ競技団体、非パラ競技団体では、「団体役員の自宅に併設」が最も多かった。デフ競技団体の「その他」には全日本ろうあ連盟の本部内があった。非パラ競技団体の「その他」では、「他団体と共同事務所を設置している」が多くを占めた。

事務局の設置形態を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では、2017 年度に85.2%だった「専用の事務局を設置」が2023 年度には100%に増加した。一方で、非パラ競技団体では、「専用の事務局を設置」している団体が2017 年度の19.2%から2023 年度には25.8%に増加した。

図表 1-3 障害者スポーツ競技団体の事務局設置形態

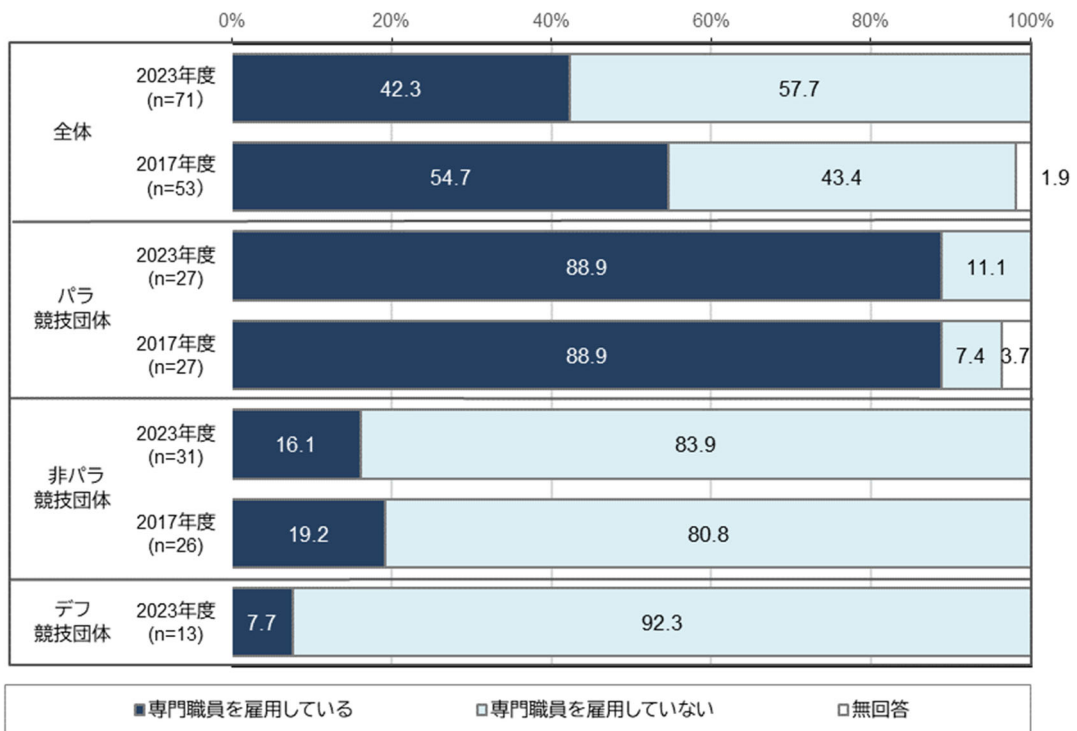


※調査対象は2009年度と2013年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は2017年度、「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

1-4.職員雇用

障害者スポーツ競技団体の職員雇用の有無について過去調査との比較でみると、パラ競技団体では約 9 割の団体が職員を雇用していた。デフ競技団体では 7.7%、非パラ競技団体では 16.1%の団体が職員を雇用していた(図表 1-4)。

図表 1-4 障害者スポーツ競技団体の職員雇用状況



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

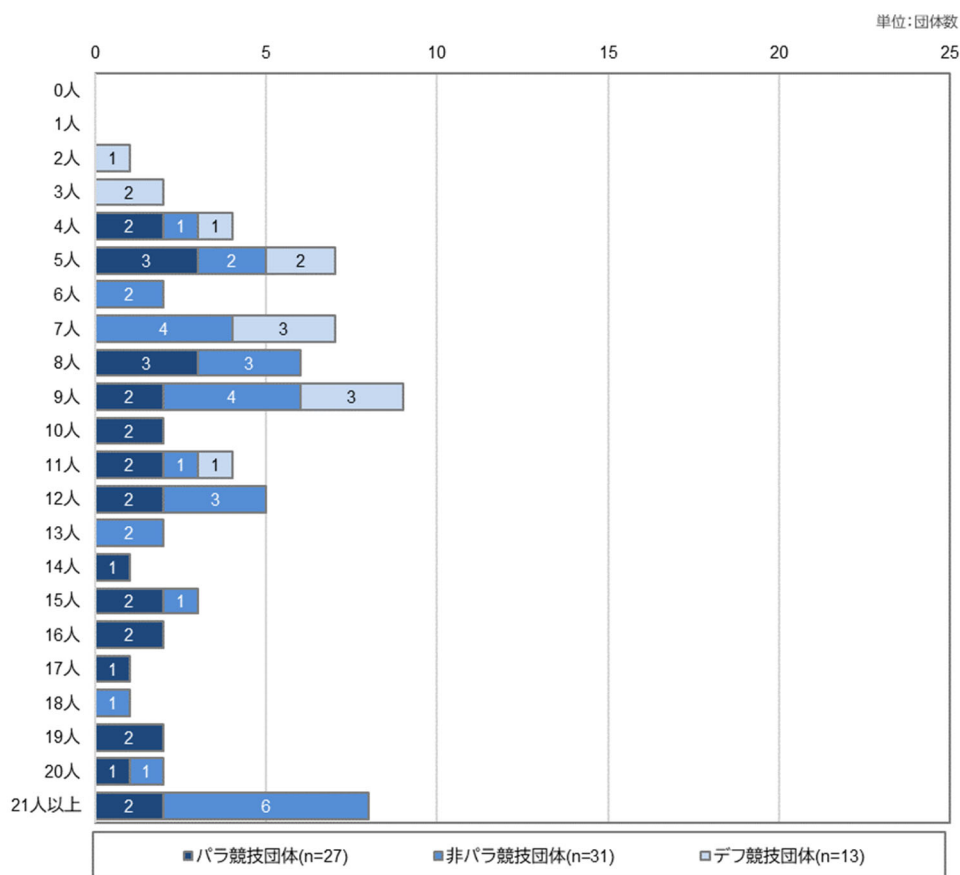
1-5. 理事・役員数

障害者スポーツ競技団体の理事・役員数についてみると、「9人」が9団体と最も多く、ついで「21人以上」の8団体だった(図表1-5)。パラ競技団体における平均値は12.9人、中央値は11人、デフ競技団体における平均値は6.2人、中央値は7人、非パラ競技団体における平均値は13.1人、中央値は9人だった。

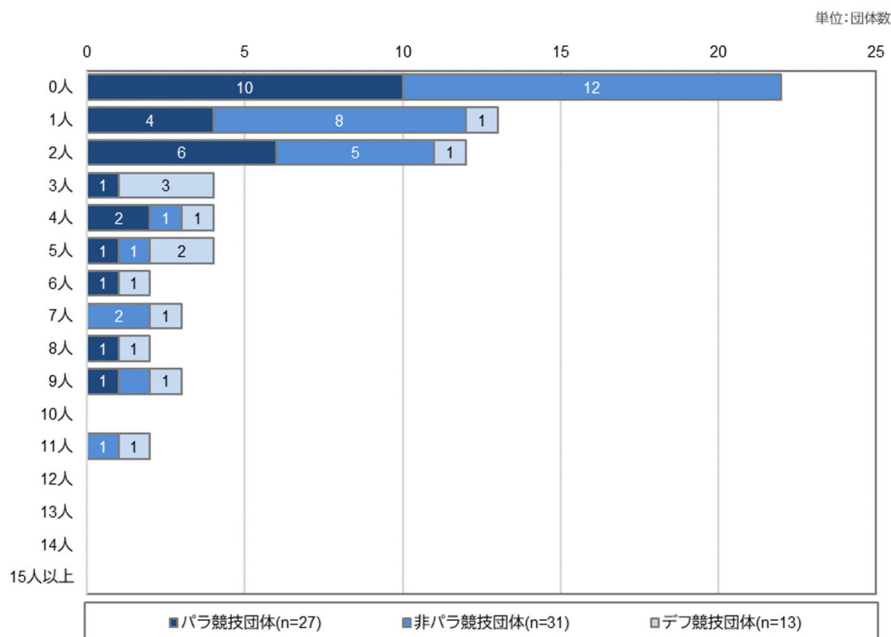
「障害当事者」の理事・役員数についてみると、「0人」が22団体と最も多く、ついで「1人」の13団体、「2人」の12団体だった(図表1-6)。パラ競技団体における平均値は2.0人、中央値は1人、デフ競技団体における平均値は5.2人、中央値は5人、非パラ競技団体における平均値は2.0人、中央値は1人だった。

「女性」の理事・役員数についてみると、「2人」が16団体と最も多く、ついで「1人」の11団体、「0人」の10団体だった(図表1-7)。パラ競技団体における平均値は4.3人、中央値は4人、デフ競技団体における平均値は1.9人、中央値は2人、非パラ競技団体における平均値は3.2人、中央値は2人だった。

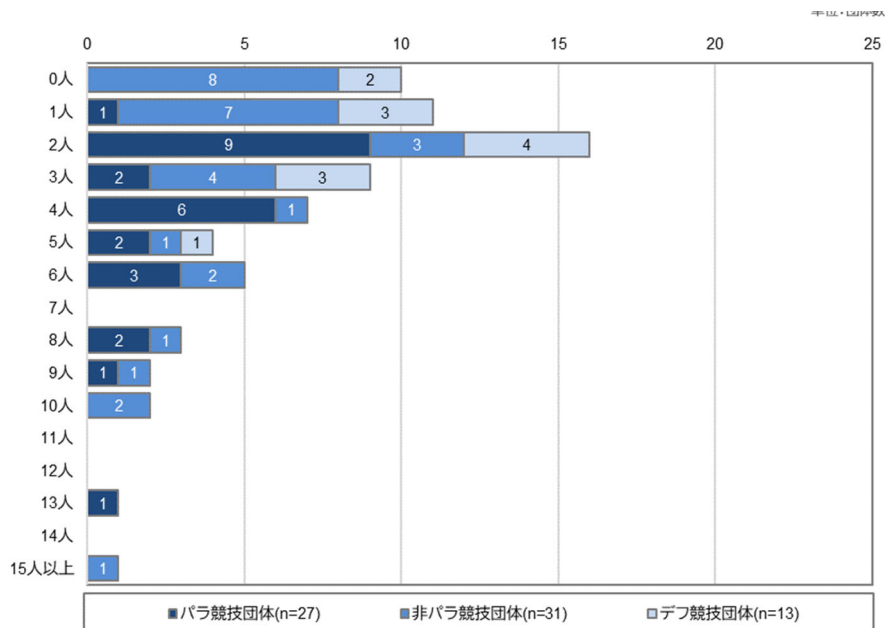
図表1-5 障害者スポーツ競技団体の理事・役員数(合計)



図表 1-6 障害者スポーツ競技団体の理事・役員数(障害当事者)



図表 1-7 障害者スポーツ競技団体の理事・役員数(女性)



図表 1-8 障害者スポーツ競技団体の理事・役員数(平均値・中央値)

	全体			パラ競技団体			非パラ競技団体			デフ競技団体		
	合計	うち障害当事者数	うち女性数	合計	うち障害当事者数	うち女性数	合計	うち障害当事者数	うち女性数	合計	うち障害当事者数	うち女性数
n	71			27			31			13		
平均	11.8	2.6	3.4	12.9	2.0	4.3	13.1	2.0	3.2	6.2	5.2	1.9
中央値	9	2	2	11	1	4	9	1	2	7	5	2

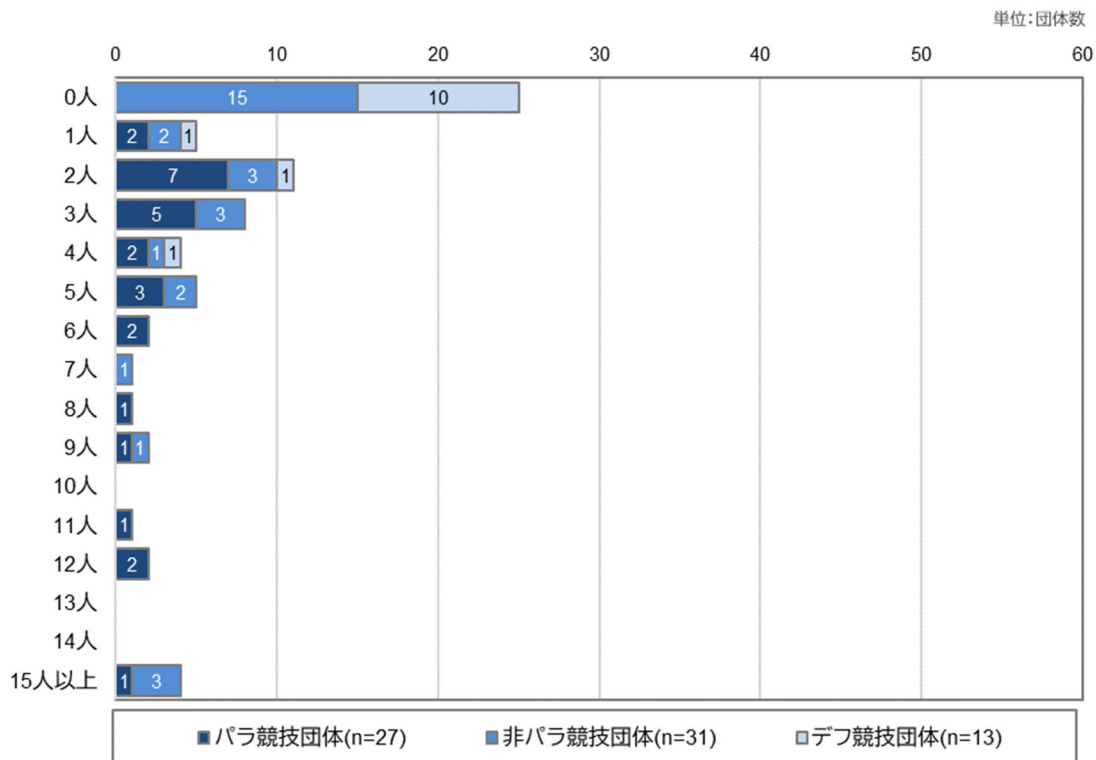
1-6.職員数

障害者スポーツ競技団体の職員数についてみると、「0人」が25団体と最も多く、ついで「2人」の11団体だった(図表1-9)。パラ競技団体における平均値は5.9人、中央値は3人、デフ競技団体における平均値は0.5人、中央値は0人、非パラ競技団体における平均値は4.0人、中央値は1人だった。職員0人の団体は役員が職員の役割を兼務していると推察できる。

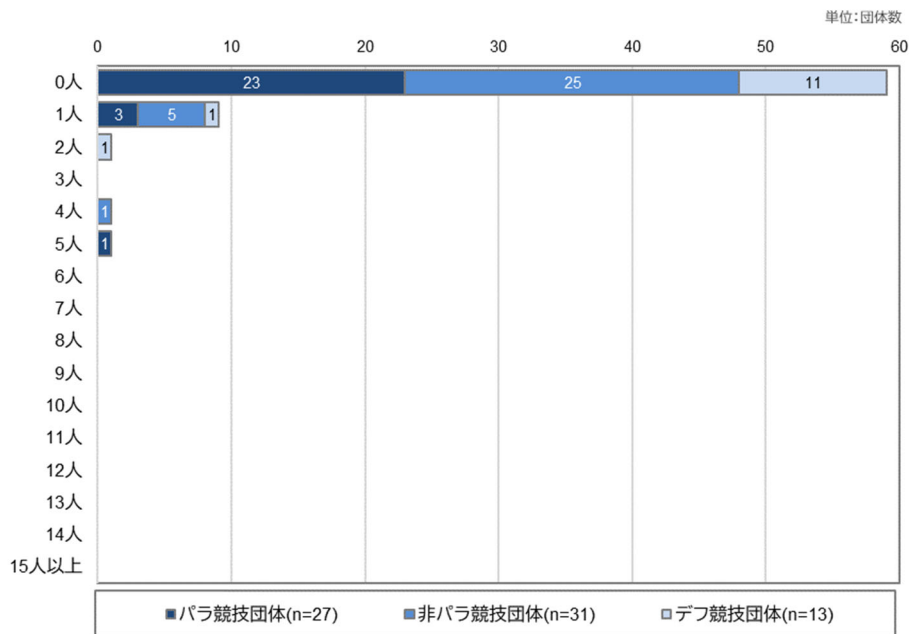
「障害当事者」の職員数についてみると、「0人」が59団体と最も多く、ついで「1人」の9団体だった(図表1-10)。パラ競技団体における平均値は0.3人、中央値は0人、デフ競技団体における平均値は0.2人、中央値は0人、非パラ競技団体における平均値は4.0人、中央値は1人だった。

「女性」の職員数についてみると、「0人」が34団体と最も多く、ついで「2人」の11団体、「1人」の10団体だった(図表1-11)。パラ競技団体における平均値は3.3人、中央値は2人、デフ競技団体における平均値は0.3人、中央値は0人、非パラ競技団体における平均値は1.5人、中央値は0人だった。

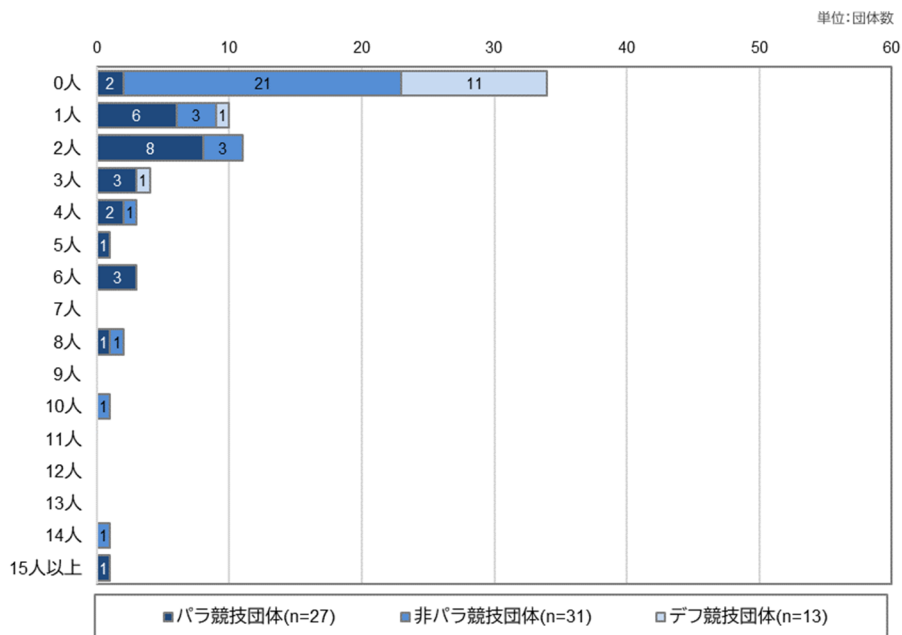
図表1-9 障害者スポーツ競技団体の職員数(合計)



図表 1-10 障害者スポーツ競技団体の職員数(障害当事者)



図表 1-11 障害者スポーツ競技団体の職員数(女性)



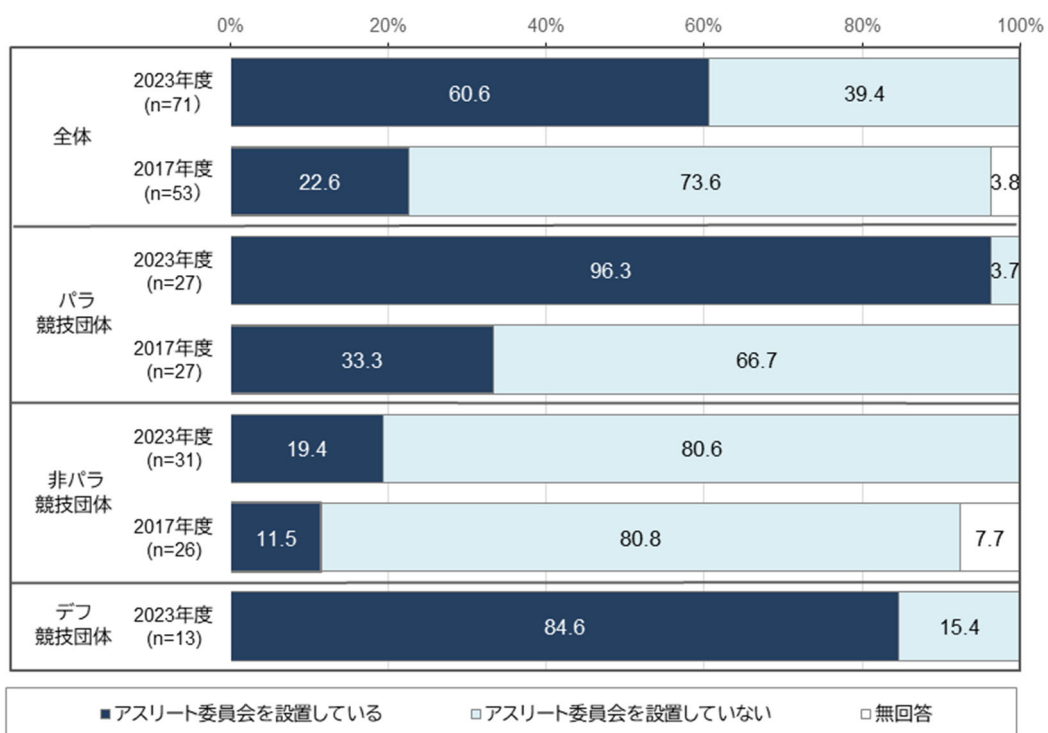
図表 1-12 障害者スポーツ競技団体の職員数(平均値・中央値)

	全体			パラ競技団体			非パラ競技団体			デフ競技団体		
	合計	うち障害当事者数	うち女性数	合計	うち障害当事者数	うち女性数	合計	うち障害当事者数	うち女性数	合計	うち障害当事者数	うち女性数
n	71			27			31			13		
平均	4.1	0.3	1.9	5.9	0.3	3.3	4.0	0.3	1.5	0.5	0.2	0.3
中央値	2	0	1	3	0	2	1	0	0	0	0	0

1-7.アスリート委員会の設置

障害者スポーツ競技団体のアスリート委員会の設置状況について過去調査との比較で見ると、パラ競技団体では96.3%、デフ競技団体で84.6%が設置していた。一方で、非パラ競技団体における設置は19.4%だった(図表 1-13)。設置状況を過去調査で見ると、パラ競技団体では33.3%(2017年度)から96.3%(2023年度)に大幅に増加した。

図表 1-13 障害者スポーツ競技団体のアスリート委員会の設置状況



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

1-8.登録者数

「選手登録者数」は、障害者スポーツ競技団体に登録されている競技者数を指す。地域のスポーツイベントとして実施される競技大会などは各競技団体が参加者の氏名やその数を把握できていない場合もある。そのため、「選手登録者数」には、スポーツを楽しむ人、いわゆる「実施人口(愛好者)」は含まれていない可能性もある。障害者スポーツ競技団体の「総登録者数」「競技登録者数」「団体チーム登録数」「指導者数」「審判員数」をまとめた(図表 1-14、図表 1-15)。「その他の人数」には、トレーナーや競技パートナーなどが含まれる。

東京 2020 パラリンピック大会前の 2021 年 7 月と 2 年後の 2023 年 7 月で比較すると、「総登録者数」は 19,451 人(2021 年 7 月)から 26,437 人(2023 年 7 月)に増えた。内訳をみると、「競技登録者数」に大きな変化はみられず、「団体チーム登録数」「指導者数」「審判員数」は微増した。競技団体の「総登録者数」でみると、パラ競技団体、非パラ競技団体では増加した一方、デフ競技団体では減少した。

障害者スポーツ競技団体に競技登録者数を把握している団体の 2023 年における総計は 12,745 人、平均値 260 人、中央値 100 人、2021 年における総計は 12,242 人、平均値 261 人、中央値 116 人だった。2023 年の競技登録者数のうち、パラ競技団体では総計 5,011 人、平均値 218 人、中央値 120 人、非パラ競技団体では総計 7,538 人、平均値 377 人、中央値 136 人、デフ競技団体では総計 196 人、平均値 33 人、中央値 13 人だった。

障害者スポーツ競技団体に団体チーム登録数を把握している団体の 2023 年における総計は 2,001 チーム、平均値 111 チーム、中央値 21 チーム、2021 年における総計は 1,848 チーム、平均値 103 チーム、中央値 16 チームだった。2023 年の団体チーム登録数のうち、パラ競技団体では総計 1,072 チーム、平均値 119 チーム、中央値 71 チーム、非パラ競技団体では総計 925 チーム、平均値 116 チーム、中央値 10 チーム、デフ競技団体では、団体チーム登録数を把握しているのは 1 団体だった。

障害者スポーツ競技団体に指導者数を把握している団体の 2023 年における総計は 2,812 人、平均値 117 人、中央値 23 人、2021 年における総計は 2,758 人、平均値 110 人、中央値 20 人だった。2023 年の指導者数のうち、パラ競技団体では総計 729 人、平均値 66 人、中央値 30 人、非パラ競技団体では総計 2,063 人、平均値 229 人、中央値 25 人、デフ競技団体では総計 20 人、平均値 5 人、中央値 4 人だった。

障害者スポーツ競技団体に審判員数を把握している団体の 2023 年における総計は 1,762 人、平均値 80 人、中央値 9 人、2021 年における総計は 1,521 人、平均値 66

人、中央値 4 人だった。2023 年の審判員数のうち、パラ競技団体では総計 1,020 人、平均値 102 人、中央値 20 人、非パラ競技団体では総計 738 人、平均値 67 人、中央値 4 人、デフ競技団体では、審判員数を把握しているのは 1 団体だった。

図表 1-14 障害者スポーツ競技団体の登録者数<2023 年 7 月/2021 年 7 月>

2023年7月		全体			パラ競技団体			非パラ競技団体			デフ競技団体		
		合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子
総登録者数	n	53	49	49	24	22	22	23	21	21	6	6	6
	平均値	499	372	100	427	286	119	695	563	104	38	22	16
	中央値	156	91	30	168	115	42	245	138	18	22	11	12
	総計	26,437	18,249	4,878	10,236	6,287	2,611	15,973	11,828	2,173	228	134	94
競技登録者数	n	49	46	46	23	21	21	20	19	19	6	6	6
	平均値	260	183	49	218	147	48	377	273	61	33	21	12
	中央値	100	81	18	120	89	29	136	91	10	13	7	6
	総計	12,745	8,400	2,243	5,011	3,096	1,013	7,538	5,181	1,157	196	123	73
団体チーム登録数	n	18	11	11	9	6	6	8	4	4	1	1	1
	平均値	111	129	21	119	99	26	116	205	19	4	2	2
	中央値	21	37	6	71	37	11	10	40	8	4	2	2
	総計	2,001	1,417	233	1,072	594	156	925	821	75	4	2	2
指導者数	n	24	19	21	11	10	10	9	7	7	4	2	4
	平均値	117	100	35	66	41	20	229	211	75	5	4	3
	中央値	23	13	5	30	19	11	25	13	3	4	4	4
	総計	2,812	1,897	733	729	412	198	2,063	1,477	523	20	8	12
審判員数	n	22	18	17	10	9	9	11	8	7	1	1	1
	平均値	80	36	20	102	51	34	67	23	4	4	2	2
	中央値	9	6	2	20	7	6	4	12	1	4	2	2
	総計	1,762	648	334	1,020	462	302	738	184	30	4	2	2
その他の人数	n	18	16	15	10	9	8	6	6	5	2	1	2
	平均値	46	27	22	56	28	32	43	31	14	4	1	4
	中央値	6	3	3	10	5	5	5	3	1	4	1	4
	総計	825	433	331	561	248	252	256	184	72	8	1	7
2021年7月		全体			パラ競技団体			非パラ競技団体			デフ競技団体		
		合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子
総登録者数	n	50	44	44	23	19	19	21	19	19	6	6	6
	平均値	389	240	70	369	187	64	509	360	91	48	30	17
	中央値	148	88	28	157	95	31	186	173	17	49	30	18
	総計	19,451	10,572	3,059	8,483	3,559	1,223	10,683	6,832	1,732	285	181	104
競技登録者数	n	47	43	42	22	19	18	19	18	18	6	6	6
	平均値	261	182	47	205	140	44	396	279	62	35	22	13
	中央値	116	84	18	122	87	29	186	119	8	25	16	9
	総計	12,242	7,810	1,992	4,505	2,668	797	7,528	5,013	1,115	209	129	80
団体チーム登録数	n	18	13	12	9	7	7	8	5	4	1	1	1
	平均値	103	110	21	105	87	27	113	163	16	5	3	2
	中央値	16	11	5	21	9	8	13	34	5	5	3	2
	総計	1,848	1,426	253	941	607	188	902	816	63	5	3	2
指導者数	n	25	22	19	12	10	10	10	9	7	3	3	2
	平均値	110	85	36	56	31	16	207	173	74	6	4	3
	中央値	20	8	6	33	9	10	14	18	5	3	2	3
	総計	2,758	1,871	681	667	306	155	2,074	1,554	520	17	11	6
審判員数	n	23	18	16	13	10	10	9	7	5	1	1	1
	平均値	66	14	7	65	16	7	76	14	6	3	1	2
	中央値	4	2	3	27	3	4	2	2	0	3	1	2
	総計	1,521	260	106	838	159	74	680	100	30	3	1	2
その他の人数	n	17	16	14	9	8	7	6	6	5	2	2	2
	平均値	46	20	14	54	15	15	39	28	13	28	20	8
	中央値	4	2	2	8	3	3	3	2	1	28	20	8
	総計	776	323	190	488	118	107	232	165	67	56	40	16

参考:図表 1-15 障害者スポーツ競技団体の登録者数<2017年7月>

		全体			パラ競技団体			非パラ競技団体		
		合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子
競技登録者数	n	39	37	37	19	18	18	20	19	19
	平均値	1,803	1,104	751	232	165	42	3,296	1,994	1,423
	中央値	115	93	17	100	67	19	228	200	17
	総計	70,334	40,853	27,800	4,406	2,966	759	65,928	37,887	27,041
団体チーム登録数	n	27	12	11	12	5	5	15	7	6
	平均値	41	31	8	62	57	16	24	13	2
	中央値	25	14	0	25	16	8	26	12	0
	総計	1,102	377	91	746	284	82	356	93	9
指導者数	n	30	26	26	12	12	12	18	14	14
	平均値	397	107	33	19	15	5	648	187	56
	中央値	14	10	2	10	9	2	21	13	2
	総計	11,902	2,786	845	230	175	55	11,672	2,611	790
審判員数	n	31	28	28	12	12	12	19	16	16
	平均値	83	14	3	10	8	2	129	19	4
	中央値	8	6	0	6	5	1	12	6	0
	総計	2,583	402	95	124	98	26	2,459	304	69

※2017年7月実施の調査では、「総登録者数」「その他(人数)」については聴取していない。
 ※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

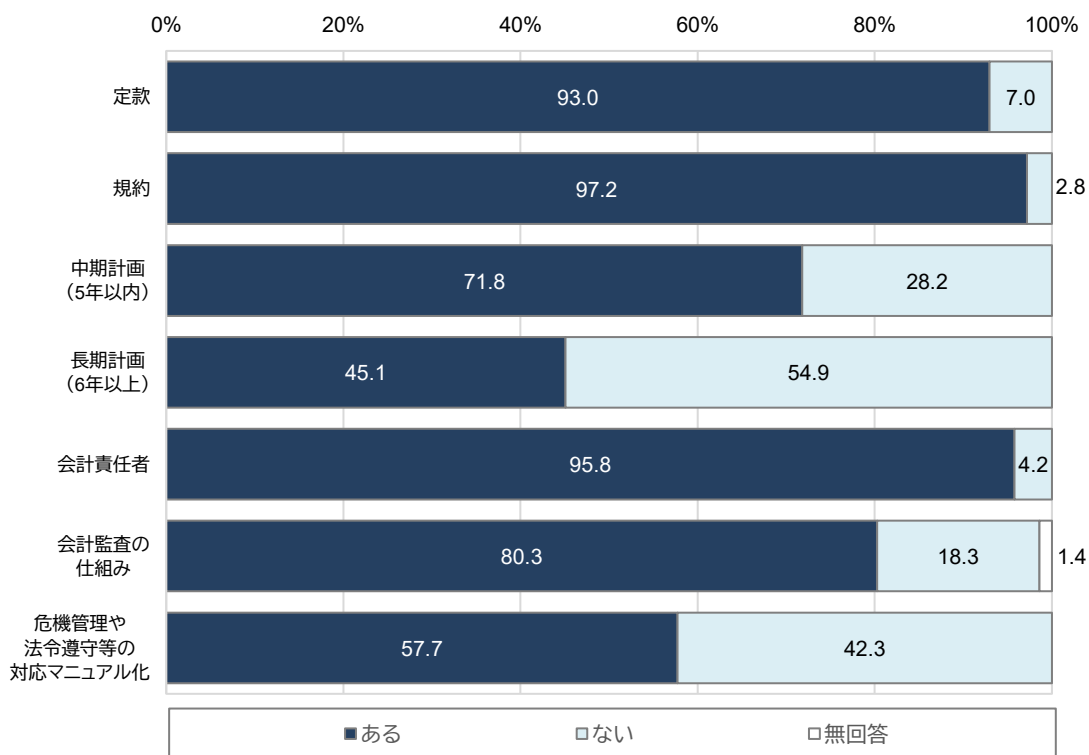
2. 組織の構成と運営について

2-1. 組織の約款、規約の有無、組織のルール化された運営の仕組み

障害者スポーツ競技団体における組織の定款と規約、中期計画、会計責任者、会計審査の仕組み、危機管理や法令遵守等の対応マニュアル化の有無についてみた(図表 1-16)。

「定款」(93.0%)、「規約」(97.2%)、「会計責任者」(95.8%)は 9 割以上の団体であった。「危機管理や法令遵守等の対応マニュアル化」がある団体は 57.7%、「中期計画(5 年以内)」がある団体は 71.8%、「長期計画(6 年以上)」がある団体は 45.1%だった。

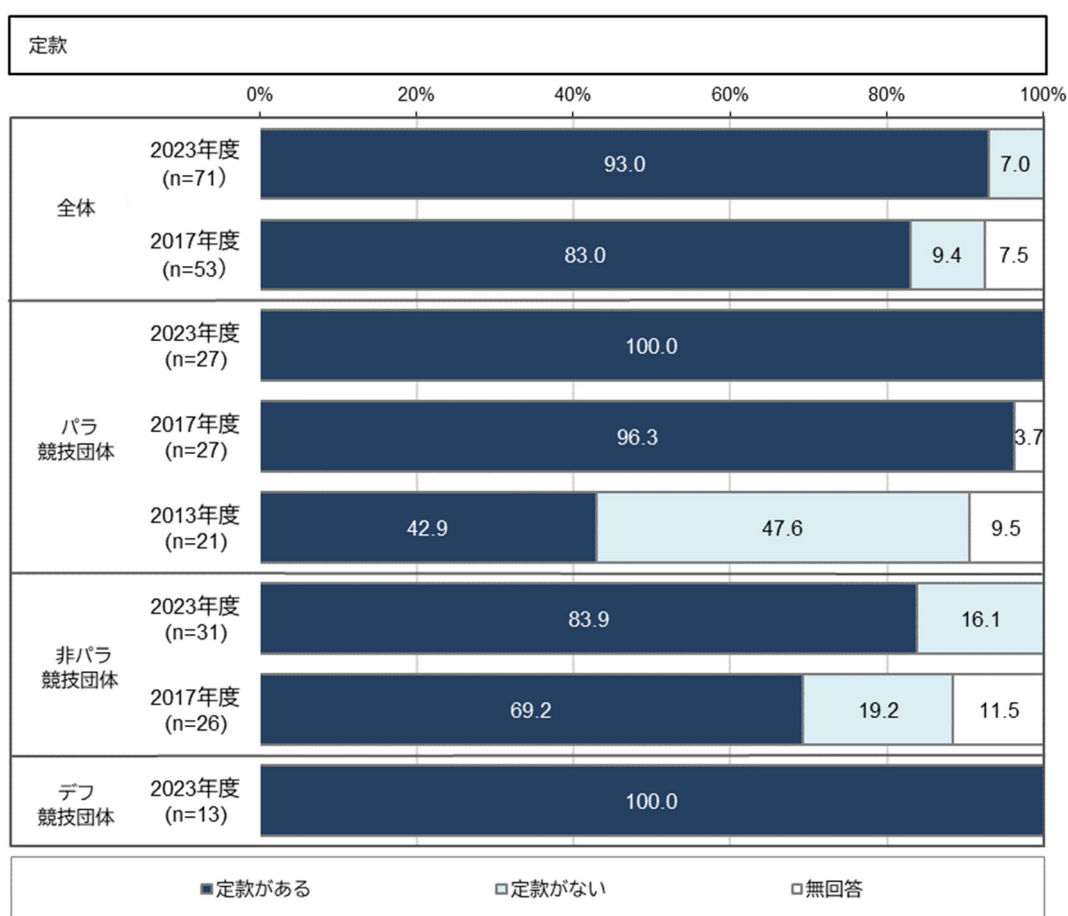
図表 1-16 障害者スポーツ競技団体の運営の仕組み(定款、規約など)



2-1-1.運営の仕組み／定款の有無

障害者スポーツ競技団体における定款の有無について過去調査との比較でみた(図表 1-17)。パラ競技団体においては、2013 年度は 42.9%であったが、2017 年度に 96.3%、2023 年度には全ての団体で定款があった。非パラ競技団体においては、2017 年度は 69.2%、2023 年度には 83.9%と定款のある団体が増加した。デフ競技団体では、2023 年度には全ての団体で定款があった。

図表 1-17 定款

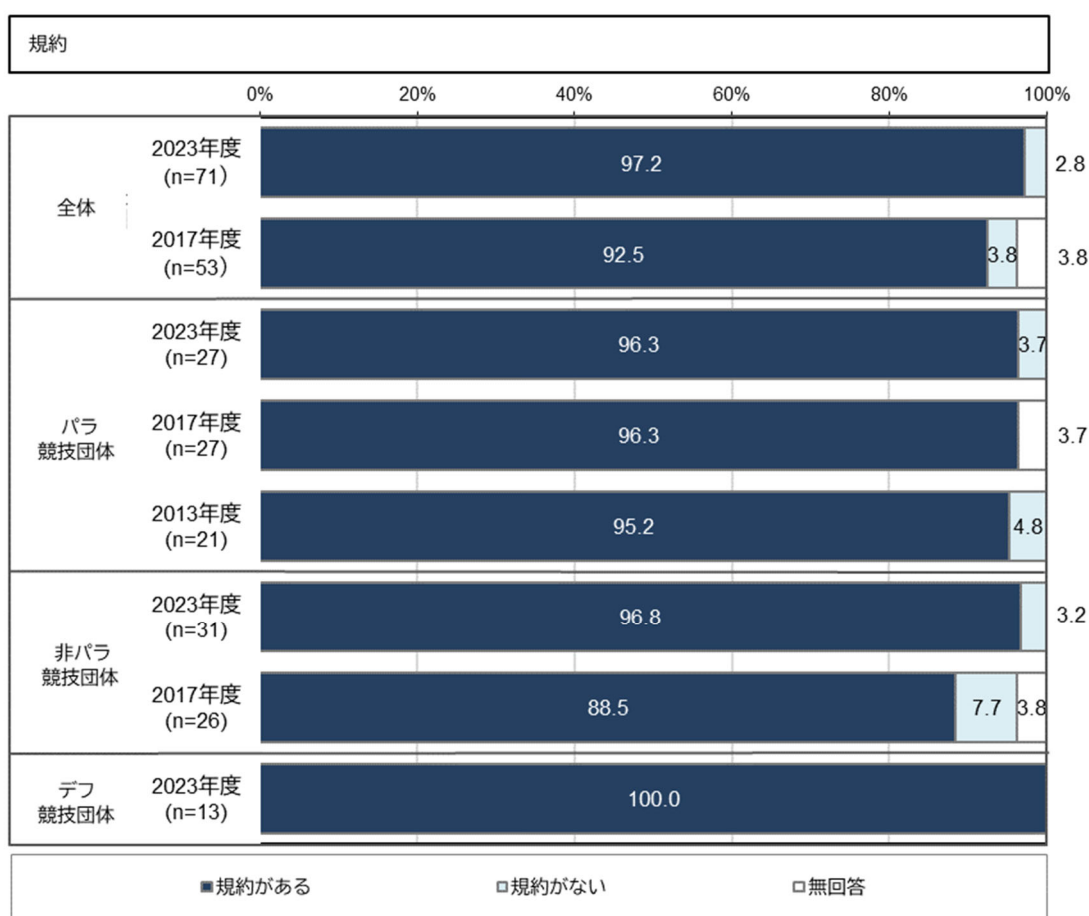


※調査対象は2013年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は2017年度、「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-1-2.運営の仕組み／規約の有無

障害者スポーツ競技団体における規約の有無について過去調査との比較でみた(図表 1-18)。パラ競技団体においては、2013 年度(95.2%)、2017 年度(96.3%)、2023 年度(96.3%)とほとんどの団体で規約があった。非パラ競技団体においては、2017 年度の88.5%から2023 年度に96.8%に増加して、ほとんどの団体で規約があった。デフ競技団体では、2023 年度には全ての団体で規約があった。

図表 1-18 規約

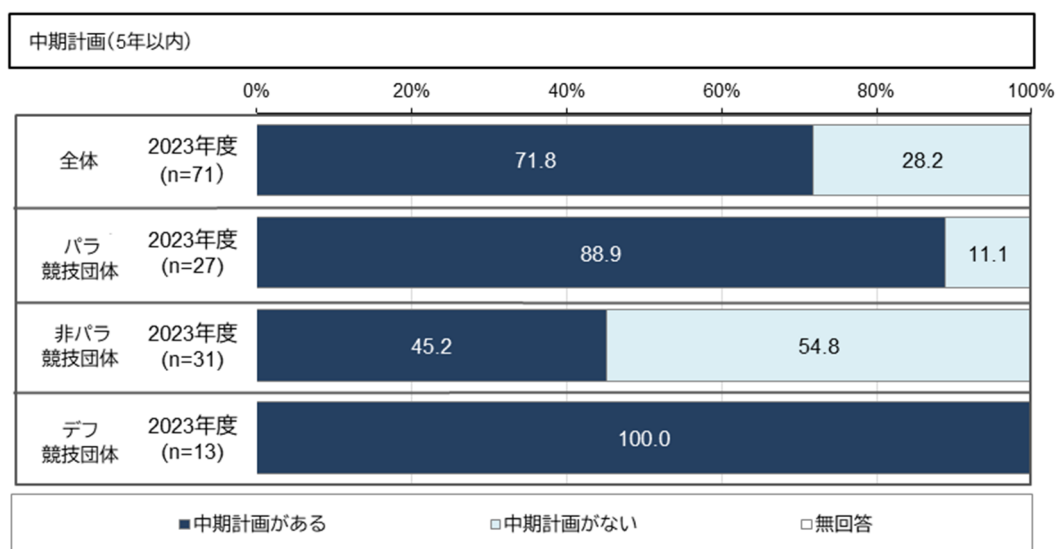


※調査対象は2013年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は2017年度、「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

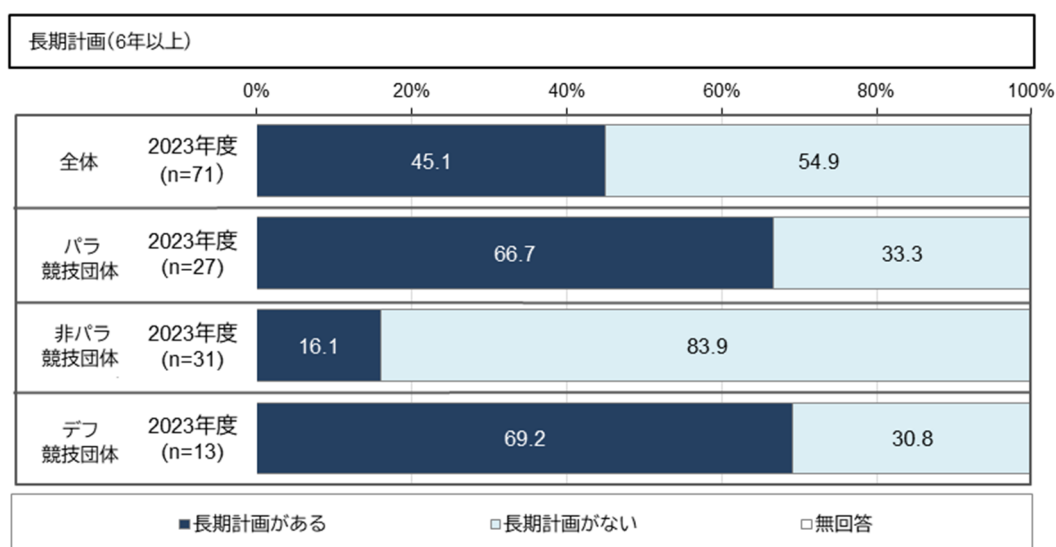
2-1-3.運営の仕組み／中・長期計画の有無

障害者スポーツ競技団体における中・長期計画の有無についてみた(図表 1-19・20)。中期計画(5年以内)の有無においては、パラ競技団体では88.9%、非パラ競技団体では45.2%、デフ競技団体では100%の団体であった。長期計画(6年以上)の有無においては、パラ競技団体では66.7%、非パラ競技団体では16.1%、デフ競技団体では69.2%の団体であった。

図表 1-19 中期計画(5年以内)



図表 1-20 長期計画(6年以上)

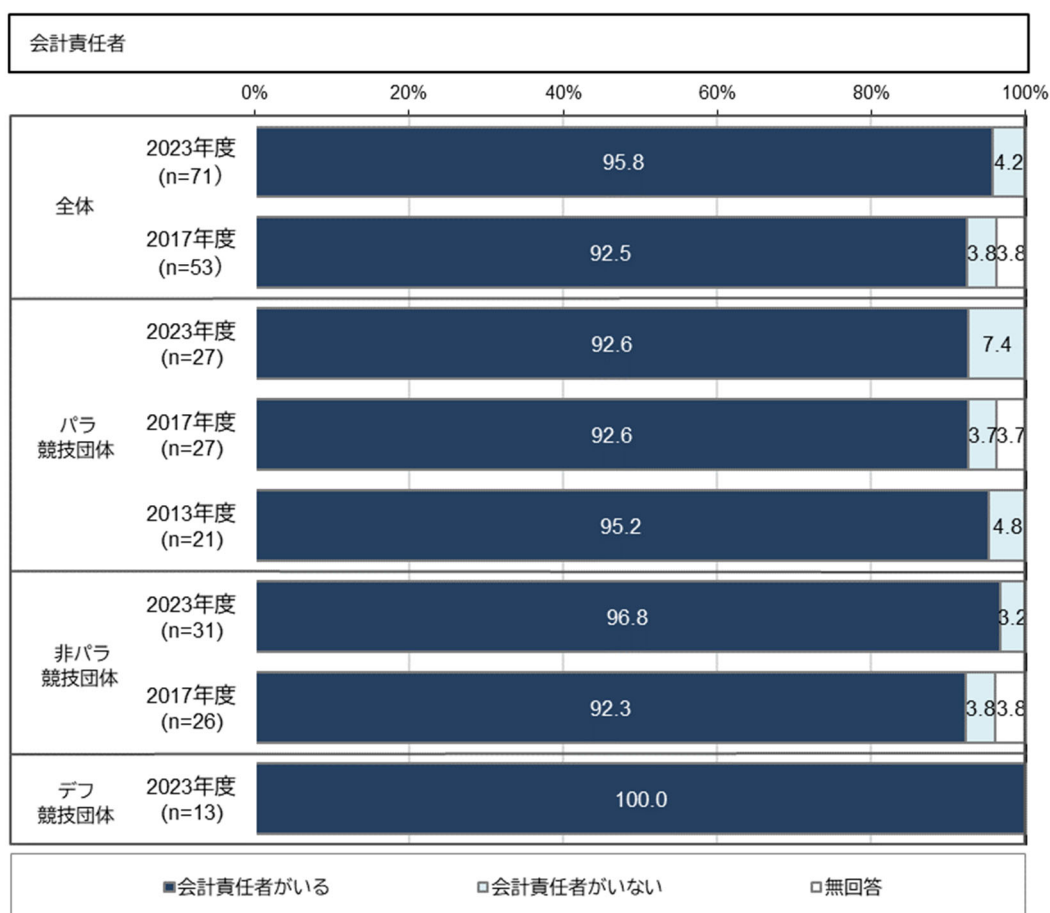


※2017年度は「中長期計画」は設問なし。ヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-1-4.運営の仕組み／会計責任者(入出金、月次/年次決算、税務、資産管理等の業務)

障害者スポーツ競技団体における会計責任者(入出金、月次/年次決算、税務、資産管理等の業務)の有無について過去調査との比較でみた(図表 1-21)。パラ競技団体においては、2013 年度(95.2%)、2017 年度(92.6%)、2023 年度(92.6%)と、ほとんどの団体で会計責任者がいた。非パラ競技団体においては、2017 年度の 92.3%から 2023 年度に 96.8%に増加して、ほとんどの団体で会計責任者がいた。デフ競技団体では、2023 年度には全ての団体に会計責任者がいた。

図表 1-21 会計責任者

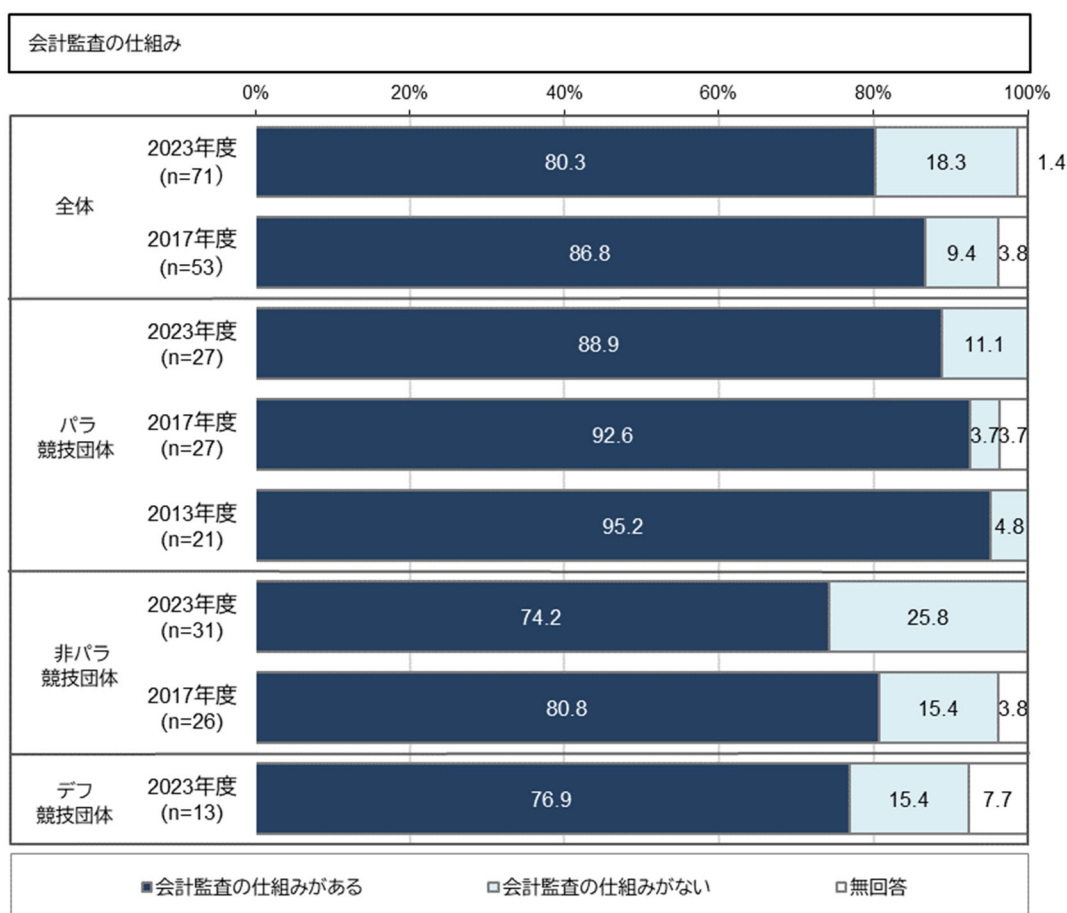


※調査対象は2013年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は2017年度、「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-1-5.運営の仕組み／会計監査の仕組み(第三者による会計内部監査)

障害者スポーツ競技団体における会計監査の仕組み(第三者による会計内部監査)の有無について過去調査との比較でみた(図表 1-22)。パラ競技団体においては、2013 年度は 95.2%であったが、2017 年度に 92.6%、2023 年度には 88.9%の団体で会計監査の仕組みがあった。非パラ競技団体においては、2017 年度は 80.8%、2023 年度には 74.2%の団体で会計監査の仕組みがあった。デフ競技団体では、2023 年度には 76.9%の団体で会計監査の仕組みがあった。

図表 1-22 会計監査の仕組み

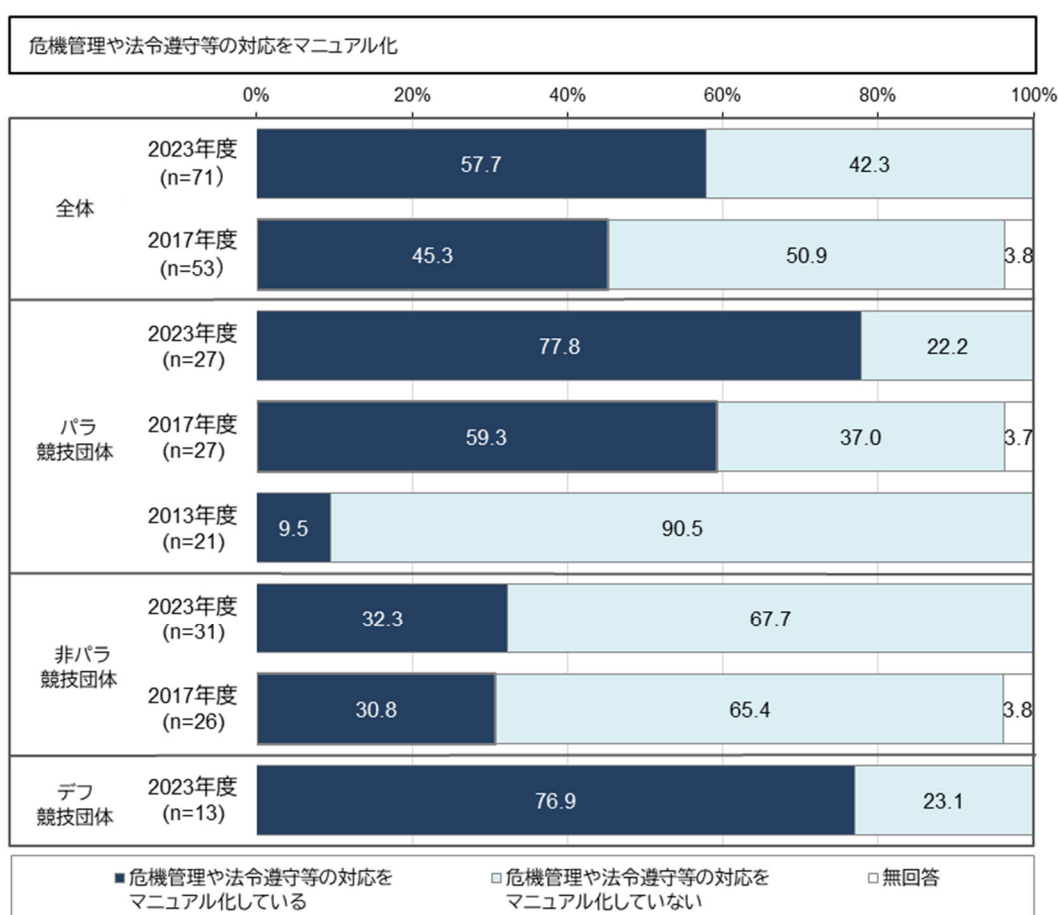


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-1-6.運営の仕組み／危機管理や法令遵守等の対応マニュアル化

障害者スポーツ競技団体における危機管理や法令遵守等の対応マニュアル化の有無について過去調査との比較でみた(図表 1-23)。パラ競技団体においては、2013 年度は 9.5%であったが、2017 年度に 59.3%、2023 年度には 77.8%の団体が危機管理や法令遵守等の対応をマニュアル化していた。非パラ競技団体においては、2017 年度は 30.8%、2023 年度には 32.3%で危機管理や法令遵守等の対応をマニュアル化していた。デフ競技団体では、2023 年度には 76.9%の団体が危機管理や法令遵守等の対応をマニュアル化していた。

図表 1-23 危機管理や法令遵守等の対応マニュアル化

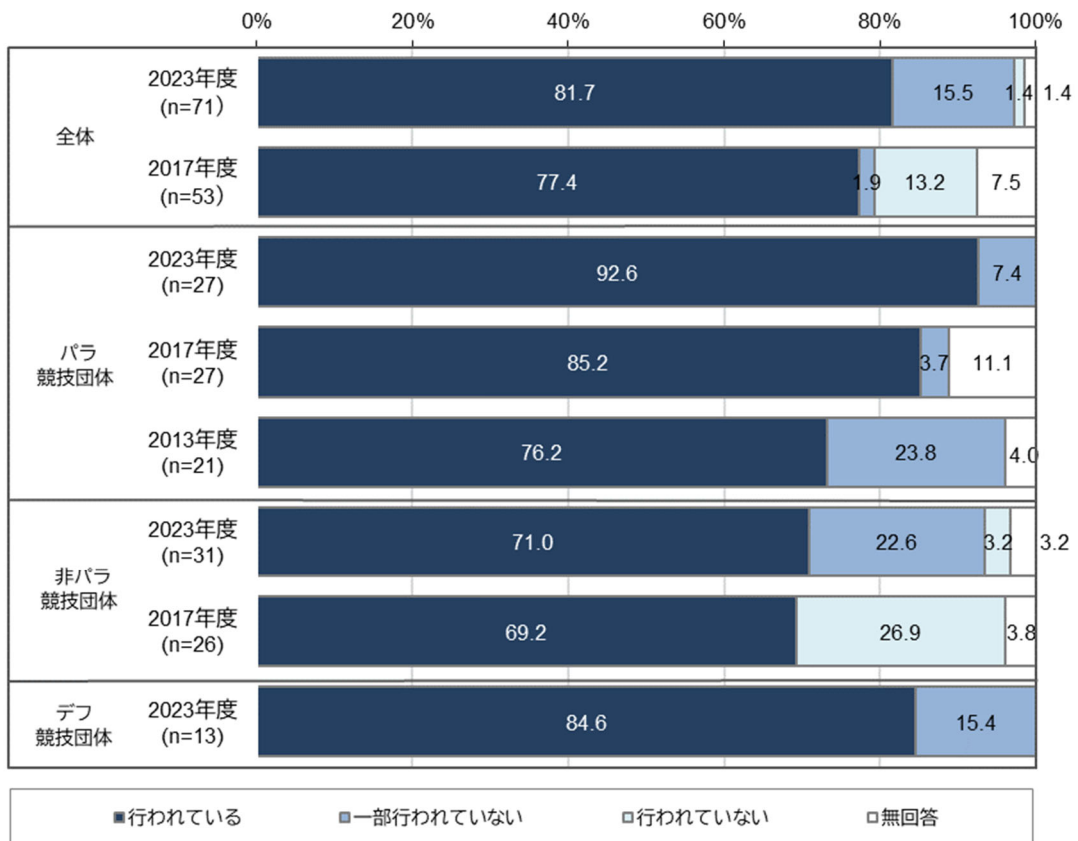


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-2.国内外の統括団体からの効率的な情報収集、管理、伝達について

障害者スポーツ競技団体において、統括団体からの情報収集、管理、伝達が一元的に効率よく行われているかについて過去調査との比較でみた(図表 1-24)。パラ競技団体においては、2013 年度は 76.2%であったが、2017 年度に 85.2%、2023 年度には 92.6%の団体で統括団体からの情報収集、管理、伝達が一元的に効率よく行われていた。非パラ競技団体においては、2017 年度は 69.2%、2023 年度には 71.0%で統括団体からの情報収集、管理、伝達が一元的に効率よく行われていた。デフ競技団体では、2023 年度には 84.6%の団体で統括団体からの情報収集、管理、伝達が一元的に効率よく行われていた。

図表 1-24 障害者スポーツ競技団体の統括団体からの効率的な情報収集、管理、伝達



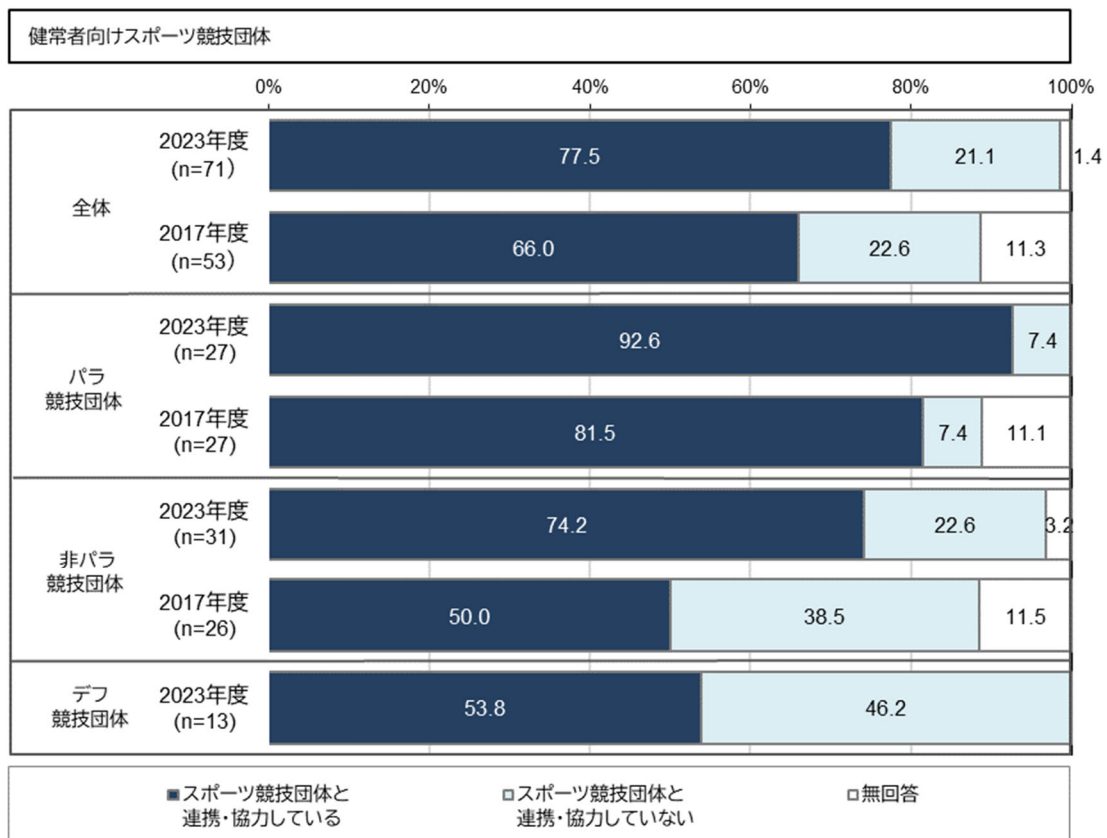
※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-3.他団体との連携・協力について

2-3-1.健常者向けスポーツ競技団体(日本オリンピック委員会加盟団体含む)との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と健常者向けスポーツ競技団体(日本オリンピック委員会加盟団体含む)との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは66.0%だったが、2023年度は77.5%に増加した(図表1-25)。そのうち、パラ競技団体では81.5%(2017年度)から92.6%(2023年度)、非パラ競技団体では50.0%(2017年度)から74.2%(2023年度)にそれぞれ増加した。デフ競技団体では、2023年度には53.8%の団体で連携・協力していた。

図表1-25 健常者向けスポーツ競技団体との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「情報交換」が 60.0%と最も多く、ついで「理事で参加」の 28.0%だった(図表 1-26)。非パラ競技団体では「情報交換」が 52.2%と最も多く、ついで「周知・広報・集客」の 34.8%だった。デフ競技団体では「情報交換」が 85.7%で最も多く、ついで「周知・広報・集客」の 57.1%だった。「その他」には、同一団体として活動している団体や審判員のサポート、国際大会への派遣、国際団体への取り次ぎなどがあった。

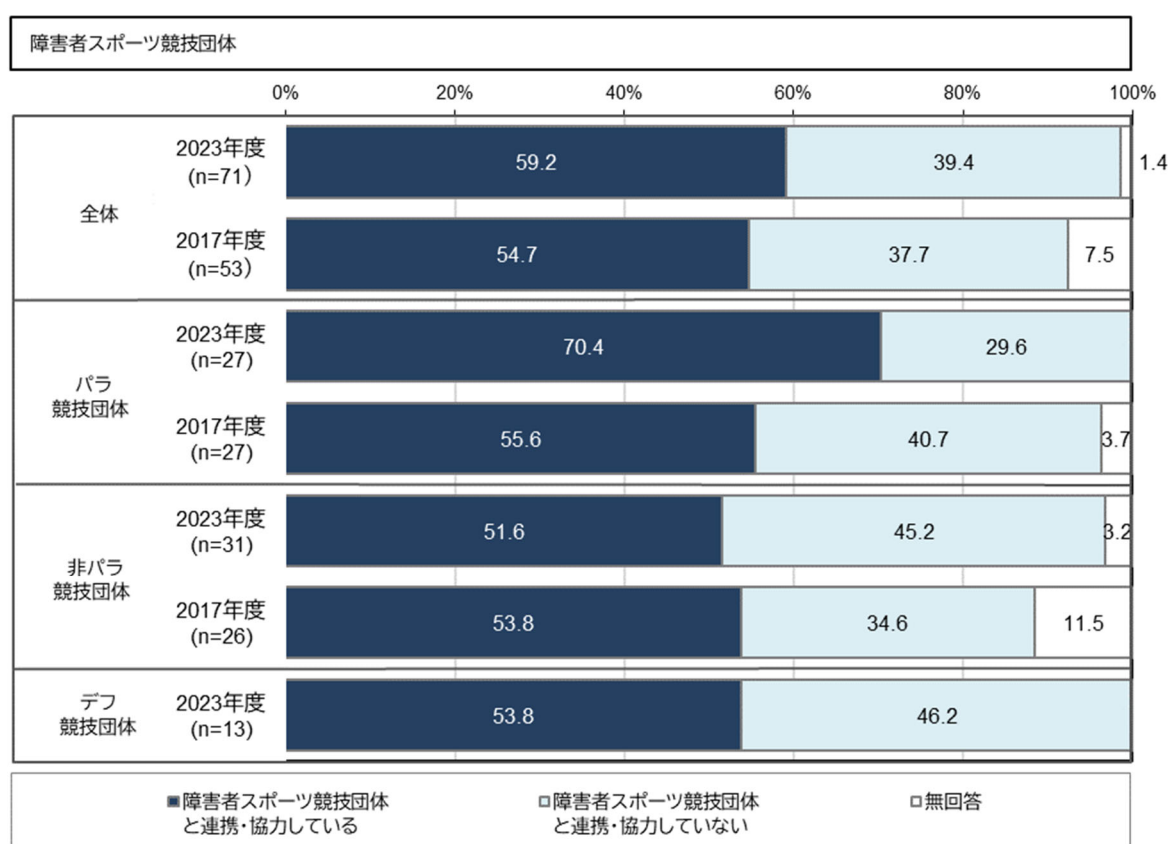
図表 1-26 健常者向けスポーツ競技団体との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=25)		非パラ競技団体 (n=23)		デフ競技団体 (n=7)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
評議員で参加	5	20.0%	2	8.7%	1	14.3%
理事で参加	7	28.0%	4	17.4%	0	0.0%
事業の企画	5	20.0%	2	8.7%	0	0.0%
会場の確保	6	24.0%	4	17.4%	1	14.3%
周知・広報・集客	6	24.0%	8	34.8%	4	57.1%
当日の運営	5	20.0%	5	21.7%	2	28.6%
指導者派遣	3	12.0%	4	17.4%	2	28.6%
ボランティア派遣	1	4.0%	2	8.7%	0	0.0%
情報交換	15	60.0%	12	52.2%	6	85.7%
その他	10	40.0%	8	34.8%	2	28.6%

2-3-2. 障害者スポーツ競技団体(日本パラリンピック委員会加盟団体含む)との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と障害者スポーツ競技団体との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは54.7%だったが、2023年度は59.2%だった(図表1-27)。そのうち、パラ競技団体では55.6%(2017年度)から70.4%(2023年度)に増加した。非パラ競技団体では53.8%(2017年度)から51.6%(2023年度)に変化した。デフ競技団体では、2023年度には53.8%の団体で連携・協力していた。

図表 1-27 障害者スポーツ競技団体との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「情報交換」が 78.9%と最も多く、ついで「周知・広報・集客」の 36.8%だった(図表 1-28)。非パラ競技団体では「情報交換」が 87.5%と最も多く、ついで「周知・広報・集客」の 37.5%だった。デフ競技団体では「情報交換」が 71.4%で最も多く、ついで「周知・広報・集客」の 57.1%だった。「その他」では、強化活動・トレーニング、大会・イベントへの参加、補助金・助成金などがあつた。

図表 1-28 障害者スポーツ競技団体との連携・協力内容

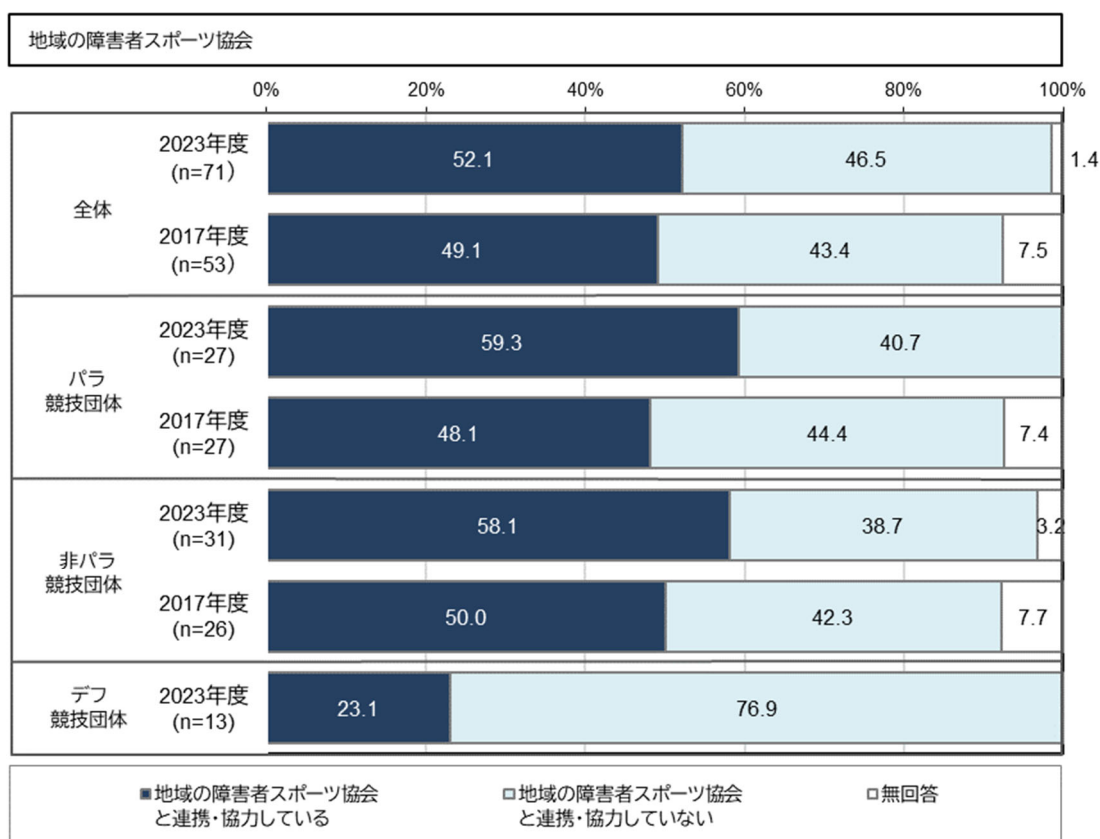
	パラ競技団体 (n=19)		非パラ競技団体 (n=16)		デフ競技団体 (n=7)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
評議員で参加	0	0.0%	1	6.3%	0	0.0%
理事で参加	2	10.5%	4	25.0%	2	28.6%
事業の企画	6	31.6%	4	25.0%	2	28.6%
会場の確保	2	10.5%	3	18.8%	1	14.3%
周知・広報・集客	7	36.8%	6	37.5%	4	57.1%
当日の運営	0	0.0%	2	12.5%	0	0.0%
指導者派遣	1	5.3%	3	18.8%	0	0.0%
ボランティア派遣	2	10.5%	2	12.5%	0	0.0%
情報交換	15	78.9%	14	87.5%	5	71.4%
その他	6	31.6%	4	25.0%	1	14.3%

※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

2-3-3.地域の障害者スポーツ協会との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と地域の障害者スポーツ協会との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは49.1%、2023年度は52.1%だった(図表1-29)。そのうち、パラ競技団体では48.1%(2017年度)から59.3%(2023年度)、非パラ競技団体では50.0%(2017年度)から58.1%(2023年度)にそれぞれ増加した。デフ競技団体では、2023年度には23.1%の団体で連携・協力していた。

図表 1-29 地域の障害者スポーツ協会との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「当日の運営」「指導者派遣」が 43.8%と最も多く、ついで「周知・広報・集客」の 37.5%だった(図表 1-30)。非パラ競技団体では「周知・広報・集客」が 61.1%と最も多く、ついで「情報交換」が 55.6%、「事業の企画」が 50.0%だった。デフ競技団体では「周知・広報・集客」が 100%だった。「その他」では、大会の運営や後援、事業への協力、アスリートの紹介・推薦、技術要員の派遣など具体的な支援内容があった。

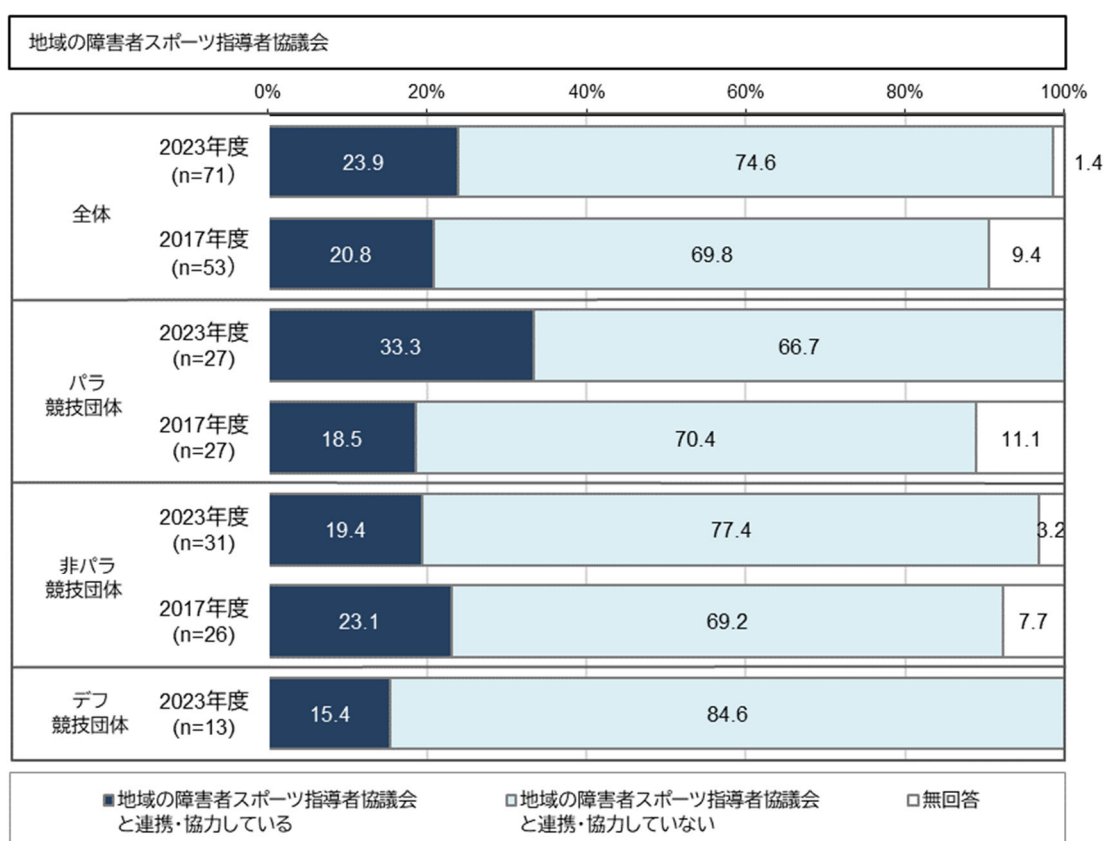
図表 1-30 地域の障害者スポーツ協会との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=16)		非パラ競技団体 (n=18)		デフ競技団体 (n=3)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	2	12.5%	9	50.0%	0	0.0%
会場の確保	3	18.8%	7	38.9%	0	0.0%
周知・広報・集客	6	37.5%	11	61.1%	3	100.0%
当日の運営	7	43.8%	8	44.4%	0	0.0%
指導者派遣	7	43.8%	4	22.2%	0	0.0%
ボランティア派遣	5	31.3%	5	27.8%	1	33.3%
情報交換	5	31.3%	10	55.6%	1	33.3%
その他	5	31.3%	2	11.1%	1	33.3%

2-3-4.地域の障害者スポーツ指導者協議会との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と地域の障害者スポーツ指導者協議会との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは20.8%、2023年度は23.9%だった(図表1-31)。そのうち、パラ競技団体では18.5%(2017年度)から33.3%(2023年度)に増加した。非パラ競技団体では23.1%(2017年度)から19.4%(2023年度)に減少した。デフ競技団体では、2023年度には15.4%の団体で連携・協力していた。

図表1-31 地域の障害者スポーツ指導者協議会との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「指導者派遣」が 44.4%と最も多かった(図表 1-32)。非パラ競技団体では「周知・広報・集客」「ボランティア派遣」が 83.3%と最も多かった。デフ競技団体では「周知・広報・集客」が 100%だった。

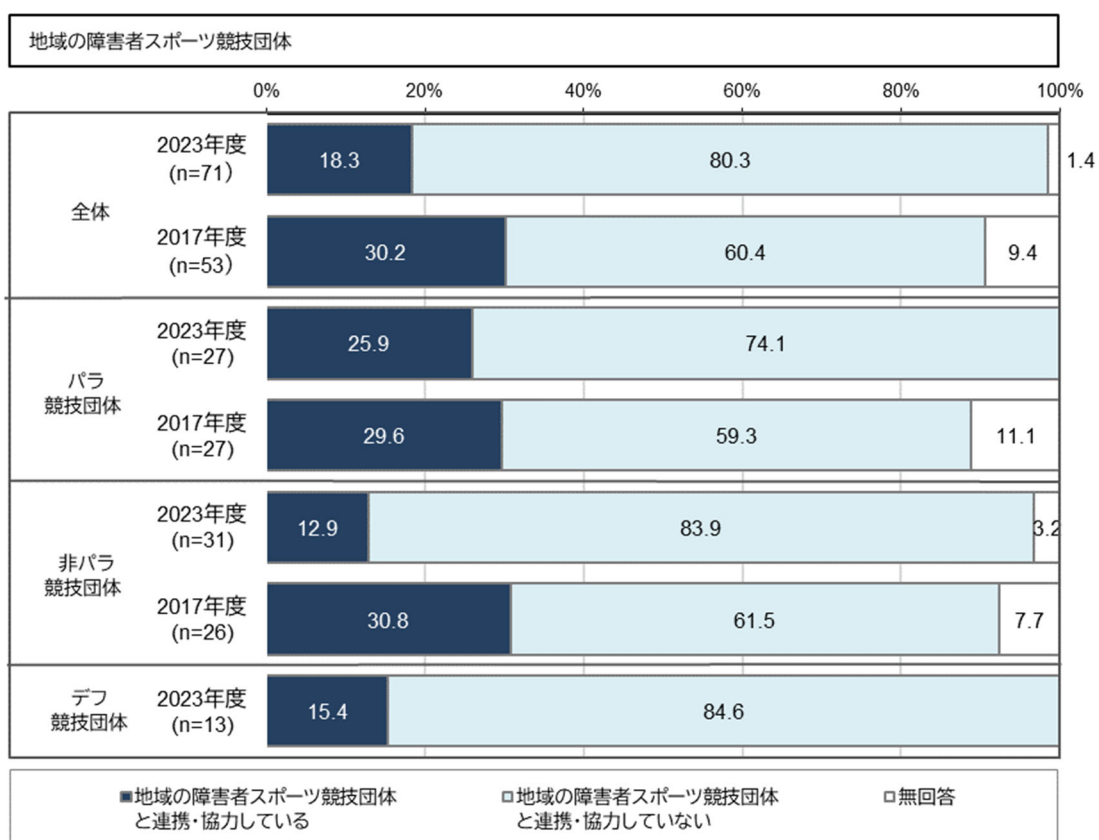
図表 1-32 地域の障害者スポーツ指導者協議会との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=9)		非パラ競技団体 (n=6)		デフ競技団体 (n=2)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	1	11.1%	1	16.7%	0	0.0%
会場の確保	1	11.1%	1	16.7%	0	0.0%
周知・広報・集客	3	33.3%	5	83.3%	2	100.0%
当日の運営	3	33.3%	3	50.0%	0	0.0%
指導者派遣	4	44.4%	1	16.7%	0	0.0%
ボランティア派遣	3	33.3%	5	83.3%	1	50.0%
情報交換	3	33.3%	2	33.3%	1	50.0%
その他	3	33.3%	0	0.0%	0	0.0%

2-3-5.地域の障害者スポーツ競技団体との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と地域の障害者スポーツ競技団体との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは30.2%、2023年度は18.3%だった(図表1-33)。そのうち、パラ競技団体では29.6%(2017年度)から25.9%(2023年度)、非パラ競技団体では30.8%(2017年度)から12.9%(2023年度)にそれぞれ減少した。デフ競技団体では、2023年度には15.4%の団体で連携・協力していた。

図表 1-33 地域の障害者スポーツ競技団体との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「会場の確保」「ボランティア派遣」「情報交換」が42.9%と最も多かった(図表 1-34)。非パラ競技団体、デフ競技団体では「情報交換」が100%だった。

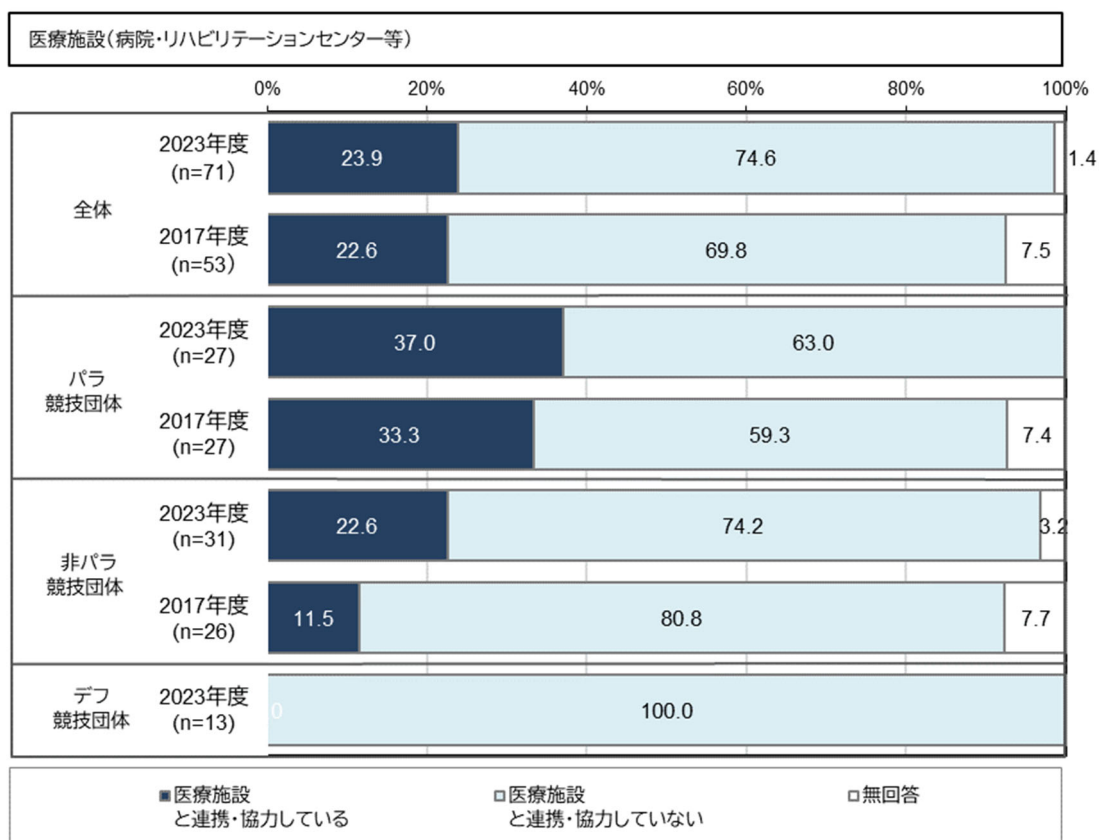
図表 1-34 地域の障害者スポーツ競技団体との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=7)		非パラ競技団体 (n=4)		デフ競技団体 (n=2)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	2	28.6%	3	75.0%	0	0.0%
会場の確保	3	42.9%	2	50.0%	0	0.0%
周知・広報・集客	2	28.6%	3	75.0%	1	50.0%
当日の運営	2	28.6%	3	75.0%	0	0.0%
指導者派遣	0	0.0%	3	75.0%	0	0.0%
ボランティア派遣	3	42.9%	3	75.0%	1	50.0%
情報交換	3	42.9%	4	100.0%	2	100.0%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

2-3-6.医療施設(病院・リハビリテーションセンター等)との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と医療施設(病院・リハビリテーションセンター等)との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは22.6%、2023年度は23.9%だった(図表1-35)。そのうち、パラ競技団体では33.3%(2017年度)から37.0%(2023年度)、非パラ競技団体では11.5%(2017年度)から22.6%(2023年度)にそれぞれ増加した。デフ競技団体では、2023年度に連携・協力している団体はなかった。

図表 1-35 医療施設との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「情報交換」が 40.0 %と最も多かった(図表 1-36)。非パラ競技団体では「周知・広報・集客」が 71.4%と最も多かった。

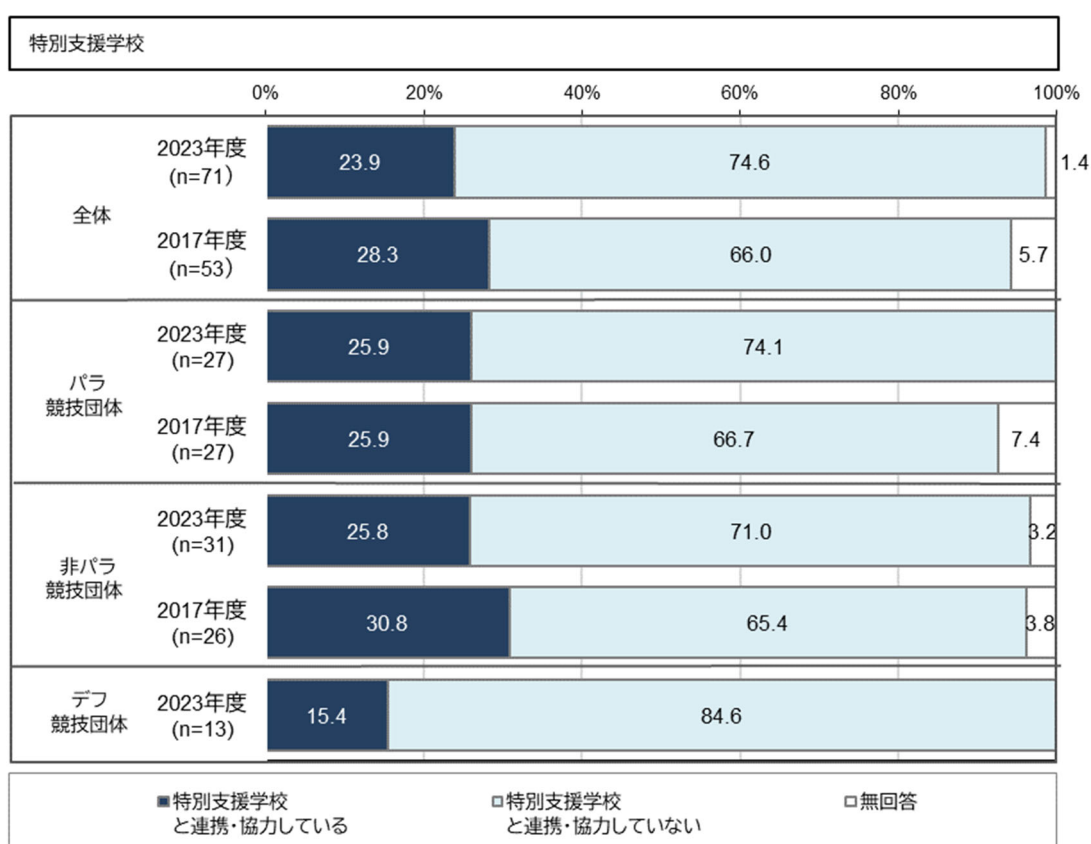
図表 1-36 医療施設との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=10)		非パラ競技団体 (n=7)		デフ競技団体 (n=0)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	2	20.0%	3	42.9%	-	-
会場の確保	1	10.0%	4	57.1%	-	-
周知・広報・集客	3	30.0%	5	71.4%	-	-
当日の運営	3	30.0%	4	57.1%	-	-
指導者派遣	1	10.0%	3	42.9%	-	-
ボランティア派遣	2	20.0%	4	57.1%	-	-
情報交換	4	40.0%	4	57.1%	-	-
その他	1	10.0%	0	0.0%	-	-

2-3-7.特別支援学校との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と特別支援学校との連携・協力について過去調査との比較で見ると、2017年度は連携・協力しているのは28.3%、2023年度は23.9%だった(図表1-37)。そのうち、パラ競技団体では25.9%(2017年度、2023年度)と変わらず、非パラ競技団体では30.8%(2017年度)から25.8%(2023年度)に減少した。デフ競技団体では、2023年度に連携・協力しているのは15.4%だった。

図表 1-37 特別支援学校との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

連携・協力内容については、パラ競技団体では「情報交換」が 57.1%と最も多かった(図表 1-38)。非パラ競技団体では「事業の企画」「周知・広報・集客」「指導者派遣」が 50.0%と最も多かった。デフ競技団体では「周知・広報・集客」「情報交換」が 100%だった。「その他」では、大会への招待・案内、講演者の派遣、体育授業への支援など、具体的な支援内容があった。

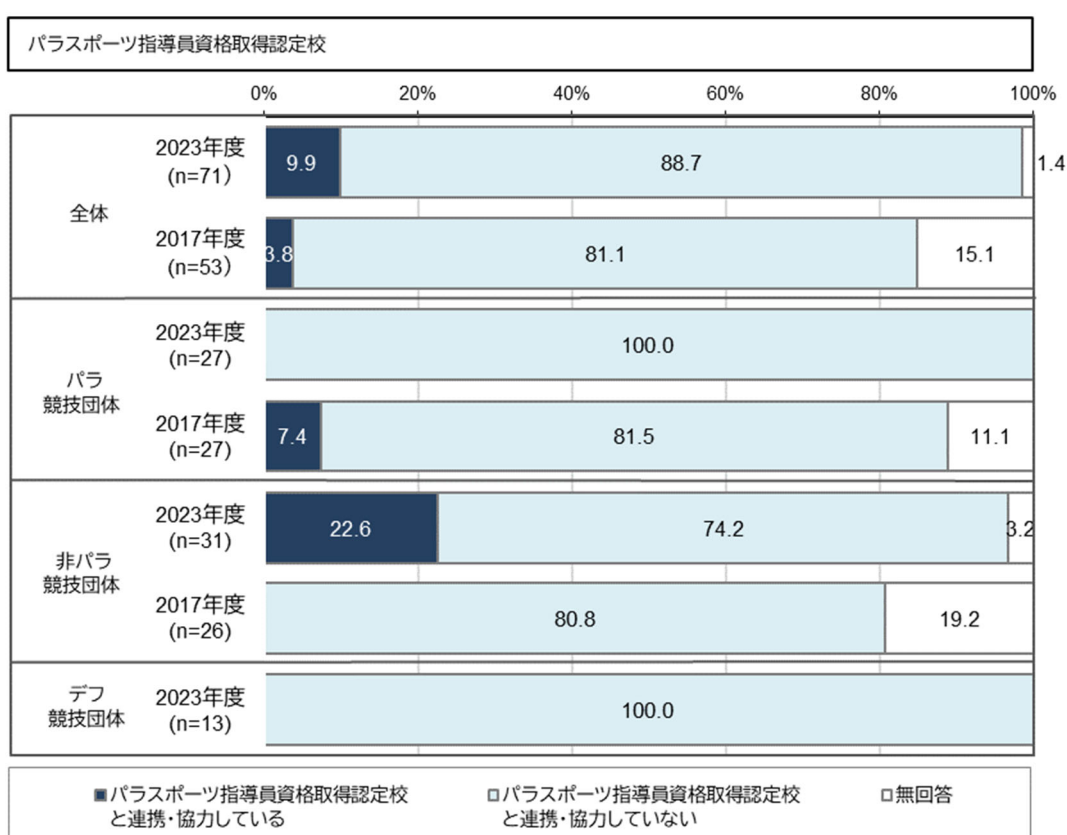
図表 1-38 特別支援学校との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=7)		非パラ競技団体 (n=8)		デフ競技団体 (n=2)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	2	28.6%	4	50.0%	0	0.0%
会場の確保	1	14.3%	2	25.0%	0	0.0%
周知・広報・集客	2	28.6%	4	50.0%	2	100.0%
当日の運営	1	14.3%	2	25.0%	0	0.0%
指導者派遣	0	0.0%	4	50.0%	0	0.0%
ボランティア派遣	0	0.0%	2	25.0%	0	0.0%
情報交換	4	57.1%	2	25.0%	2	100.0%
その他	3	42.9%	2	25.0%	1	50.0%

2-3-8. パラスポーツ指導員資格取得認定校との連携・協力

障害者スポーツ競技団体とパラスポーツ指導員資格取得認定校との連携・協力について過去調査との比較でみると、2017年度は連携・協力しているのは3.8%、2023年度は9.9%だった(図表1-39)。そのうち、パラ競技団体では7.4%(2017年度)から0%に減少した。非パラ競技団体では0%(2017年度)から22.6%(2023年度)に増加した。デフ競技団体では、2023年度に連携・協力している団体はなかった。

図表1-39 パラスポーツ指導員資格取得認定校との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。
 ※パラスポーツ指導員資格取得校(旧障害者スポーツ指導員資格取得認定校)

連携・協力内容については、非パラ競技団体では「ボランティア派遣」が71.4%と最も多かった(図表 1-40)。

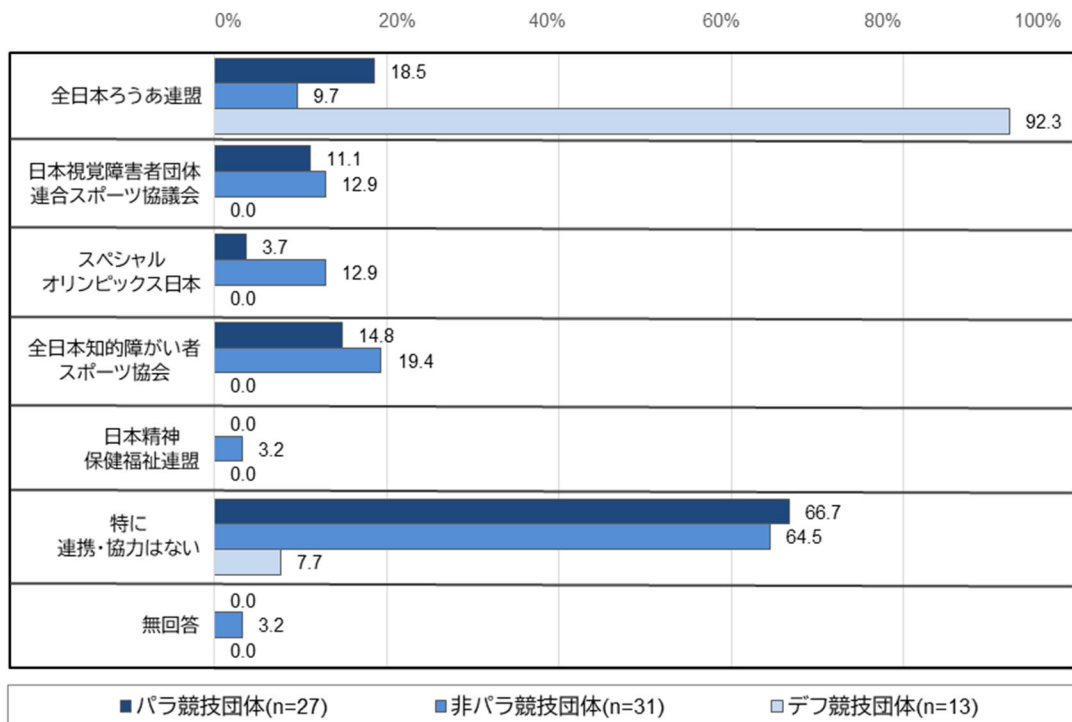
図表 1-40 パラスポーツ指導員資格取得認定校との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=0)		非パラ競技団体 (n=7)		デフ競技団体 (n=0)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	-	-	1	14.3%	-	-
会場の確保	-	-	2	28.6%	-	-
周知・広報・集客	-	-	3	42.9%	-	-
当日の運営	-	-	3	42.9%	-	-
指導者派遣	-	-	2	28.6%	-	-
ボランティア派遣	-	-	5	71.4%	-	-
情報交換	-	-	1	14.3%	-	-
その他	-	-	0	0.0%	-	-

2-4.障害者スポーツ統括競技団体との連携・協力

障害者スポーツ競技団体と障害別の障害者スポーツ統括競技団体の連携・協力団体についてみた(図表 1-41)。パラ競技団体、非パラ競技団体においては「特に連携・協力はない」がそれぞれ 66.7%、64.5%と最も多かった。デフ競技団体では「全日本ろうあ連盟」が 92.3%で最も多かった。

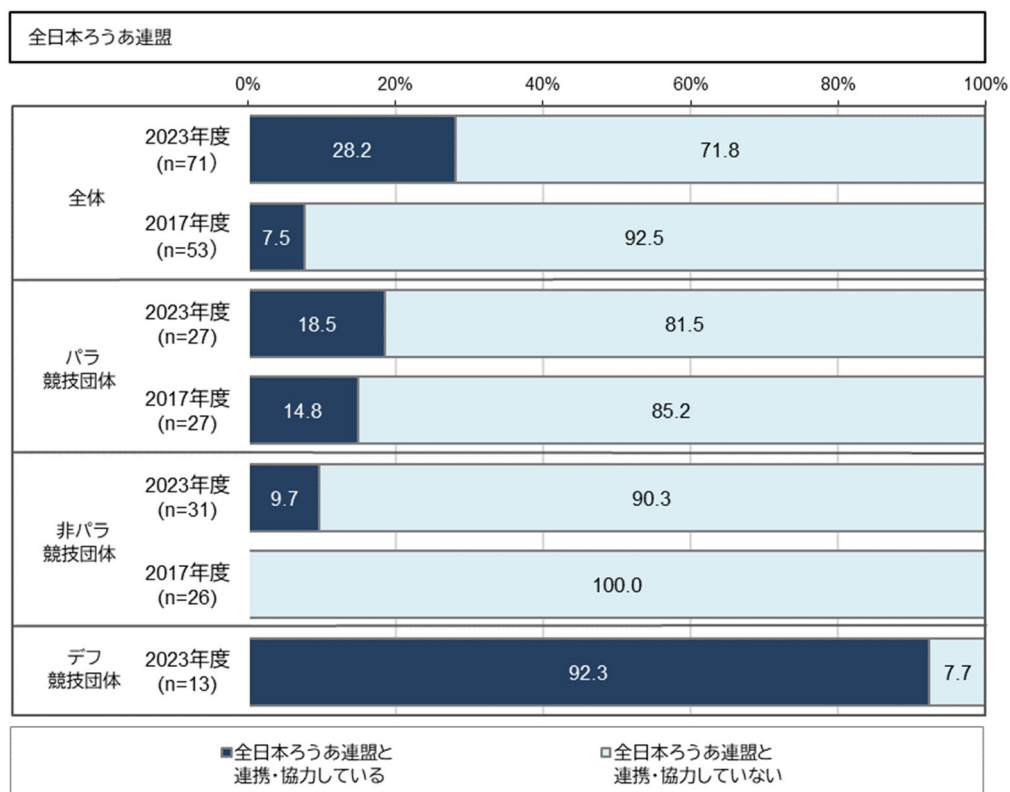
図表 1-41 障害者スポーツ統括競技団体との連携・協力



2-4-1.全日本ろうあ連盟との連携・協力

全日本ろうあ連盟との連携・協力の内容は、デフ競技団体においては「情報交換」が83.3%で最も多く、ついで「周知・広報・集客」の41.7%だった(図表 1-42、図表 1-43)。「その他」では、東京 2025 デフリンピック大会の調整・準備があった。

図表 1-42 全日本ろうあ連盟との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

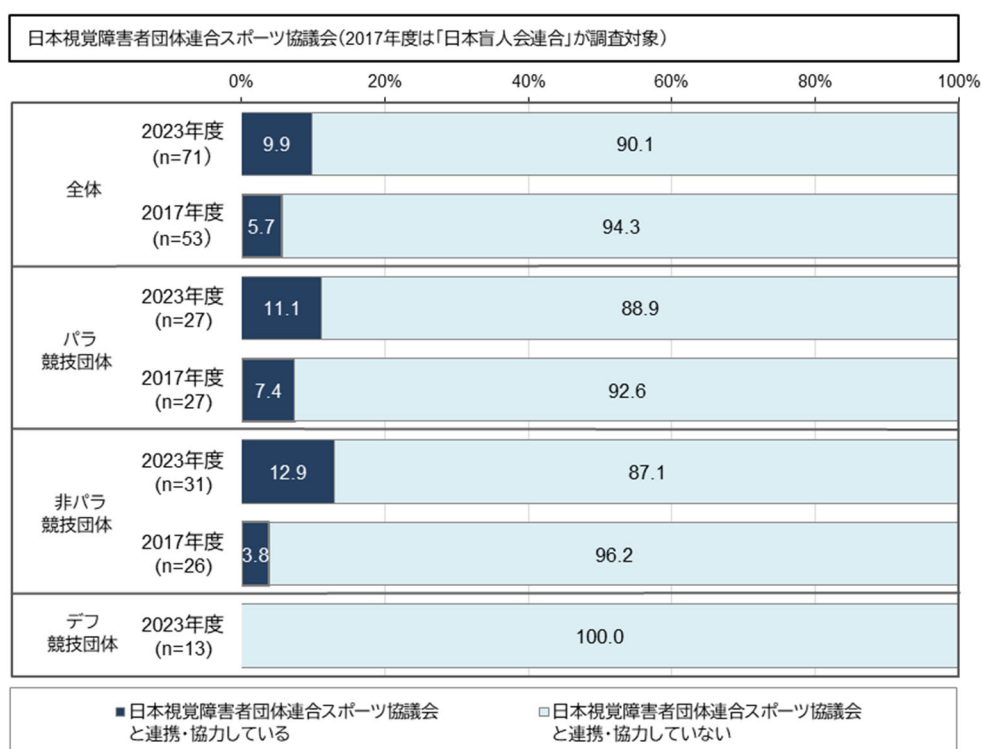
図表 1-43 全日本ろうあ連盟との連携・協力との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=5)		非パラ競技団体 (n=3)		デフ競技団体 (n=12)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	0	0.0%	0	0.0%	1	8.3%
会場の確保	0	0.0%	0	0.0%	1	8.3%
周知・広報・集客	0	0.0%	0	0.0%	5	41.7%
当日の運営	0	0.0%	0	0.0%	1	8.3%
指導者派遣	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ボランティア派遣	0	0.0%	0	0.0%	1	8.3%
情報交換	3	60.0%	2	66.7%	10	83.3%
その他	2	40.0%	2	66.7%	3	25.0%

2-4-2. 日本視覚障害者団体連合スポーツ協議会との連携・協力

日本視覚障害者団体連合スポーツ協議会との連携・協力について過去調査との比較で見ると、パラ競技団体では7.4%(2017年度)から11.1%(2023年度)、非パラ競技団体では3.8%(2017年度)から12.9%(2023年度)に、それぞれ増加した(図表1-44)。連携・協力の内容は、「情報交換」が最も多かった(図表1-45)。

図表 1-44 日本視覚障害者団体連合スポーツ協議会との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

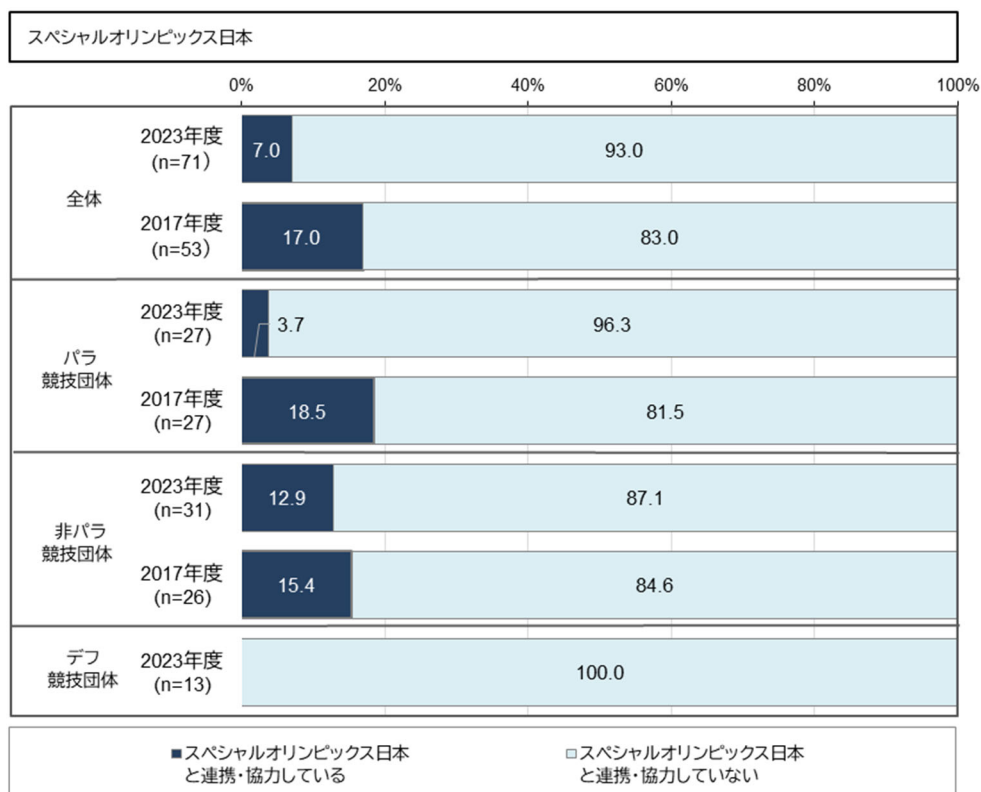
図表 1-45 日本視覚障害者団体連合スポーツ協議会との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=3)		非パラ競技団体 (n=4)		デフ競技団体 (n=0)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	0	0.0%	0	0.0%	-	-
会場の確保	0	0.0%	0	0.0%	-	-
周知・広報・集客	1	33.3%	0	0.0%	-	-
当日の運営	0	0.0%	0	0.0%	-	-
指導者派遣	0	0.0%	0	0.0%	-	-
ボランティア派遣	0	0.0%	0	0.0%	-	-
情報交換	3	100.0%	3	75.0%	-	-
その他	0	0.0%	1	25.0%	-	-

2-4-3 スペシャルオリンピックス日本との連携・協力

スペシャルオリンピックス日本との連携・協力について過去調査との比較でみると、パラ競技団体では18.5%(2017年度)から3.7%(2023年度)、非パラ競技団体では15.4%(2017年度)から12.9%(2023年度)にそれぞれ減少した(図表1-46)。連携・協力の内容は、非パラ競技団体では「情報交換」が最も多かった(図表1-47)。

図表 1-46 スペシャルオリンピックス日本との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

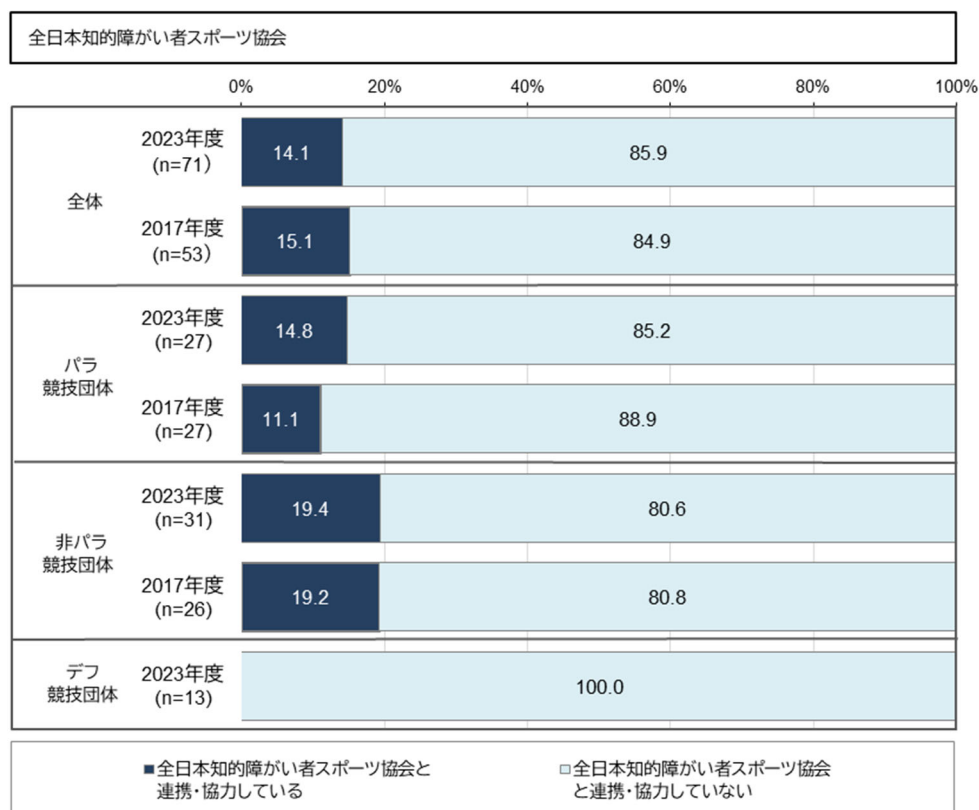
図表 1-47 スペシャルオリンピックス日本との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=1)		非パラ競技団体 (n=4)		デフ競技団体 (n=0)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	0	0.0%	1	25.0%	-	-
会場の確保	0	0.0%	0	0.0%	-	-
周知・広報・集客	1	100.0%	0	0.0%	-	-
当日の運営	0	0.0%	0	0.0%	-	-
指導者派遣	0	0.0%	0	0.0%	-	-
ボランティア派遣	0	0.0%	1	25.0%	-	-
情報交換	1	100.0%	4	100.0%	-	-
その他	0	0.0%	0	0.0%	-	-

2-4-4.全日本知的障がい者スポーツ協会との連携・協力

全日本知的障がい者スポーツ協会との連携・協力について過去調査との比較でみると、パラ競技団体では11.1%(2017年度)から14.8%(2023年度)に増加した(図表1-48)。連携・協力の内容は、非パラ競技団体では「情報交換」が最も多かった(図表1-49)。

図表 1-48 全日本知的障がい者スポーツ協会との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

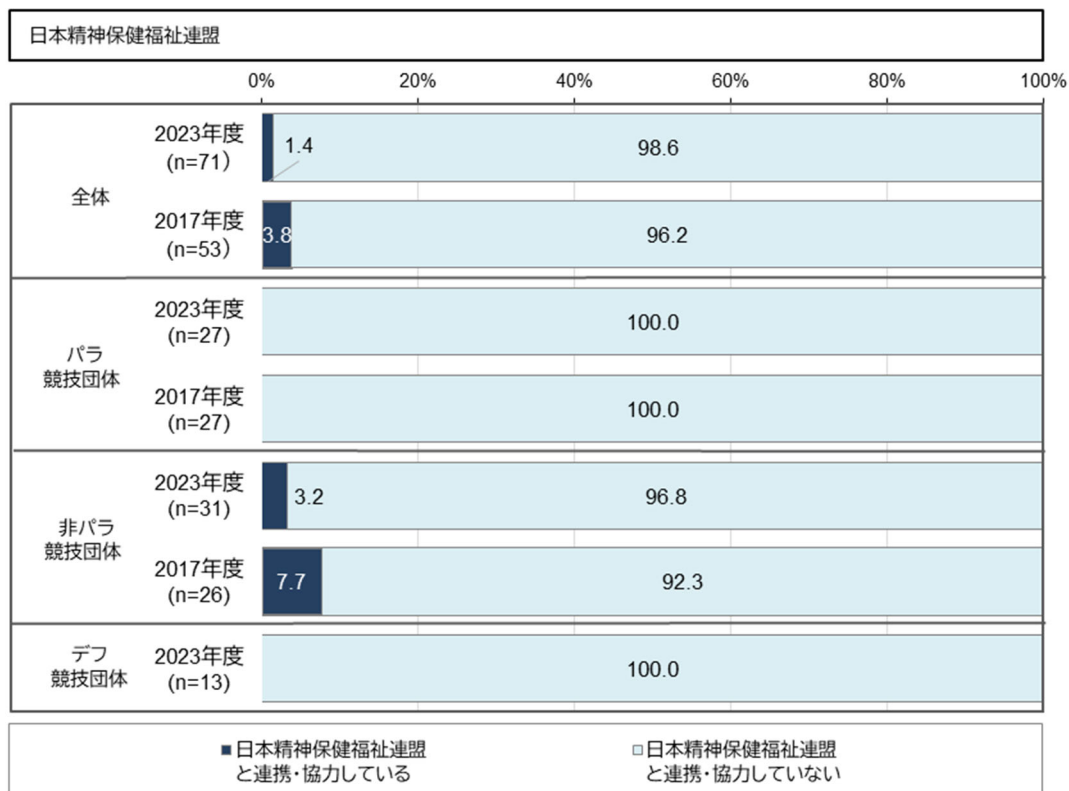
図表 1-49 全日本知的障がい者スポーツ協会との連携・協力内容

	パラ競技団体 (n=1)		非パラ競技団体 (n=4)		デフ競技団体 (n=0)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	0	0.0%	1	25.0%	-	-
会場の確保	0	0.0%	0	0.0%	-	-
周知・広報・集客	1	100.0%	0	0.0%	-	-
当日の運営	0	0.0%	0	0.0%	-	-
指導者派遣	0	0.0%	0	0.0%	-	-
ボランティア派遣	0	0.0%	1	25.0%	-	-
情報交換	1	100.0%	4	100.0%	-	-
その他	0	0.0%	0	0.0%	-	-

2-4-5.日本精神保健福祉連盟との連携・協力

日本精神保健福祉連盟との連携・協力について過去調査との比較でみると、連携・協力はほとんどみられなかった(図表 1-50、図表 1-51)。

図表 1-50 日本精神保健福祉連盟との連携・協力



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

図表 1-51 日本精神保健福祉連盟との連携・協力内容

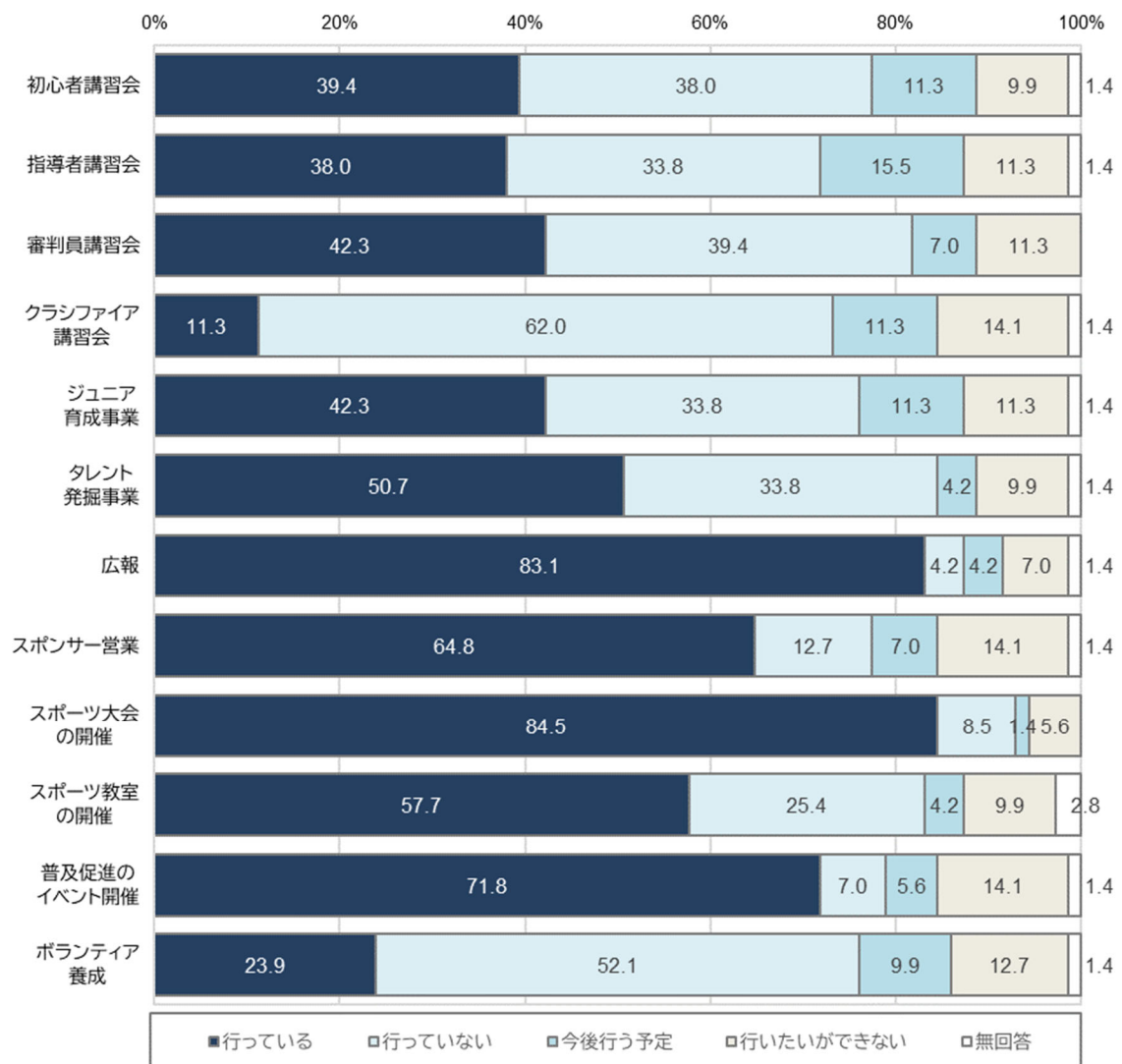
	パラ競技団体 (n=0)		非パラ競技団体 (n=1)		デフ競技団体 (n=0)	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
事業の企画	-	-	1	100.0%	-	-
会場の確保	-	-	1	100.0%	-	-
周知・広報・集客	-	-	1	100.0%	-	-
当日の運営	-	-	1	100.0%	-	-
指導者派遣	-	-	0	0.0%	-	-
ボランティア派遣	-	-	0	0.0%	-	-
情報交換	-	-	1	100.0%	-	-
その他	-	-	0	0.0%	-	-

3. 実施事業

3-1. 各事業の実施状況

障害者スポーツ競技団体の実施事業についてみると、「スポーツ大会の開催」が 84.5% で最も多く、ついで「広報」(83.1%)、「普及促進イベント」(71.8%)、「スポンサー営業」(64.8%)が続く(図表 1-52)。「ボランティア養成」は 23.9%、「クラシファイア講習会」は 11.3%だった。

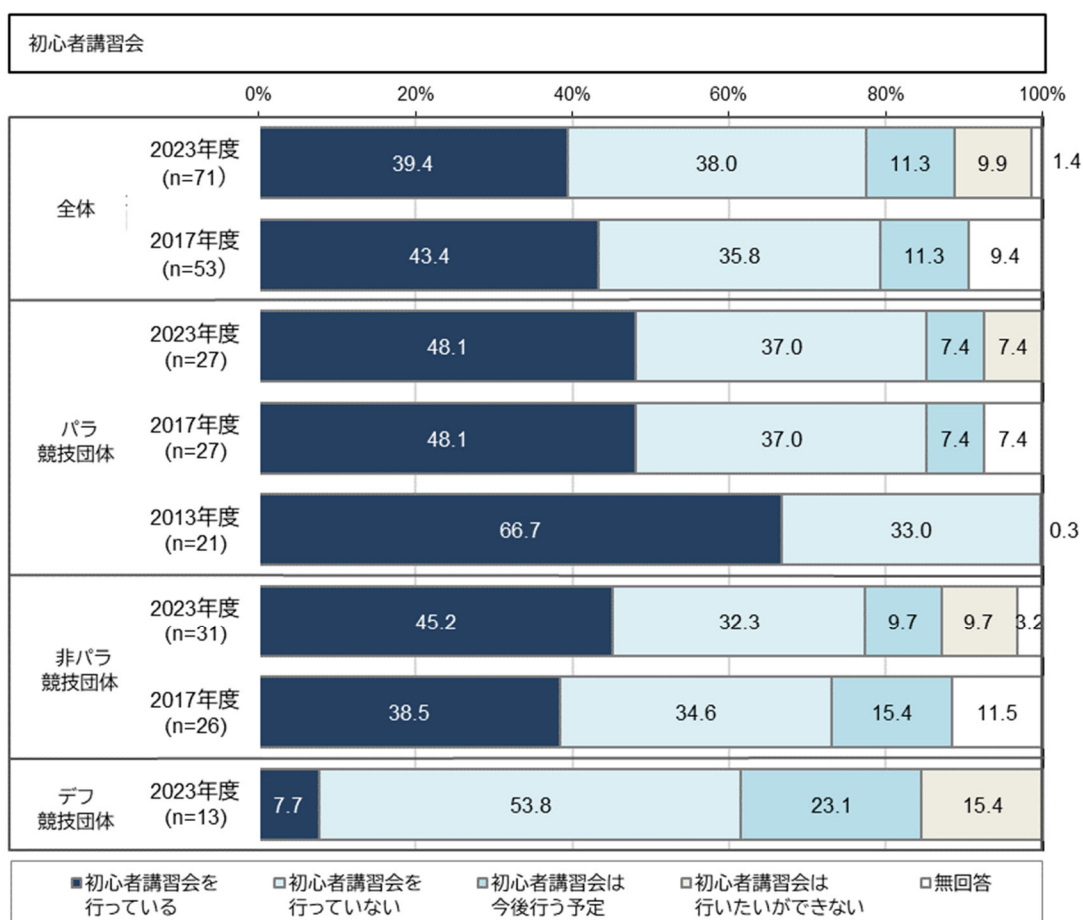
図表 1-52 障害者スポーツ競技団体の実施事業の状況



3-1-1.初心者講習会

「初心者講習会」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 66.7%(2013 年度)から 48.1%(2017 年度、2023 年度)に減少した(図表 1-53)。非パラ競技団体では 38.5%(2017 年度)から 45.2%(2023 年度)に増加した。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 7.7%だった。

図表 1-53 初心者講習会

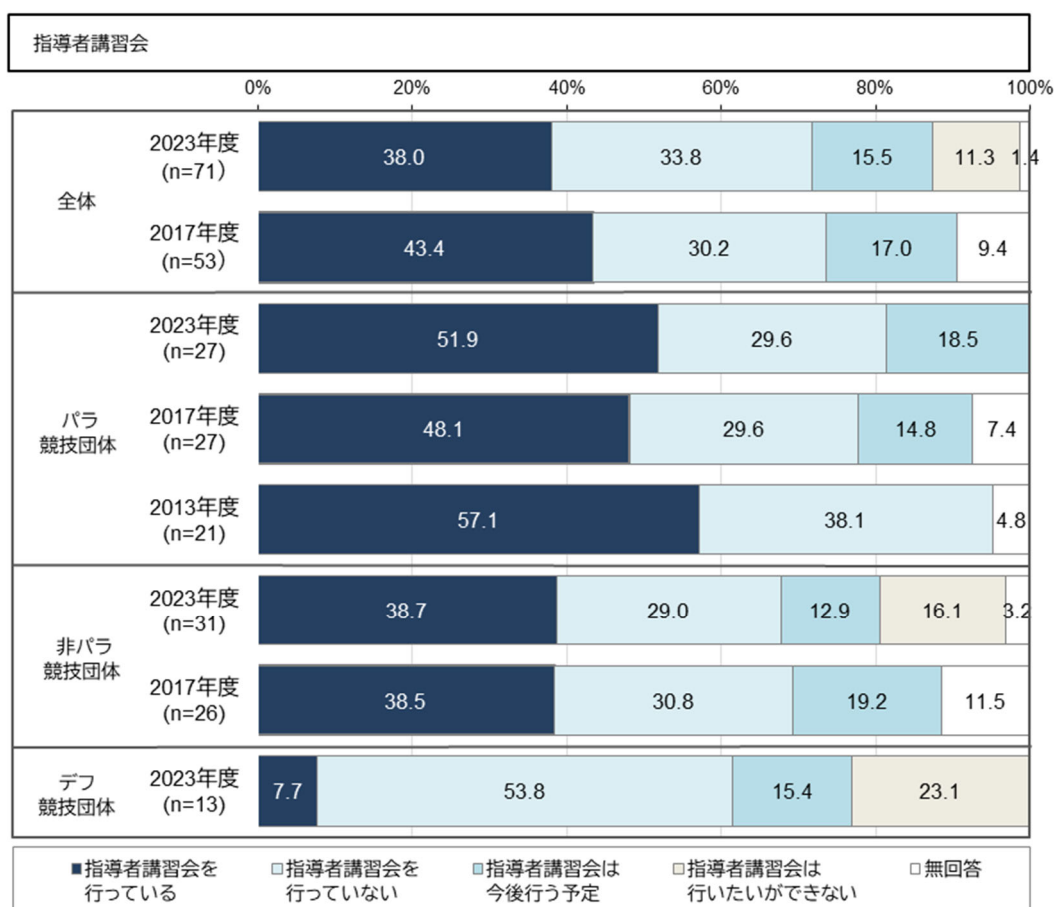


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-2.指導者講習会

「指導者講習会」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 57.1%(2013 年度)から 48.1%(2017 年度)、51.9%(2023 年度)と変化した(図表 1-54)。非パラ競技団体では 38.5%(2017 年度)から 38.7%(2023 年度)とほぼ横ばいだった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 7.7%だった。

図表 1-54 指導者講習会

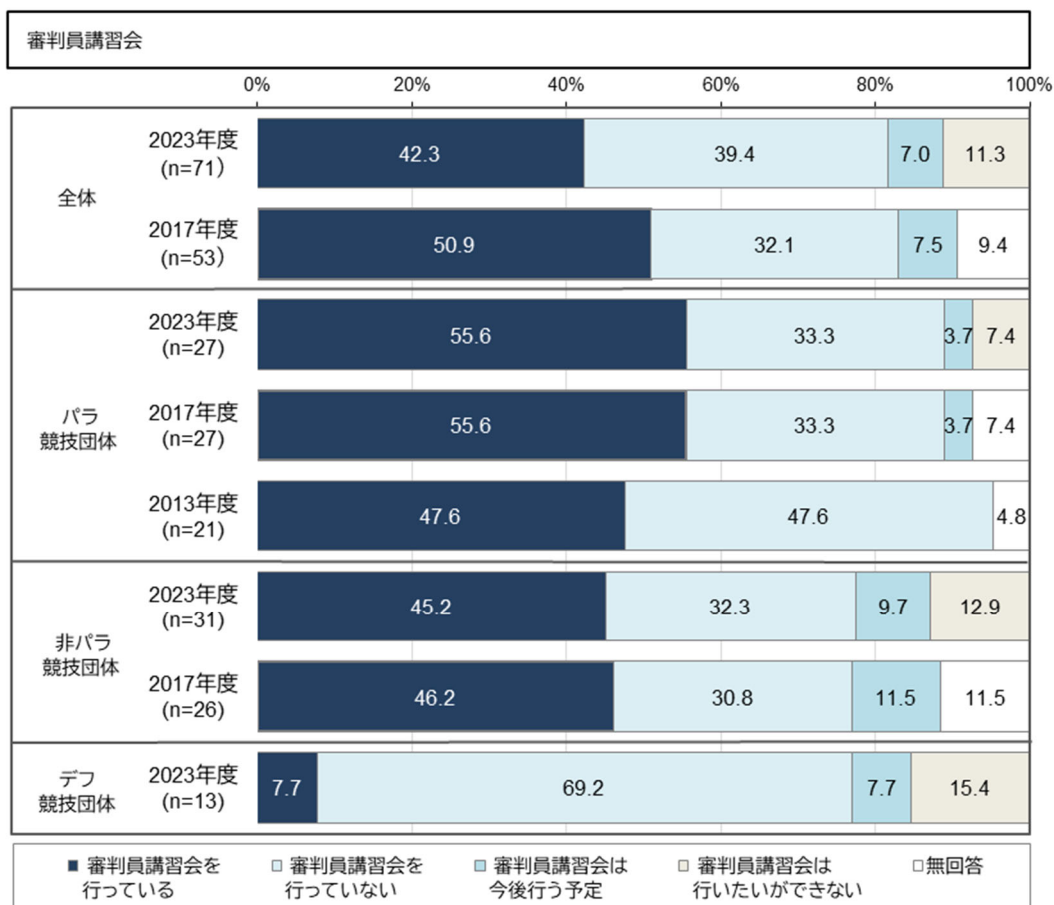


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-3.審判員講習会

「審判員講習会」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 47.6%(2013 年度)から 55.6%(2017 年度、2023 年度)と変化した(図表 1-55)。非パラ競技団体は 46.2%(2017 年度)から 45.2%(2023 年度)だった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 7.7%だった。

図表 1-55 審判員講習会

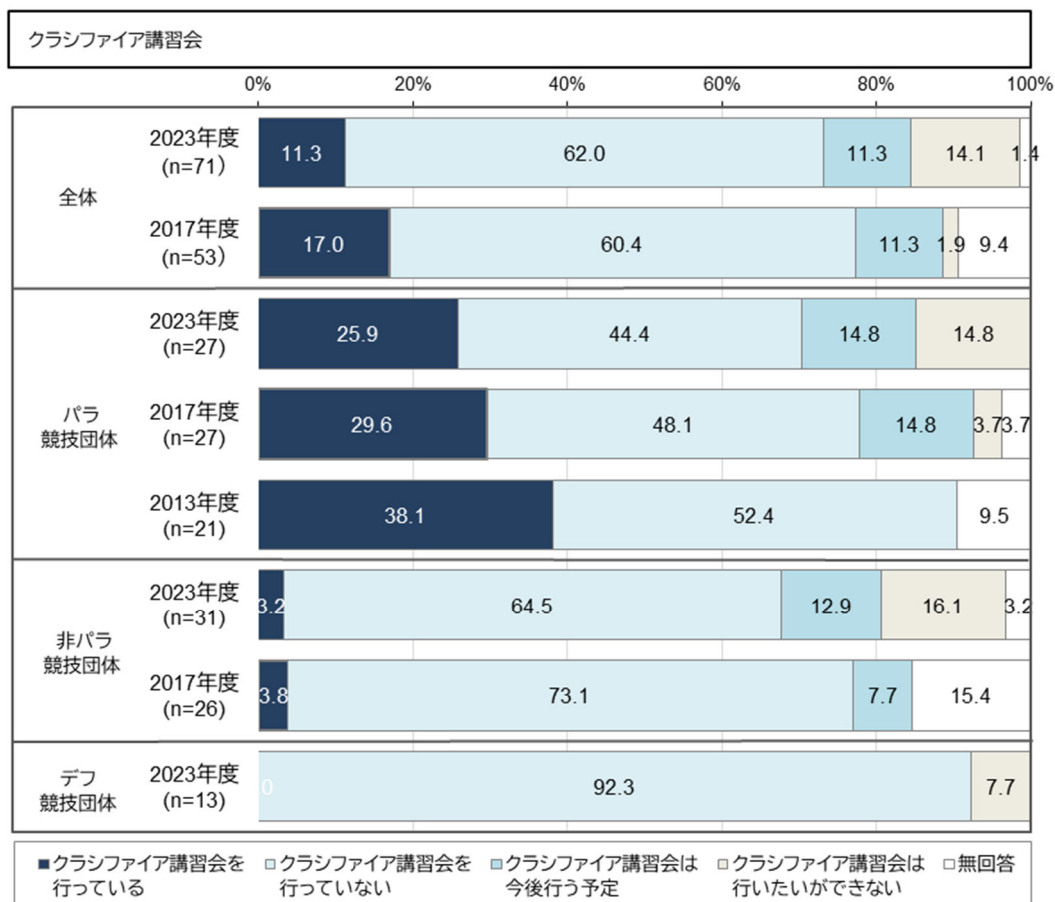


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-4.クラシファイア講習会

「クラシファイア講習会」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 38.1% (2013 年度)から 29.6%(2017 年度)、25.9%(2023 年度)と減少した(図表 1-56)。

図表 1-56 クラシファイア講習会

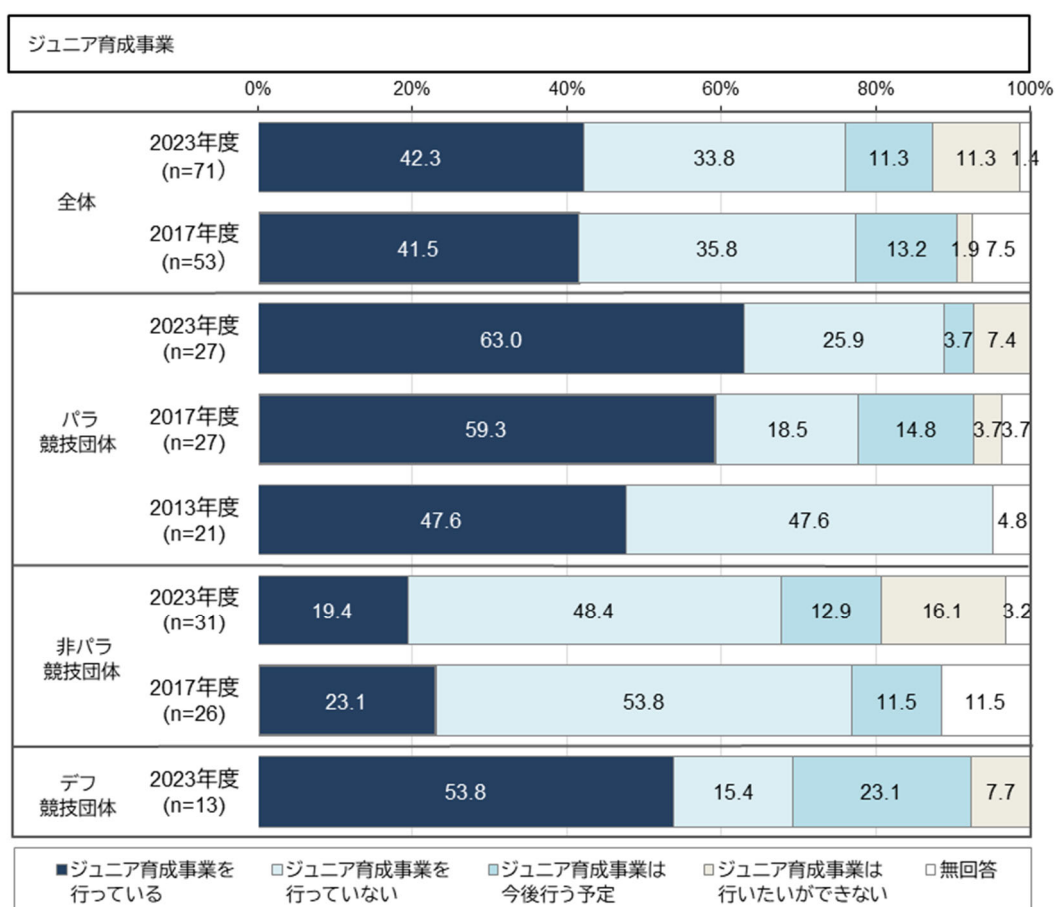


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-5.ジュニア育成事業

「ジュニア育成事業」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 47.6% (2013 年度)から 59.3%(2017 年度)、63.0%(2023 年度)と増加した(図表 1-57)。非パラ競技団体は 23.1%(2017 年度)から 19.4%(2023 年度)だった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 53.8%だった。

図表 1-57 ジュニア育成事業

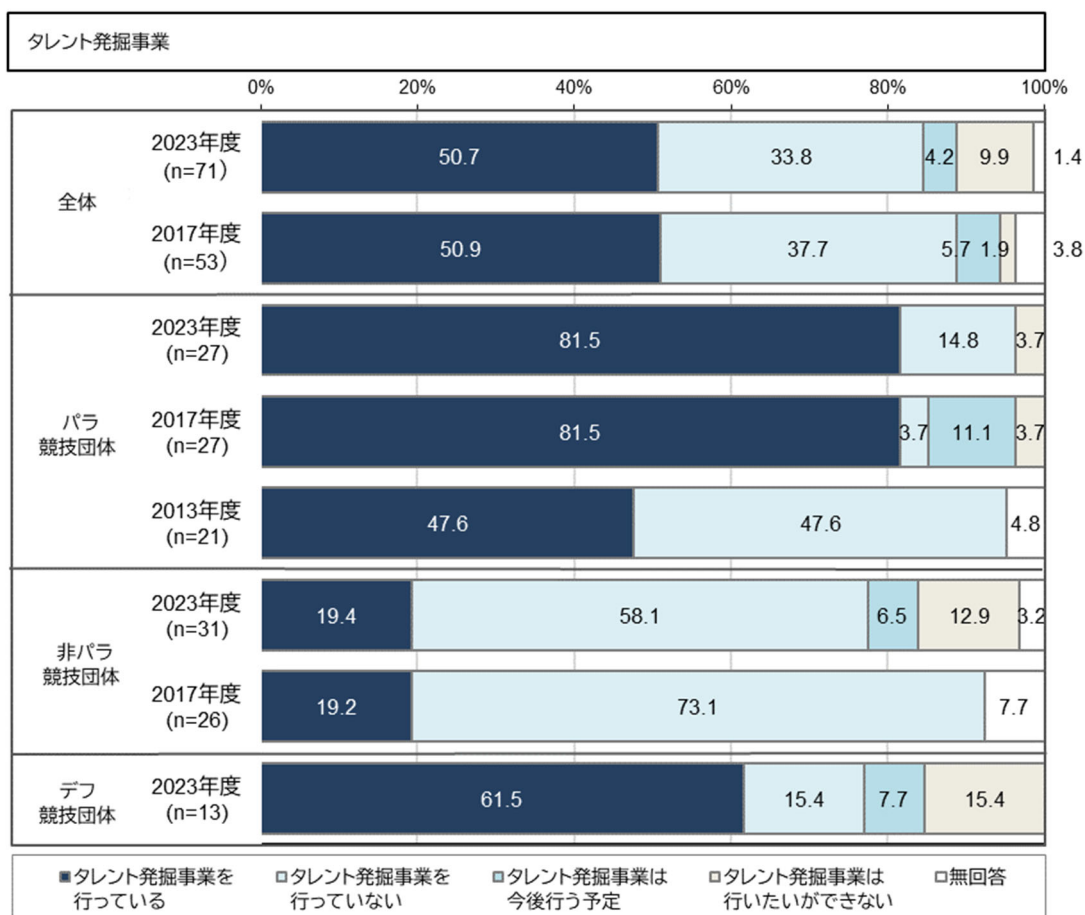


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-6.タレント発掘事業

「タレント発掘事業」の実施を過去調査との比較で見ると、パラ競技団体では 47.6% (2013 年度)から 81.5%(2017 年度、2023 年度)と増加した(図表 1-58)。非パラ競技団体では 19.2%(2017 年度)から 19.4%(2023 年度)とほぼ横ばいだった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 61.5%だった。

図表 1-58 タレント発掘事業

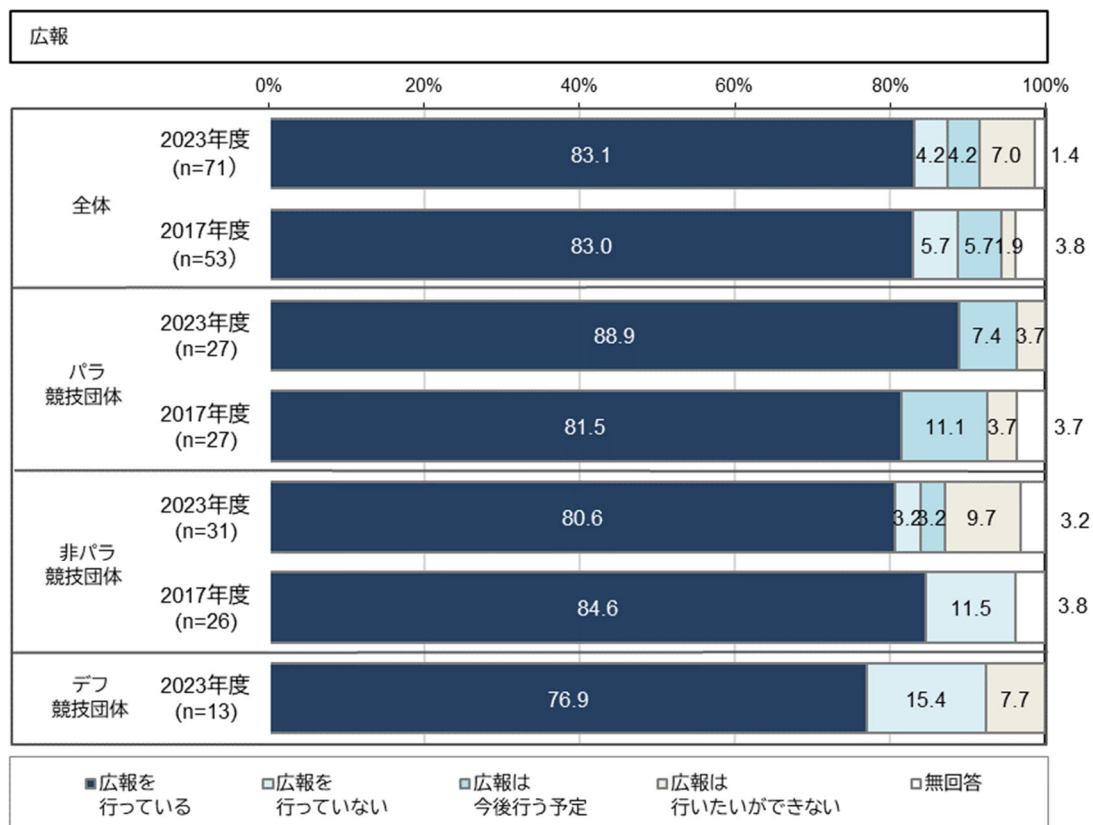


※調査対象は 2013 年度が「パラリンピック競技団体」のみ、「非パラリンピック競技団体」は 2017 年度、「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査を開始。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-7.広報

「広報」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 81.5%(2017 年度)から 88.9%(2023 年度)と増加した(図表 1-59)。非パラ競技団体は 84.6%(2017 年度)から 80.6%(2023 年度)だった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 76.9% だった。

図表 1-59 広報

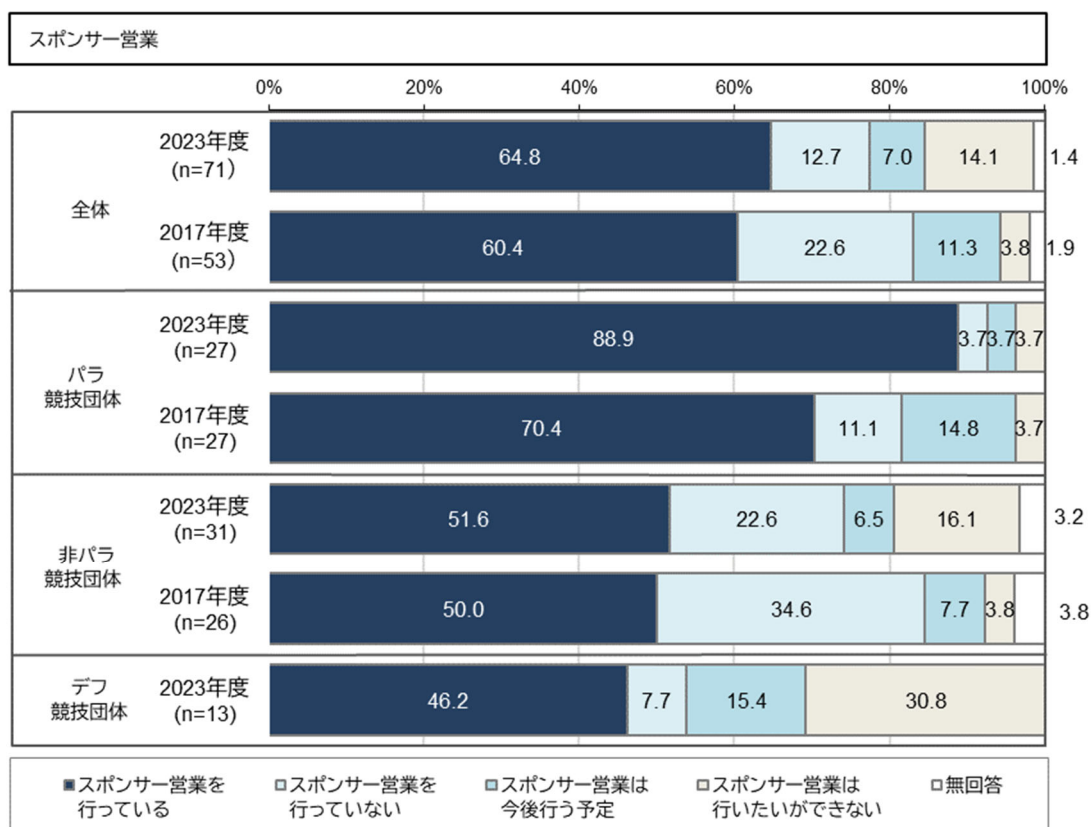


※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。2013 年度は設問項目なし。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-8. スポンサー営業

「スポンサー営業」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 70.4% (2017 年度) から 88.9% (2023 年度) と増加した(図表 1-60)。非パラ競技団体は 50.0% (2017 年度) から 51.6% (2023 年度) だった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 46.2% だった。

図表 1-60 スポンサー営業

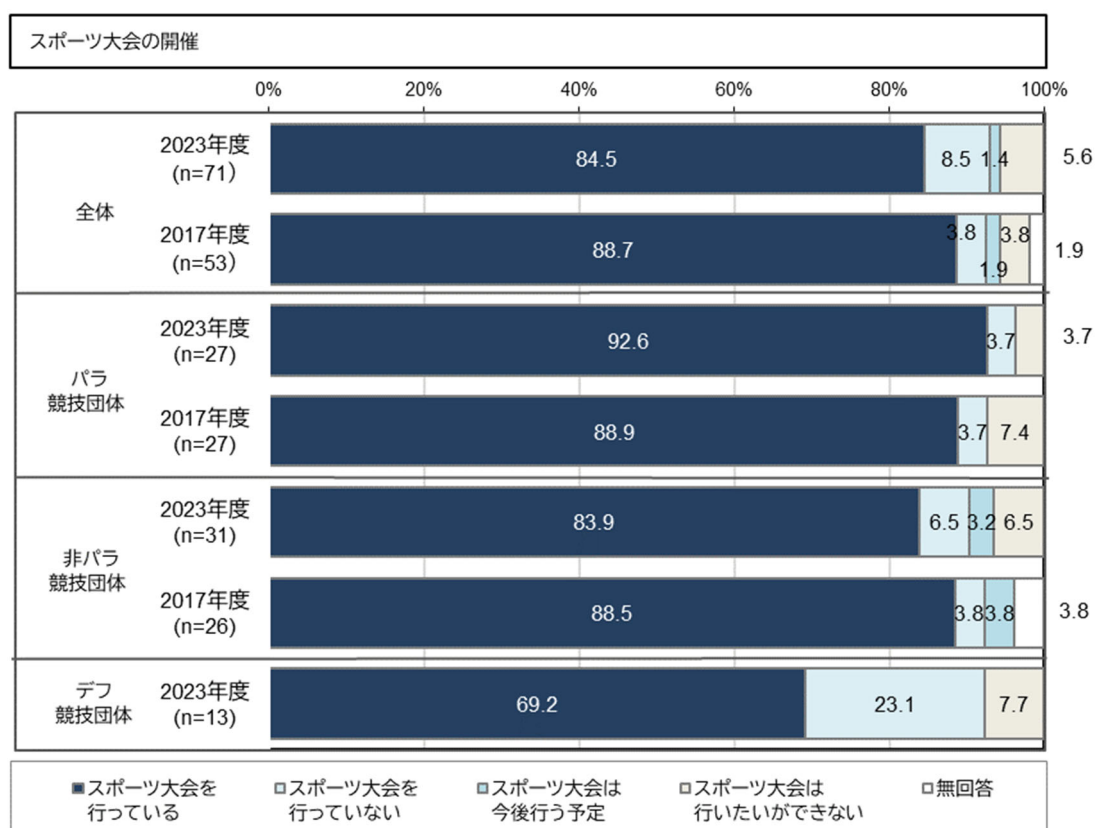


※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。2013 年度は設問項目なし。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-9.スポーツ大会の開催

「スポーツ大会の開催」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体では 88.9% (2017年度)から92.6%(2023年度)と増加した(図表1-61)。非パラ競技団体は88.5% (2017年度)から 83.9%(2023年度)だった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 69.2%だった。

図表 1-61 スポーツ大会の開催

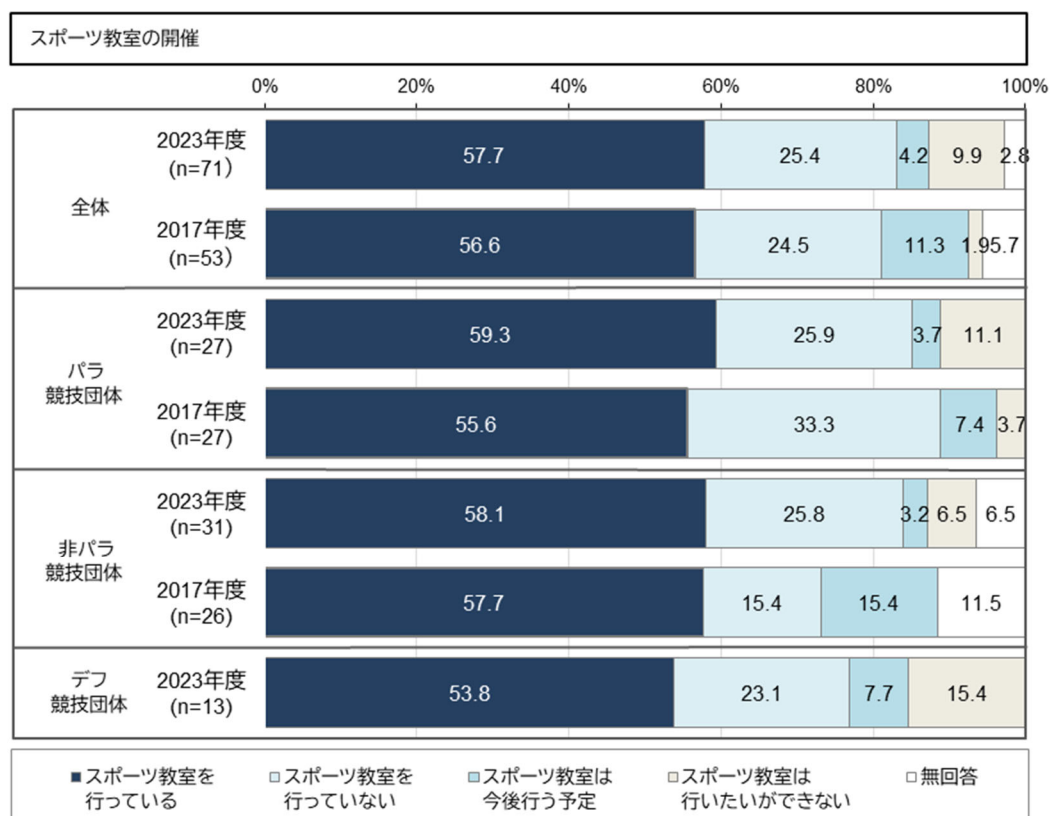


※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。2013 年度は設問項目なし。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-10.スポーツ教室の開催

「スポーツ教室の開催」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体は 55.6% (2017 年度)から 59.3%(2023 年度)だった(図表 1-62)。非パラ競技団体は 57.7% (2017 年度)から 58.1%(2023 年度)だった。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 53.8%だった。

図表 1-62 スポーツ教室の開催

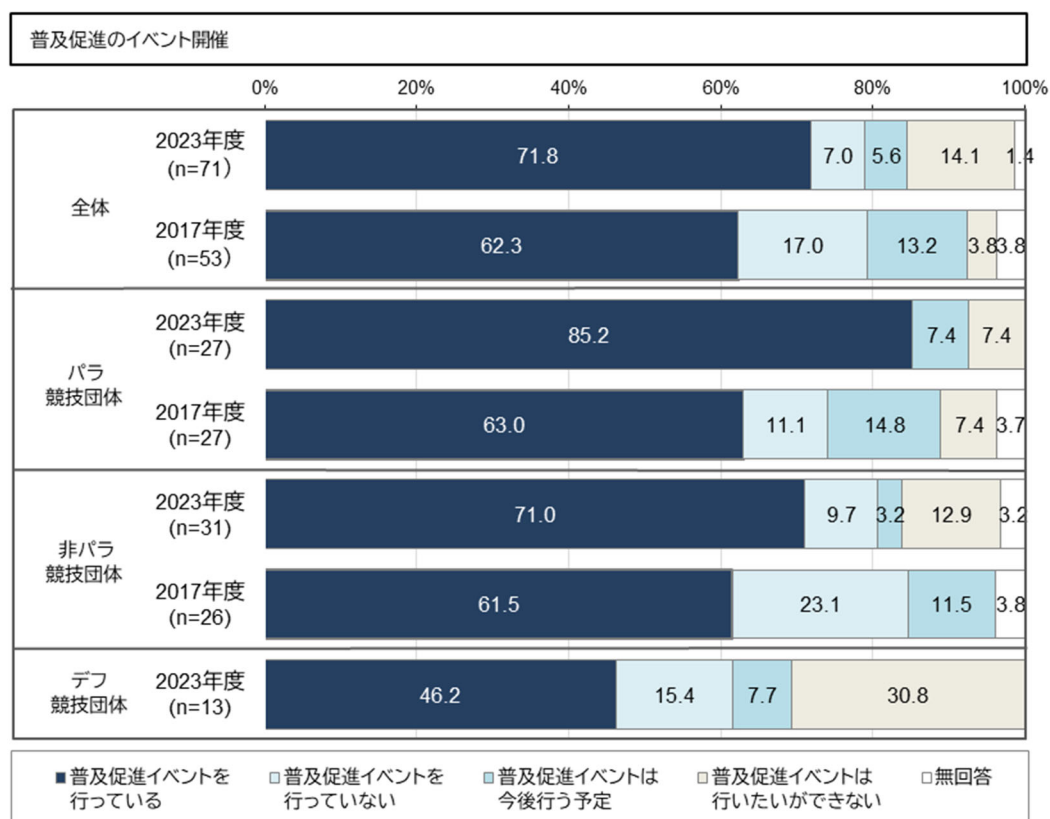


※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。2013 年度は設問項目なし。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-11.普及促進のイベント開催

「普及促進のイベント開催」の実施を過去調査との比較で見ると、パラ競技団体では63.0%(2017年度)から85.2%(2023年度)に増加した(図表 1-63)。非パラ競技団体は61.5%(2017年度)から71.0%(2023年度)だった。デフ競技団体では2023年度に実施しているのは46.2%だった。

図表 1-63 普及促進のイベント開催

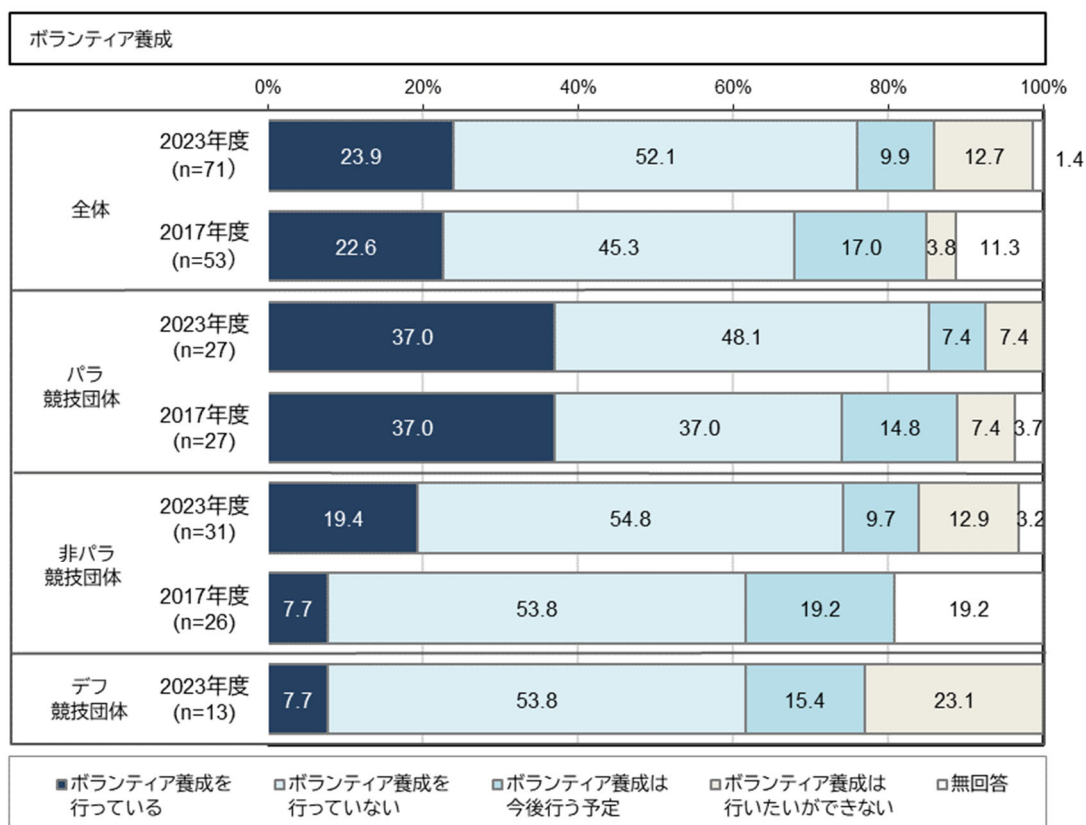


※「デフリンピック競技団体」は2023年度から調査開始。2013年度は設問項目なし。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

3-1-12. ボランティア養成

「ボランティア養成」の実施を過去調査との比較でみると、パラ競技団体は 37.0%(2017 年度、2023 年度)だった(図表 1-64)。非パラ競技団体では 7.7%(2017 年度)から 19.4%(2023 年度)と増加した。デフ競技団体では 2023 年度に実施しているのは 7.7% だった。

図表 1-64 ボランティア養成



※「デフリンピック競技団体」は 2023 年度から調査開始。2013 年度は設問項目なし。いずれもヤマハ発動機スポーツ振興財団「パラリンピック競技団体調査」より。

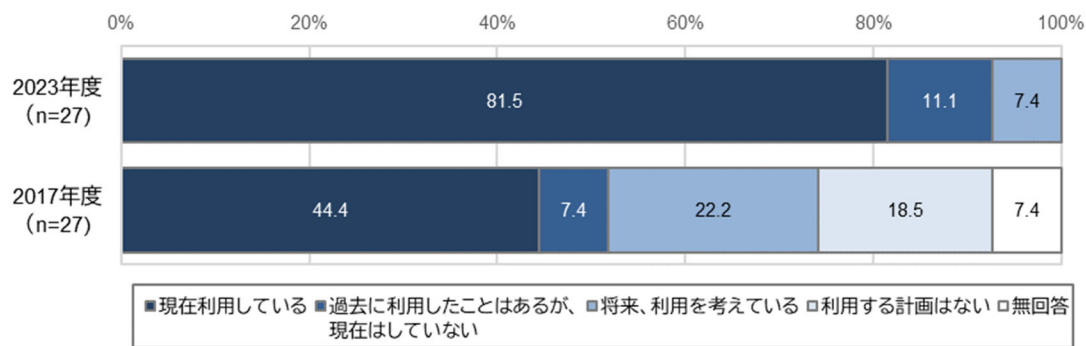
4. パラリンピック競技団体の施設利用状況

4-1.ハイパフォーマンススポーツセンター施設(ナショナルトレーニングセンター:NTC)の利用

4-1-1.利用の有無

パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用の有無について過去調査との比較で見ると、「現在利用している」が44.4%(2017年度)から81.5%(2023年度)に増加した(図表1-65)。

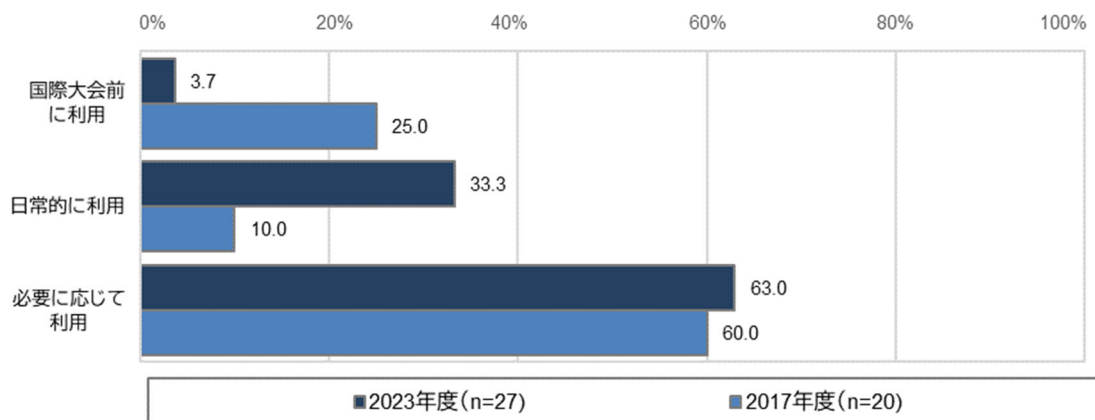
図表 1-65 パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用有無



4-1-2.利用状況

パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用状況について過去調査との比較で見ると、「国際大会前に利用」は25.0%(2017年度)から3.7%(2023年度)に減少する一方、「日常的に利用」が10.0%(2017年度)から33.3%(2023年度)に増加した(図表1-66)。

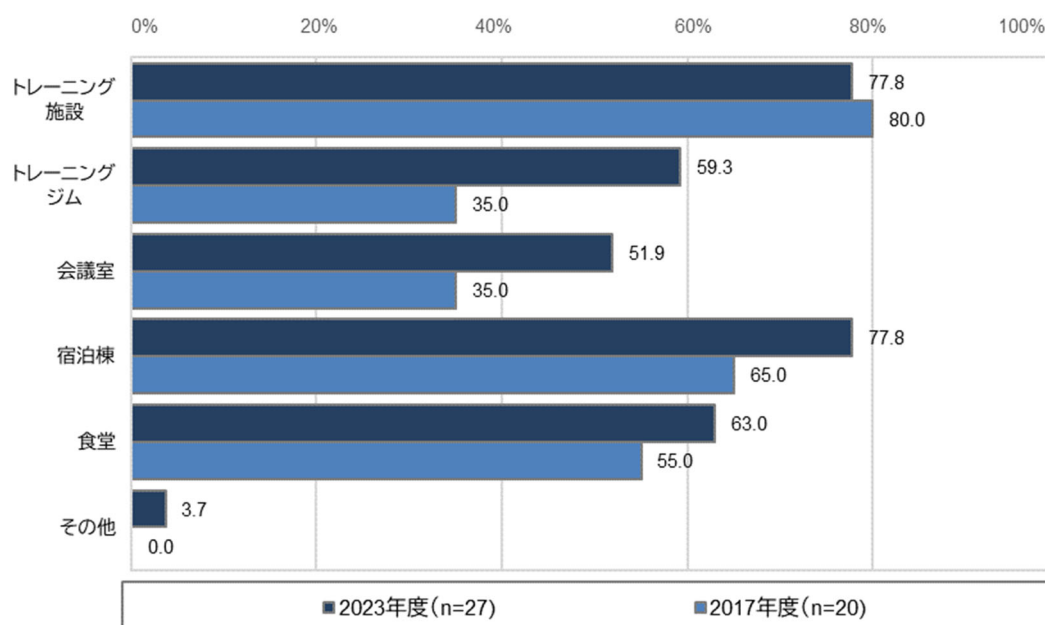
図表 1-66 パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用状況



4-1-3.利用施設

パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用施設について過去調査との比較で見ると、「トレーニングジム」は35.0%(2017年度)から59.3%(2023年度)、「会議室」は35.0%(2017年度)から51.9%(2023年度)、「宿泊棟」が65.0%(2017年度)から77.8%(2023年度)、「食堂」が55.0%(2017年度)から63.0%(2023年度)にそれぞれ増加した(図表 1-67)。

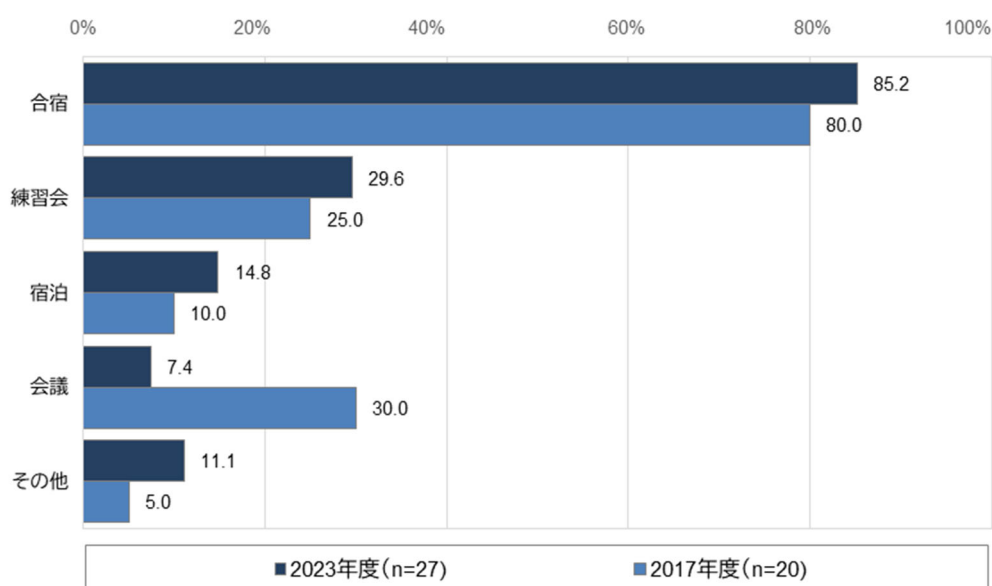
図表 1-67 パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用施設



4-1-4.利用目的

パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用目的は、「合宿」が 85.2%で最も多かった。過去調査との比較でみると、「練習会」が 25.0%(2017 年度)から 29.6%(2023 年度)、「宿泊」が 10.0%(2017 年度)から 14.8%(2023 年度)にそれぞれ増加した一方、「会議」は 30.0%(2017 年度)から 7.4%(2023 年度)に減少した(図表 1-68)。

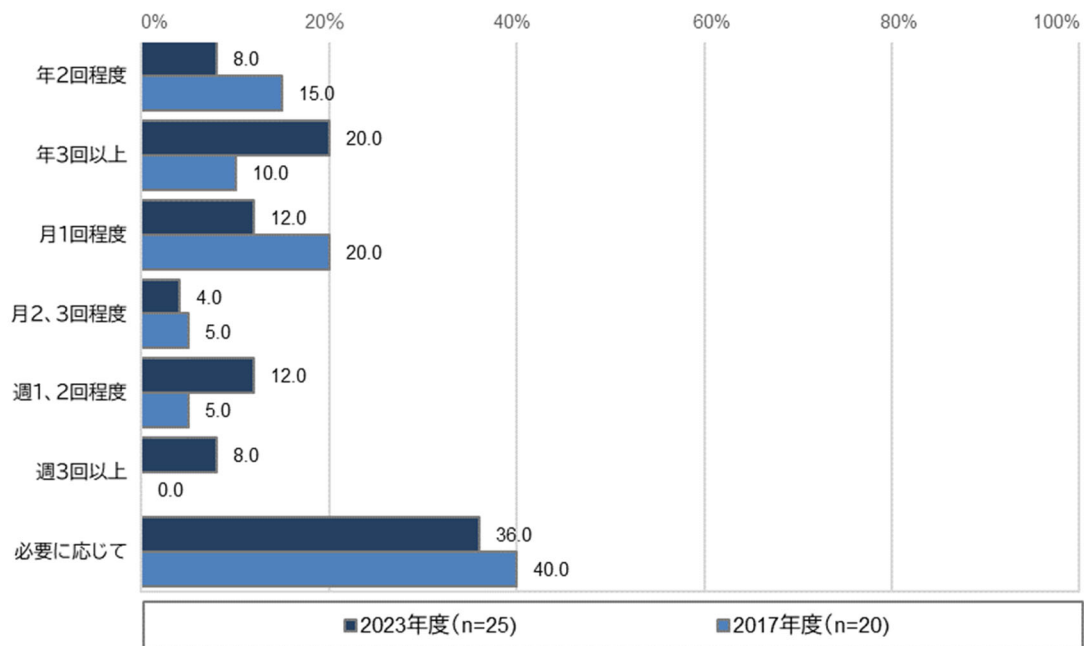
図表 1-68 パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用目的



4-1-5.利用頻度

パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用頻度について過去調査との比較で見ると、「必要に応じて」が40.0%(2017年度)、36.0%(2023年度)でそれぞれ最も多かった(図表1-69)。「週1、2回程度」が5.0%(2017年度)から12.0%(2023年度)、「週3回以上」が0%(2017年度)から8.0%(2023年度)に増加した。

図表1-69 パラ競技団体のナショナルトレーニングセンターの利用頻度

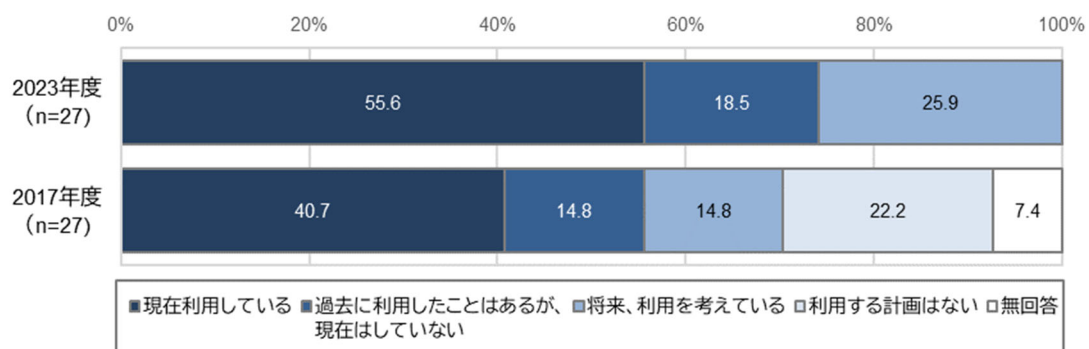


4-2.ハイパフォーマンススポーツセンター施設(国立スポーツ科学センター:JISS)の利用

4-2-1.利用の有無

パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用の有無について過去調査との比較でみると、「現在利用している」は40.7%(2017年度)から55.6%(2023年度)に増加した(図表1-70)。

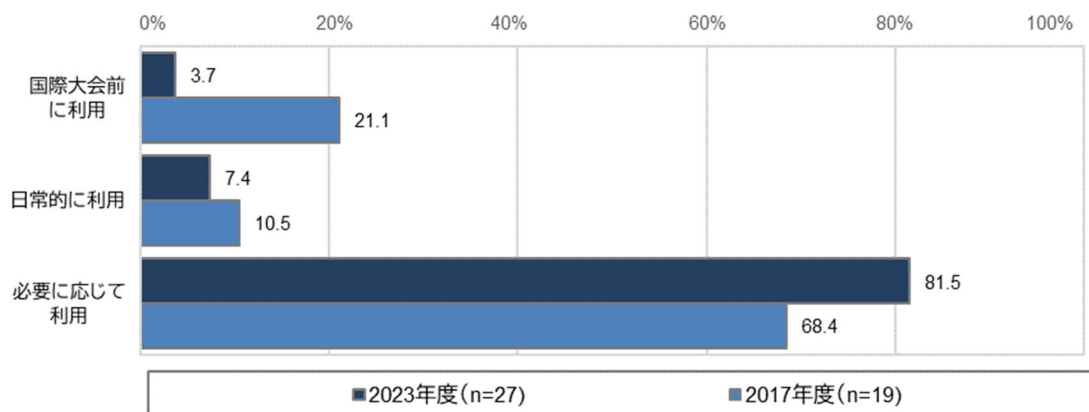
図表 1-70 パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用有無



4-2-2.利用状況

パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用状況について過去調査との比較でみると、「必要に応じて利用」が68.4%(2017年度)から81.5%(2023年度)に増加した(図表1-71)。「国際大会前に利用」「日常的に利用」はそれぞれ2017年度から2023年度にかけて減少した。

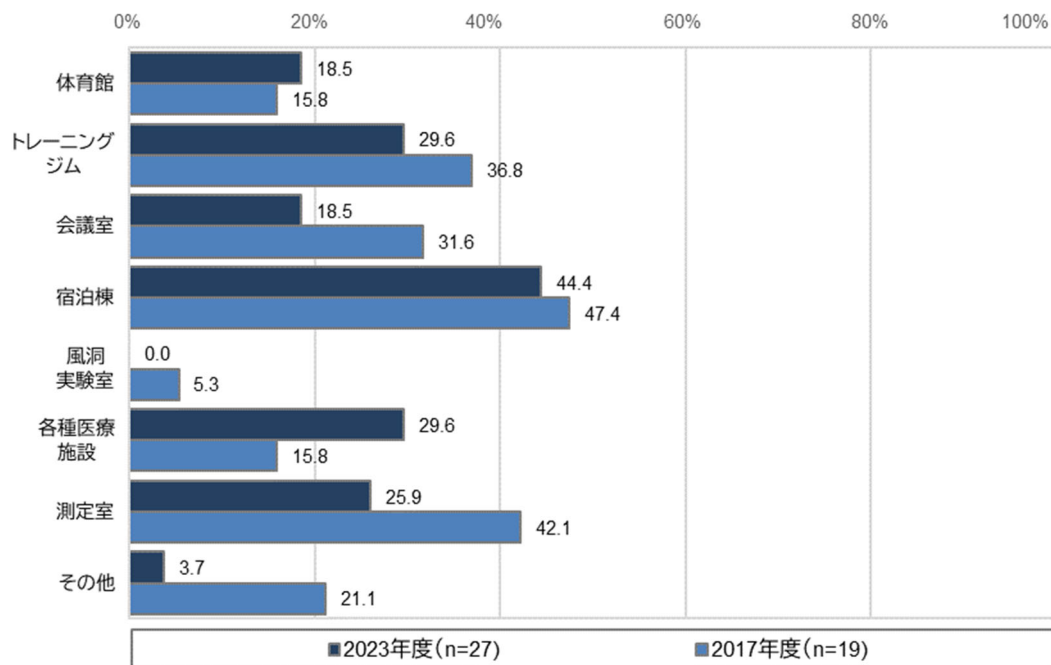
図表 1-71 パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用状況



4-2-3.利用施設

パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用施設について過去調査との比較でみると、「体育館」は15.8%(2017年度)から18.5%(2023年度)、「各種医療施設」は15.8%(2017年度)から29.6%(2023年度)に増加した(図表1-72)。一方で、「トレーニングジム」は36.8%(2017年度)から29.6%(2023年度)、「会議室」は31.6%(2017年度)から18.5%(2023年度)、「宿泊棟」は47.4%(2017年度)から44.4%(2023年度)、「測定室」は42.1%(2017年度)から25.9%(2023年度)にそれぞれ減少した。

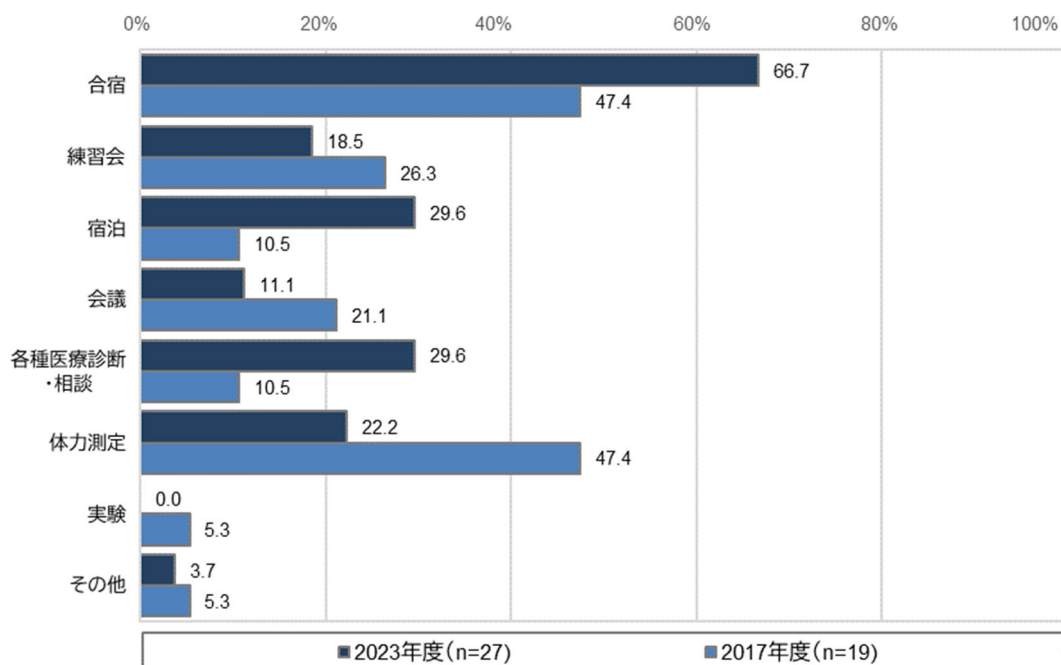
図表1-72 パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用施設



4-2-4.利用目的

パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用目的は、「合宿」が 66.7%で最も多かった。過去調査との比較でみると、「合宿」が 47.4%(2017 年度)から 66.7%(2023 年度)、「宿泊」が10.5%(2017 年度)から 29.6%(2023 年度)、「各種医療診断・相談」は 10.5%(2017 年度)から 29.6%(2023 年度)にそれぞれ増加した一方、「練習会」は 26.3%(2017 年度)から 18.5%(2023 年度)、「会議」は 21.1%(2017 年度)から 11.1%(2023 年度)、「体力測定」は 47.4%(2017 年度)から 22.2%(2023 年度)に減少した(図表 1-73)。

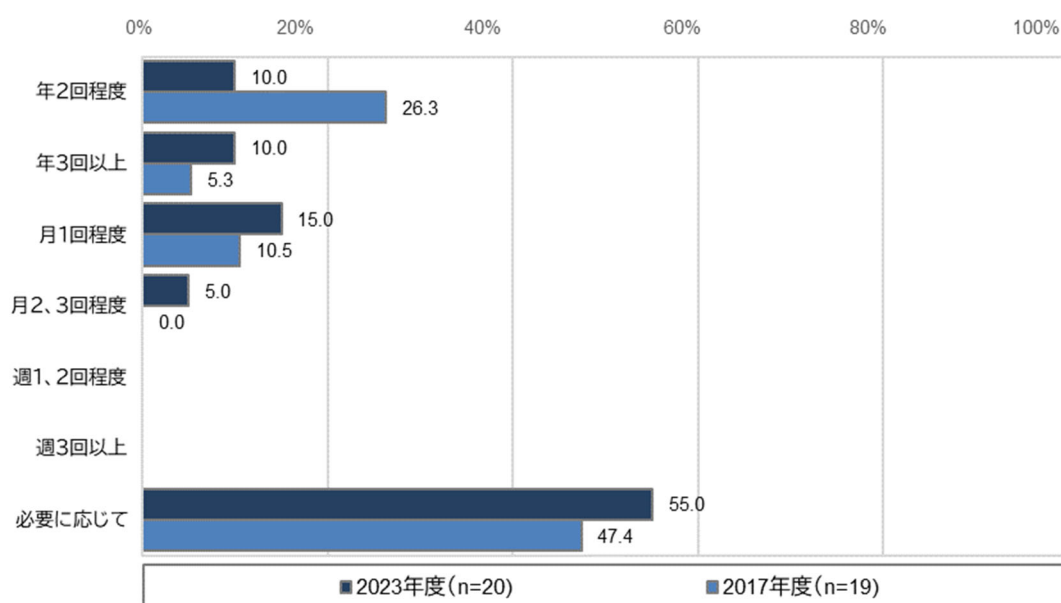
図表 1-73 パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用目的



4-2-5.利用頻度

パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用頻度について過去調査との比較でみると、「必要に応じて」が 47.4%(2017 年度)、55.0%(2023 年度)でそれぞれ最も多かった(図表 1-74)。「年 3 回以上」が 5.3%(2017 年度)から 10.0%(2023 年度)、「月 1 回以上」が 10.5%(2017 年度)から 15.0%(2023 年度)、「月 2、3 回程度」が 0%(2017 年度)から 5.0%(2023 年度)に増加した。

図表 1-74 パラ競技団体の国立スポーツ科学センター(JISS)の利用頻度

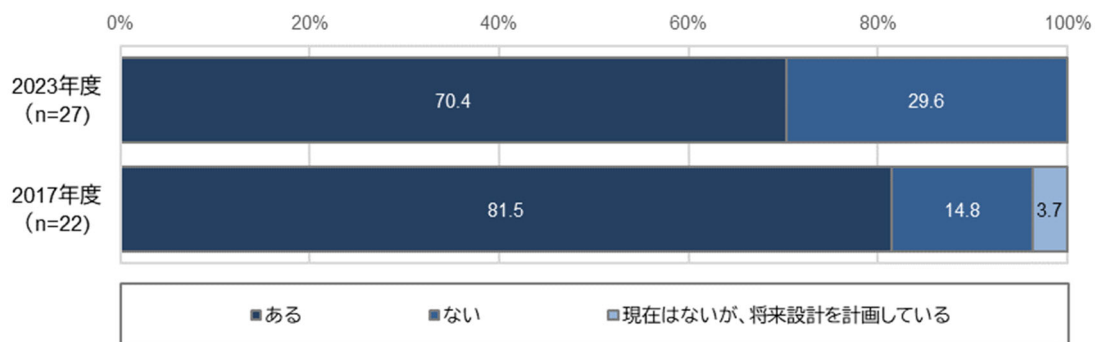


4-3.競技別強化拠点の利用

4-3-1.利用の有無

パラ競技団体の競技別強化拠点の利用の有無について過去調査との比較でみると、「ある」は81.5%(2017年度)から70.4%(2023年度)に減少した(図表1-75)。

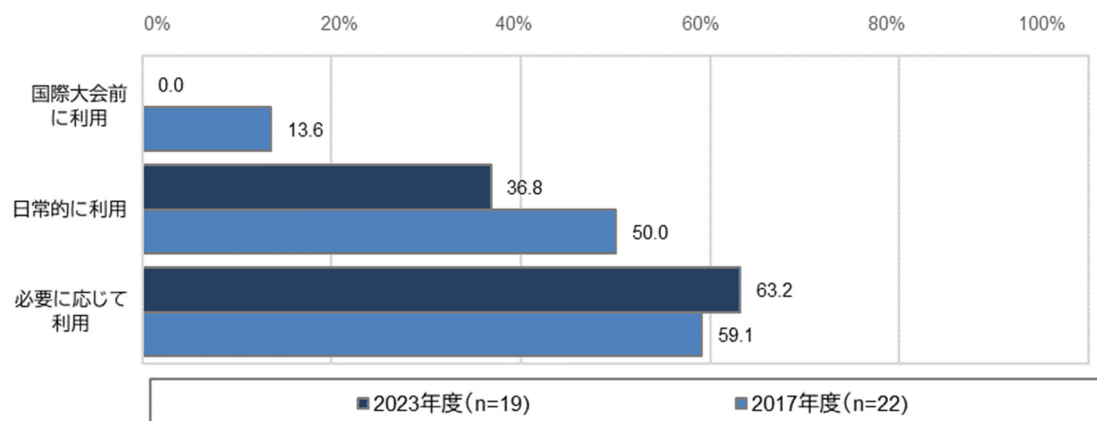
図表 1-75 パラ競技団体の競技別強化拠点の利用有無



4-3-2.利用状況

パラ競技団体の競技別強化拠点の利用状況について過去調査との比較でみると、「必要に応じて利用」が59.1%(2017年度)から63.2%(2023年度)に増加した(図表1-76)。一方で、「国際大会前に利用」「日常的に利用」はそれぞれ2017年度から2023年度にかけて減少した。

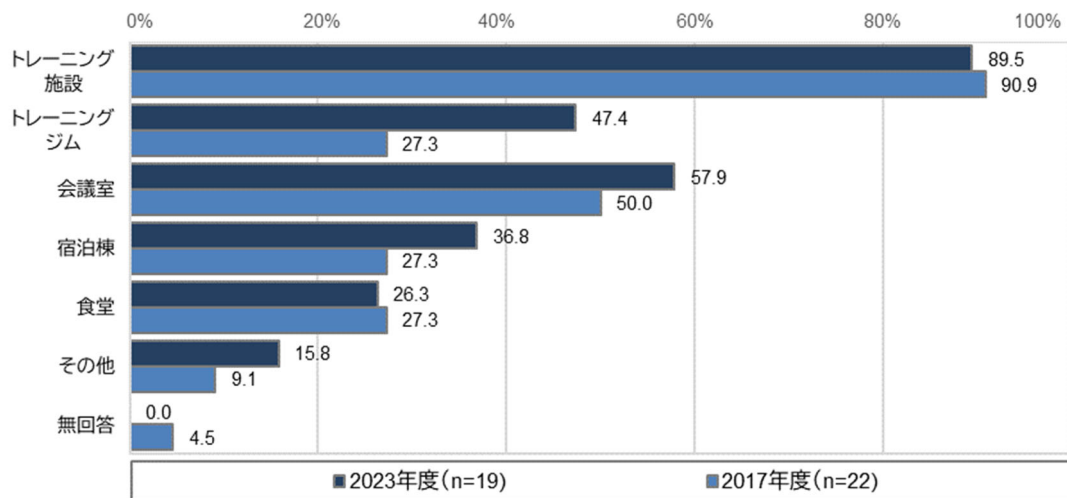
図表 1-76 パラ競技団体の競技別強化拠点の利用状況



4-3-3.利用施設

パラ競技団体の競技別強化拠点の利用施設は、「トレーニング施設」が 89.5%で最も多かった。過去調査との比較でみると、「トレーニングジム」は 27.3%(2017 年度)から 47.4%(2023 年度)、「会議室」は 50.0%(2017 年度)から 57.9%(2023 年度)、「宿泊棟」は 27.3%(2017 年度)から 36.8%(2023 年度)に増加した(図表 1-77)。

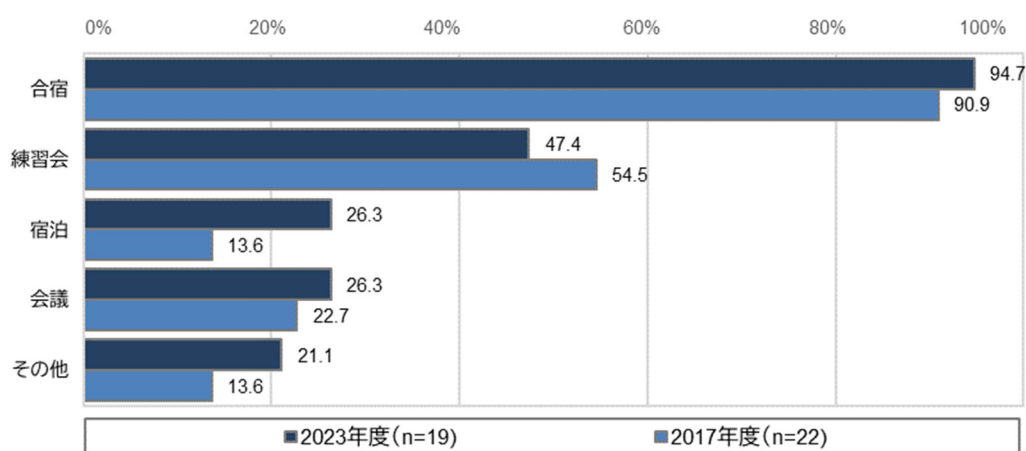
図表 1-77 パラ競技団体の競技別強化拠点の利用施設



4-3-4.利用目的

パラ競技団体の競技別強化拠点の利用目的について過去調査との比較でみると、「合宿」が90.9%(2017年度)、94.7%(2023年度)でそれぞれ最も多かった(図表1-78)。「宿泊」は13.6%(2017年度)から26.3%(2023年度)、「会議」は22.7%(2017年度)から26.3%(2023年度)に増加した一方、「練習会」は54.5%(2017年度)から47.4%(2023年度)に減少した。

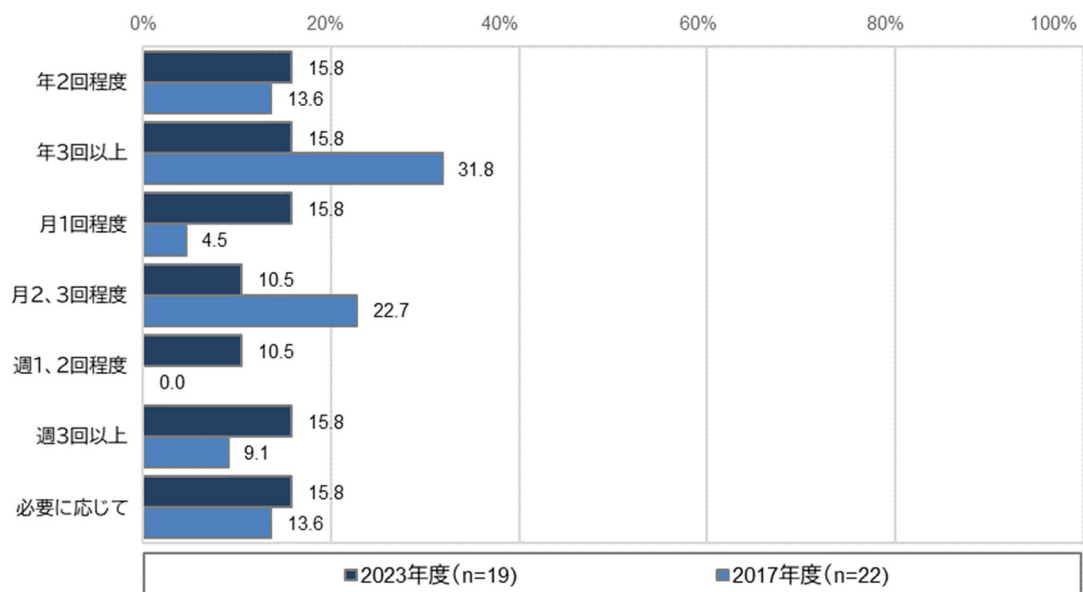
図表1-78 パラ競技団体の競技別強化拠点の利用目的



4-3-5.利用頻度

パラ競技団体の競技別強化拠点の利用頻度について過去調査との比較でみると、「週 3 回以上」は 9.1%(2017 年度)から 15.8%(2023 年度)、「週 1、2 回程度」は 0%(2017 年度)から 10.5%(2023 年度)、「月 1 回程度」が 4.5%(2017 年度)から 15.8%(2023 年度)に増加した(図表 1-79)。

図表 1-79 パラ競技団体の競技別強化拠点の利用頻度

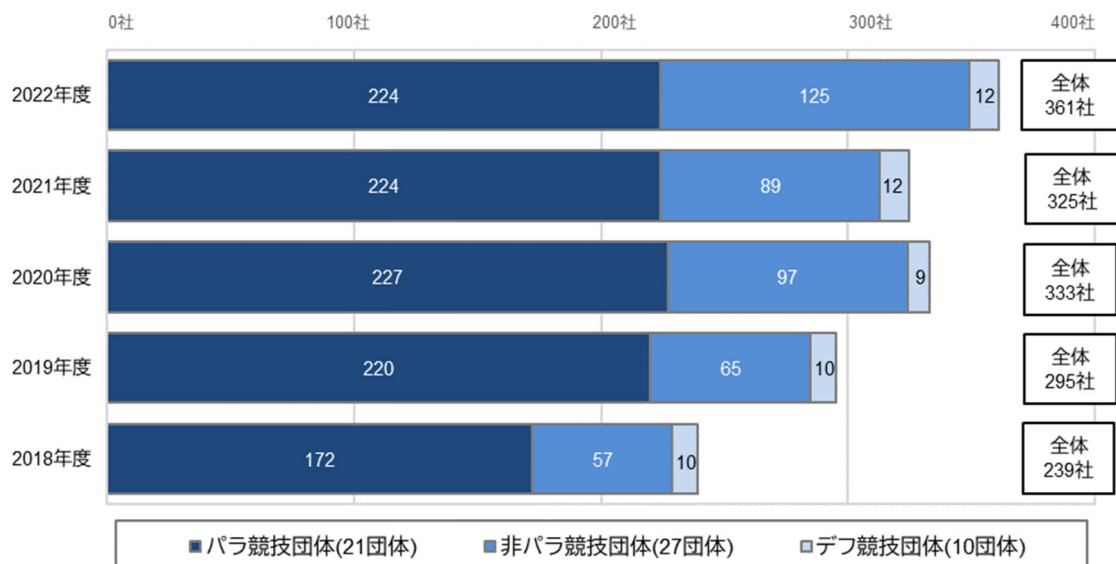


5. 資金計画

5-1. スポンサー数(支援企業、協賛企業など含む)

障害者スポーツ競技団体の直近5年間のスポンサー数を過去調査との比較でみると、2018年度には239社であったスポンサー数が2022年度には361社まで増加した(図表1-80)。パラ競技団体では、2019年度以降にスポンサー数の大きな変化はみられないが、非パラ競技団体では、57社(2018年度)から125社(2022年度)に倍増した。

図表1-80 直近5年間のスポンサー数



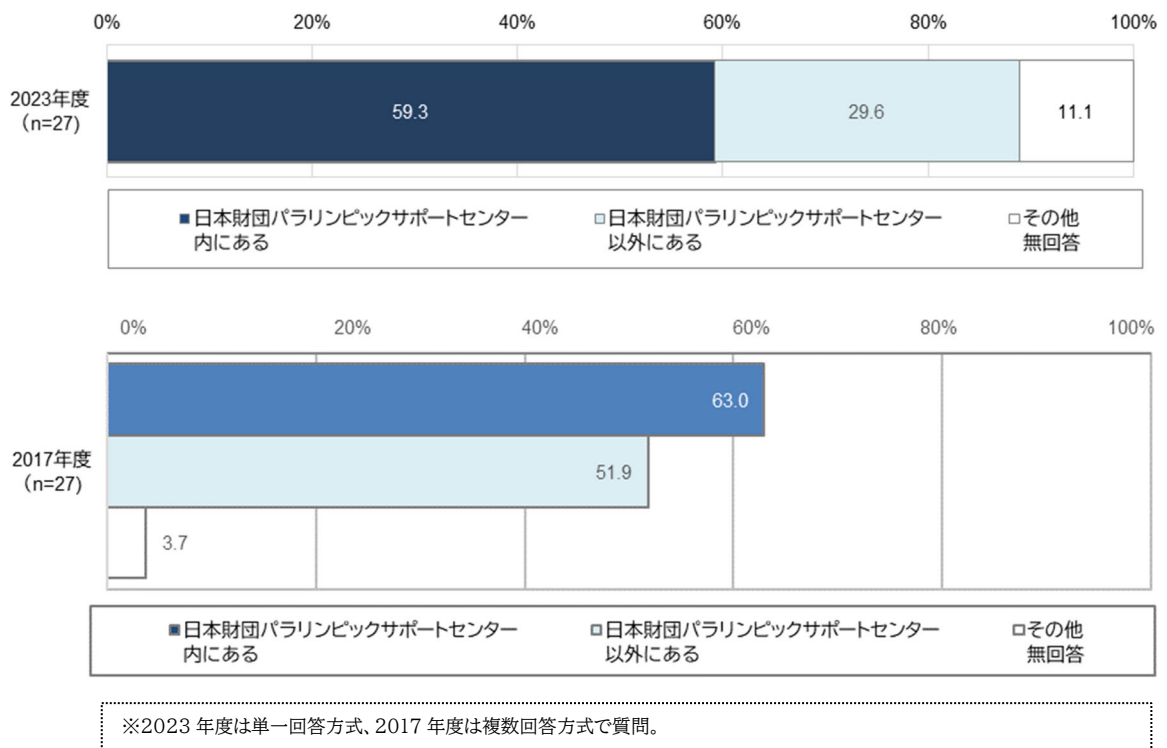
※スポンサー数は、回答のあった競技団体のスポンサー数の合計。支援企業、協賛企業などを含む。

6.その他

6-1.事務局の主たる機能の所在地(パラリンピック競技団体のみ)

パラ競技団体の事務局の主たる所在地について過去調査との比較でみると、2023 年度では 59.3%の団体が「日本財団パラリンピックサポートセンター内にある」(図表 1-81)だった。

図表 1-81 パラ競技団体の事務局の主たる機能の所在地



6-2. 団体運営

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が公益財団法人として活動を開始した2015年1月以降の障害者スポーツ競技団体の団体運営における予算額、事業数、人員配置の変化についてまとめた。期間は、以下、4区分で比較した。

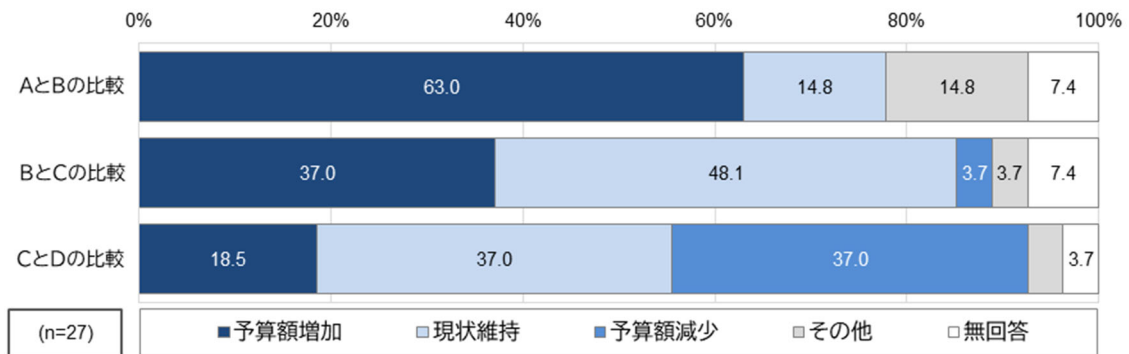
- (A) 2015年1月以前
- (B) 2015年1月（東京オリパラ組織委員会発足）～
2020年8月（当初の予定であった東京パラまで）
- (C) 2020年9月～2021年8月（延期となった東京パラまでの期間）
- (D) 2021年9月以降（延期となった東京パラ終了後）

6-2-1. 団体運営に関する予算額

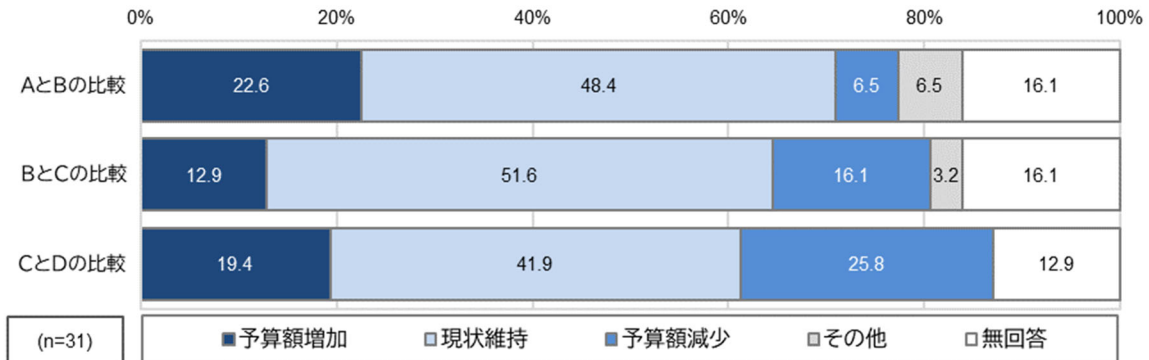
パラ競技団体の団体運営に関する予算額の変化をみると、「(A)2015年1月以前」と「(B)2015年1月～2020年8月」の比較では63.0%の団体で予算が増加した(図表1-82)。「(B)2015年1月～2020年8月」と「(C)2020年9月～2021年8月」の比較では48.1%の団体で予算は現状維持だったのに対し、37.0%の団体では予算が増加した。「(C)2020年9月～2021年8月」と「(D)2021年9月以降」の比較では37.0%の団体で予算が減少していた一方で、37.0%の団体で現状維持、18.5%の団体では東京2020パラリンピック大会終了後に予算を増加した。

非パラ競技団体の団体運営に関する予算額の変化をみると、「(A)2015年1月以前」と「(B)2015年1月～2020年8月」の比較では22.6%の団体で予算が増加した(図表1-83)。「(B)2015年1月～2020年8月」と「(C)2020年9月～2021年8月」の比較では51.6%の団体で予算は現状維持だったのに対し、16.1%の団体では予算が減少した。「(C)2020年9月～2021年8月」と「(D)2021年9月以降」の比較では19.4%の団体で予算が増加した一方、25.8%の団体で予算が減少、現状維持は41.9%だった。

図表 1-82 パラ競技団体の団体運営に関する予算額の変化



図表 1-83 非パラ競技団体の団体運営に関する予算額の変化

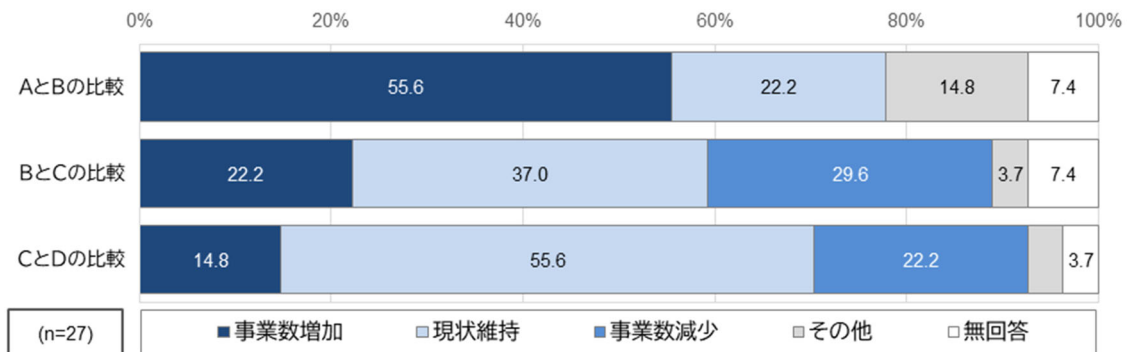


6-2-2.団体運営に関する事業数

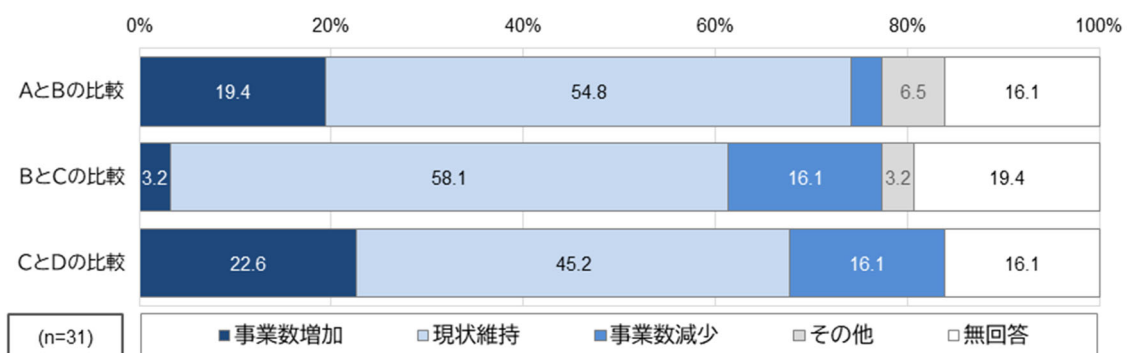
パラ競技団体の団体運営に関する事業数の変化をみると(図表 1-84)、「(A)2015年1月以前」と「(B)2015年1月～2020年8月」の比較では55.6%の団体で事業数が増加した(図表 1-84)。「(B)2015年1月～2020年8月」と「(C)2020年9月～2021年8月」の比較では37.0%の団体で事業数は現状維持だったのに対し、22.2%の団体では事業数が増加した。「(C)2020年9月～2021年8月」と「(D)2021年9月以降」の比較では22.2%の団体で事業数が減少していた一方で、55.6%の団体で現状維持、14.8%の団体では東京2020パラリンピック大会終了後に事業数が増加した。

非パラ競技団体の団体運営に関する事業数の変化をみると(図表 1-85)、「(A)2015年1月以前」と「(B)2015年1月～2020年8月」の比較では19.4%の団体で事業数が増加した(図表 1-85)。「(B)2015年1月～2020年8月」と「(C)2020年9月～2021年8月」の比較では58.1%の団体で事業数は現状維持だったのに対し、16.1%の団体では事業数が減少した。「(C)2020年9月～2021年8月」と「(D)2021年9月以降」の比較では22.6%の団体で事業数が増加した一方、16.1%の団体で事業数が減少、現状維持は45.2%だった。

図表 1-84 パラ競技団体の団体運営に関する事業数の変化



図表 1-85 非パラ競技団体の団体運営に関する事業数の変化

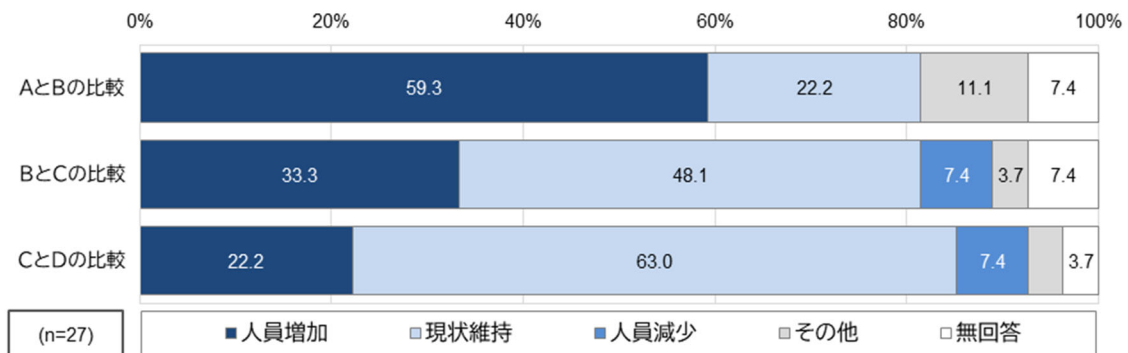


6-2-3.団体運営に関する人員配置

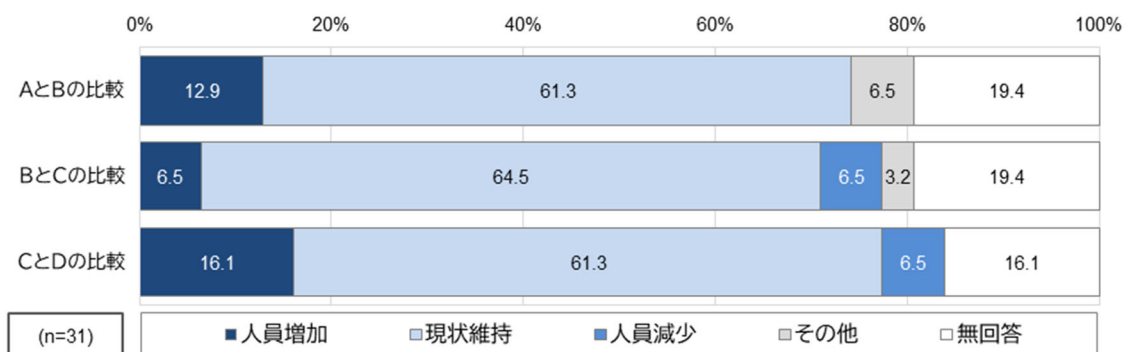
パラ競技団体の団体運営に関する人員配置の変化をみると(図表 1-86)、「(A)2015年1月以前」と「(B)2015年1月～2020年8月」の比較では59.3%の団体で人員が増加した(図表 1-86)。「(B)2015年1月～2020年8月」と「(C)2020年9月～2021年8月」の比較では48.1%の団体で人員は現状維持だったのに対し、33.3%の団体では人員が増加した。「(C)2020年9月～2021年8月」と「(D)2021年9月以降」の比較では7.4%の団体で人員が減少していた一方で、63.0%の団体で現状維持、22.2%の団体では東京2020パラリンピック大会終了後に人員が増加した。

非パラ競技団体の団体運営に関する人員配置の変化をみると(図表 1-87)、「(A)2015年1月以前」と「(B)2015年1月～2020年8月」の比較では12.9%の団体で人員が増加した(図表 1-87)。「(B)2015年1月～2020年8月」と「(C)2020年9月～2021年8月」の比較では64.5%の団体で人員は現状維持だったのに対し、6.5%の団体では人員が減少した。「(C)2020年9月～2021年8月」と「(D)2021年9月以降」の比較では16.1%の団体で人員が増加した一方、6.5%の団体で人員が減少、現状維持は61.3%だった。

図表 1-86 パラ競技団体の団体運営に関する人員配置の変化



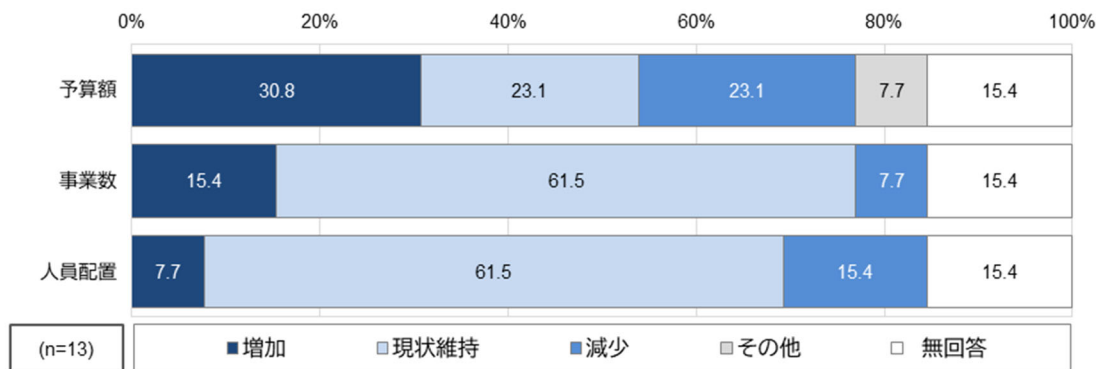
図表 1-87 非パラ競技団体の団体運営に関する人員配置の変化



6-3.デフ競技団体の団体運営の変化

デフリンピック2025大会の東京開催が決定した2022年9月以降のデフ競技団体の団体運営における予算額、事業数、人員配置の変化についてみた。予算額は30.8%が増加、23.1%が現状維持、23.1%が減少、事業数は15.4%が増加、61.5%が現状維持、7.7%が減少、人員は7.7%が増加、61.5%が現状維持、15.4%が減少だった(図表1-88)。

図表 1-88 デフ競技団体の団体運営の変化

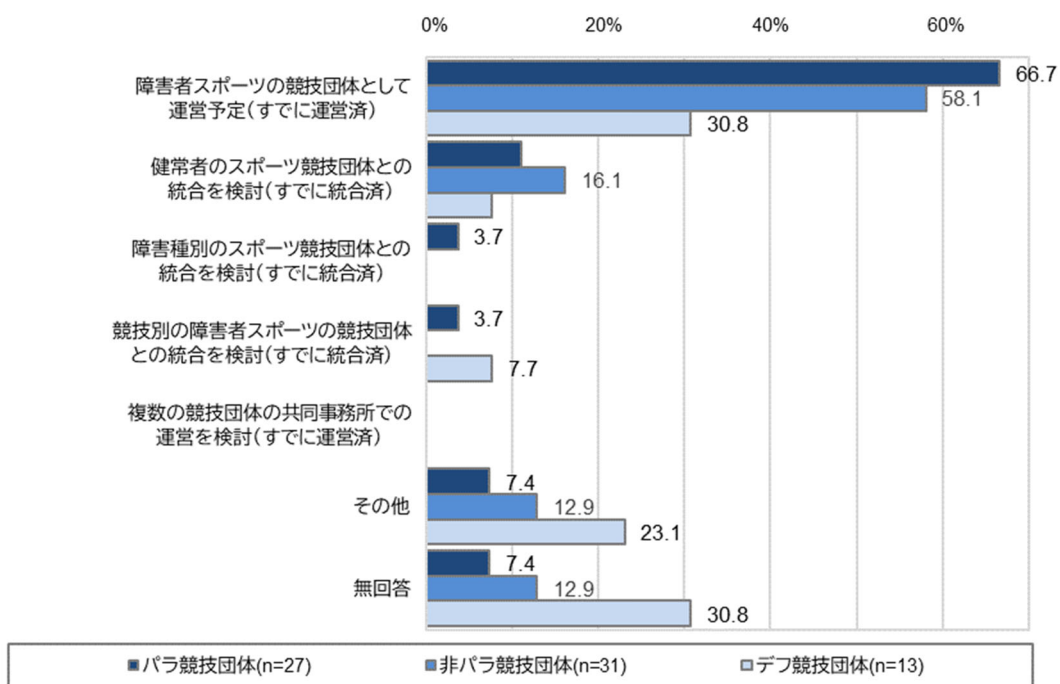


6-4. 今後5年以内の団体運営の方向性

障害者スポーツ競技団体の2024年4月以降5年以内の競技団体運営の方向性についてみた。

パラ競技団体では、「障害者スポーツの競技団体として運営予定(すでに運営済)」が66.7%で最も多く、ついで「健常者のスポーツ競技団体との統合を検討(すでに統合済)」の11.1%だった。非パラ競技団体では、「障害者スポーツの競技団体として運営予定(すでに運営済)」が58.1%で最も多く、ついで「健常者のスポーツ競技団体との統合を検討(すでに統合済)」の16.1%だった。デフ競技団体では「障害者スポーツの競技団体として運営予定(すでに運営済)」が30.8%で最も多かった(図表1-89)。「その他」は、未定がほとんどだった。

図表1-89 今後5年以内の団体運営の方向性



7.まとめ

1. 中央競技団体との関係

障害者スポーツ競技団体の実態を把握する上で、障害のないスポーツ競技団体、いわゆる中央競技団体の実態について、笹川スポーツ財団「中央競技団体现況調査」(2023)の調査結果をもとに比較を試みた。公益法人の割合をみると、中央競技団体では分析対象となった71団体のうち、59団体(83.1%)が公益財団法人、もしくは公益社団法人だったのに対して、障害者スポーツ競技団体では分析対象となった63団体のうち、公益法人は5団体(7.9%)で、約6割が一般社団法人、約4分の1が特定非営利活動法人(NPO法人)だった。競技団体の登録人口についてみると、前述の「中央競技団体现況調査」では、中央競技団体の競技登録者数は、1団体あたり平均10万2,986人、中央値は7,234人、最大値は202万2,939人だった。一方、障害者スポーツ競技団体の競技登録者数は、平均値260人、中央値100人だった(図表1-14)。内閣府「令和5年版障害者白書」(2023)によると、身体障害者436万人、知的障害者109万4,000人、精神障害者614万8,000人となっている。重複障害者もいるので正確な人数の把握は難しいが、合計すると約1,160万人が日本にいる障害者数と計算できる。日本の全人口に占める障害者の割合が約1割であることを考えると、競技登録者数においては、障害のある人とない人の人口比率以上の開きがあることがわかった。

2. 東京2020パラリンピック大会開催後の変化

本調査は障害者スポーツ競技団体78団体を対象に実施した。団体内訳は、パラ競技団体(28団体)、非パラ競技団体(36団体)、デフ競技団体(14団体)で、それぞれで比較を行った。2021年開催の東京2020パラリンピック競技大会を経て、2024年に世界パラ陸上競技選手権大会(神戸市)、2025年に夏季デフリンピック競技大会(東京都)、2026年にアジアパラ競技大会(愛知県・名古屋市)に控える中、各団体の置かれている現状、今後の方向性などが明らかになった。

事務局と職員の雇用についてみると、パラ競技団体は、全ての団体が専用の事務局を設置し、約9割で職員を雇用していた(図表1-3・4)。一方で、非パラ競技団体とデフ競技団体の事務局は「団体役員の自宅に併設」が多く、職員を雇用している団体は、非パラ競技団体で16.1%、デフ競技団体で7.7%だった。

アスリート委員会の設置状況について 2017 年度調査と比較すると、パラ競技団体では 33.3%(2017 年度)から 96.3%に大幅に増加した。非パラ競技団体では 11.5%(2017

年度)から 19.4%に微増、デフ競技団体は 84.6%で設置していた(図表 1-13)。パラ競技団体でアスリート委員会を設置する団体が急増した理由としては、①2016 年度に日本パラリンピック委員会(JPC)にアスリート委員会が設置され、それ以降、競技団体に設置を呼び掛けていたこと、②2019 年度に「スポーツ団体ガバナンスコード<中央競技団体向け>」を策定し、適切な組織運営を確保するため、アスリート委員会を設置し、その意見を組織運営に反映させることを明記したこと、が挙げられる。「スポーツ団体ガバナンスコード<中央競技団体向け>」は、スポーツ団体の中でも特に高いレベルのガバナンスの確保が求められる中央競技団体が適切な組織運営を行う上での原則・規範を示すものであり、2020 年度以降は、遵守状況の公表が団体に求められている。アスリート委員会が競技力向上を主な目的としているため、パラ競技団体で 96.3%、デフ競技団体で 84.6%と高い設置率を示した一方で、非パラ競技団体では 19.4%に留まったと推察できる。

障害者スポーツ競技団体の登録者数について、東京2020パラリンピック開催前(2021年7月)と開催後2年が経過した2023年7月を比較すると、パラ競技団体で変化がみられた(図表1-14)。競技登録者数<総計:4,505人→5,011人、平均値:205人→218人>、団体チーム登録数<総計:941チーム→1,072チーム、平均値:105チーム→119チーム>、審判員数<総計:838人→1,020人、平均値:65人→102人>と、それぞれ増加した。非パラ競技団体、およびデフ競技団体では大きな変化がみられなかったことから、東京2020パラリンピックがきっかけとなり、パラ競技団体の登録者数が増加したことが示唆された。コロナ禍で障害当事者の活動機会が限定された状況下における増加は、パラリンピックが与える影響の可能性の大きさを想像するには十分な結果と言えるだろう。

実施事業についてみると、障害者スポーツ競技団体の実施事業では、「広報」「スポーツ大会の開催」が 8 割を超え、特に「スポーツ大会の開催」は、パラ競技団体で 92.6%、非パラ競技団体で 83.9%、デフ競技団体で 69.2%と多くの団体で実施していた(図表 1-52・61)。一方で、「ボランティア養成」(23.9%)、「クラシファイア講習会」(11.3%)の実施率は低く、特に「クラシファイア講習会」は、パラ競技団体で 25.9%、非パラ競技団体で 3.2%、デフ競技団体では実施していなかった(図表 1-56)。パラ競技団体におけるクラシファイア講習会の実施は、2013 年度から実施率が徐々に減少している。2017 年度実施、2023 年度非実施の団体を見ると、クラシファイア講習会の所管が国際競技連盟(IF)にあるため、コロナ禍を含めた様々な事情によって IF が講習会を実施しなかったことが理由として挙げられる。

障害者スポーツ競技団体の直近 5 年間(2018 年度～2022 年度)のスポンサー数(支援企業、協賛企業などを含む)は、パラ競技団体では大きな変化はみられなかったが、非パラ競技団体では 5 年間でスポンサー数が倍増した。東京 2020 パラリンピックには直接関わることのなかった非パラ競技団体においても、企業の注目を集めることにつながり、間接的にはあるが、支援企業や協賛企業の倍増につながったと推察できる。デフ競技団体においても、2022 年度までのスポンサー数では大きな変化がみられなかったが、2025 年 11 月に東京で夏季デフリンピック競技大会が開催されることを踏まえると、2024 年度には支援企業、協賛企業が増加する可能性は大いにあると言える。

3.パラリンピック競技団体の施設利用

パラ競技団体のハイパフォーマンススポーツセンター(HPSC)の利用実態について、その用途、頻度なども明らかになった。パラ競技団体において、ナショナルトレーニングセンター(NTC)を、現在または過去に利用している(いた)団体は 9 割を超えた(図表 1-65)。国立スポーツ科学センター(JISS)を現在または過去利用している(いた)団体も約 4 分の 3、競技別強化拠点を現在利用している団体は約 7 割だった。パラ競技団体の JISS 利用において、「各種医療施設」は 15.8%(2017 年度)から 29.6%(2023 年度)に増加した(図表 1-72)。NTC は、2019 年 6 月に屋内トレーニングセンター・イーストが設立されたことにより利用者が増加し、屋内トレーニングセンター・ウエスト、イースト、JISS に利用者が分散される傾向がある。例えば、JISS で利用者が減少した「トレーニングジム」は、NTC では利用者が増加、医療施設は NTC にはなく、JISS にあるため利用者が集中したと推察できる。

HPSC は JISS と NTC が持つスポーツ医・科学、情報等による研究、支援および高度な科学的トレーニング環境を提供し、国内外のハイパフォーマンススポーツの強化に貢献しており、その観点からも、NTC と JISS の実態は、施設ごとに捉えるよりは一体として捉えるのが現実的である。

4.今後に向けて

東京2020パラリンピックが障害者スポーツ競技団体にどのように影響したのかを、大会開催決定前、決定後、大会の延期、大会の開催、開催後の期間において、予算額、事業数、人員配置でみた。パラ競技団体では、大会開催決定から大会まで予算額、事業数、人員ともに約6割の団体で増加していた。大会終了後は、約4割の団体で予算額は現状維持、約6割の団体で事業数、人員は現状維持であった。予算額は約4割の団体で減少していたが、事業

数、人員はそれほど減少していない中で組織運営されている現状がわかった。非パラ競技団体では、大会開催決定以降も約半数の団体では予算額、事業数は現状維持、人員は約6割で現状維持と、大会が組織運営にそれほど大きな影響を与えていないことがわかった。デフ競技団体では、デフリンピック2025大会の東京開催が決定してから、約3割の団体で予算額が増加していたが、事業数、人員は約6割で現状維持であった。大会開催に向けては、2024年度以降、組織運営にも変化がみられると想定される。

2015年5月に日本財団の支援により発足した「日本財団パラリンピックサポートセンター」は、2022年1月に「日本財団パラスポーツサポートセンター(以下、パラサポ)」と名称を変更し、現在もパラ競技団体の事務局人件費、普及啓発費、広報・マーケティング費等の助成金をはじめ、会計・翻訳など共通する業務を集約化し、効率的な団体運営を推進するシェアードサービスを提供し、競技団体の基盤強化を支援している。

笹川スポーツ財団「スポーツ白書2023」では、東京2020大会終了後に岐路を迎える障害者スポーツ競技団体における組織運営の選択肢として、①競技団体として自立して運営、②健常者のスポーツ競技団体と統合(メインストリーム化)、③複数の競技団体の事務局機能を一元化した共同事務所を設置して運営、を挙げている。組織を運営する上では、各競技団体が中長期ビジョンとその実現に向けた計画を示し、それに対して必要な支援ができる仕組みづくりが求められている。東京2020パラリンピックの開催をきっかけに、障害者スポーツ競技団体では、様々な取り組みを進めている。〈①競技団体として自立して運営〉では、支援企業、協賛企業などの獲得活動に加えて、ブラインドサッカーや車いすバスケットボールなどは、障害者スポーツの興行化に向けて、大会の有料化に取り組んでいる。〈②健常者のスポーツ競技団体と統合(メインストリーム化)〉では、日本トライアスロン連合や日本セーリング連盟のように、すでに統合して活動している団体もある。〈③複数の競技団体の事務局機能を一元化した共同事務所を設置して運営〉では、現在もパラサポの支援により多くの競技団体が支えられているが、東京2020パラリンピック終了後に新たな動きもみられた。2023年6月、9つの競技団体(日本パラ・パワーリフティング連盟、日本知的障がい者卓球連盟、日本身体障害者アーチェリー連盟、日本障害者カヌー協会、日本パラフェンシング協会、日本パラ射撃連盟、日本障がい者乗馬協会、日本知的障害者水泳連盟、日本車いすカーリング協会)が合同で活動するプロジェクト「P.UNITED」が立ち上がった。競技の異なる団体が合同で活動することで、単一の競技団体にはないスポンサーメリットを生み出すことができるなど、各団体の良さを出し合う中でこれまでになかった価値の提供にもつながるだろう。

前述の①②③以外の取り組みとして、2016年に設立した日本障がい者サッカー連盟

(JIFF)の活動が挙げられる。7つの障がい者サッカー団体(日本アンプティサッカー協会、日本CPサッカー協会、日本ソーシャルフットボール協会、日本知的障がい者サッカー連盟、日本電動車椅子サッカー協会、日本ブラインドサッカー協会、日本ろう者サッカー協会)の支援に加えて、健常者のスポーツ競技団体である日本サッカー協会(JFA)と協働し、サッカーファミリーとして共生社会の実現に向けた事業を展開していく取り組みは、障害者スポーツの特性を生かし、障害のない人でも楽しめるスポーツとして、障害のない人に焦点を当てて愛好者を増やすなど、戦略的な組織基盤強化の視点において、様々な可能性が提供されると考える。

2021年に開催された東京2020パラリンピックは、障害者スポーツ競技団体の組織運営に様々な影響を及ぼした。大会の1年延期により、各団体が大会終了後に計画していた事業やプログラムは再考を余儀なくされ、大会終了後も、平時には完全に戻ったとは言えない環境下において、事業やプログラムを実施し、スポンサー活動を行うことの困難さは、想像に難くない。各競技団体が創意工夫を凝らし、多くの困難と向き合い模索しながら団体運営を進めている姿には、尊敬の念を抱かざるを得ない。パリ2024パラリンピックに始まり、東京2025デフリンピック大会や愛知・名古屋2026アジアパラ競技大会などの国内で開催される国際大会が続く。これらの大会がきっかけとなり、障害者スポーツ競技団体のさらなる基盤強化が進むことを期待したい。

(小淵和也)

8. シンポジウム開催レポートのご紹介

障害者スポーツ競技団体の実情

～東京 2020 パラリンピック終了後の課題と今後の展望～

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、2024年2月17日(土)に東京・御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターにて公開シンポジウム「障害者スポーツ競技団体の実情 ～東京 2020 パラリンピック終了後の課題と今後の展望～」を開催しました。

本シンポジウムは、当財団が2012年より取り組んでいる「障害者スポーツを取り巻く環境調査」結果報告の一環として実施したものです。

2023年度に実施した「障害者スポーツ競技団体の事業実態調査」の結果概要報告と合わせて、障害者スポーツ競技団体の関係者をパネリストに迎え、東京 2020 パラリンピック開催前後の変化を踏まえながら現在の課題と今後の展望について意見交換しました。

本シンポジウムの開催レポートは当財団の WEB サイトよりご覧いただけます。

<https://www.ymfs.jp/survey/>



第2章

大学における障害者スポーツの現状に関する調査

調査概要

(1)調査目的

2014 年度より、厚生労働省の所管であった障害者スポーツに関わる諸事業が文部科学省に移管され、翌 2015 年 10 月にスポーツ庁が設置され、障害の有無に関わらず一体化したスポーツ振興が進められている。また、2021 年に開催された東京オリンピック・パラリンピックに向けて、2014 年から大会組織委員会が全国の大学・短期大学と連携協定を結び、「教育」、「経験」、「レガシー」の 3 つのキーワードをもとに体育・スポーツ系の大学のみならず、各大学がそれぞれの特色を生かして様々なプログラムを展開している(810 校が締結* 2021 年 12 月時点)。以上のように東京パラリンピック開催を契機として、障害者スポーツをめぐる状況は劇的に変化しているが、大学における障害者スポーツ支援の状況はどのように変化しているのだろうか。

本プロジェクトではすでに 2012 年、2014 年に大学を対象とした調査を実施しており、本調査は大学における障害者スポーツの現状について、経年の比較検討を行うものである。なお、調査対象は全国の 801 大学とし、障害のある競技者に対する支援や施設貸し出し、障害者スポーツ支援に関する意向等について質問紙調査を実施した。

(2)調査対象

全国の 4 年生大学 801 校を対象とした。なお、2014 年の前回調査では体育・スポーツ・健康系学部、学科、コース等を有する 183 大学(197 学部・学科・コース)を調査対象としたが、冒頭の調査目的に記載のとおり、近年では専攻を問わず大学における障害者スポーツ支援が進んできていることから、今回は日本国内の全大学を調査対象とした。

(3)調査内容

主な調査項目は下記のとおりである。

- ・ 障害学生の在籍状況、大会出場について
- ・ 障害のある競技者の入試、奨学金について
- ・ 運動施設の状況、貸し出しについて
- ・ 障害者スポーツ選手の競技力向上に対する意向、現状について
- ・ 大学連携協定およびオリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施について

(4)調査期間

2023 年 7 月 1 日～8 月 31 日

(5)調査方法

郵送留置法による質問紙調査

調査委託機関:株式会社サーベイリサーチセンター

〒116-8581 東京都荒川区西日暮里 2-40-10

TEL:03-3802-6775

(6)回収結果

801 大学中 206 大学(回収率:25.7%)

要約

- ◆ 障害者スポーツに関わる専任教員が在籍する大学は 12.1%、パラスポーツ指導員資格取得認定校は 14.6%に留まっており、障害者スポーツに関わる教育課程のある大学は少数であった(図表2-5・6)。
- ◆ 障害学生の在籍状況については、「精神障害」71.4%、「病弱」58.3%、「聴覚障害」57.3%、「肢体不自由(車椅子)」40.8%、「視覚障害」37.4%、「肢体不自由(義肢)」8.7%となっており、前回調査と比べ、精神障害ならびに病弱の増加が顕著であった(図表2-7)。
- ◆ 障害のあるスポーツ選手の在籍状況については、「聴覚障害」11.7%、「肢体不自由(車椅子)」7.8%となっており、それ以外は 5%以下に留まっており、前回調査からの変化はほぼみられなかった(図表2-13)。
- ◆ スポーツ推薦制度を有している大学のうち、62.0%が障害のあるスポーツ選手も対象としており、そのうち 41.9%が障害のあるスポーツ選手の合格実績を有している。また、障害のあるスポーツ選手への金銭的支援制度を導入している大学のうち、62.3%が障害のあるスポーツ選手も対象としており、そのうち障害のあるスポーツ選手への支援実績があるのは 42.4%となっていた(図表2-19・20・26・27)。
- ◆ 各運動施設の障害のあるスポーツ選手・団体への貸し出し状況について、過去の体育館メインアリーナ(2014 年度:22.6%)/2023 年: 14.9%)、プール(2014 年度: 12.9%/2023 年:18.5%)、現在のプール(2014 年度:6.5%/2023 年:18.5%)等に増加がみられるが、全体的に運動施設の貸し出しは低調となっている(図表2-37・38)。
- ◆ 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割について、大学スポーツ施設の活用や専門の研究者養成・コーチ養成、教育に関する予算措置等、全項目において 60%以上の大学が「重要である」もしくは「やや重要である」と回答していたが、それらの取り組み状況はほとんどの項目において 10%弱に留まっており、大学の「理想」と「現実」の間に大きな差がみられた(図表2-44・45・46・47)。
- ◆ 「2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向けた大学連携協定」は 106 校(51.5%)が締結し、「東京 2020 大学連携レガシーネットワーク」は 53 校(25.7%)が加入していた。オリンピック・パラリンピックに関わる諸活動の実施状況につ

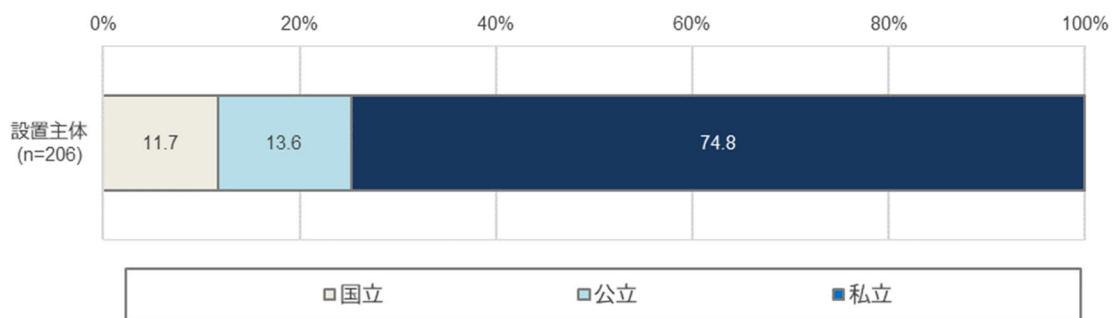
いて、連携協定およびレガシーネットワークの加入別でみていくと、全項目において連携協定締結およびレガシーネットワーク加入大学のほうが高い実施率となっていた(図表2-48・49)。

調查報告

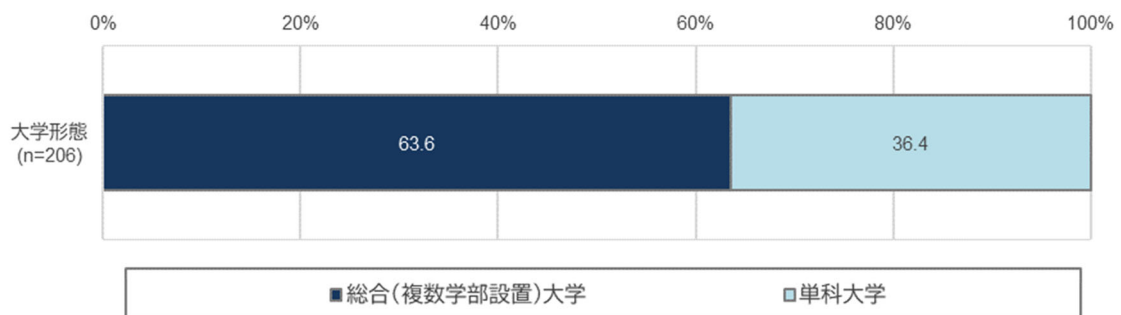
1. 回答大学の概要について

回答校の状況について、設置主体については私立大学が 74.8%と多数を占めている(図表 2-1)。設置形態・規模については、総合大学が 63.6%と過半数となっており(図表 2-2)、5 千人未満の大学が 77.2%となっていた(図表 2-3)。また、スポーツ系学部の有無について、設置している大学は 13.6%となっており(図表 2-4)、障害者スポーツに関わる専任教員が在籍する大学は 12.1%(図表 2-5)、そして、パラスポーツ指導員資格取得認定校は 14.6%(初級・中級の合計値)に留まっており(図表 2-6)、回答大学の多くが非体育・スポーツ系の専攻であると同時に、障害者スポーツに関わる教育課程のある大学は少数であるものと考えられる。

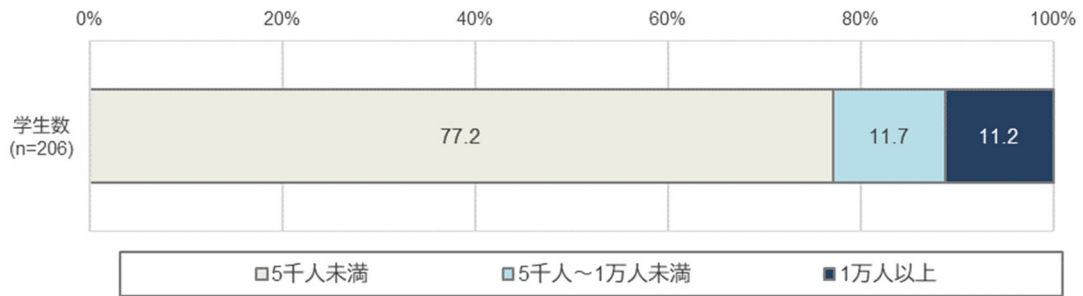
図表 2-1 大学の設置主体



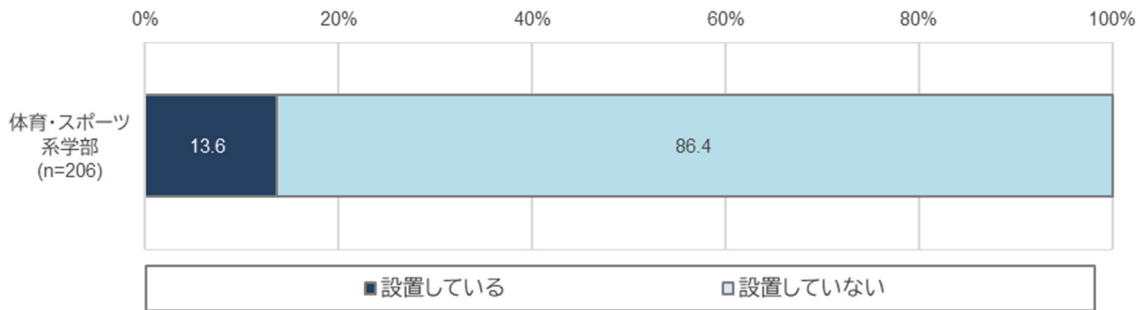
図表 2-2 大学の設置形態



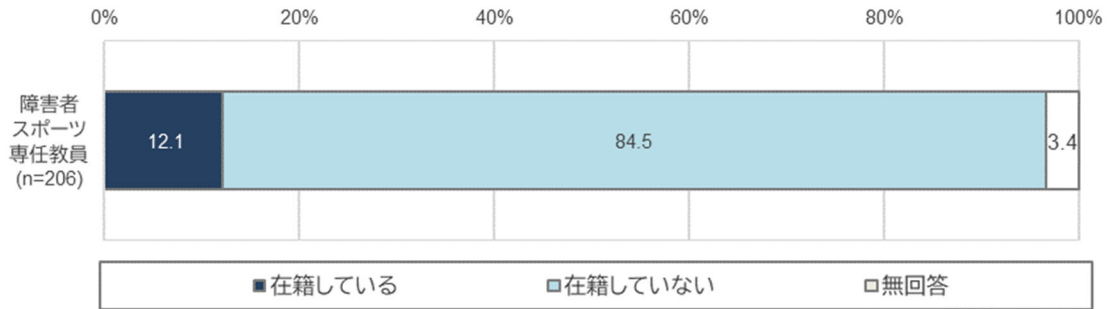
図表 2-3 大学の学生数



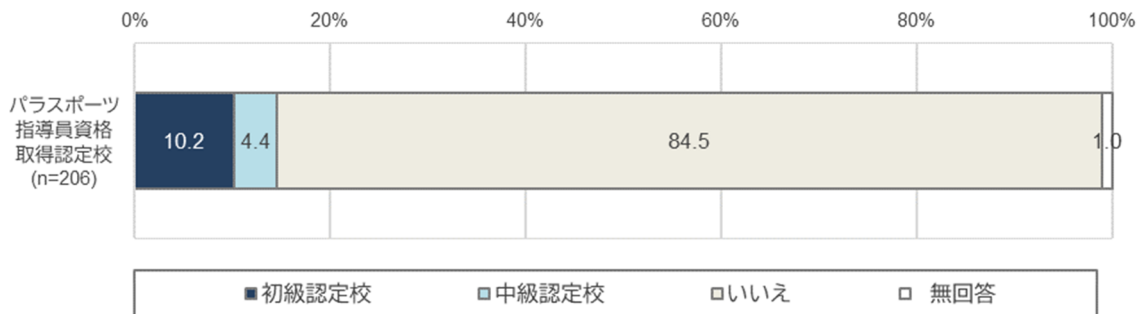
図表 2-4 スポーツ系学部の設置の有無



図表 2-5 障害者スポーツを専門とする専任教員(任期付き含む)の在籍状況



図表 2-6 パラスポーツ指導員資格取得認定校について



2. 障害学生の在籍状況・支援について

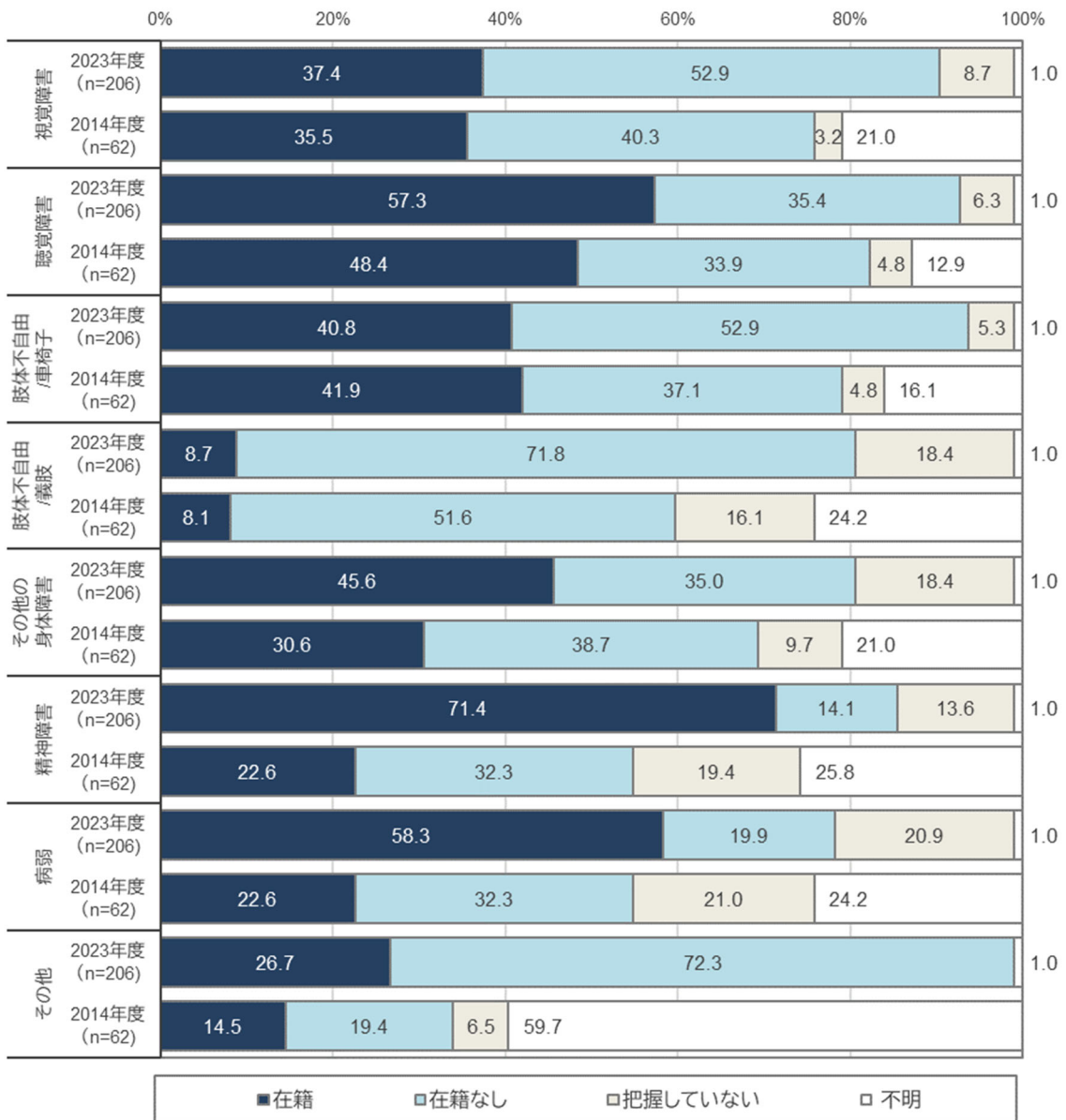
*以下の調査報告では、本調査と前回調査では対象が異なるものの、参考として同一項目についてはグラフ中に結果を併記している。

2-1. 障害学生の在籍状況と支援部署

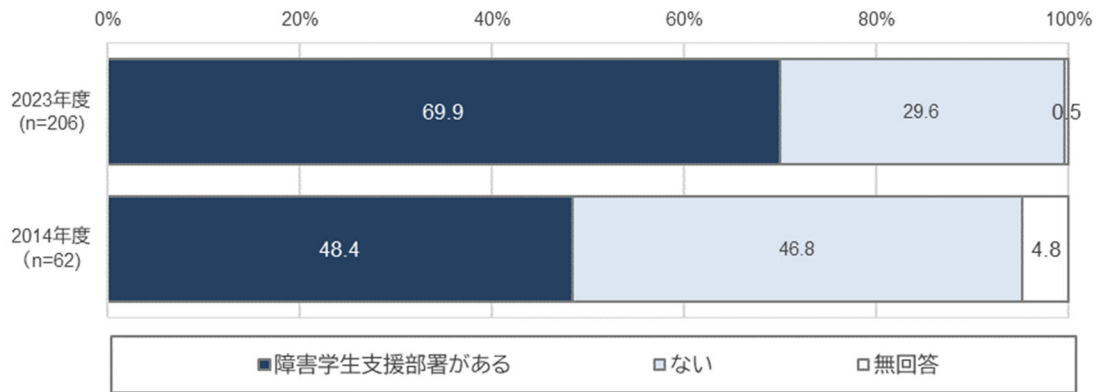
障害学生の在籍状況について、「精神障害」が71.4%と最も割合が高くなっており、以下、「病弱」58.3%、「聴覚障害」57.3%、「肢体不自由(車椅子)」40.8%、「視覚障害」37.4%、「肢体不自由(義肢)」8.7%であった(図表 2-7)。前回調査と比べ、精神障害ならびに病弱の増加が顕著であるが、「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」(日本学生支援機構, 2022)によれば、発達障害や病弱の増加が他障害と比べて顕著であることから、本調査も同様の傾向を示しているものと考えられる。

また、障害学生支援部署は69.9%の大学に設置されており(図表 2-8)、「授業時の支援」83.5%、「生活環境の支援」68.4%となっており(図表 2-9)、関係部署の設置、何らかの支援を実施している割合ともに前回調査よりも増加している。これは、各大学における障害学生数の増加や、2016年に施行された障害者差別解消法の施行等、障害児・者を取り巻く社会情勢の変化が背景にあるのではないだろうか。

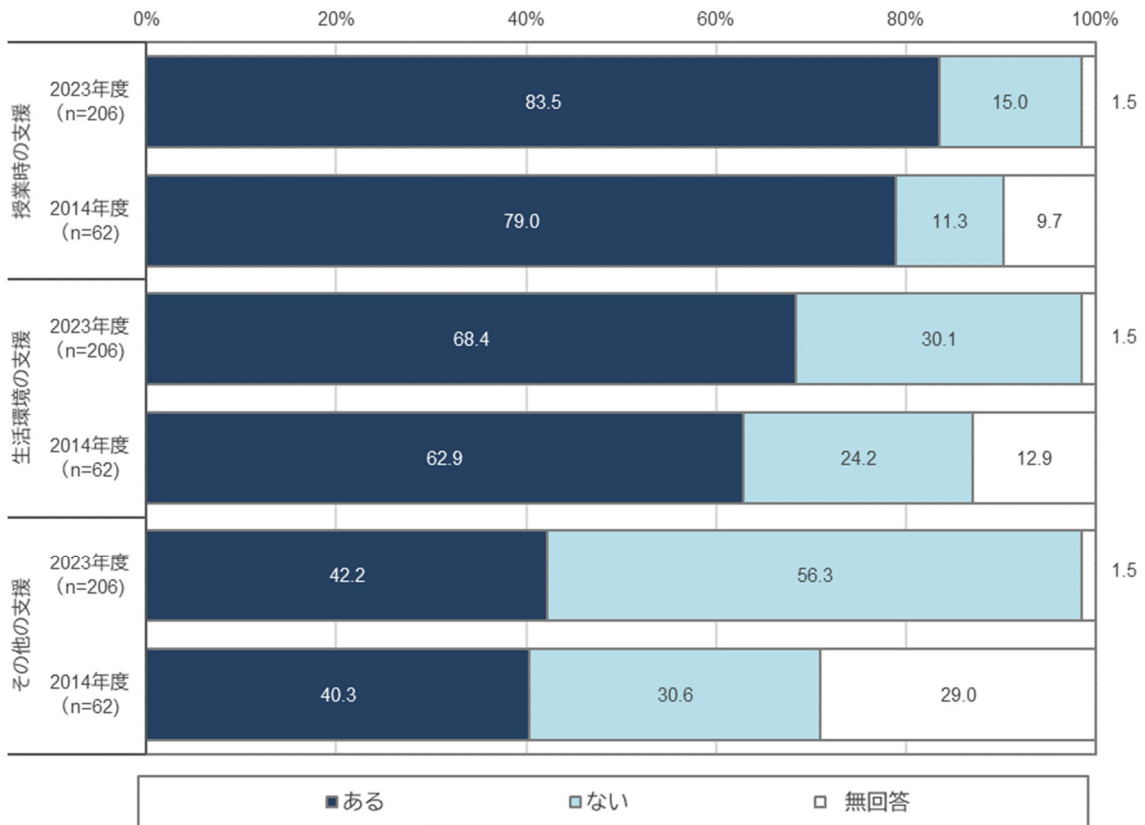
図表 2-7 障害のある学生の在籍状況(障害種別)



図表 2-8 障害学生支援部署の有無



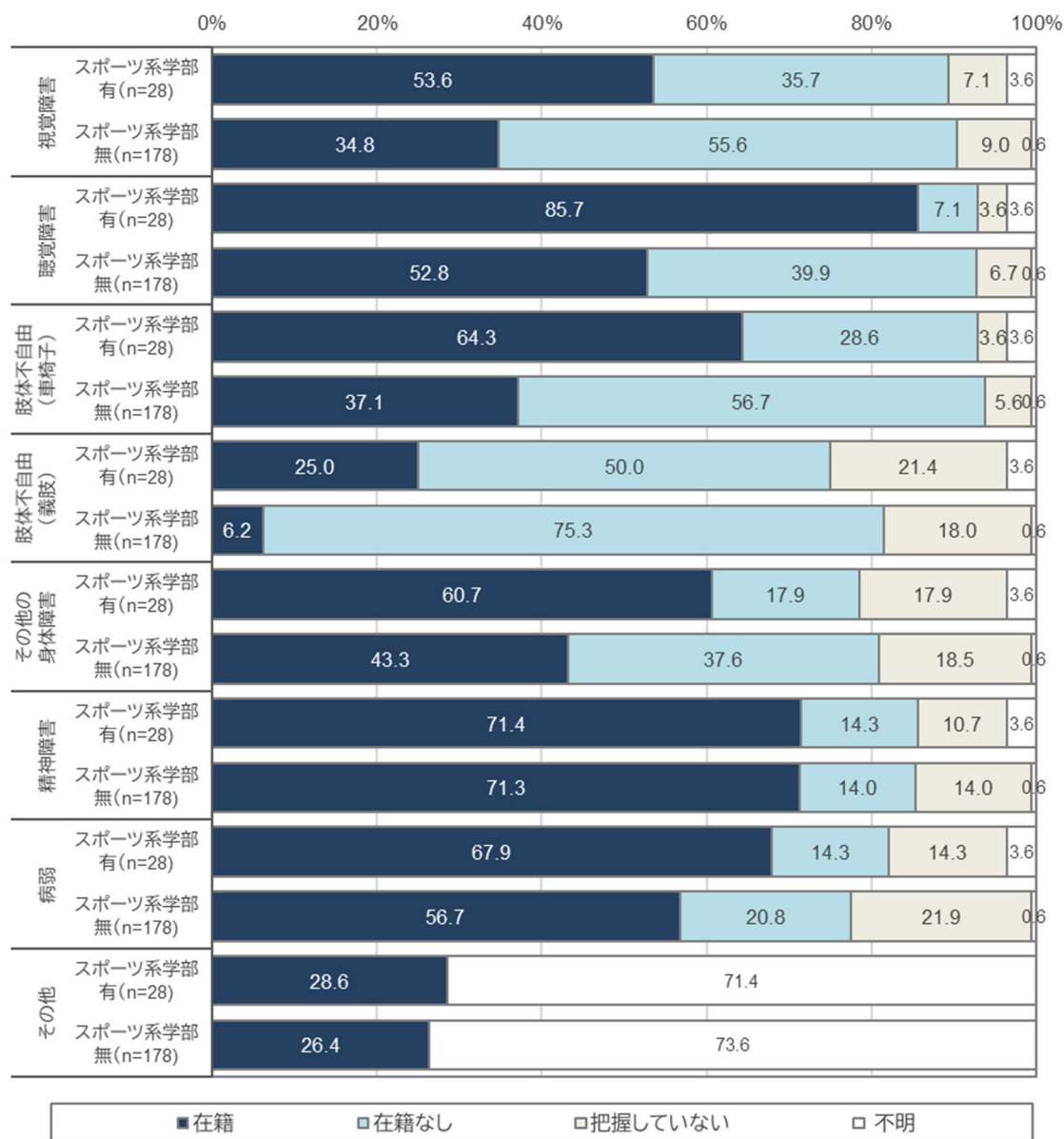
図表 2-9 障害のある学生への支援状況



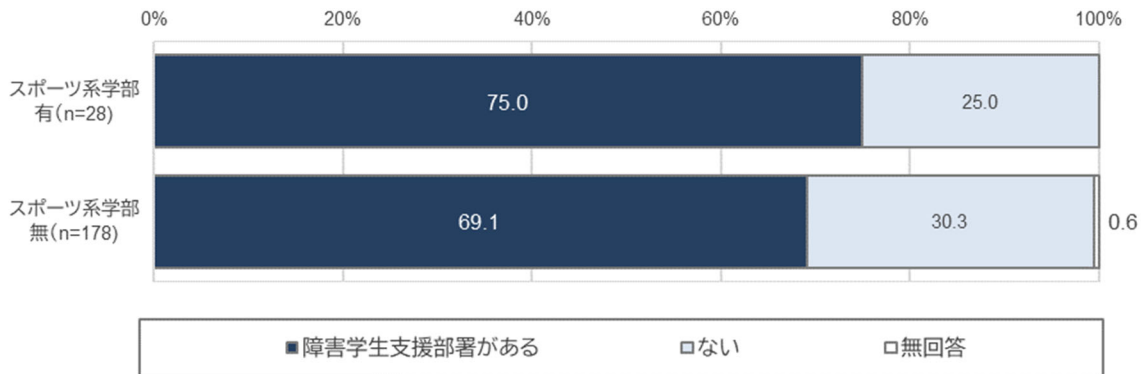
2-2. 障害学生の在籍・支援状況（学部別）

障害学生の在籍状況について、スポーツ系学部の設置有無でみていくと、聴覚障害(スポーツ系学部有:85.7%/無:52.8%)、肢体不自由(車椅子)(スポーツ系学部有:64.3%/無:37.1%)、視覚障害(スポーツ系学部有:53.6%/無:34.8%)となっており、スポーツ系学部のほうが全般的に障害学生の在籍割合が高くなっている(図表 2-10)。また、障害学生支援部署の設置・支援状況について、スポーツ系学部の設置有無で見えていくと、支援部署の設置ありが(スポーツ系学部有:75.0%/無:69.1%)となっており、わずかではあるがスポーツ系学部を設置している大学のほうが支援部署の設置割合が高いと同時に(図表 2-11)、授業時ならびに生活環境への支援については、スポーツ系学部設置大学のほうが積極的に行っているものと考えられる(図表 2-12)。

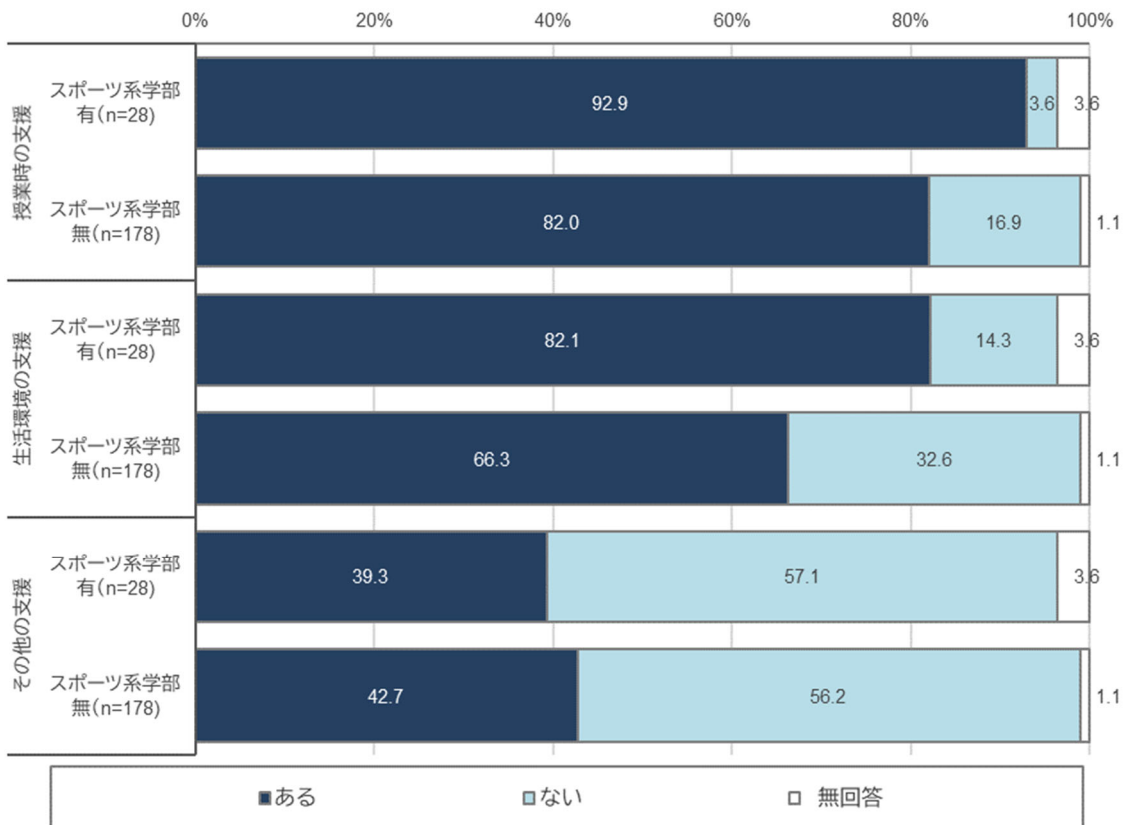
図表 2-10 障害のある学生の在籍状況(学部別比較)



図表 2-11 障害学生支援部署の有無(学部別比較)



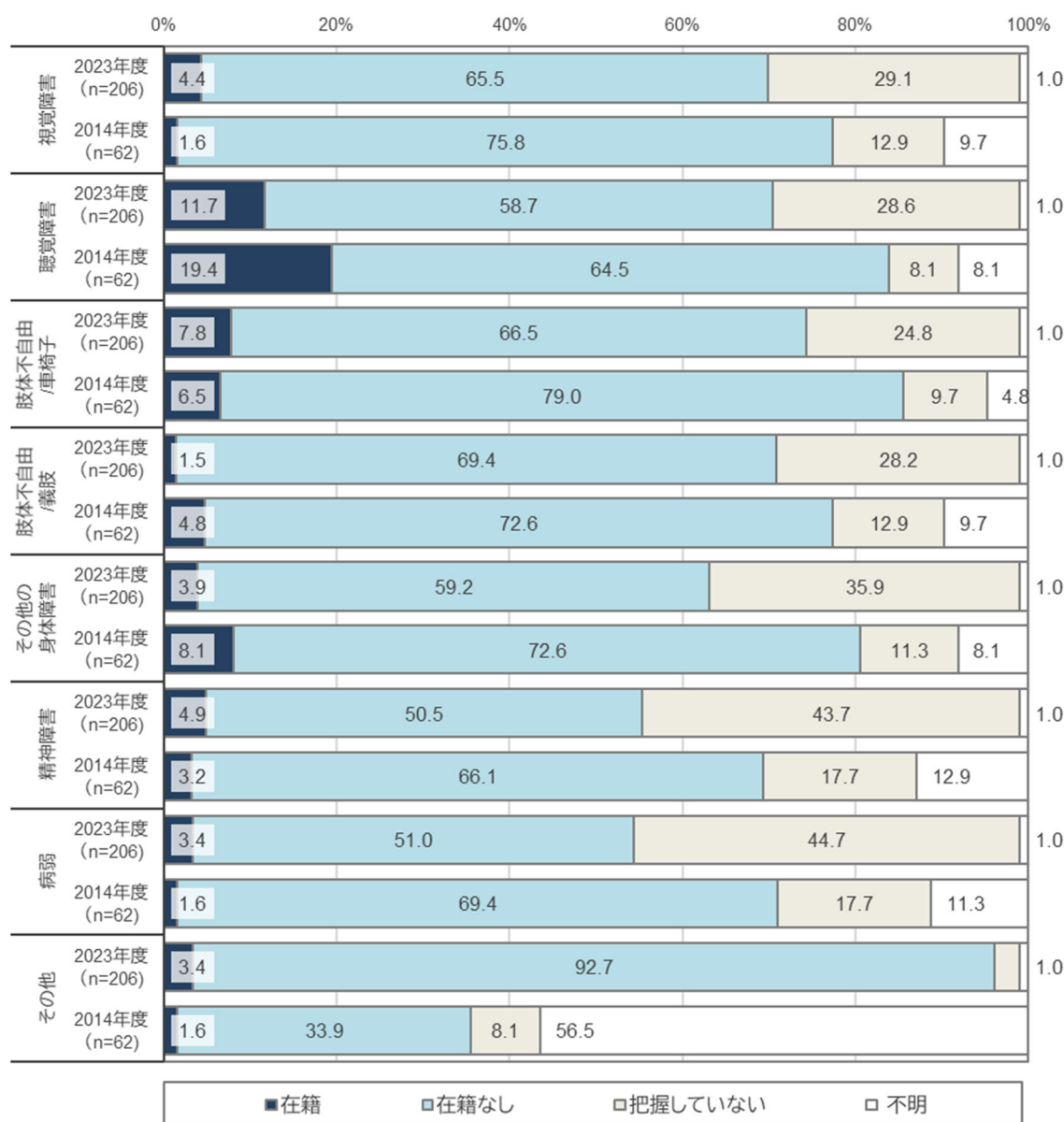
図表 2-12 障害のある学生への支援状況(学部別比較)



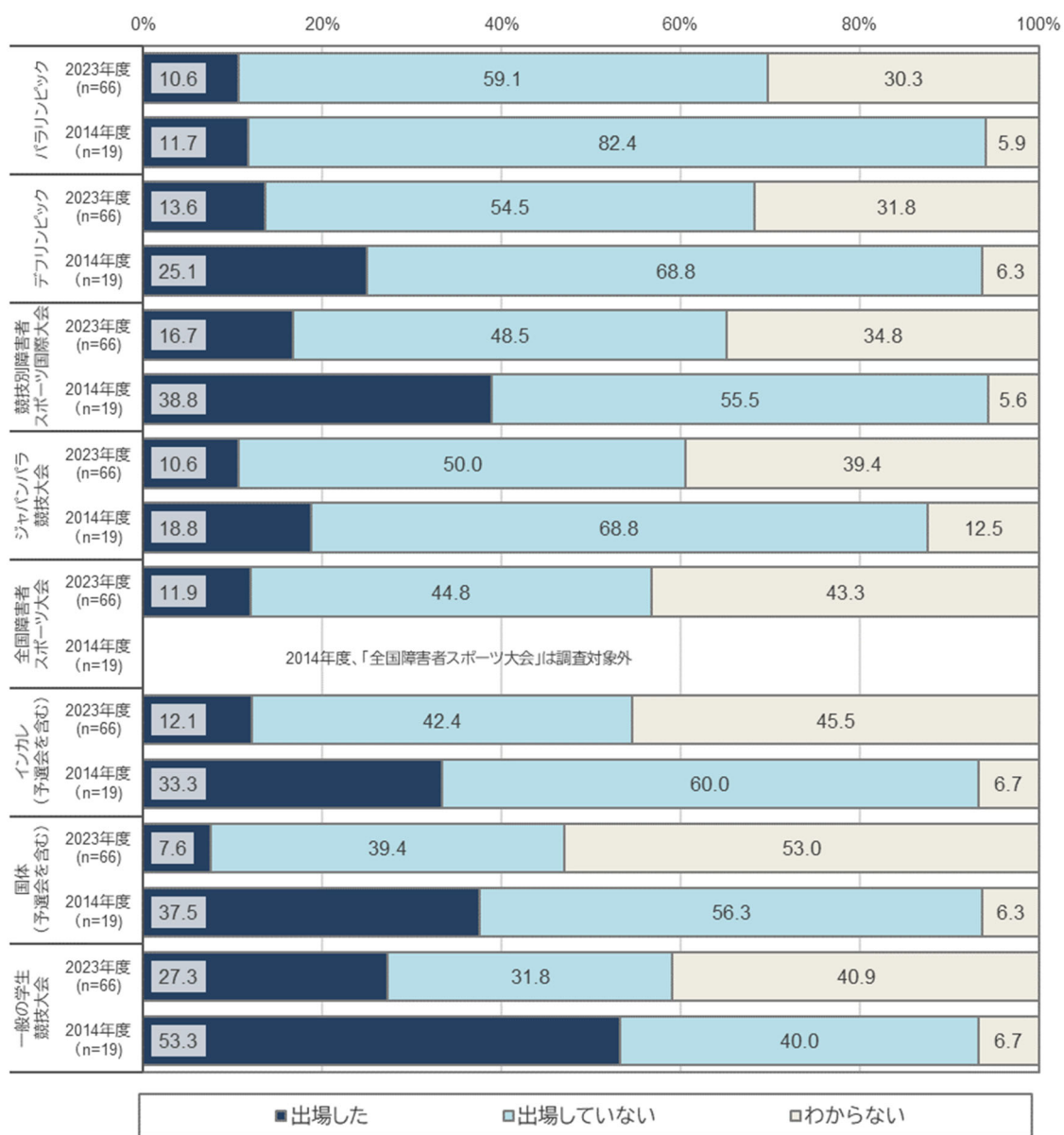
2-3. 障害のあるスポーツ選手の在籍状況・スポーツ大会への参加状況

障害のあるスポーツ選手の在籍状況については、「聴覚障害」11.7%や「肢体不自由(車椅子)」7.8%が上位となっており、それ以下は5%以下に留まっている(図表 2-13)。また、障害のあるスポーツ選手の大会出場については、「競技別障害者スポーツ国際大会」16.7%、「デフリンピック」13.6%などが上位となっているが、前回調査と比べて全般的に参加割合が低下していた(図表 2-14)。これは、前述のように調査対象を体育・スポーツ系以外にも広げたことで、結果としてスポーツに取り組む障害学生の出場割合が低下したものと考えられる。

図表 2-13 障害のあるスポーツ選手の在籍状況



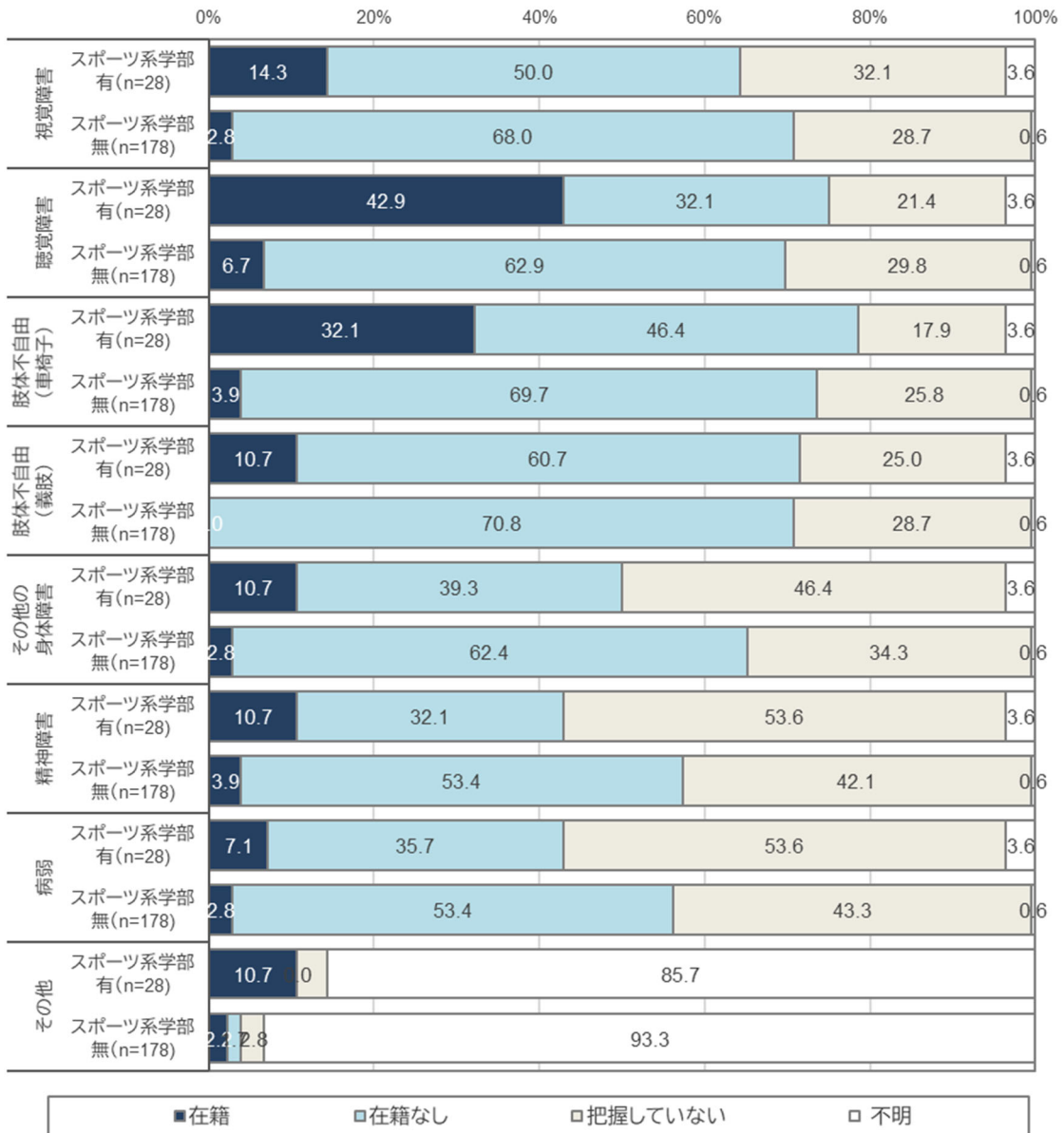
図表 2-14 障害のあるスポーツ選手のスポーツ大会への参加状況



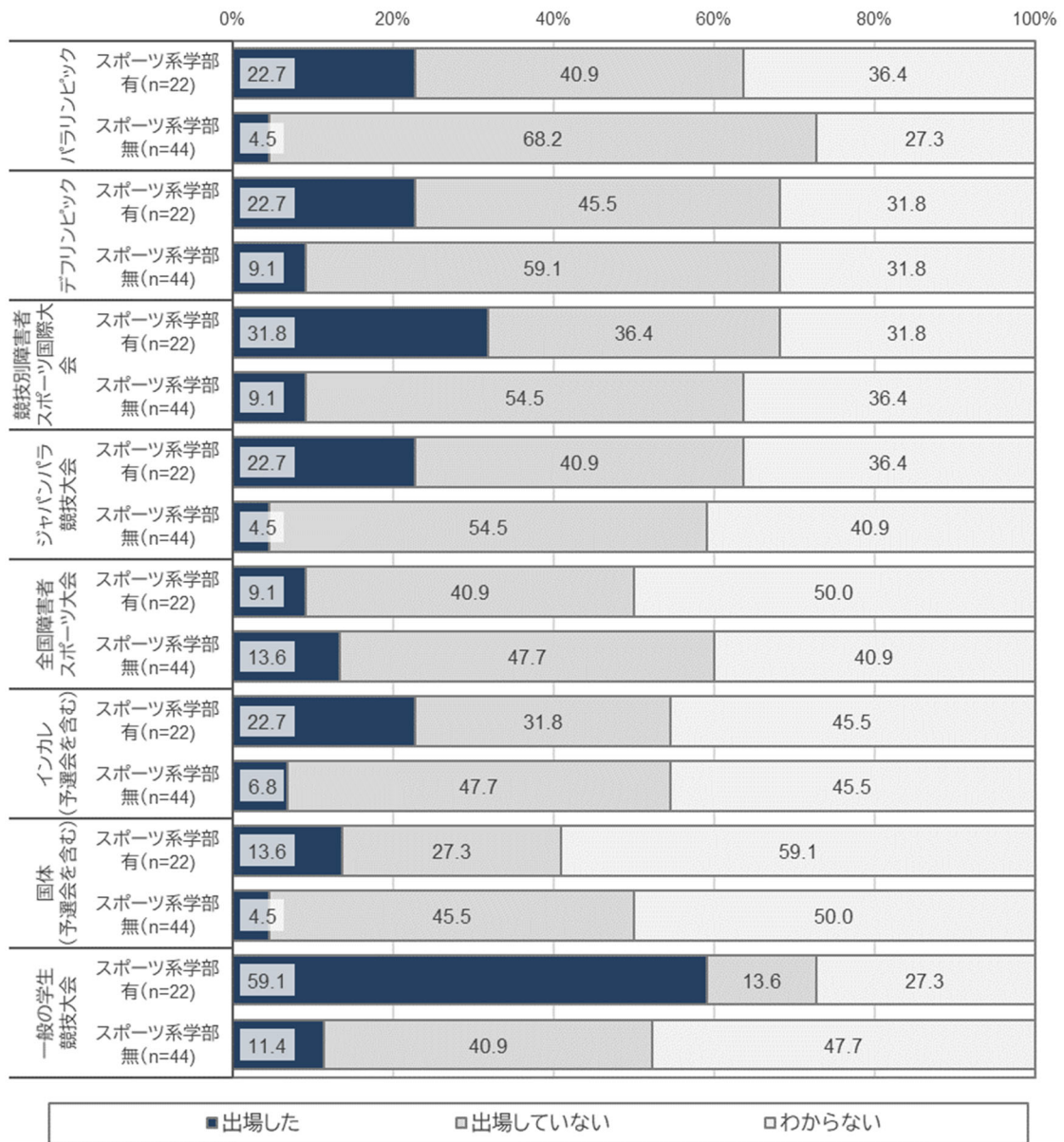
2-4. 障害のあるスポーツ選手の在籍状況・スポーツ大会への参加状況(学部別)

障害のあるスポーツ選手の在籍状況について、スポーツ系学部の設置有無でみていくと、聴覚障害(スポーツ系学部有:42.9%/無:6.7%)、肢体不自由(車椅子)(スポーツ系学部有:32.1%/無:3.9%)が顕著であるが、スポーツ系学部を有する大学のほうが全般的に在籍割合が高くなっている。また、大会の参加状況についても、パラリンピック(スポーツ系学部有:22.7%/無:4.5%)、デフリンピック(スポーツ系学部有:22.7%/無:9.1%)、競技別障害者スポーツ国際大会(スポーツ系学部有:31.8%/無:9.1%)等にみられるように、スポーツ系学部を有する大学のほうが障害学生の大会出場が活発となっている(図表 2-15・16)。

図表 2-15 障害のあるスポーツ選手の在籍状況(学部別比較)



図表 2-16 障害のあるスポーツ選手のスポーツ大会への参加状況(学部別比較)

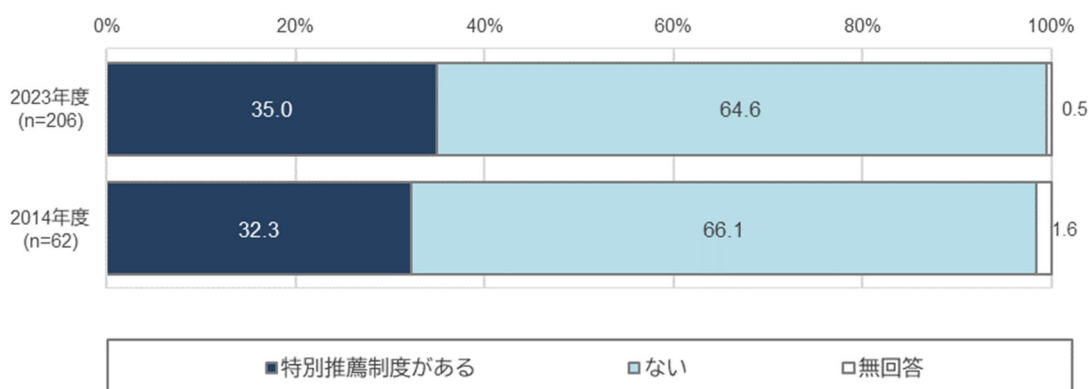


3. 入学試験における障害者スポーツ選手への対応について

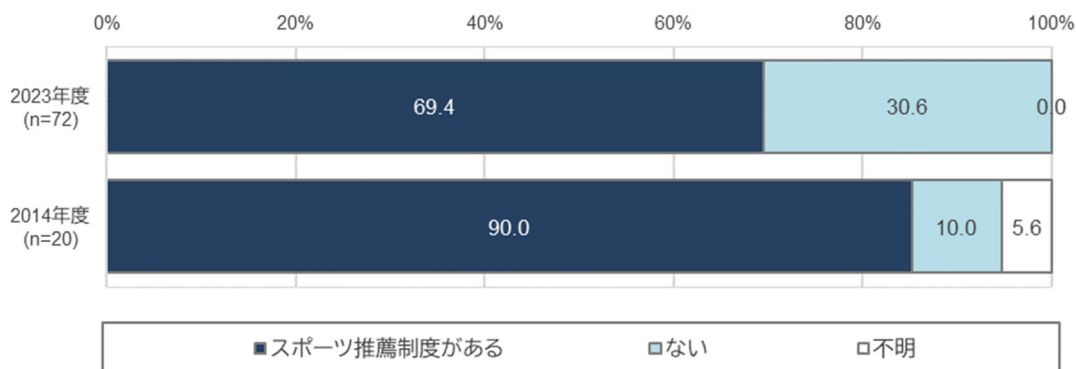
3-1. 特別推薦・スポーツ推薦制度

特別推薦制度を設けている大学は35.0%となっており、そのうち69.4%がスポーツ推薦制度を有している(図表 2-17・18)。また、スポーツ推薦制度を有している大学のうち、62.0%が「障害のある選手も対象」としており、そのうち 41.9%が合格実績を有している(図表 2-19・20)。前回調査からの変化について、回答校数が少数のため単純に比較できないが、スポーツ推薦制度内で、「障害のある選手も対象」としている大学が、2014 年度(38.9%)/2023 年度(62.0%)となっており、前回調査は体育・スポーツ系専攻の大学のみが対象となっていたが、本調査は学部・専攻を問わず実施していることから、スポーツ推薦において障害のある選手を対象とする大学は増加してきているものと推察される。

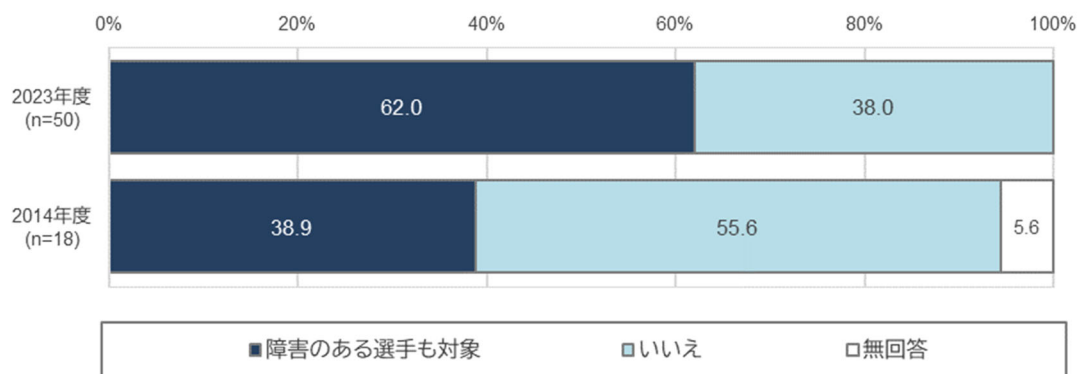
図表 2-17 特別推薦制度の有無



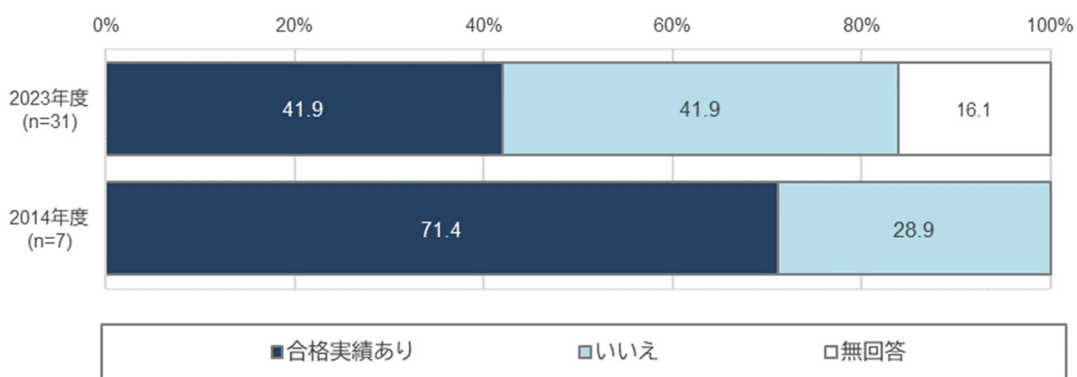
図表 2-18 特別推薦制度内のスポーツ推薦制度の有無



図表 2-19 スポーツ推薦制度で障害のあるスポーツ選手を対象としている割合



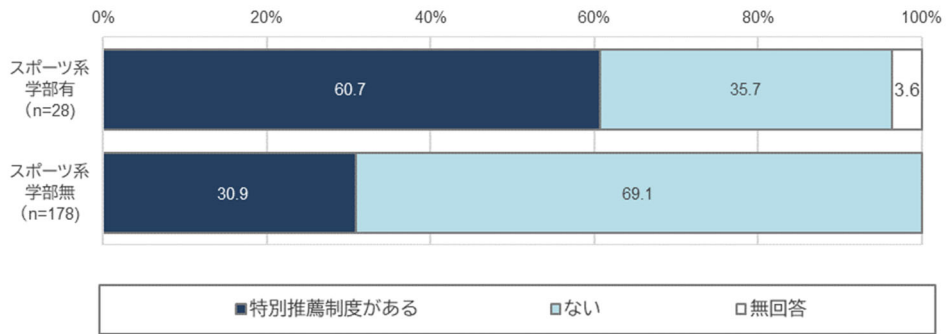
図表 2-20 障害のあるスポーツ選手の合格実績



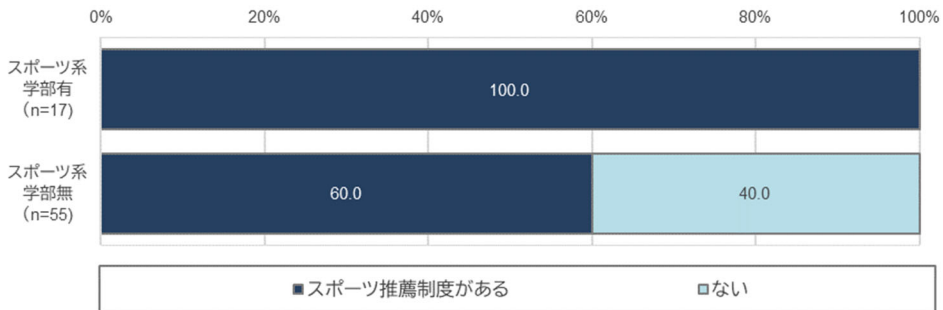
3-2. 特別推薦・スポーツ推薦制度（学部別）

推薦制度の状況について、スポーツ系学部の設置有無でみていくと、推薦制度を有しているスポーツ系学部の100%がスポーツ推薦制度を設けており、そのうち82.4%が障害のある選手を対象としており、57.1%の合格実績を有している(図表 2-21~24)。スポーツ系学部を有する大学のほうが、障害学生の在籍割合が高いことは前述のとおりであるが、他学部を有する大学と比べ積極的にスポーツ推薦を導入していると同時に、その多くが障害のある選手を対象としており、推薦入試での入学割合がスポーツ系学部のない大学と比べて高いものと推察される。

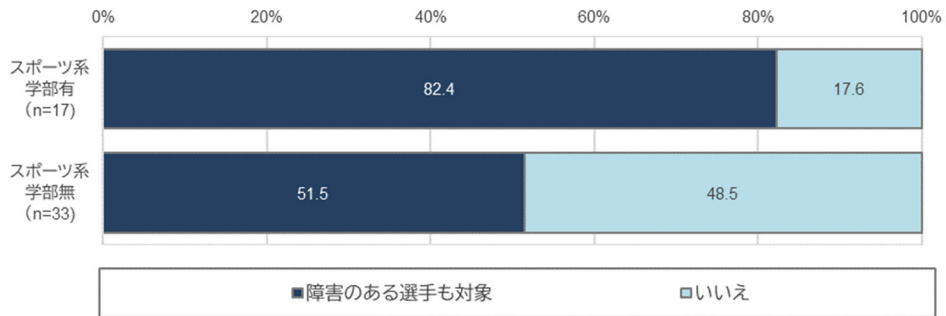
図表 2-21 特別推薦制度の有無(学部別比較)



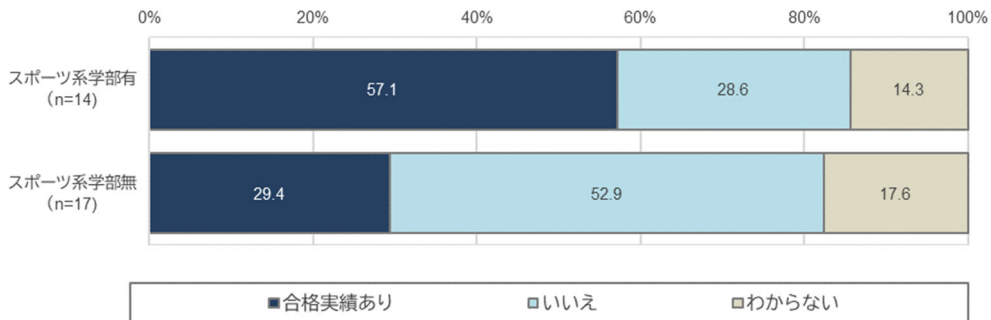
図表 2-22 特別推薦制度内のスポーツ推薦制度の有無(学部別比較)



図表 2-23 スポーツ推薦制度で障害のあるスポーツ選手を対象としている割合(学部別比較)



図表 2-24 障害のあるスポーツ選手の合格実績(学部別比較)

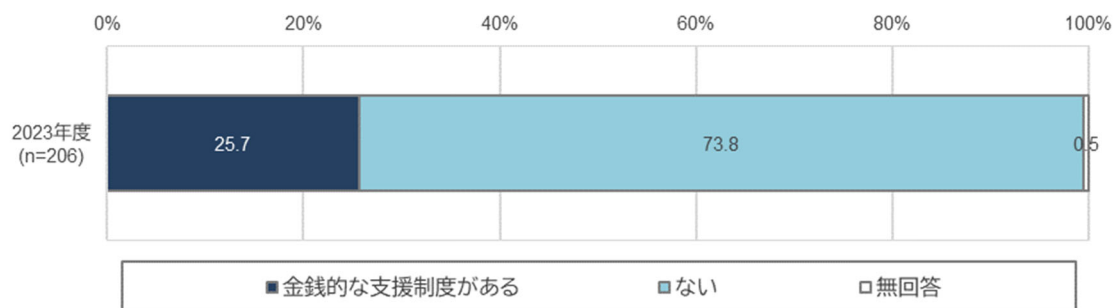


4. 障害者スポーツ選手への金銭的支援について

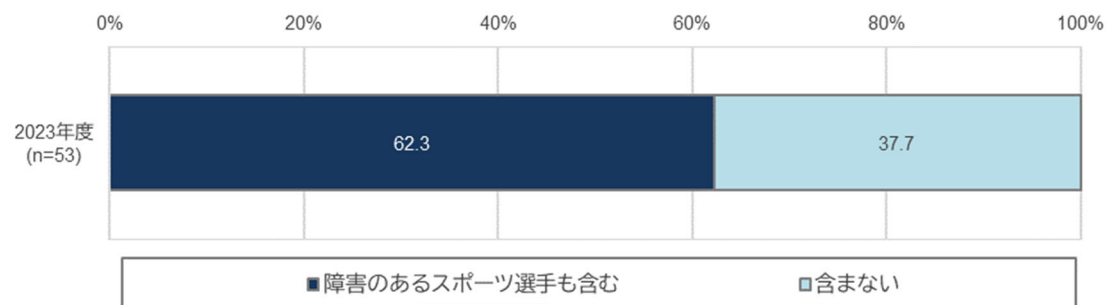
4-1. スポーツ選手への金銭的支援

スポーツ選手への金銭的支援(競技成績を支援基準の一つに含む)(入学金免除・授業料免除・給付奨学金・競技経費の補助等)は、25.7%の大学で導入されており、そのうち62.3%が障害のあるスポーツ選手も対象としている(図表 2-25・26)。また、障害のあるスポーツ選手を対象としている大学のうち、支援実績があるのは42.4%となっていた(図表 2-27)。

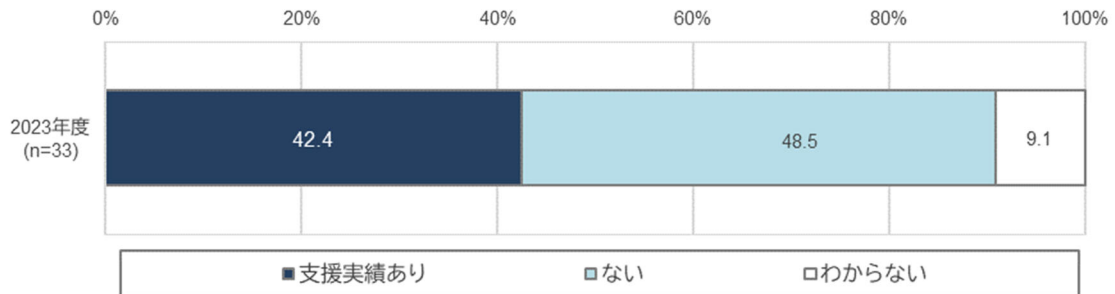
図表 2-25 スポーツ選手を対象とした金銭的支援制度の有無



図表 2-26 金銭的支援制度で障害のあるスポーツ選手を対象としている割合



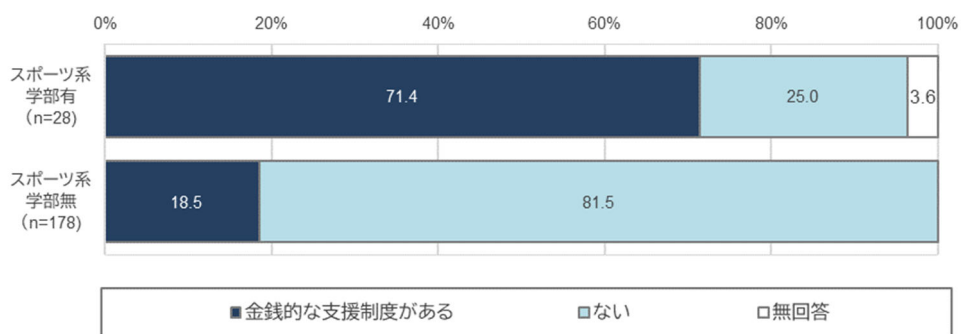
図表 2-27 障害のあるスポーツ選手の支援実績の有無



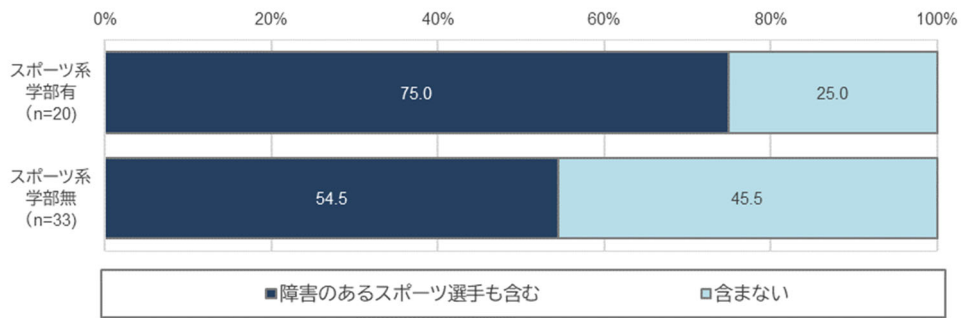
4-2. スポーツ選手への金銭的支援（学部別）

スポーツ選手への金銭的支援の状況について、スポーツ系学部の設置有無でみていくと、スポーツ系学部を有している大学の 71.4%が支援制度を導入しており、スポーツ系学部を有していない大学と比べて導入割合が圧倒的に高くなっている(図表 2-28)。また、支援制度の対象については、スポーツ系学部を有する大学の 75.0%が障害のある選手も対象としており、そのうち 73.3%の大学が支援実績を有している(図表 2-29・30)。前述のように、スポーツ系学部を有する大学において、積極的に障害のあるスポーツ選手を対象に含んだ推薦入試を実施されているが、入学後も何らかの金銭的な支援が活発に行われているものと推察される。

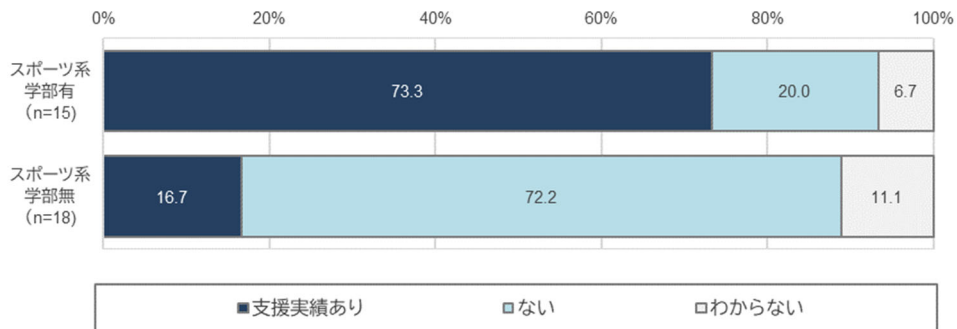
図表 2-28 スポーツ選手を対象とした金銭的支援制度の有無(学部別比較)



図表 2-29 金銭的支援制度で障害のあるスポーツ選手を対象としている割合(学部別比較)



図表 2-30 障害のあるスポーツ選手の支援実績の有無(学部別比較)

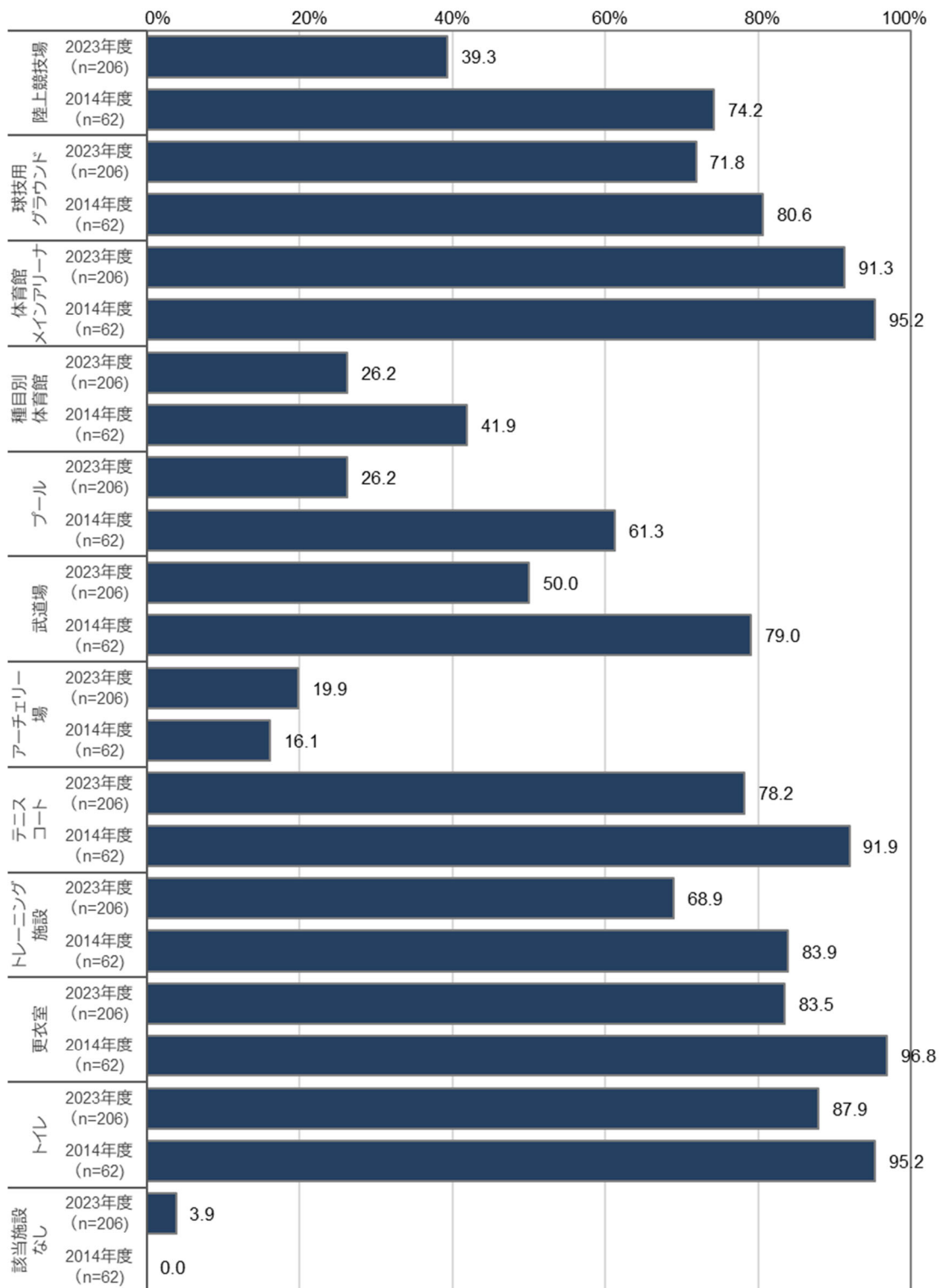


5. 運動施設について

5-1. 大学が保有する運動施設

大学が保有する施設は図表 2-31 のとおりである。球技用グラウンド(2014 年度:80.6%/2023 年:71.8%)や体育館メインアリーナ(2014 年度:95.2%/2023 年度:91.3%)等、多種目に対応できる汎用性の高い施設は、調査対象が専攻を問わず全大学となった本調査においても高い設置割合となっているが、陸上競技場(2014 年度:74.2%/2023 年度:39.3%)やプール(2014 年度:61.3%/2023 年度:26.2%)、武道場(2014 年度:79.0%/2023 年度:50.0%)等、用途が限定されている施設については、体育・スポーツ系大学のみを調査対象とした前回調査から大幅に減少していた。

図表 2-31 大学が保有する運動施設

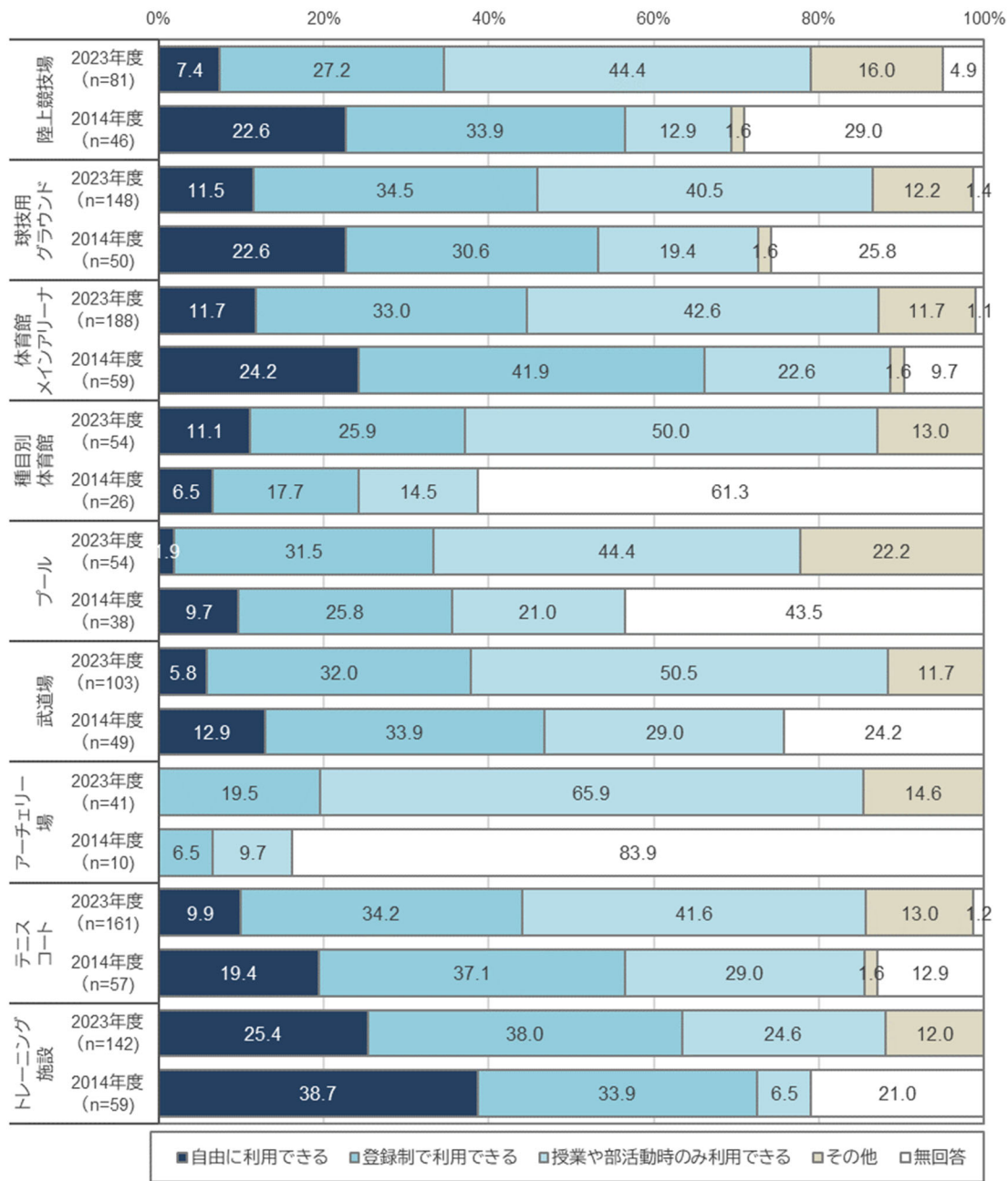


5-2. 運動施設の学内における利用状況

運動施設の学内における利用状況は図表 2-32 のとおりである。多くの大学に設置されている施設についてみていくと、球技用グラウンドは、「自由に利用できる(2014 年度:22.6%/2023 年度:11.5%)」、「登録制で利用できる(2014 年度:30.6%/2023 年度:34.5%)」、「授業や部活動時のみ利用できる(2014 年度:19.4%/2023 年度:40.5%)」となっており、体育館メインアリーナは、「自由に利用できる(2014 年度:24.2%/2023 年度:11.7%)」、「登録制で利用できる(2014 年度:41.9%/2023 年度:33.0%)」、「授業や部活動時のみ利用できる(2014 年度:22.6%/2023 年度:42.6%)」となっている。また、テニスコートは、「自由に利用できる(2014 年度:19.4%/2023 年度:9.9%)」、「登録制で利用できる(2014 年度:37.1%/2023 年度:34.2%)」、「授業や部活動時のみ利用できる(2014 年度:29.0%/2023 年度:41.6%)」といった状況になっている。

2014 年度調査と比べ、本調査では全般的に「自由に利用できる」「登録制で利用できる」施設の割合が低下している一方で、「授業や部活動時のみ利用できる」施設が大幅に増加していることが特徴的である。2014 年度調査は体育・スポーツ系学部のみを対象としていることから、実技授業の履修者や部活動参加者のみならず、他の学生に対しても運動の機会を確保する狙いがあると推察され、一方で本調査において体育・スポーツ系学部を設置している大学は 1 割程度に留まることから、施設の運用は限定的になっているものと考えられる。

図表 2-32 運動施設の学内における利用状況

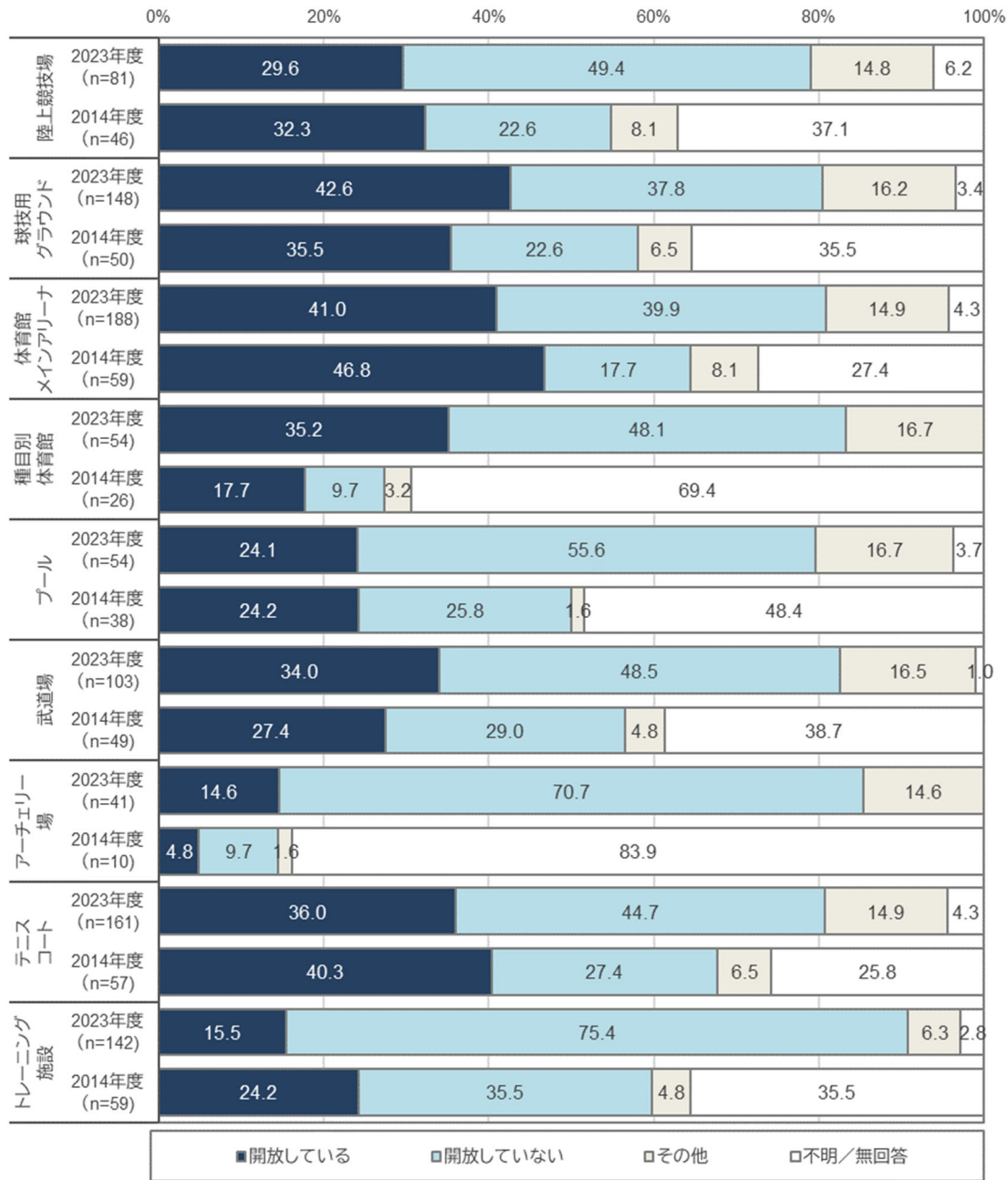


5-3.運動施設の学外への開放状況

運動施設の学外への開放状況は図表 2-33 のとおりである。主だった施設についてみていくと、球技用グラウンドは、「開放している(2014 年度:35.5%/2023 年度:42.6%)」、「開放していない(2014 年度:22.6%/2023 年度:37.8%)」、体育館メインアリーナは、「開放している(2014 年度:46.8%/2023 年度:41.0%)」、「開放していない(2014 年度:17.7%/2023 年度:39.9%)」、テニスコートは、「開放している(2014 年度:40.3%/2023 年度:36.0%)」、「開放していない(2014 年度:27.4%/2023 年度:44.7%)」といった状況になっている。

2014 年度調査では、「不明・無回答」の割合が高く、本調査と比較をすることは難しくなっているが、「開放している」各施設の割合を勘案すると、前回調査と比べて施設の開放状況についてそれほど大きな変化は生じていないものと推察される。

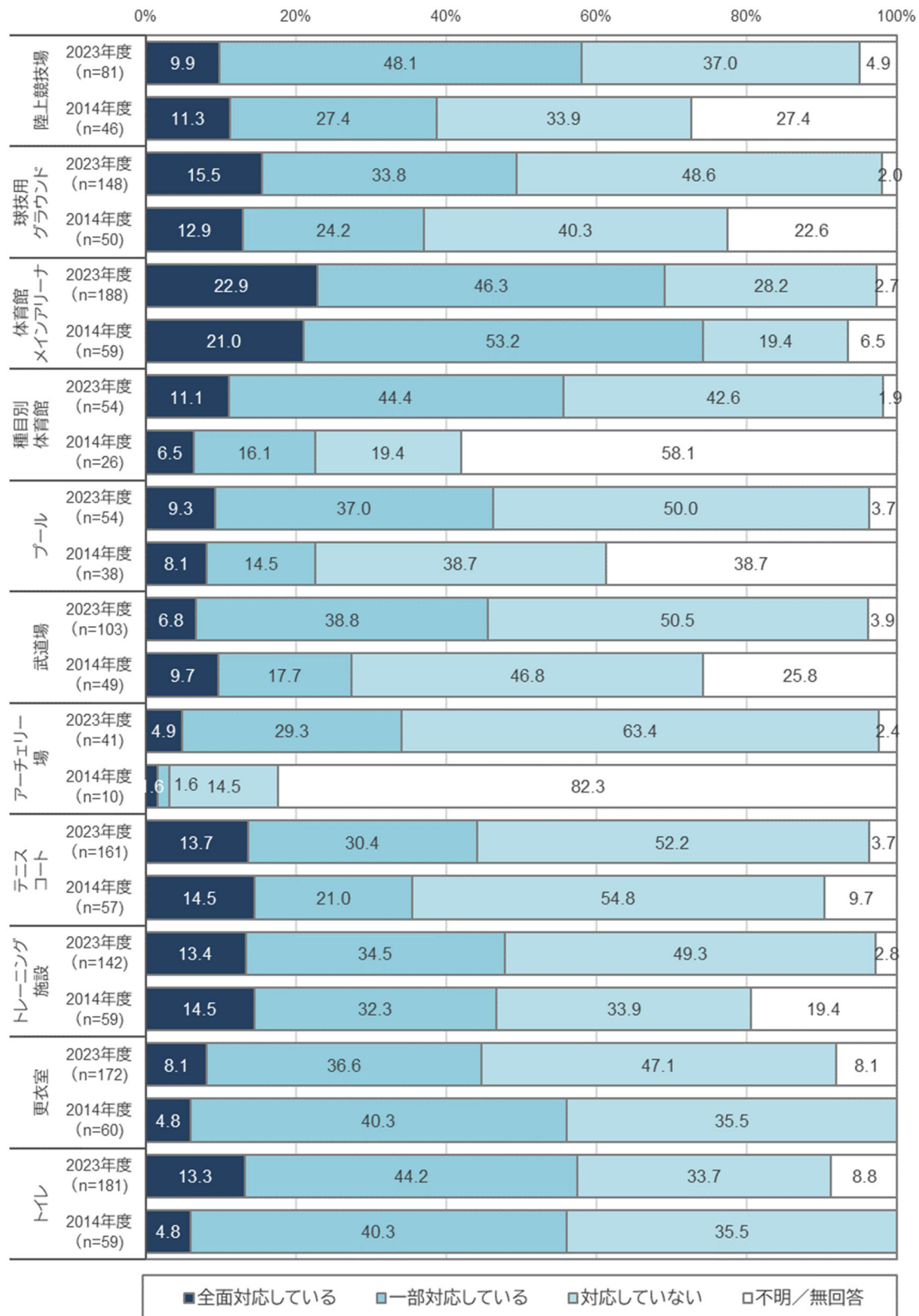
図表 2-33 運動施設の学外への開放状況



5-4.運動施設のバリアフリー状況

運動施設のバリアフリー状況は図表 2-34 のとおりである。2014 年度調査と本調査を比較すると、「全面对応している」施設の割合に大きな変化はみられないが、「一部対応している」割合を含めると、陸上競技場(2014 年度:38.7%/2023 年度:58.0%)、種目別体育館(2014 年度:22.6%/2023 年度:55.5%)、プール(2014 年度:22.6%/2023 年度:46.3%)等、全体的にバリアフリーに対応している施設が増加していることが明らかになった。障害者差別解消法の施行に伴う障害学生への合理的配慮の提供や、各大学において障害学生の在籍割合が増加していることから、学内の運動施設のバリアフリー化が進んできているものと推察される。

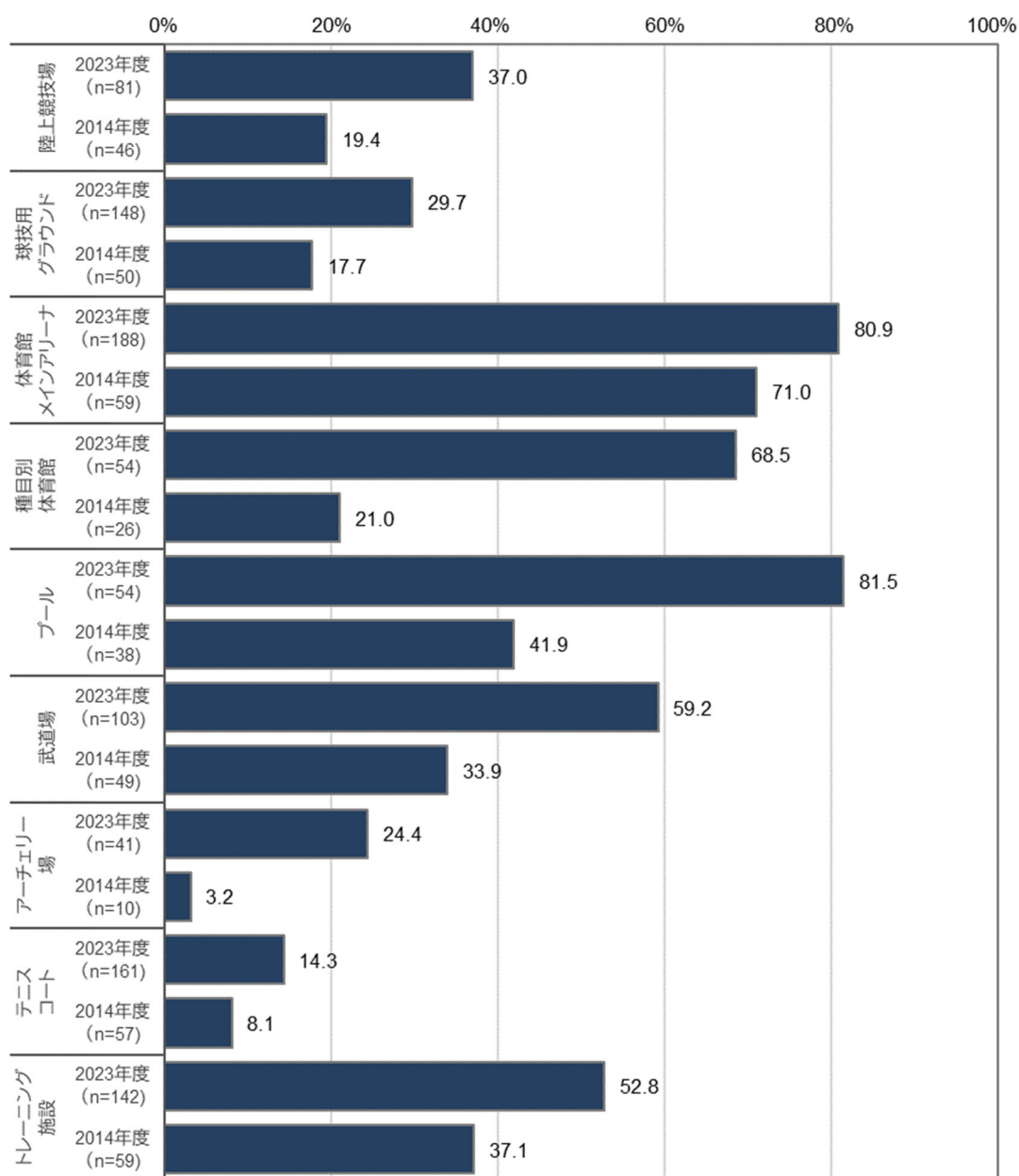
図表 2-34 運動施設のバリアフリー度



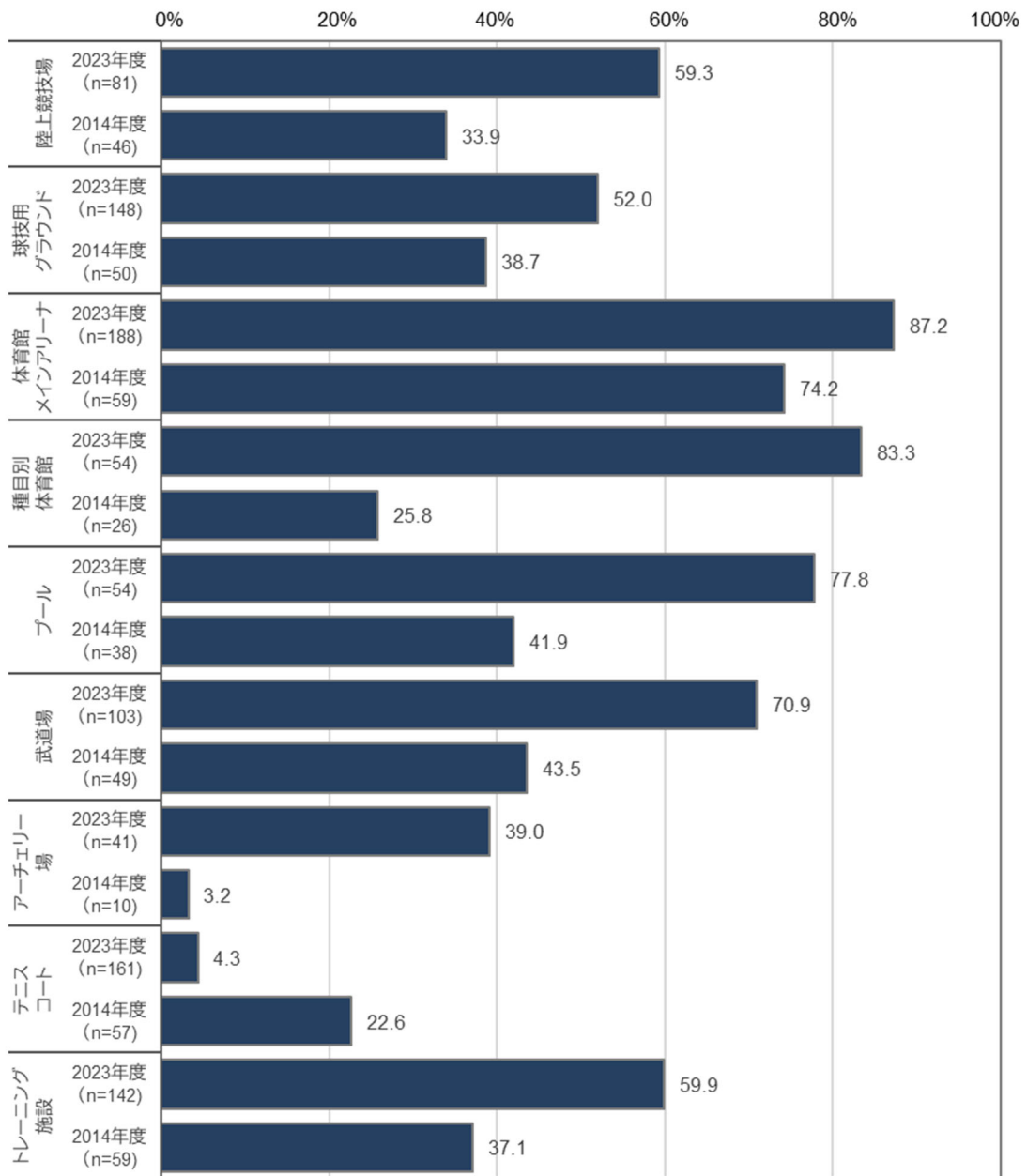
5-5.各運動施設の更衣室・シャワールーム・トイレの設置状況

各運動施設の更衣室、シャワールームおよびトイレの設置状況は図表2-35・36のとおりである。前回調査と比較すると、テニスコートのトイレを除き、運動施設における各設備の設置率は大幅に増加しており、前述の施設のバリアフリー化の進展と合わせて、障害の有無に関わらず、各運動施設の利便性が向上しているものと考えられる。

図表 2-35 更衣室、シャワールームが付帯する運動施設



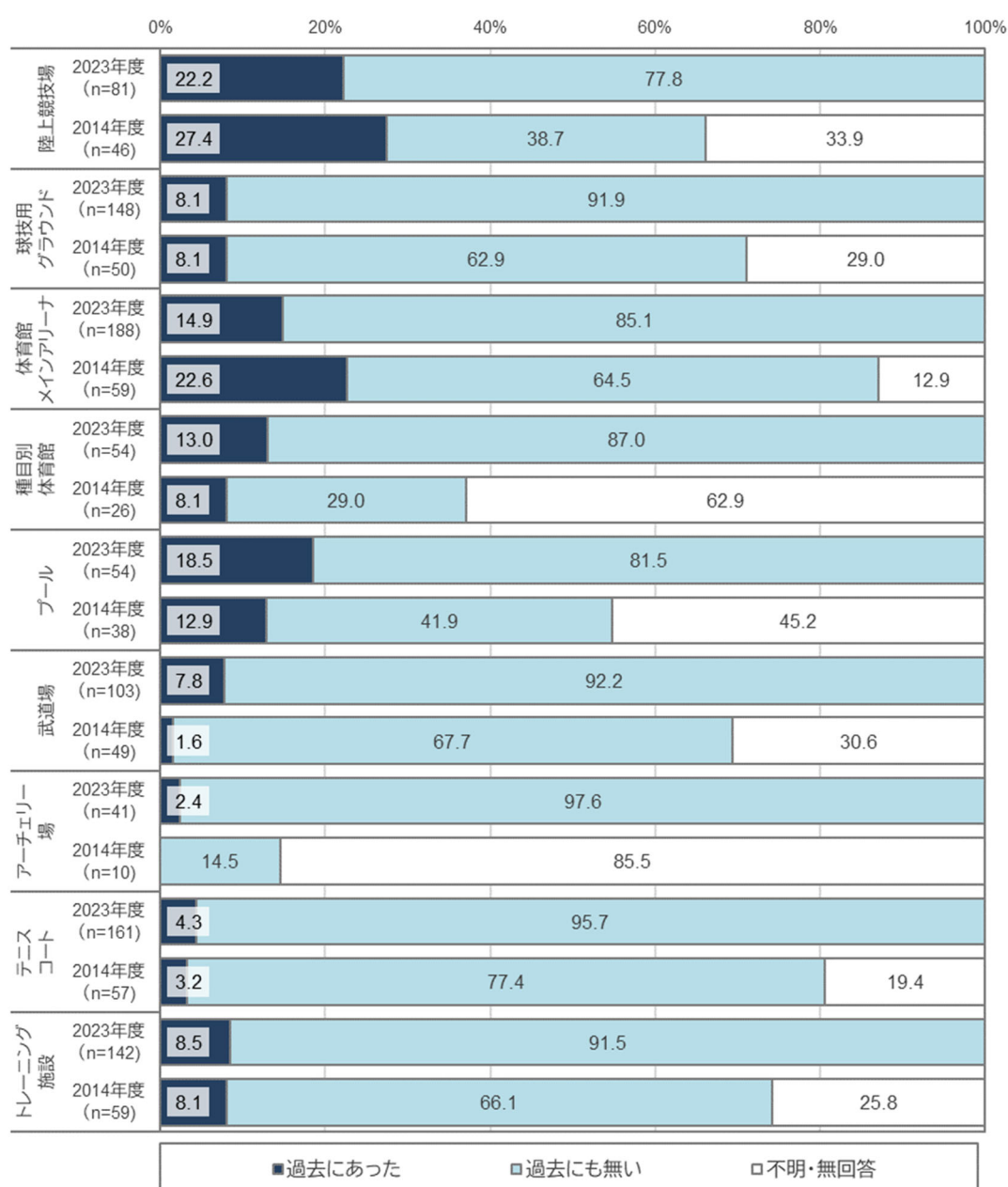
図表 2-36 トイレが付帯する運動施設



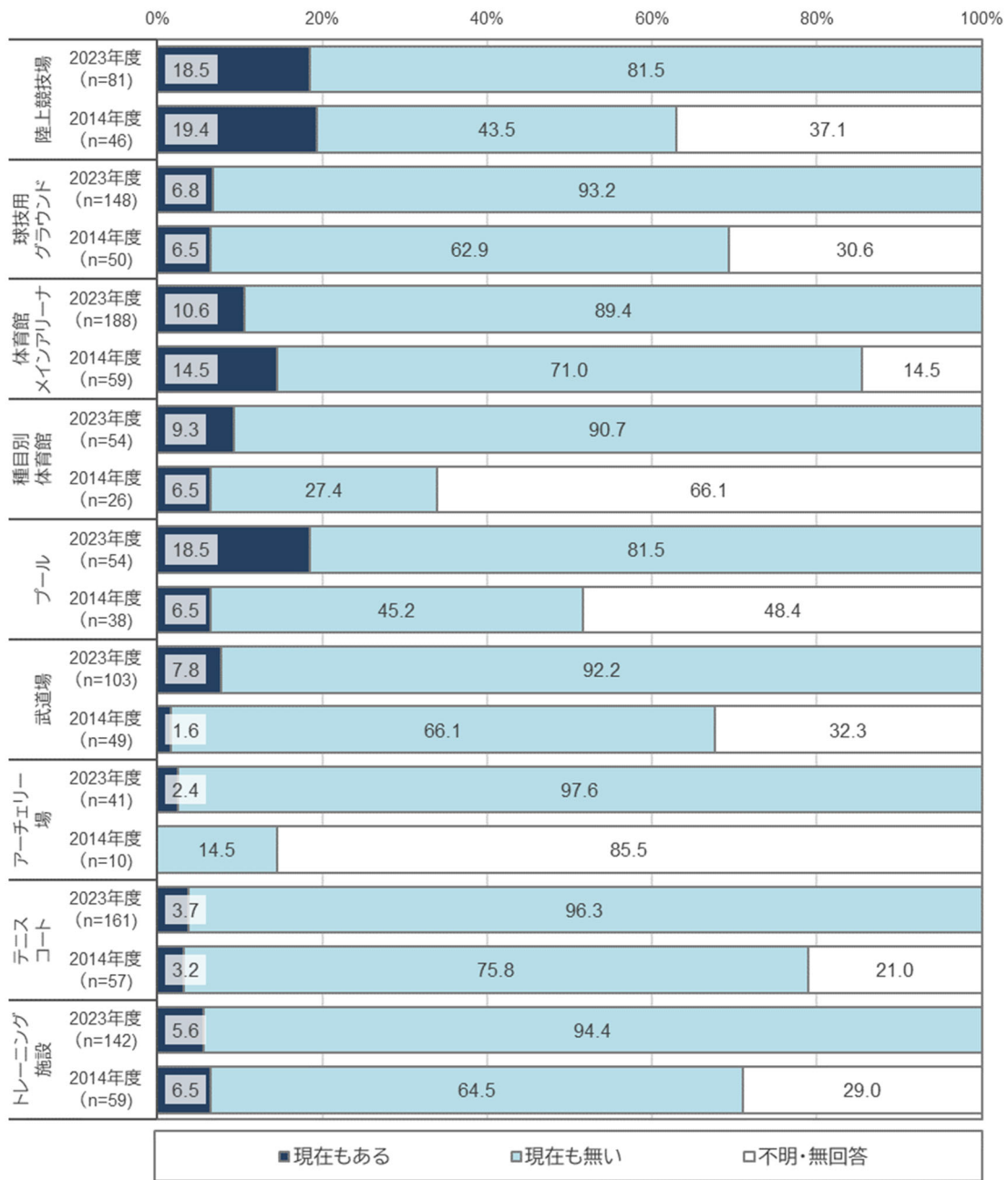
5-6. 各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への貸出状況

各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への過去・現在の貸し出し状況は図表2-37・38のとおりである。過去の体育館メインアリーナ(2014 年度:22.6%/2023 年度:14.9%)、プール(2014 年度:12.9%/2023 年度:18.5%)、現在のプール(2014 年度:6.5%/2023 年度:18.5%)等に変化がみられるが、全体的に施設の貸し出しは低調となっており、前述のとおり施設の運用は学内での活動が中心となっており、施設の開放と同様に、障害のある選手や団体への貸し出しも限定的になっているものと考えられる。

図表 2-37 各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への過去の貸出状況



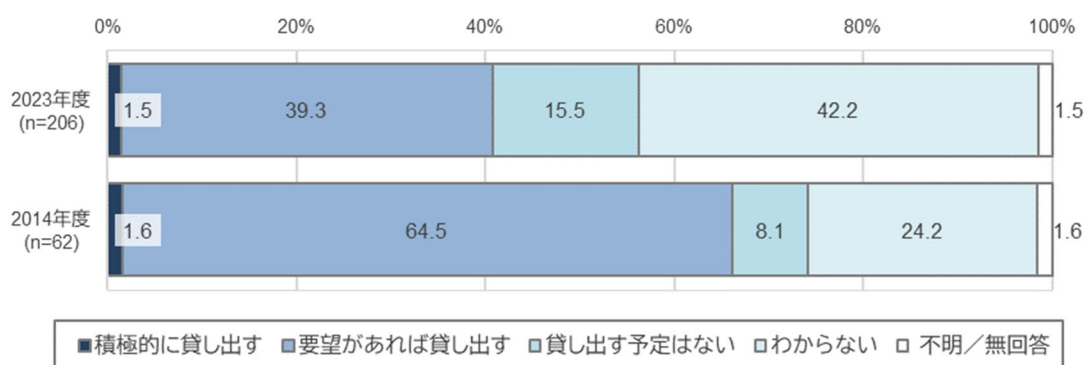
図表 2-38 各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への現在の貸出状況



5-7. 各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への貸し出し意向

各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への貸し出し意向について、貸し出す（「積極的に貸し出す」と「要望があれば貸し出す」の合計値）としている割合が、2014年度は66.1%であるのに対して、2023年度は40.8%となっており、本調査では貸し出すとする割合が低下していた（図表 2-39）。前述のとおり、運動施設の学内利用状況について、2014年度調査と比べ本調査では「授業や部活動時のみ利用できる」施設が大幅に増加しており、施設の運用は授業や部活動のみを対象とした限定的なものとなっていると考えられることから、学外への貸し出しについても消極的な大学が多いものと推察される。

図表 2-39 各運動施設の障害のあるスポーツ選手や団体への貸出意向



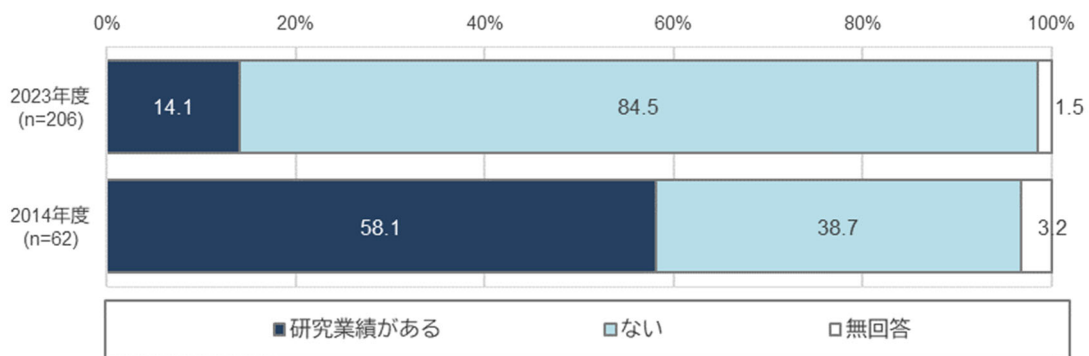
6. アスリートの競技力向上について

6-1. 障害のあるアスリートの競技力向上を目的とした研究業績

障害のあるアスリートの競技力向上を目的とした研究業績の有無について、2014年度は58.1%と回答校の過半数が研究業績を有していたが、2023年度は業績を有する大学が14.1%と大幅に低下していた(図表2-40)。本調査の回答校のうち、スポーツ系学部を有する大学は13.6%であると同時に、障害者スポーツを専門とする専任教員の在籍割合が12.1%と少数に留まっていることから、関連する研究の実施割合が低値となっているものと考えられる。

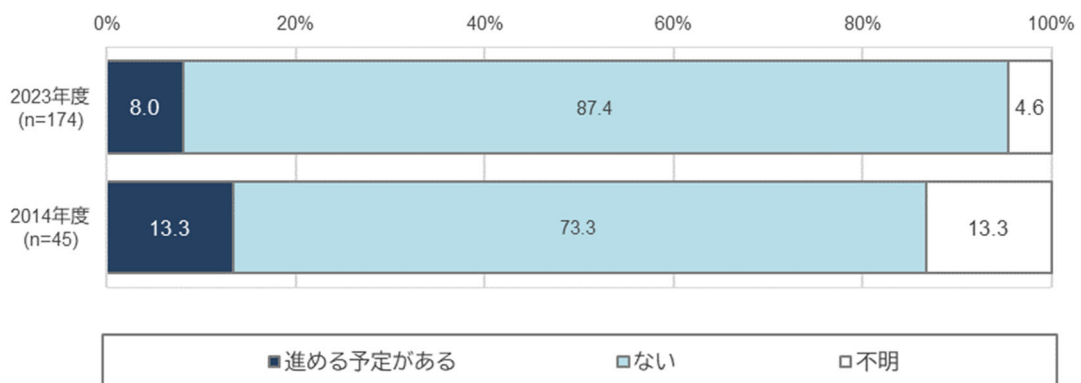
また、今後の関連する研究の意向については、「進める予定がある」とした大学は8.0%となっており、実績と今後の意向ともに低い割合となっている(図表2-41)。

図表 2-40 障害のあるアスリートの競技力向上を目的とした研究業績の有無



※2014年度は業績ではなく、組織として質問

図表 2-41 研究の今後の予定

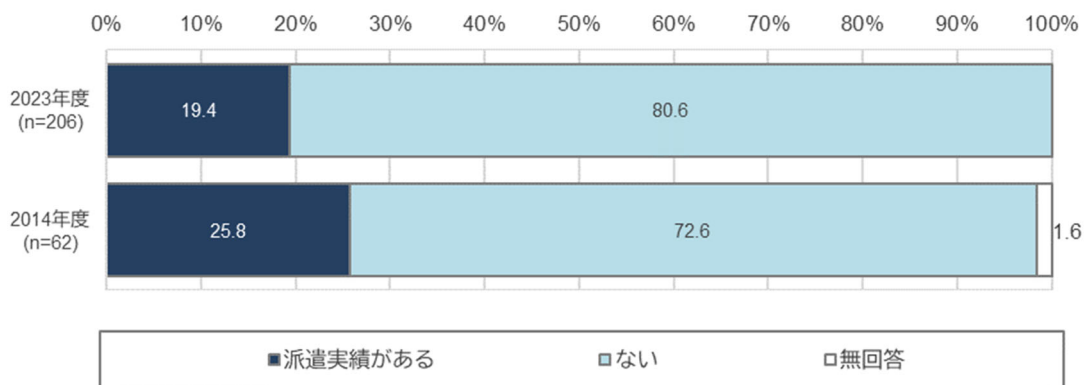


6-2. 教職員のスポーツ大会への派遣実績

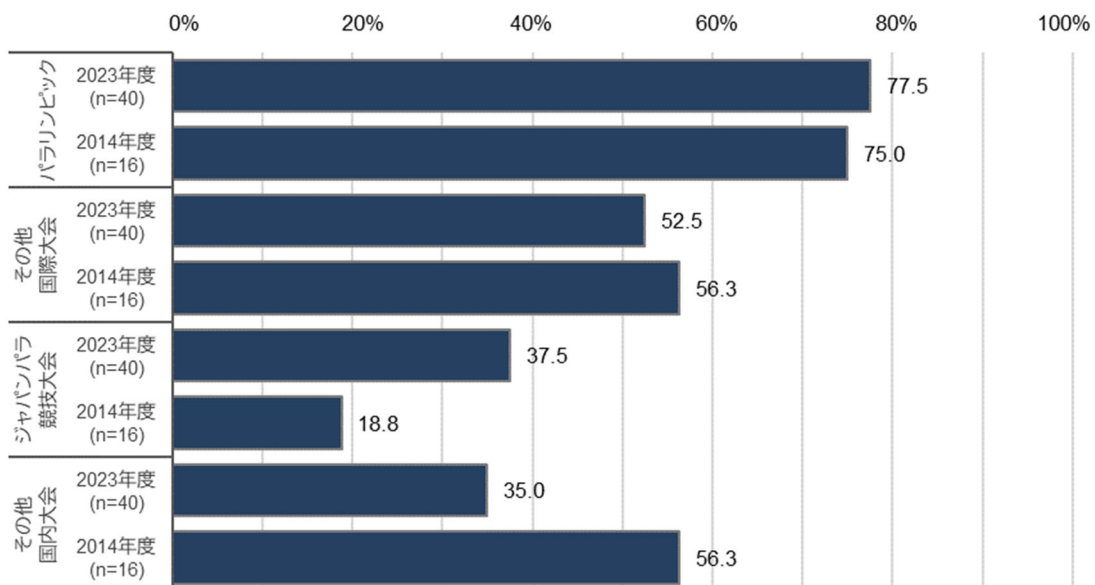
教職員の各種大会への派遣実績は図表 2-42 のとおりである。派遣した大学の割合は、2014 年度(25.8%)から、2023 年度(19.4%)となっており、若干割合が低下している。前述のように、スポーツを行っている障害学生に対する支援は体育・スポーツ系学部を有する大学において活発に行われているが、専攻を問わず全大学を対象とした本調査において、体育・スポーツ系学部のみを対象とした前回調査と比較すると、派遣実績がそれほど低下しておらず、教職員に関しては所属先の専攻を問わず在籍し活動しているものと推察される。

また、大会別の派遣状況は図表 2-43 のとおりである。前回調査と比べ、ジャパンパラ競技大会への派遣割合が増加した一方で、その他の国内大会への派遣割合が減少し、パラリンピック等の国際大会については、大きな変化はみられなかった。

図表 2-42 教職員のスポーツ大会への派遣実績の有無



図表 2-43 スポーツ大会別の派遣実績

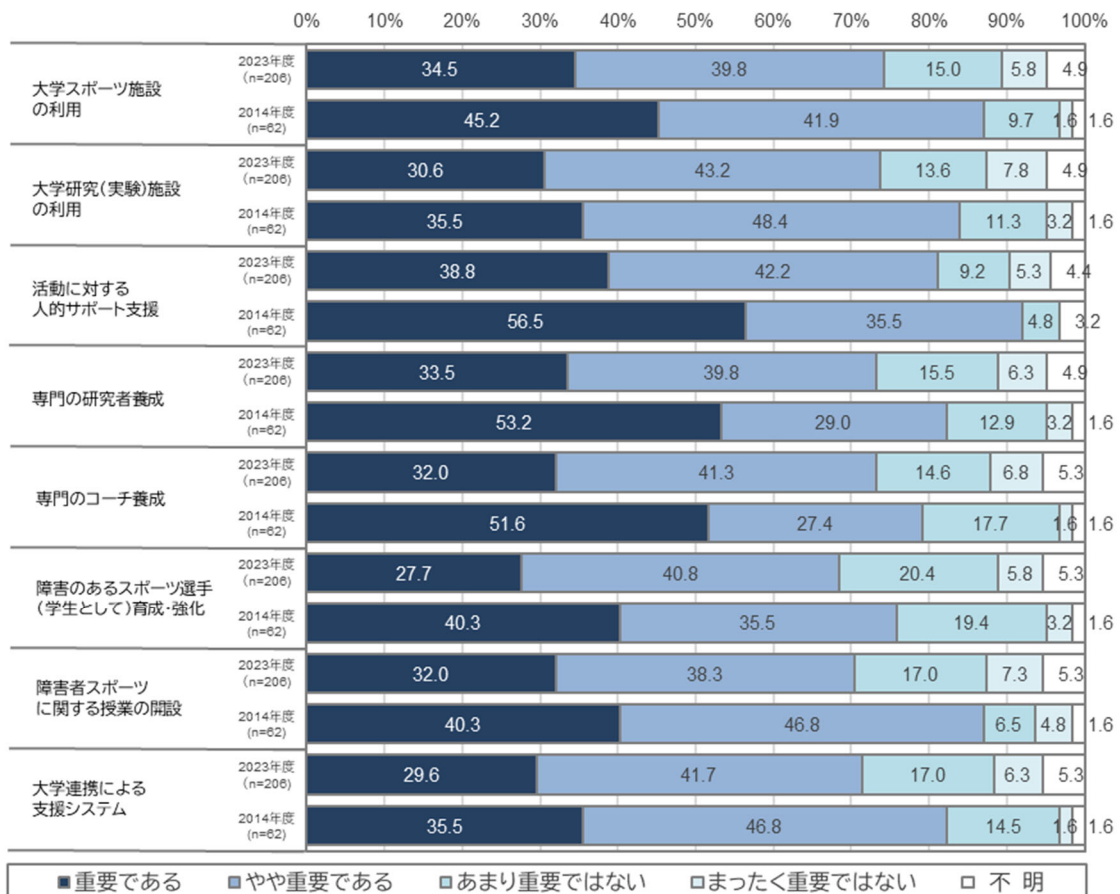


7. 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割の重要度について

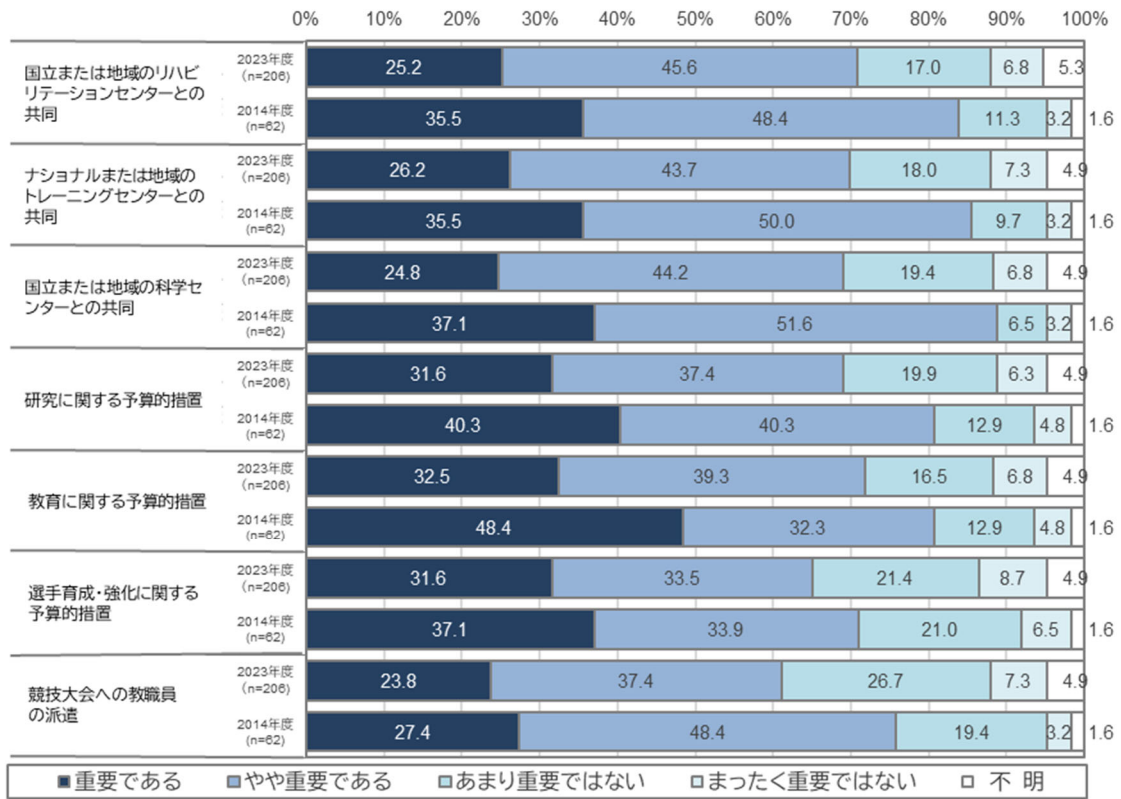
7-1. 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割の重要度

障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割の重要度は図表2-44・45 のとおりである。前回調査と比べて、15 の設問全てにおいて重要とする割合が低下していた。「重要である」の回答割合に着目すると、活動に対する人的サポート(2014 年度:56.5%/2023 年度:38.8%)、専門の研究者養成(2014 年度:53.2%/2023 年度:33.5%)、専門のコーチ養成(2014 年度:51.6%/2023 年度:32.0%)、以上 3 項目については重要度の下落が顕著であるが、これらの活動については専門的な知識やスキルを持つスタッフが必要となることから、体育・スポーツ系学部から調査対象を拡大した本調査においては相対的に重要度が下がったものと考えられる。

図表 2-44 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割の重要度 1



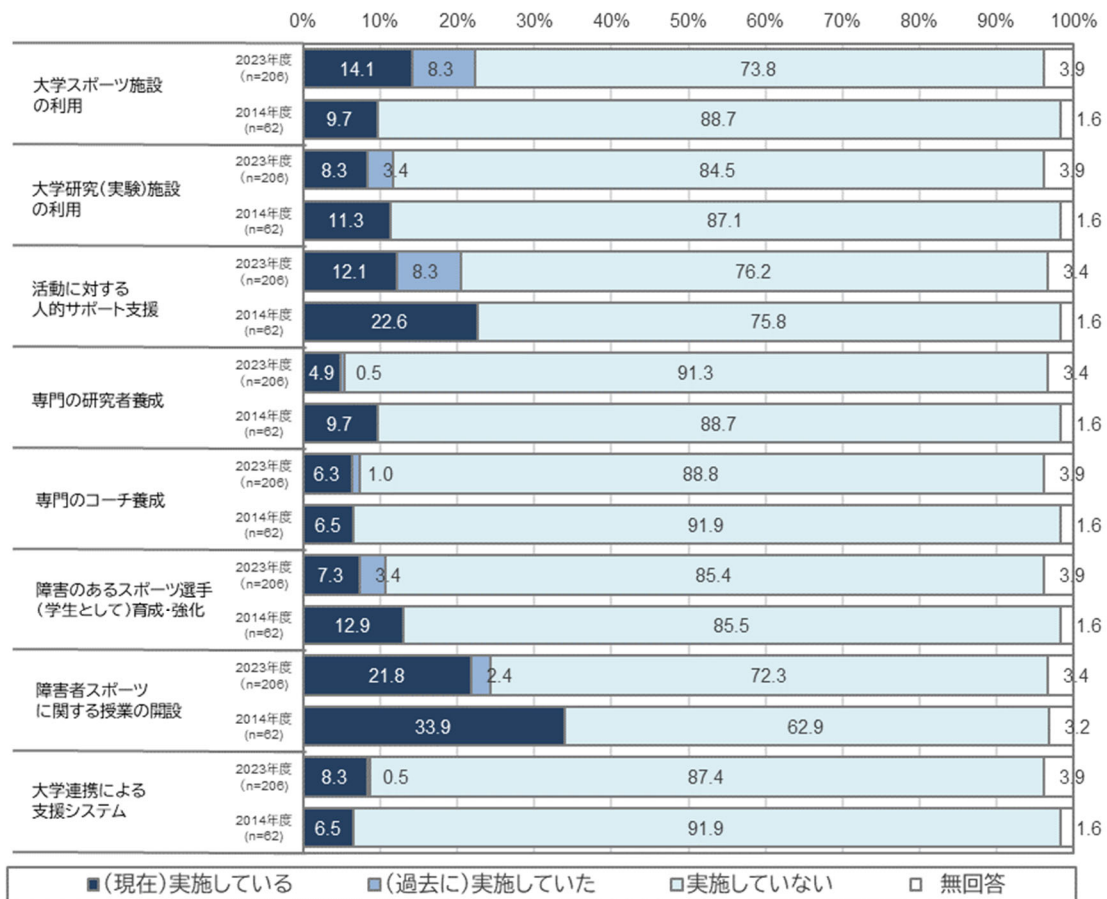
図表 2-45 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割の重要度 2



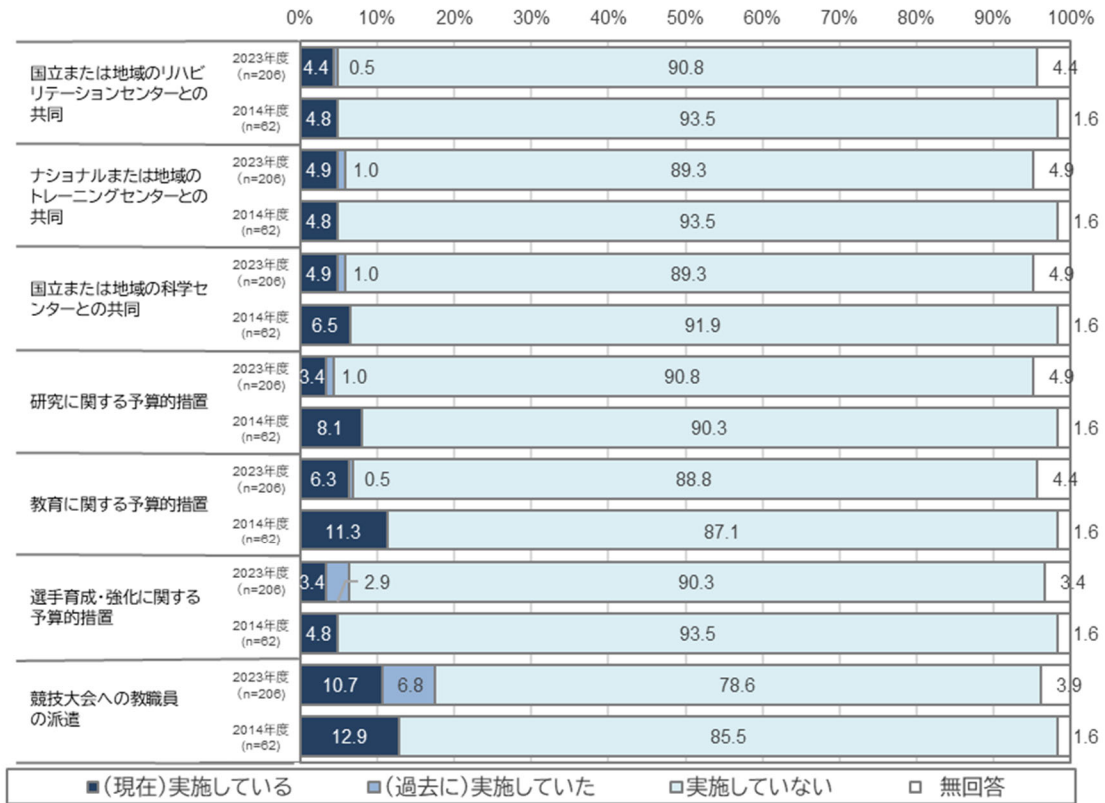
7-2. 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の取り組み状況

障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の取り組み状況は図表 2-46・47 のとおりである。活動に対する人的サポート(2014 年度:22.6%/2023 年度:12.1%)、障害者スポーツに関する授業の開設(2014 年度:33.9%/2023 年度:21.8%)等、専門的な知識やスキルを持った人材が必要となる取り組みについては実施割合が低下していた。それ以外の項目については、前回調査とほぼ同様の実施状況となっており、各種取り組みは低調となっている。また、前述の重要度の質問と重ね合わせると、各活動に関して全般的に「重要である」と考えながらも、実際には十分に実施されていない状況が明らかになった。

図表 2-46 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の取り組み状況 1



図表 2-47 障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の取り組み状況 2

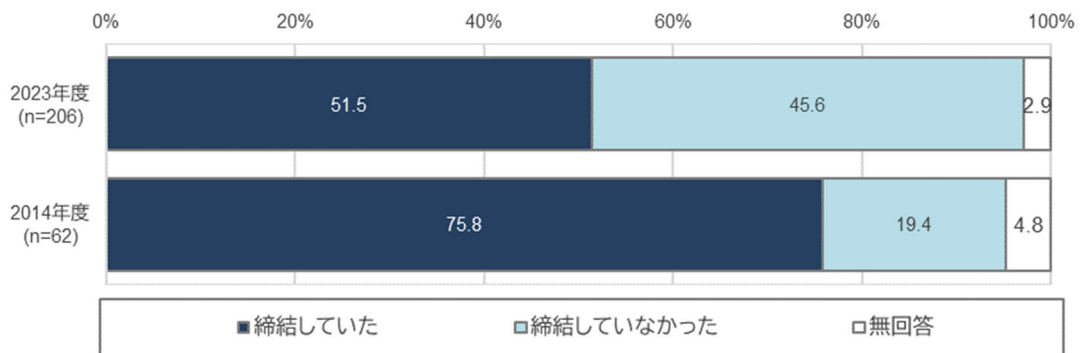


8. 大学連携協定およびオリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施について

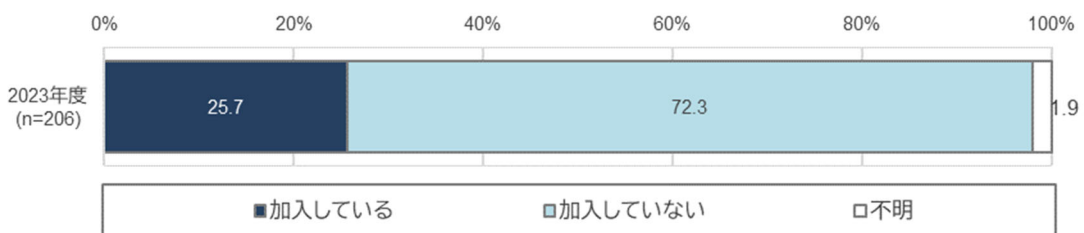
8-1. オリ・パラ大学連携協定、大学連携レガシーネットワークの加入状況

「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向けた大学連携協定」の締結および、「東京2020大学連携レガシーネットワーク」の加入状況は図表2-48・49のとおりである。大学連携協定は51.5%の大学が締結し、大学連携レガシーネットワークは25.7%の大学が加入している。

図表2-48 「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向けた大学連携協定」の締結状況



図表2-49 「東京2020大学連携レガシーネットワーク」の加入状況

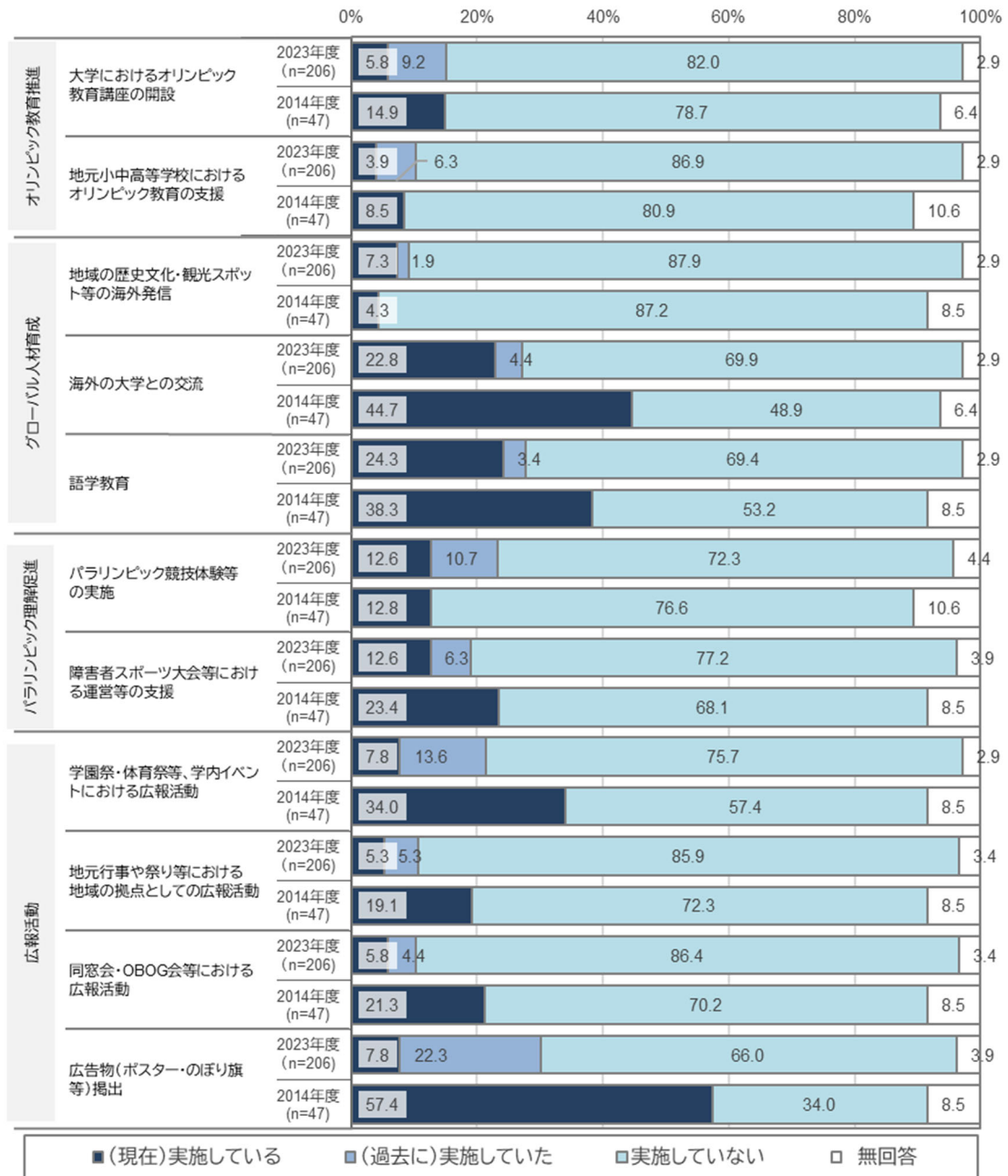


8-2. オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況

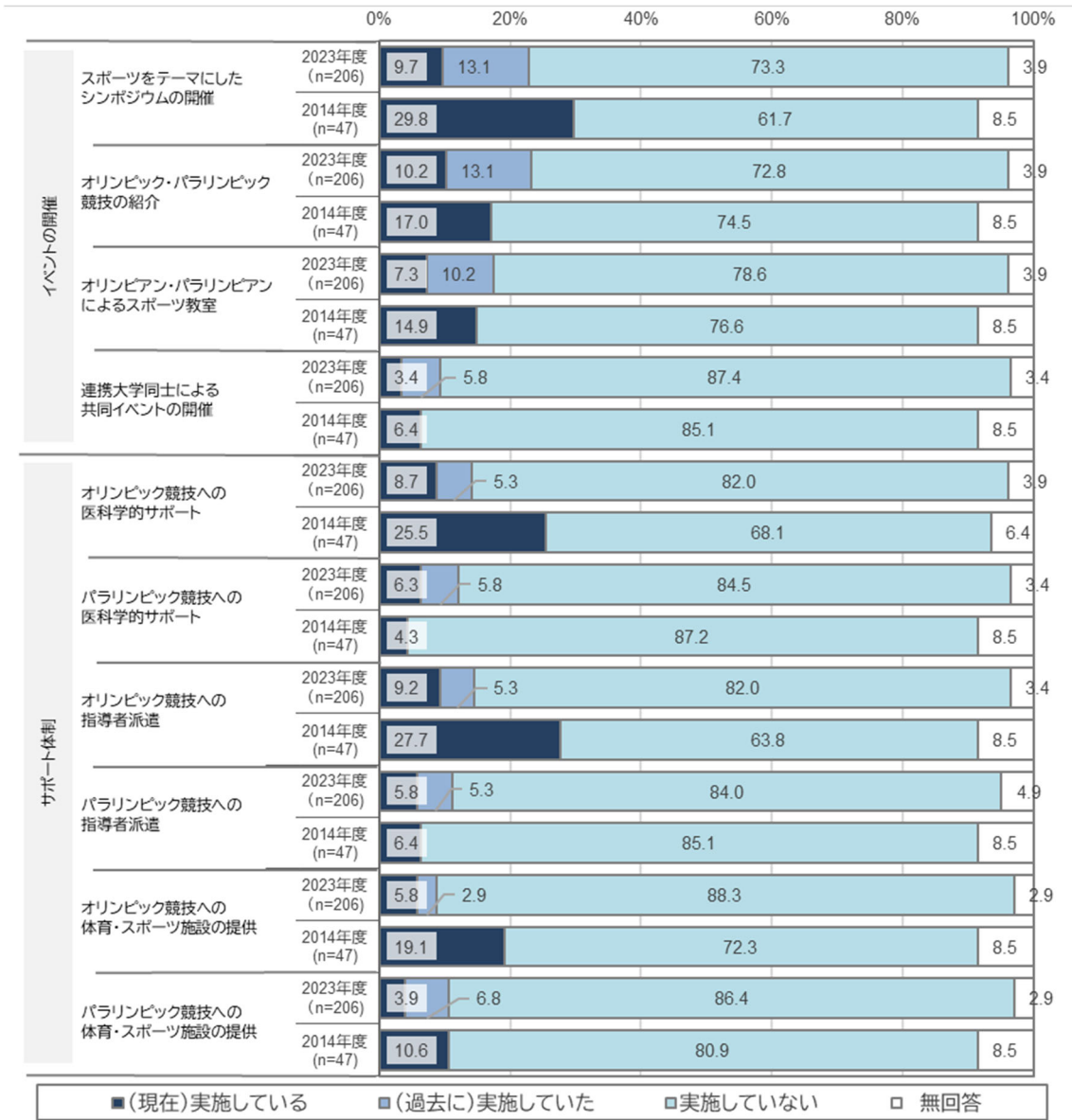
オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況は図表 2-50・51 のとおりである。全般的に実施割合が低下しているが、特に「学園祭・体育祭等、学内イベントにおける広報活動」(2014 年度:34.0%/2023 年度:7.8%)、「広告物(ポスター・のぼり旗等)の掲出」(2014 年度:57.4%/2023 年度:7.8%)となっており、オリ・パラに関する各種広報活動については、多くの大学が大会開催までを想定しており、開催後の本調査においては実施割合が低下したものと推察される。また、「海外大学との交流」が、2014 年度の 44.7%から、2023 年度は 22.8%と大幅に低下しているが、コロナウイルスの感染拡大による関連事業の縮小が影響しているのではないだろうか。

さらに競技に関する項目についてみていくと、「オリンピック競技への医科学的サポート」(2014 年度:25.5%/2023 年度:8.7%)、「オリンピック競技への指導者派遣」(2014 年度:27.7%/2023 年度:9.2%)等の実施割合が前回調査と比べて低下しているが、これらは前述のとおり、本調査が体育・スポーツ系以外の大学も対象としていることから、専門的なサポートが実施可能な大学が少数に留まったためと考えられる。

図表 2-50 オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況 1



図表 2-51 オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況 2

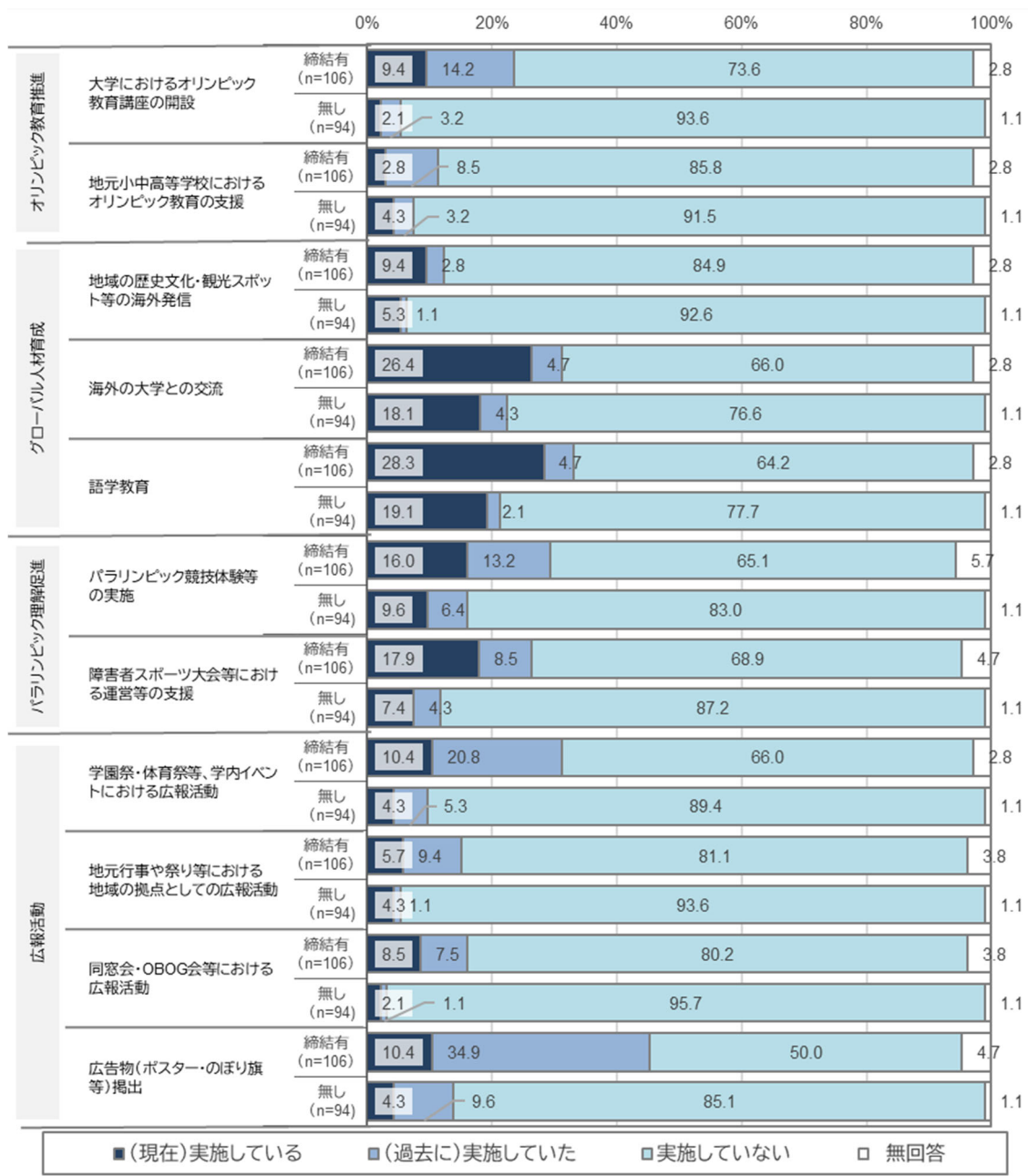


8-3. オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況(大学連携協定締結状況別)

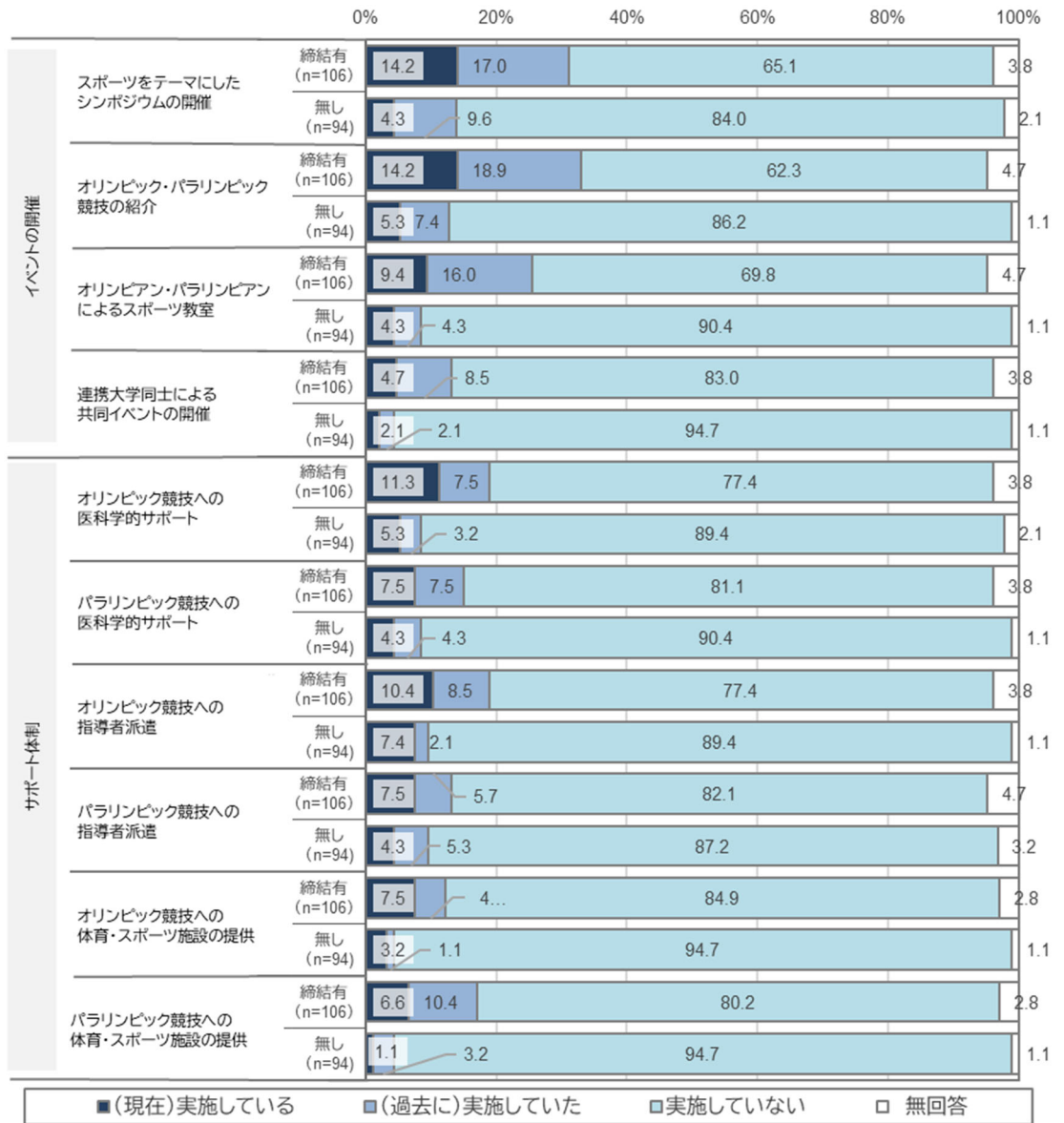
オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況について、オリ・パラ大学連携協定の締結状況別でみていくと、全項目において、現在・過去ともに連携協定を締結している大学のほうが高い実施率となっている(図表 2-52・53)。広報活動に関して、締結有の大学において、「学園祭・体育祭等、学内イベントにおける広報活動」(現在実施:10.4%/過去実施:20.8%)、「広告物(ポスター・のぼり旗等)の掲出」(現在実施:10.4%/過去実績:34.9%)等、締結していない大学と比べて、過去から現在の実施率の低下が顕著となっている。

また、現在の実施状況について、「海外の大学との交流」(締結有:26.4%/締結なし:18.1%)、「語学教育」(締結有:28.3%/締結なし:19.1%)等、「グローバル人材育成」に関わる取り組みが、連携協定を締結している大学においてより活発に実施されていることが明らかになった。さらに、「パラリンピック競技体験等の実施」(締結有:16.0%/締結なし:9.6%)、「障害者スポーツ大会等における運営等の支援」(締結有:17.9%/締結なし:7.4%)等が、上述のグローバル人材育成に関わる活動と比べ、実施割合は若干低くなっているが、連携協定を締結している大学においてより活発に実施されており、東京オリンピック・パラリンピック開催の「レガシー」の一つであると指摘できるのではないだろうか。

図表 2-52 オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況(大学連携協定締結状況別)1



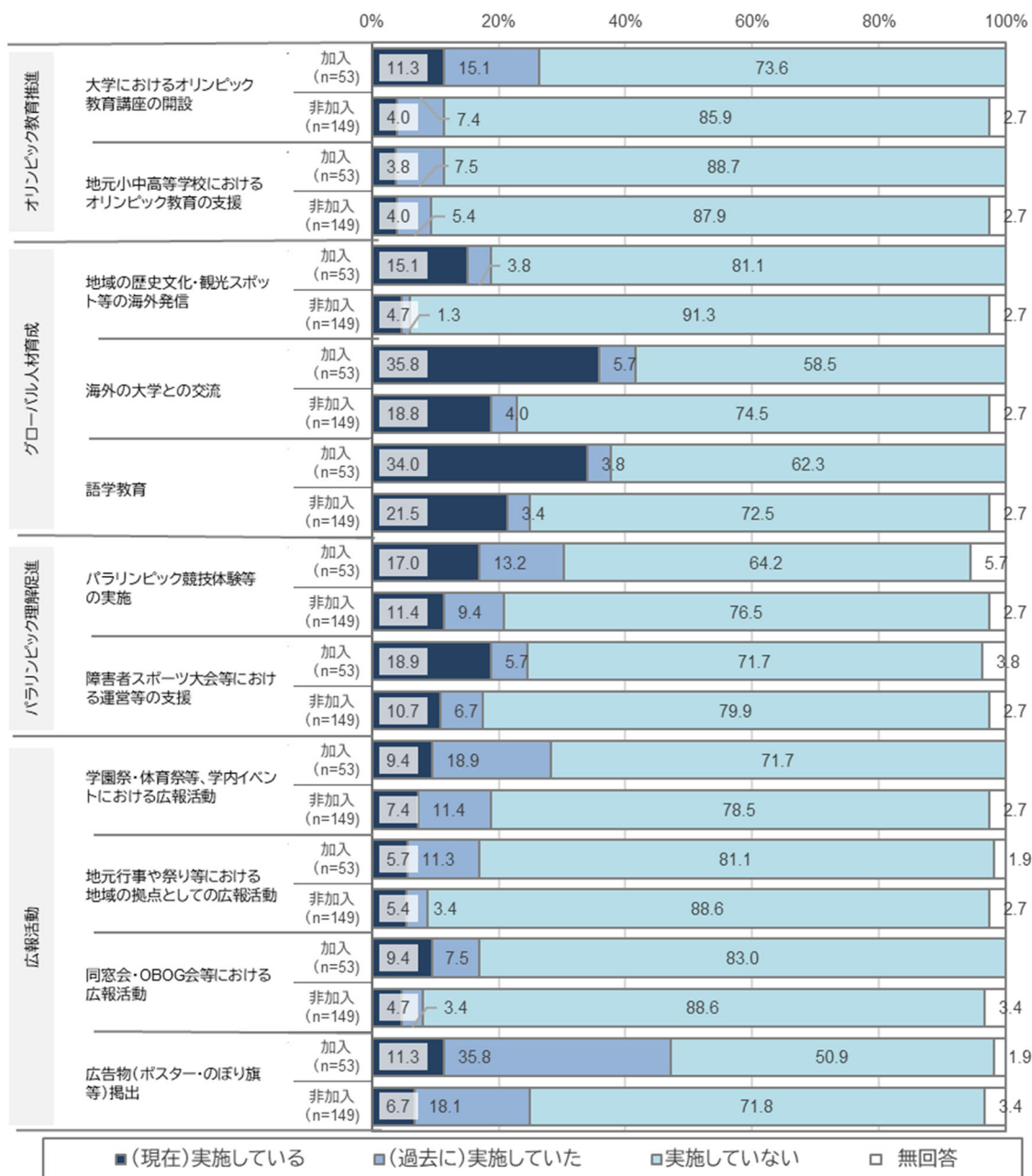
図表 2-53 オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況(大学連携協定締結状況別)2



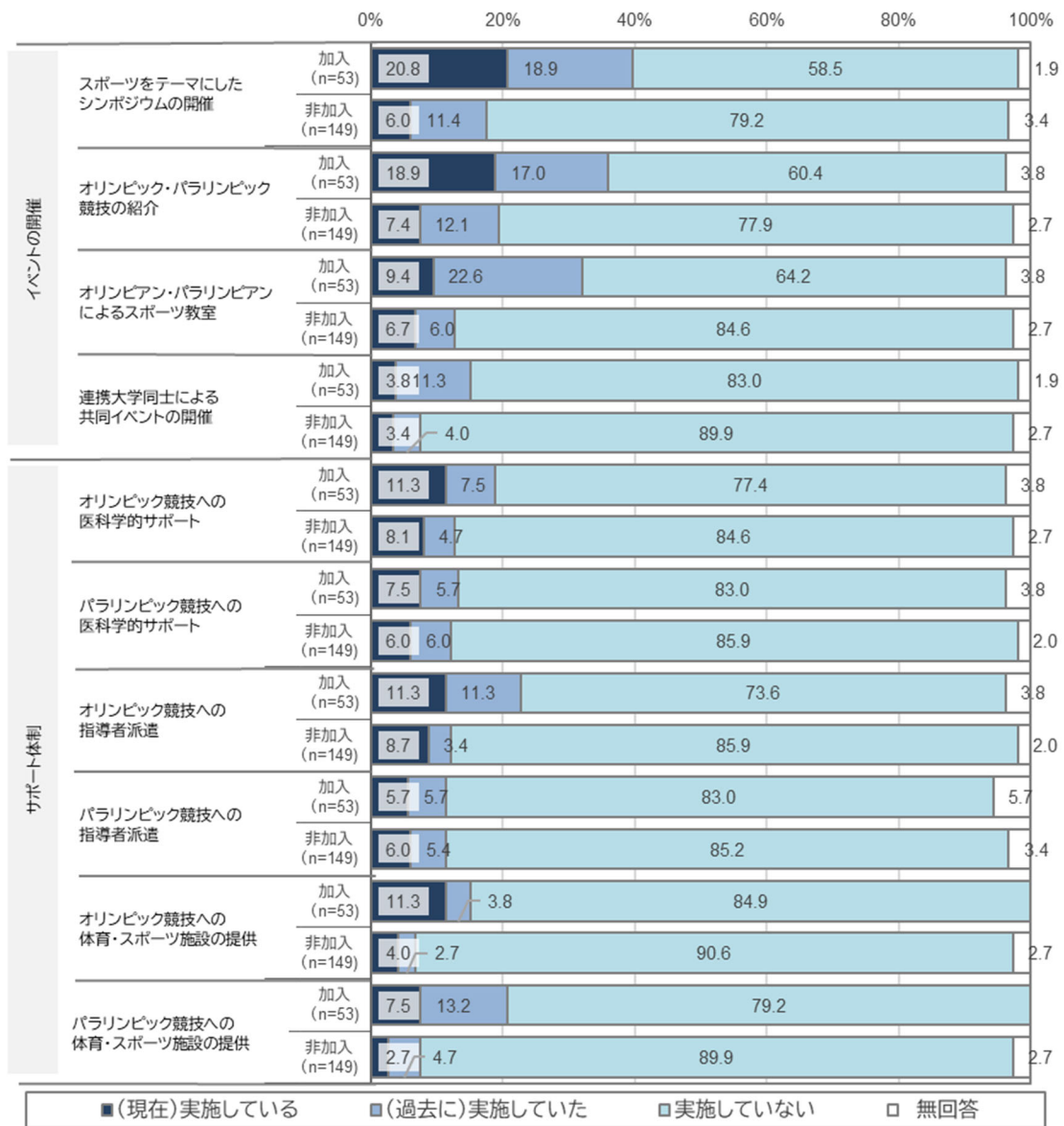
8-4. オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況(レガシーネットワーク加入状況別)

オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況について、大学連携レガシーネットワークの加入別でみていくと、前述のオリ・パラ大学連携協定と同様に、全項目において現在・過去ともにレガシーネットワークに加入している大学のほうが高い実施率となっている(図表2-54・55)。また、「海外の大学との交流」(加入:35.8%/非加入:18.8%)、「語学教育」(加入:34.0%/非加入:21.5%)等の「グローバル人材育成」や、「パラリンピック競技体験等の実施」(加入:17.0%/非加入:11.4%)、「障害者スポーツ大会等における運営等の支援」(加入:18.9%/非加入:10.7%)等の「パラリンピック理解促進」に関わる活動が、加入大学において積極的に実施されていることが明らかになった。

図表 2-54 オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況(レガシーネットワーク加入状況別)1



図表 2-55 オリンピック・パラリンピックに関わる活動の実施状況(レガシーネットワーク加入状況別)2



9. まとめ

9-1. 障害学生・障害のあるスポーツ選手の在籍状況および支援について

障害学生の在籍および障害学生支援部署の設置割合は、前回調査と比べ上昇していると同時に、各種支援が拡充してきており、徐々にではあるが障害学生が学びやすい環境整備が進んできているのではないだろうか。また、バリアフリー対応をしている運動施設が前回調査から増加しており、ソフト面のみならずハード面においても環境整備が進んできている。これらの背景には、前述のとおり、障害者差別解消法の施行等、障害児・者を取り巻く社会情勢の変化があり、2024年4月からは、合理的配慮の提供が私立大学を含む民間事業者にも義務化される（これまでは「努力義務」に留まっていた）ことから、障害学生に対する各種支援は今後も拡充されていくのではないだろうか。

障害のあるスポーツ選手については、体育・スポーツ系学部を有する大学の在籍割合がほとんどの障害種で他学部のみ設置の大学よりも高くなっており、専門的なスキルを持った教員や指導者および、充実した環境のもとで競技を行っているものと推察される。また、スポーツ推薦入試を導入している大学において、障害のあるスポーツ選手を対象としている大学は前回調査に比べて増加しており、体育・スポーツ系学部では過半数の大学が合格実績を有しており、障害のあるスポーツ選手への門戸は広がってきている。さらに入学後の金銭的支援については、スポーツ選手を支援対象としている約60%の大学が障害のあるスポーツ選手も対象としており、体育・スポーツ系学部はより高い支援実績を有している。本プロジェクトで実施しているアスリートのキャリア調査においては、近年、大学での競技経験を有するケースが増加してきており、障害のある選手の大学入学および各種支援が今後拡充していくのか否か注目される場所である。

9-2. 大学における競技力向上支援・諸活動の実施について

障害のある選手および団体への運動施設貸し出しについては、全般的に低調となっており、貸し出し意向（積極的に貸し出す・要望があれば貸し出す）についても、前回調査と比べ前向きな回答が減少していた。また、障害者スポーツ選手の競技力向上における大学の役割について、活動に対する人的サポートや専門の研究者養成・コーチ養成等、専門的な知識やスキルを持つ人材が必要となる項目については、前回調査と比べ「重要である」と回答する割合が顕著に低下していたが、全項目において60%以上の大学が重要であると回答していた。その一方で、実際の各種活動は非常に低調となっており、全般的に障害者スポーツ支援は「重要である」と考えながらも、実際には十分に実施されていない状況が明らかになった。

そして、オリンピック・パラリンピックに関わる諸活動の実施状況を大学連携協定の加盟およびレガシーネットワークの加入有無でみていくと、加盟・加入大学において語学教育や海外大学との交流等、「グローバル人材育成」に関わる活動が積極的に行われているが、他の項目については未加盟・未加入大学との大きな差はみられなかった。

以上のように障害者スポーツに関わる諸活動が不活発な要因としては、障害者スポーツを専門とする人材の不足を挙げることができる。本調査において、障害者スポーツを専門とする教員の在籍は12.1%、パラスポーツ指導員資格取得認定校は14.6%に留まっており、学内に運動施設や研究・支援環境が存在するとしても、外部団体や個人との連携を推進する人材がおらず、諸活動へとつながっていかないものと考えられる。

前節の障害学生・障害のある選手への支援状況を勘案すると、現行の大学における障害者スポーツ支援については、在学するアスリートへの支援は入試段階・入学後ともに徐々にではあるが拡充されてきている一方で、学外に対する競技力向上支援や各種活動は不活発であり、「学内での障害者スポーツ支援」が中心となっている状況が明らかになった。

(河西正博)

10. 視察報告

【視察概要】

日時:2023年9月11日(月) 9:00~11:30

回答者:日本体育大学附属高等支援学校 島崎洋二校長・平野雅嗣副校長・長澤知博教頭

聞き手:藤田紀昭(日本福祉大学スポーツ科学部)

齊藤まゆみ(筑波大学体育系)

小淵和也(公益財団法人笹川スポーツ財団)

河西正博(同志社大学スポーツ健康科学部)

大庭義隆(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)

【学校の沿革・概要】

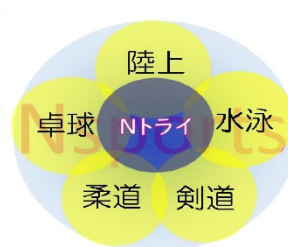
日本体育大学が創立125周年(2016年)を機に、「共生社会の実現に向けて特別支援教育を推進していく」という方針のもと、2017年に網走市から道立高等技術専門学校、市職業訓練校跡地の無償譲渡を受け知的障がい児を対象とした高等支援学校を開校した。

1学年定員40名となっており、2023年5月現在、1年生28名/2年生28名/3年生26名(自宅通学:12名/寄宿舍70名)が在学しており、都道府県別では、北海道出身者62名、道外出身者20名となっている。教育方針として、スポーツ教育、労作教育(作業学習・就労実習等)、情操教育(芸術・音楽等)が柱となっており、これらのカリキュラムを中心とした教育を行っている。また、軽度知的障害のある生徒が多数を占めており、近年、自閉傾向のある生徒の入学が増加しているとのことである。

1. 教育プログラムの特色について

週に10時間、体育授業が行われており、そのうち6時間は「Nsports」と呼ばれる取り組みを行っており、部活動と連動する形で陸上、水泳、卓球、柔道、剣道等の専門種目に取り組んでいる。

本校で行うスポーツ活動全般を「Nsports」と呼び様々なスポーツにトライしています。週6時間「Nsports Time(体育授業)」を設け授業の中で専門的にスポーツを学び・楽しみ取り組んでいます。



自分に合ったプログラムで活動できる、個性を生かせる体育授業。様々なスポーツを学び、経験することで、楽しさや喜びを実感し自信につなげることを応援します。

図1 Nsports 概要(学校要覧より転載)

関連施設としては第一体育館、第二体育館(トレーニング場・柔道場併設)、屋外グラウンド、屋内型の150m×4コースの走路が設置されている。屋内走路に関しては、週休日や夜間に市内の中学校や高校への貸し出しを行い、費用は網走市が負担している。

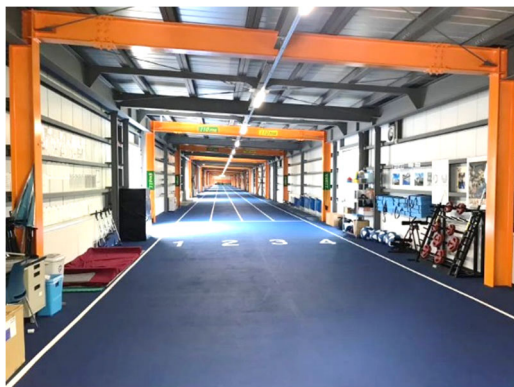


図2 屋内走路(NARS)



図3 第二体育館・柔道場

部活動は陸上競技部、水泳部、剣道部、柔道部、卓球部があり、各部が高体連に加盟しており、支部大会を勝ち上がり全道大会に出場している。また、VIRTUS スキー世界選手権で優勝する生徒が在籍するなど活発にスポーツ活動を行っている。また、運動が苦手な生徒を対象に、部活動と同様の枠組みで「Nトライ」というプログラムを開設しており、週に3回程度、バドミントン、ミニバレー、パークゴルフ、卓球、各種レクリエーション等を実施している。開校年度に実施した、前回調査(2017年)時には、陸上競技部、水泳部、卓球部の3種目のみ設置されており、現在はより活発に運動部活動が展開されている。

また、労作教育に関しては、車で5分程度の場所に約2ヘクタール(サッカーコート2面分)の農場を有しており、ブドウ、ジャガイモ、トウモロコシ、カボチャ等の栽培を行っている。

特にブドウ・トウモロコシ栽培には力を入れており、ブドウについては2020年から「日体大ワインプロジェクト」を立ち上げ、2023年から網走市内の企業と連携し、収穫したブドウからサイダーならびにジェラート、リキュールの販売を開始している。また、2024年度中にはワインをリリースし、これまでのブドウ作りに携わった卒業生の20歳のお祝いに送る予定である。今後はブドウの収穫量を増やしていき、ワインの販売を視野に入れている。また、トウモロコシについては、「空飛ぶサニーショコラプロジェクト」を進めており、物流企業やコンビニエンスストアと連携し、朝もぎのトウモロコシを空輸して都内のコンビニで販売し、新鮮さや品質が良いことから即日完売をしている。



図4 ブドウ畑の全景



図5 商品化されたブドウサイダー

また、情操教育に関しては校舎の3階ワンフロア全てが情操教育に関わる教室となっており、パソコン室、音楽室、美術室、図書室などが設置されており、正課の活動時だけでなく、休憩時間、放課後等も一部利用できる体制を整えている。

2. 進路について

卒業生の進路に関しては、就労継続 A・B といった「福祉的就労」よりも、一般就労が増加してきている。福祉的就労の人数に大きな変化はみられないが、一般就労については、2019 年度卒業生が 4 名であったが、2022 年度は 15 名となっており、年々、一般就労の割合が増加してきている(2023 年度学校要覧より)。また、労作教育に関わりのある企業や、地元・北海道内の企業を中心に就職しており、「憧れていた先輩のところ(企業)へ行く」ことを希望する生徒が一定割合いるとのことであった。

また、例年、資格取得のため福祉やスポーツ関連の専門学校へ進学する生徒が数名おり、昨年度は高校卒業資格を取得するために定時制高校へ進学した生徒がいたとのことであった。

(河西正博)

第3章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

1.チャレンジ！ユニ★スポについて

「チャレンジ！ユニ★スポ」とは、“健常者と障害者の相互理解促進”や“共生社会実現への貢献”を目的に、“静岡県内の特別支援学級がある小・中学校の児童・生徒・教員”を対象に障害者スポーツ『ボッチャ』をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、当財団が(公財)静岡県障害者スポーツ協会(以下、「県協会」)、筑波大学体育系齊藤まゆみ教授の協力や指導を得て2019年より実施している事業である。2019年度にケーススタディーとして開始し、2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で継続開催が危ぶまれたものの12の小学校を対象に実施でき、ボッチャ体験を通じた障害者への理解促進やスポーツが苦手な人に対する有用性などが確認できた。しかし、開催校にボッチャ教材がないところが多く、その後の活動継続阻害要因の一つであることも調査から明らかになった。そこで、2021年度より体験会後にボッチャ教材を1セット提供し、追跡調査を行うこととした。そして2022年度より“静岡県内の全ての小・中学校”に対象を拡大し、継続して事業を展開している。今年度は、指導員として車いすバスケットボール選手が参加するなど、障害のある人と児童生徒が直接交流するプログラムとして展開した。2019年からの5年間で約4,200名の児童・生徒・教員に体験していただいた。

「チャレンジ！ユニ★スポ」実施にあたっては、関係各位の多大な協力を得て継続開催できた。開催にあたって多岐にわたりご協力をいただいた静岡県、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして本活動にご理解ご協力いただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げたい。

2.プログラムの特徴

本事業ではボッチャ体験会に加え、①障害者スポーツに関する知識の提供(学習機会)、②スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革、③スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少、④社会的価値の醸成(学術的価値)を有するプログラムとしている。

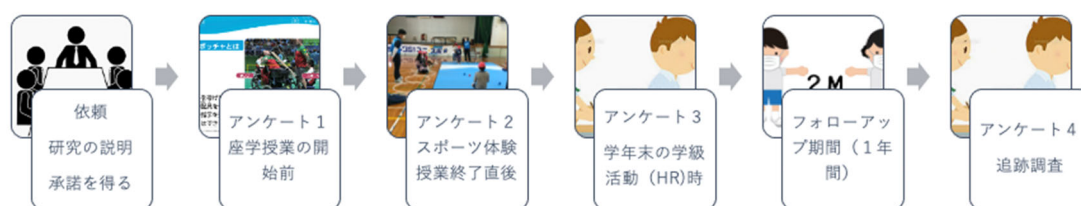
3.調査目的

今年度は、2022 年度までの調査研究において明らかとなったこととして、ユニスポ体験学習後であっても児童にとってポッチャは日常的に実施できる環境ではないこと、また「用具がない」「予算がない」「専門の知識がない」という教員のニーズがあることに着目し、「ボール提供の有無」と「その後の実施状況」について調査データをもとに検討した。次に、「学校規模」と「その後の実施状況」についても検討し、「チャレンジ！ユニ★スポ」体験学習内容が子どもたちの意識や行動変容に与える影響についての効果検証をすることとした。

4.調査方法

調査の手続きとして、各年度において、事前に参加校に説明と依頼をし、調査研究参加への承諾を得た。次に事前学習前の意識調査(アンケート 1)を実施した。事前調査実施後に各校において座学での授業を事前学習として実施した。その後ポッチャを教材とした体験学習を実施し、体験学習終了時に意識調査(アンケート 2)を行った。さらに、体験学習の数か月経過後に意識調査(アンケート3)を実施し、全体の傾向と学校別の分析とフィードバックを実施した。そして、追跡調査としての意識調査(アンケート4)を翌年度に実施した。なお、2021 年度開催校よりポッチャボール教材を体験会後に1セット提供した。

図表 3-1 調査の流れ



5.教材提供の有無による差異(調査1)

5-1.対象者

2019-2022 年度に「チャレンジ！ユニ★スポ」へ参加した 4 年生児童のうち、1 年経過後の追跡調査まで参加した 34 校の約 1,000 名を対象とした。また、教材提供のない 2019-2020 年度開催 12 校(約 300 名)と 2021-2022 年度開催 22 校(約 700 名)で比較した。

5-2.アンケート調査

アンケートは、「事前学習前(アンケート 1)」用、「体験会参加直後(アンケート 2)」用、「体験会から 2~3か月経過後(アンケート 3)」用、「1 年後(アンケート4)」用の4種類であるが、いずれも共通する調査項目を設定している(図表 3-2)。同一対象者へ期間中に4回の回答を依頼した(調査用紙は巻末資料参照)。

アンケート実施にあたっては、以下について補足説明を加えた。

- ・アンケートへの協力は強制でなく任意である。
- ・回答者コードは、外部には回答者を特定できない配慮を加えた個別識別コード設定となっており、児童自身で設定する仕組みである。記入は児童の意思を尊重するが、可能な範囲で協力して欲しい。

図表 3-2 調査項目と実施時期

質問項目	事前	直後	数か月後	1 年後
障害のある人との距離感	○	○	○	
オリンピック・パラリンピックへの興味 (注)	○			
知っている障害者スポーツ種目	○			
ボッチャの感想		○		
障害イメージ	○	○	○	○
障害者スポーツイメージ	○	○	○	○
アダプテッドの考え方	○	○	○	○
アダプテッドの実践力	○	○	○	○

○は実施項目

(注)オリンピック・パラリンピックに対する興味は、2021 年度まで「東京 2020 大会」、2022 年度より「パリ 2024 大会」として尋ねている。

- ・調査結果発表時に回答者個人を特定する情報は一切含まれない。
- ・「必ず3つ選んでください」と指示している一部の設問では、児童からの質問が想定される。例えば、「2つしか該当項目がない。全てが当てはまる。どれも当てはまらない」などである。その場合は「自分の気持ちに近い順に上から3つ選んで○を」という回答を教師に依頼した。

5-3. 事前学習

事前学習は、国際パラリンピック委員会の公認教材である「I'm POSSIBLE(アイムポッシブル)」を指定した。内容は「パラリンピックってなんだろう」と「ボッチャをやってみよう(P13までを座学で実施、P14からをチャレンジ！ユニ★スポで実施する)」の2項目で、スライド、ワークシート、動画「リオ2016パラリンピックダイジェスト(3分34秒)」と「ボッチャをやってみよう(5分10秒)」を提供し、実施を依頼した。

5-4. 結果の概要

期間中に実施した4回のアンケートから、回答者コードで紐づけられた1046組のデータを分析対象とした。得られたデータはアダプテッド・センシティブ尺度(齊藤ら,2021)を用いてスコア化したのち比較検討した。

図表 3-3 教材提供の有無と時期別の評価スコア一覧

	平均点±SD			
	事前学習前	体験直後	数ヶ月後	1年後
1：Q5_障害イメージ				
全体 (1046)	0.53±0.81	0.78±0.91	0.75±0.90	0.79±0.93
教材提供なし (334)	0.48±0.76	0.63±0.86	0.66±0.84	0.87±0.96
教材提供あり (712)	0.56±0.83	0.86±0.92	0.79±0.92	0.75±0.92
2：Q6_障害者スポーツ				
全体 (1043)	1.38±0.77	1.64±0.69	1.56±0.74	1.59±0.70
教材提供なし (334)	1.34±0.77	1.57±0.74	1.53±0.74	1.65±0.72
教材提供あり (709)	1.41±0.77	1.68±0.65	1.57±0.74	1.57±0.69
3：Q7_アダプテッドの考え方				
全体 (1043)	1.42±0.66	1.49±0.68	1.58±0.68	1.57±0.70
教材提供なし (334)	1.40±0.64	1.44±0.68	1.52±0.68	1.58±0.75
教材提供あり (709)	1.43±0.67	1.52±0.68	1.61±0.68	1.57±0.67
4：Q8_アダプテッドの実践力				
全体 (1035)	2.30±0.70	2.43±0.69	2.55±0.66	2.67±0.59
教材提供なし (331)	2.27±0.73	2.46±0.71	2.53±0.67	2.73±0.53
教材提供あり (704)	2.31±0.68	2.42±0.68	2.55±0.66	2.64±0.61

5-4-1.障害イメージ

障害者に対してどのようなイメージを持っているかを把握するために、「障害」から連想する用語として「困っている、個性的、手伝いが必要、不便なことがある、その人らしさ、リハビリ、自由に動けない、できることがある、車いす」の選択肢から 3 つを選択してもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、全体の傾向として事前学習前(0.53±0.81)に比べ体験直後(0.78±0.91)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(0.75±0.90)、1 年後(0.79±0.93)まで継続することが示された(図表 3-3)。本調査対象児童の多くは、学校内に特別支援学級があったとしても、日頃から障害者との深い交流があるわけではない。そのため身近な存在として障害をイメージする機会を持っていない(齊藤ら,2022)ことが示されている。そのことから、**チャレンジ！ユニ★スポ**は、スポーツを通して児童に「障害」とは何かを考える契機を与えたと考えられる。

次に、教材の提供の有無で比較した。教材提供の影響として数か月後と 1 年後のスコアに着目すると、数か月後では教材提供ありのほうがスコアは高いものの、1 年後にはその差はなくなっていることが示された。これは、体験直後のスコアが教材提供ありの児童において突出して高く、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験に強く影響を受けたことが推察される。その後は緩やかにスコアは下がるものの、1 年後においても事前学習前よりも有意に高く保たれていることから、体験でのインパクトが強かったとも考えられる。

5-4-2.障害者スポーツイメージ

障害者スポーツから連想するイメージについて、「楽しそう、大変そう、チャレンジしてみたい、不便、激しい、障害者のためのもの」という選択肢より 3 つを選択してもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(1.38±0.77)に比べ体験会直後(1.64±0.69)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(1.64±0.74)、1 年後(1.59±0.70)まで継続することが示された(図表 3-3)。座学だけでなく、**チャレンジ！ユニ★スポ**で実際にスポーツを通して体験することで「スポーツとしての気づき」が得られたことが、ポジティブな意識変容に影響したと考えられる。

次に、教材の提供の有無で比較した。教材提供の影響として数か月後と 1 年後のスコアに

着目したところ差は認められなかった。

5-4-3.アダプテッドの考え方

障害のある友達とスポーツをするために必要なものとして、「障害者スポーツに詳しい先生やコーチ、スポーツのルールを変えること、障害者スポーツの本や資料、障害のある友達と相談すること、障害者スポーツ専用の道具や場所、サポートすること」という選択肢より 3 つを選択してもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。自らが主体的に関わっていこうとする意識をアダプテッドの自発性と捉え、数値は自発性が高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(1.42±0.66)、体験会直後(1.49±0.68)、数か月後(1.58±0.68)、1 年後(1.57±0.70)と高くなることが示された(図表 3-3)。

スコアの詳細をみていくと、専門の道具や場所を必要としつつもサポートする意識が醸成されていくこと、その際の相談先を本や専門性を有する他者とするか、自分の中で解決していこうと行動するかで回答が分かれることも示唆された。チャレンジ！ユニ★スポは、いわゆる「出前講座」の様式であることから、「外から来る専門の先生が特別に教えてくれる機会」と捉えている児童も多く、日常的なものになっていくには、「日頃から指導してくれる学校内の先生」による授業になっていくことが望まれる。その際の障壁の一つに指摘された用具のなさについては、教材の提供の有無での比較で検討した。教材提供の影響として数か月後と1年後のスコアに着目したところ、数か月後のスコアが教材提供あり(1.61±0.68)が提供なし(1.52±0.68)よりも有意に高いことが示されたが、1 年後では差がないことが示された。全体の傾向としては緩やかな増加・維持であるが、教材提供ありの数か月後のみ高いスコアが観察された背景については、スコア数値のみでは説明ができないため、別途実施するヒアリングによる実態調査結果と合わせて考察していきたい。

5-4-4. アダプテッドの実践力

障害のある友だちとスポーツを楽しむために必要だと思うことを、体育授業での場面設定をもとに「友だちがうまくなるように練習をがんばってもらい、友だちも楽しめるようにルールを変える、あまりボールを渡さないようにしてあげる、みんなが車いすにのって車いすバスケットボールをする、無理をさせず得点係や応援で頑張ってもらい、ボールを使いやすいものに変える」という選択肢から3つを選んでもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1年後の4回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。一緒に楽しむための配慮や工夫を必要な場面で適用しようとする意識をアダプテッドの適用度と捉え、数値は適用度が高いほうから3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(2.30±0.70)、体験会直後(2.43±0.69)、数か月後(2.55±0.66)、1年後(2.67±0.59)と高くなることが示された(図表3-3)。チャレンジ！ユニ★スポ体験内容は、単にポッチャを体験させるのではなく、具体的な障害を提示しながら児童に考えさせることや審判も含めた実践などが含まれていることが意識変容の背景にあると考えられる。

次に、教材の提供の有無で比較した。教材提供の影響として数か月後と1年後のスコアに着目したところ、数か月後では差がないものの、1年後には教材提供なしのほうがスコアは高くなっていることが示された。しかしながらどちらの群においてもスコアは漸増パターンを示しており、ポッチャに限定されない多様なアダプテッドの実践力として児童の学びが継続されているものと考えられる。

これらの結果から、教材提供の有無に関わらず、一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。また、障害のある友達とスポーツをするために自ら主体的に関わっていこうとする意識の醸成や必要な場面でアダプテッドを適用しようとする意識があることも明らかとなった。また、その意識は1年後も継続していることが示された。以上のことから、チャレンジ！ユニ★スポによるユニバーサル・スポーツを教材とした体験会を軸とする教育内容は、児童生徒の意識変化に影響すると考えられた。

6. 学校規模による差異(調査2)

教材提供の有無による比較では、アダプテッド・センシティブ尺度で評価される4項目(障害イメージ、障害者スポーツイメージ、アダプテッドの考え方、アダプテッドの実践力)全てにおいて、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験前よりも体験後のほうが高い状況が継続することが示された。しかし、ポッチャ教材提供の有無が反映すると考えられる4回目調査での評価では、差が認められなかった。つまり、学校に用具があるかどうかよりも、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験において、ポッチャを体験したことが児童の意識変容の契機になったと考えられる。

そこで、教材提供を行った2021年度と2022年度の参加校を対象とし、教材の適正配置数、活用方法や学校における教育方針等との関連を検討するために、参加校の学校規模を当該学年において50名2学級以下(以下、小規模とする)とそれ以上(以下、中規模以上とする)の2群に分けて検討した。

6-1. 対象者

2021年度と2022年度に**チャレンジ！ユニ★スポ**へ参加した当時4年生児童のうち、1年経過後の追跡調査まで参加した17校の回答者コードで紐づけられた712組のデータを分析対象とした。内訳は小規模8校(n=154)、中規模以上9校(n=558)である。

6-2. 学校規模とその後の活動実施状況

学校規模とその後の活動実施状況を図表3-4に示した。小規模では8校全てにおいて、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験後もユニバーサルスポーツとしてポッチャ等の活動が実施されていた。一方で、中規模以上では、実施有が5校(n=370、66.3%)、未実施が4校(n=188、33.7%)であり、児童の3人に1人は未実施という結果であった。このことから、学校規模はその後の活動実施に影響があると考えられる。このことは、教師から提示された課題や問題点にある「1クラス3~4セット欲しい」「道具が揃わないのが課題、実施してみると児童の反応がいいので、より多くの児童が体験できるようにしたい」「道具が複数あると子どもたちも興味を示すと思う」というコメントにも反映されている。しかし、「用具がなければできな

図表 3-4 学校規模別でみたその後の活動実施状況

	実施(n=524)	未実施 (n=188)
小規模 (n=154)	8校 (n=154)	0
中規模以上 (n=558)	5校 (n=370)	4校 (n=188)

い」というだけでは現状に留まってしまうことから、**チャレンジ！ユニ★スポ**では用具を手作りする方法なども併せて提示し、「…だからできないのではなく、工夫すればできる」ということも体験的に学ばせる良い機会だと捉えていた。この点については2つの解釈があり、安全性の確保という視点でどこまで手作りで良いのかというリスクマネジメントの観点から正規の用具で実施する必要性に拘るべきというものと、手作りをする手間・時間などを考えると実施を躊躇するという教員の多忙な実態という社会的課題も背景にあることがうかがえた。

6-3. 学校規模と意識変容

教材提供の有無で児童の意識変容に差がないことから、学校規模と時期別の評価スコアを比較した(図表 3-5)。

図表 3-5 学校規模と時期別の評価スコア一覧

	平均点±SD			
	事前学習前	体験直後	数ヶ月後	1年後
1：Q5_障害イメージ				
全体 (712)	0.56±0.83	0.86±0.92	0.79±0.92	0.75±0.92
大規模 (558)	0.56±0.83	0.88±0.92	0.79±0.92	0.74±0.91
小規模 (154)	0.58±0.82	0.76±0.92	0.79±0.93	0.77±0.95
2：Q6_障害者スポーツ				
全体 (709)	1.41±0.77	1.68±0.65	1.57±0.74	1.57±0.69
大規模 (557)	1.39±0.77	1.66±0.65	1.56±0.75	1.53±0.71
小規模 (152)	1.47±0.75	1.72±0.66	1.62±0.72	1.72±0.57
3：Q7_アダプテッドの考え方				
全体 (709)	1.43±0.67	1.52±0.68	1.61±0.68	1.57±0.67
大規模 (555)	1.42±0.68	1.50±0.69	1.58±0.67	1.53±0.66
小規模 (154)	1.48±0.66	1.56±0.64	1.74±0.71	1.71±0.70
4：Q8_アダプテッドの実践力				
全体 (704)	2.31±0.68	2.42±0.68	2.55±0.66	2.64±0.61
大規模 (551)	2.32±0.67	2.39±0.68	2.53±0.67	2.63±0.63
小規模 (153)	2.28±0.70	2.52±0.64	2.63±0.59	2.69±0.53

全体傾向としては、どのスコアも事前学習前よりも1年後は高くなっていることから、学校規模に関わらず、**チャレンジ！ユニ★スポ**が児童の意識変容に影響を与えていることが示されている。1年後の調査において学校規模による有意な差が認められたのは、障害者スポーツイメージとアダプテッドの考え方であった。障害者スポーツイメージは、小規模校が1.72±0.57であるのに対し中規模以上では1.53±0.71であった。また、アダプテッドの考え方は、小規模校が1.71±0.70であるのに対し中規模以上では1.53±0.66と、いずれも小規模校のほうが、中規模以上よりも有意に高い値を示した。どちらも体験会直後は差がな

いことからその後の体験の有無が興味関心と関連していることが推察される。特に、小規模校ではその後もユニバーサルスポーツとしてポッチャをはじめとする体験活動が実施されていたのに対し、中規模以上では児童の3人に1人は未実施という結果であったことから、学校規模はその後の活動実施に影響しており、体験的に学ぶことから生じる障害者スポーツイメージやアダプテッドの考え方に差が生じたのではないだろうか。

用具の適正配置については、通常学級において1学級に1セットのみの教材では不十分であることも示された。児童数あたりの適切な教材配置数としては、授業で行う場合はクラスに3～4セット(10人あたり1セット)、レクリエーション等で随時活用されるためには、使用可能な状態で目につくところに用具が置かれていることが必要であることが現場から示された。教材や用具を揃えるという点では、地域連携や拠点形成で用具を融通し合うなどの、選択と集中スタイルが有効であろう。その場合は県協会や地域のスポーツ協会などが拠点(西浦,2024)となっていくことで計画的な配備が可能になる。

小規模で学年1クラスの場合は、カリキュラムの柔軟な運用で比較的新しいことに取り組みやすい現状も示された。これは小林(2023)の研究結果でも同様の指摘があり、小規模校のほうが実施への障害要因が少ない。

7.追跡調査

チャレンジ！ユニ★スポを開催して1年経過後の状況をつかむことを目的に、2021年に開催した4校(小規模2校、中規模以上2校)を訪問し、ご担当の先生からお話を伺った。

7-1.その後のポッチャ体験の実施状況について

多くの学校で、体験会后「機会があればまたやりたい」という児童が多かったのを受けて、学校での空き時間や昼休みを活用して、また地域と連携したイベントの場で実施されていた。但し、コロナ禍の影響や授業時間の余裕のなさから、実施回数については限られたものとなり、日常的にやれる状態には至っていない。

- ・この地域は過疎化が進んでおり、公立小中一貫教育構想を考えている。文化が違う学校が一つになるためにも交流を深めていこうという段階である。いきなり授業となるとハードルが高いので、行事から進めている(自然教室→探村交流→総合的学習の発表など)。この一環として、2小学校、1中学校で合同の地域交流会を開催した際、プログラムの一つとしてポッチャ体験コーナーを取り入れた。チャレンジ！ユニ★スポ開催小学校の5年生(体験会時4年生)と、他校5年生がポッチャ体験のお手伝いをしながら、同時に5年生同士の交流を行った。
- ・年度が変わり小学1年生の担任となった。最初は1時間席に座っているのも難しい年齢のため、教室内でポッチャを活用した。正式なルールではなく、「ポッチャ遊び」のような感じで行ったが、1年生でもわかりやすいため、意欲的に取り組めた。ルールが簡単、誰でもできるため、学年を選ばずにできる。
- ・チャレンジ！ユニ★スポ開催後、子どもたちからは「やってよかった」、「もっとやりたい」という声があり、クラスごとに時間をとってポッチャ体験を実施した。
- ・月に3回ほどある、昼休みの延長の時間「学級遊び」の時間で3~4回実施した。コロナ禍で場所がなかったため、教室内での実施となった。
- ・ポッチャボールセットをもらったこともあり、コロナ禍のため昼休みに外遊びができない日に、ポッチャを実施した。
- ・いただいたポッチャボール1セットについて、「ぜひ積極的に使ってください」と他の先生方に案内した。特別支援学級の先生は特に興味を持ってくれ、使っていたいている。
- ・ポッチャは準備もほとんど必要ないので、学校に教材があればちょっとした空き時間や雨の日の昼休み時などにやっている。
- ・2022年に職員の夏休みのレクリエーションでも活用した。20名ほどで実施したがほとんどが初めての体験であった。先生方からはポッチャは練習不要で、誰でも勝てる可能性があるため、とても楽しかった、という感想をもらった。
- ・同世代の職員に個別に声がけをして広めるようにしていると、子どもたちも「それ何?」と興

味を持ってくれた。

- ・ボッチャ以外にはその後パラスポーツは体験していない。

7-2.その後の子どもたちの変化について

ほとんどの学校が、総合学習の福祉の時間で開催したこともあり、その後パラスポーツや障害に関しての投げかけに対して多くの気づきや理解、前向きな発言や行動がみられた。

- ・4年の福祉の学習でのボッチャ体験を通してパラスポーツへの興味をとっても持ったようで、冬季の北京パラリンピックもかなり興味を持って見たように思う。
- ・東京オリパラが終わって学校側としての取り組みも少し落ち着いていた感じがする。一方、**チャレンジ！ユニ★スポ**後、パラスポーツについていろいろと自分で調べた児童はいた。
- ・北京パラ開催前に、余ったはがきでパラ選手に応援メッセージを出すことを提案したら、良いね！と自然と前のめりに取り組む子がほとんどであった。その姿を見ると、障害者スポーツへの理解、共生社会への理解や応援したいという気持ちは、1年間の福祉学習の中で、この体験をしていなければなかったと思う。
- ・意外と身近なところに障害のある方がいるということがわかり、また、お年寄り、小さな子供たちでも、できることできないことがあるという気づきがあった。例えば、おばあちゃんに優しくしよう、とか、地域で困っているお年寄りがいれば声かけようかな・・とかいう声が聞かれた。4年生にとってこれらを知ることができたことは大きい。
- ・イベントとして開催し指導員に来てもらったことは、子どもたちの印象に残り意欲も高まったと感じた。教員がやると、普段の授業の延長という感じになってしまう。**チャレンジ！ユニ★スポ**がきっかけづくりになり、その後の学びにつながった。その後の福祉の授業では、いろんな方がいるんだということがわかり、どうなったら住みやすいかを話し合っ発表を行った。この町は坂が多いからスロープが必要とか、ボタンが押せない人がいるので低めの自動販売機があるといいね、などの気づきがあった。
- ・もともと優しい子が多く、不登校の子が学校に来た時とても優しいが、より一層優しいなと感じるようになった。
- ・特別支援学級の児童との交流はもともと多くはない。特別支援学級の児童との関わりには、個人的には特に大きな変化はないように思う。
- ・普段の体育と違い、スタートラインが一緒のため取り組みやすい。運動が不得意な子など、普段の体育では認められにくい子も、認められる機会となり自己肯定感が高まる。

7-3.教材の準備・保管について

どの学校も教材が十分に揃っているとは言えず、実施にあたっては1クラスあたり3セットほどが必要という意見が多い。貸し出しのシステムの要望もあった。また教材の保管場所に

ついても、児童が使いやすい場所での保管の必要性が指摘された。

- ・イベント開催にあたり、6 セットを用意した(もともとあった:1、YMFS から:1、オリパラ関係で指定を受け購入:3、年度予算で購入:1)。
- ・合計3セットあるので学級遊びなどで使っている(学校にあった:1、廃校になった学校から:1、YMFS から:1)。
- ・クラスで1~2セットだけだと「待ち」の時間が多くなってしまうのでやりにくい。子どもたちは、たくさん投げたいので投げる機会を多くしてあげたい。
- ・道具の数と場所が揃わないと難しい。35人学級だと、3~4セット欲しい。1人1球持てる感じ。持てると嬉しいし安心できる様子である。
- ・1人1球投げたとして、1学級3セットくらいあると、使いやすい。一定の期間置いておくと、職員も子どもたちも興味(気になる)を持ってくれると思う。
- ・1クラス1セットずつあり、さらに声かけをしてくれる教員もいれば取り組みやすい。道具があっても、教員が知らなければ活用しないと思う。教員に知ってもらうことが大事。
- ・ボールの貸し出しシステムがあればありがたい。欲しい時に希望どおり、道具が借りられれば、自分たちで計画を立てて、活用できると思う。
- ・教材は、職員室の体育の備品を管理するところに保管し、担任の教員経由で貸し出ししている。子どもたちが職員室に自分で貸し出しを申し出るのは、ハードルが高いかもしれない。職員室よりは各教室にあるほうが、子どもたちも興味を持って使いやすいと思う。
- ・教材を4年生の教材室に保管したため、5年生が使えない状態だった。来年は体育館等、皆が使えるところに置くよう、体育主任と会話している。
- ・特別支援学級の教室に1セット常に置いている。申し出れば、いつでも使える。

7-4.体験機会を増やすにあたっての課題

学校で継続して実施するためには、児童数に見合った教材の確保、総合学習に加えて体育などの時間でも実施できるようにすることが挙げられた。

- ・総合学習の時間で実施したが、体育の時間ではやっていない。体育も学習指導要領に則ってやっており、カリキュラムのどこで位置づけるか?になる。総合でやるのが多いのは、逆に学校でやるとしたら総合学習の時間しかできない。学習指導要領にボッチャが、スポーツと位置づけられればやれるようになる。現在は決められたカテゴリーの中でやらないといけな
いと思っているので、体育での実施は慎重にならざるを得ない。例えば、市教委で研修会などやってくれば、授業として実施する敷居がぐっと下がると思う。
- ・授業の時間等が限られていて、自由な時間が取れない。体育の授業に組まれているわけでもなく、すでに組まれているカリキュラムもきつきつなので、もう少し余裕があれば実施できるのに、と感じている。

- ・1,000 人規模の学校ゆえ、人数の多い学校の場合は道具の数が揃わないと、継続して活用するのは難しい。
- ・教材の購入について、管理職が興味を持つと「購入してみたらどうか」ということになるが、年間の予算の中で事務員と確認し、校長・教頭に許可を得てようやく購入することになる。体育と情報関係の予算は一緒だったりするため、どの部分にどれだけ予算をさけるか、なかなか難しい。
- ・4年生では総合学習の時間で実施したため、5年生ではテーマが変わりボッチャ体験も残念ながらそれきりになってしまった。時間を取るのが難しい。

7-5. 今後の展開にあたって

まず教員が楽しさや効果を知ることが重要であり、その機会(研修など)をつくることは児童が学習する機会の増加につながる。先生がリードすれば児童はついてくる。

- ・ボッチャをやったことがない教員は多い。体験すると皆さん、その面白さや活用方法がわかる。まずは教員に知ってもらうことが大事。
- ・教員向けの研修があると良い。既存の研修会や、教職員体育大会で、道具があれば取り入れることはできるかもしれない。教員自身が楽しさをわかれば子どもたちに体験させてみたいと思うであろう。
- ・地域で実施する体育の担当の教員が集まる実技研修会があるので、そこでボッチャを紹介することで広まる可能性はあると思う。
- ・まず道具があること、そして何よりも「やるよ！」という音頭を取る人がいないと道具があっても使わないので、先生方に知ってもらうということが重要。先生が旗を振ると児童が素直についてくる。
- ・物とアイデアをパッケージにして学校に提供し教員に実施してもらうことも、選択肢としてはあるかもしれない。
- ・普段の授業を抜けて、他校の**チャレンジ！ユニ★スポ**体験会の見学に行ってやり方を学ぶというのは難しい。

8.まとめ

本調査を実施するにあたっては学校関係者の協力が不可欠であった。事前学習では、教師が配布された教材をもとに展開することから教師の教材観や扱い方も重要な要素である。1年後の追跡調査からは、継続して実施することで児童の障害イメージや障害者スポーツのポジティブイメージが醸成されることが示されたが、体育やスポーツ場面におけるアダプテッドへの意識や実践力については、差がないことも示された。**チャレンジ！ユニ★スポ**は、多くの小学校では総合的な学習の時間の福祉単元として実施されていることから、単発的な扱いにならざるを得ない。アダプテッドの意識が定着するためには年間計画に組み込まれていくことが必要(齊藤ら,2022)であり、障害者スポーツ指導員による「出前授業・出前講座」から各校の教員による「自前授業・自前体験会」が展開できるよう、教員対象の研修も同時に進めていくことが求められる。

2019年度から2021年度までの調査において、常に用具不足や予算の問題が継続に対する阻害要因として示されたことから、体験会後に当該校へ用具を提供し、その後の活用状況についても調査してきた。しかしながら、単に用具を提供するだけでは効果がなく、学校規模に応じた用具の準備が必要であることも示された。この課題に対しては、所轄する教育委員会や地域単位、もしくは県協会が拠点となって学校や福祉施設等への用具の貸し出しができるシステム構築が有効であると考えられる。その時には教育と福祉という行政の壁を越えて有機的なつながりを持つことが費用対効果の面でも有効であろう。

2019年度から継続してきた本調査からは、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。さらに、1年後の追跡調査からも児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。**チャレンジ！ユニ★スポ**開始当初は、指導者も試行錯誤でスタートしたが、教材提供を開始した2021年度になると、指導者の経験も豊富となり、体験内容も単にボッチャを体験させるのではなく、具体的な障害を提示しながら児童に考えさせる内容や審判も含めた実践などが定着してきたことも背景にあると考えられる。

本調査にご協力いただいた児童生徒の皆さん、事業の実施にご協力いただいた学校関係者ならびに、静岡県障害者スポーツ協会にお礼申し上げます。

文献

小林裕季(2023):高等学校体育教師が生徒のニーズに応じた指導実践に至るまでのプロセス—質的分析をもとに—, 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会.

西浦謙太(2024):中学校体育におけるアダプテッド・スポーツ導入の障壁について—ボッチャを用いて—, 令和5年度筑波大学体育専門学群卒業論文.

齊藤まゆみ, 澤江幸則, 齊藤仁人, 松原豊(2021):障害者スポーツ関連授業効果尺度の開発1, 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会.

齊藤まゆみ, 澤江幸則, 齊藤仁人, 松原豊(2022):ボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識に及ぼす影響.筑波大学体育系紀要,45,25-31.

(齊藤まゆみ)

第4章

障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は 2019 年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は 26 名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ 1 時間から 1 時間半程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等を説明し、同意を得た上で調査を実施した。協力者は、男性 9 名、女性 17 名で、先天性障害 15 名、中途障害 11 名、年齢は 20 歳～54 歳(平均 30.5 歳)であった。主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号 18-11 および 22-001-01)を受けて実施した。また、調査にあたっては、本プロジェクトメンバーのほか、日本福祉大学スポーツ科学部の兒玉友准教授の協力を得た。

今年度は、調査対象者 26 名中 12 名が視覚障害のある選手であり、他の肢体不自由等の選手とは異なるキャリア形成の様相がみられた。視覚障害のある選手のうち、視覚特別支援学校に在籍していた選手の多くが、競技開始や継続のきっかけとして部活動や教員との出会いを挙げていた点が非常に特徴的である。

これまでのキャリア調査において、特に普通学校において体育や運動部活動参加の困難性が垣間みられ、病院やリハビリテーションセンター等の医療職や、同様の障害のある「ロールモデル」の存在が、スポーツ開始・継続それぞれの局面で重要な役割を果たしているが、これらは「学校外」の機関、個人の働きかけによるものであった。しかしながら、本調査では、視覚障害のある複数の選手が、特別支援学校で「部活動」として水泳やゴールボールに出会い、専門的な指導スキルを持った教員のもとで競技を始めており、学齢期の取り組みの延長線上に現在のスポーツキャリアが存在しているものと考えられる。このような取り組みの背景として、昨今、特別支援学校の多くが併置(複数障害に対応する学校)となっている一方で、視覚特別支援学校の多くは単置となっており、体育や部活動において障害特性に応じた活動が展開できていることが推察される。

また、本調査においては若年の対象者が比較的多くなっているが、競技的に取り組んでいる選手の多くが、学校卒業後に一般雇用やフルタイム勤務を経ずに、直接「アスリート雇用」となっている点が特徴的である。これまでも、2013 年の東京パラリンピック招致決定後、ア

スリート雇用制度の拡大や競技団体のパラリンピアンに対する支援が拡充されてきた旨の報告をしてきたが、本調査において、東京パラ招致決定後に社会人となった選手の多くが、アスリート雇用もしくはそれに準ずる雇用形態となっており、東京パラリンピックを契機とした支援体制は現在も継続されているものと考えられる。しかしながら、現役引退後や、競技継続のターゲットとなるパラリンピック終了後のキャリア形成に対する不安の声が一部選手から聞かれ、メディア等で「パラバブル」とも指摘されるように、東京パラリンピック開催後の企業を中心とした競技団体・個人への支援縮小が懸念される場所である。以下、関連するインタビュー結果を抜粋する。

「(所属企業から)パラを目指さないのであれば、選手としての雇用はできないと言われ、アスリート雇用から一般雇用になった。」

「(所属企業が)単年契約となっており、東京パラリンピック後の雇用継続に不安があったことから、(別企業に)転職した。」

「(アスリート雇用が)パリパラリンピックまでは継続されることになっている。パリパラリンピックが一つの区切りで、その後のことは見通しも立てられていない。」

「視覚障害のある自分が、その後(アスリート雇用終了後に)就職できるのかどうか不安を持っている。」

以上のように、アスリート雇用から一般雇用への転換、アスリート雇用を維持するための転職、直近のパラリンピックまでの雇用契約等、選手個々の現役選手としてのキャリア、その後のセカンドキャリアに対する不安が散見された。パラリンピアンもしくはパラリンピックを目指す選手の多くが、いわゆる「アスリート雇用」を中心として、実質的に競技に専念できる環境が整いつつある中で、今後もこのような体制は維持されていくのであろうか。そして、「〇〇パラリンピック後のことは考えていない、わからない」という言葉が聞かれる中で、選手自身がセカンドキャリアをどのように考え、企業とどのような関係性を構築していくのであろうか。

企業を中心とした競技者に対する支援がこれからも継続、拡大していくのか、あくまでも東京パラリンピック開催に向けた一過性のものとして縮小していくのかについて、本調査のみで詳述することはできないが、本プロジェクトで実施している競技団体調査と合わせて、今後も検討していきたいと考えている。

(河西正博)

パラスポーツ選手のスポーツキャリアパターンについて

本研究プロジェクトで選手のスポーツキャリアパターンに関するインタビュー調査を始めて本年度で5年目となる。今年度までに76名の選手のインタビュー調査を終えた。その内訳は図表4-1に示すとおりである。

図表 4-1 2019～2023 年の調査対象者 76 名の属性

属性	項目	n	%
性別	男性	46	60.5
	女性	30	39.5
障害程度	重度	50	65.8
	中度	23	30.3
	軽度	3	3.9
障害種別	視覚	19	25.0
	聴覚	0	0
	肢体(脊損等)	18	23.7
	肢体(切断・欠損)	20	26.3
	肢体(脳性麻痺)	6	7.9
	肢体(その他)	13	17.1
障害発生時期	先天的障害	31	40.8
	後天的障害	45	59.2

選手のスポーツキャリアパターンは千差万別で、誰一人として同じキャリアをたどった人はいない。しかしながら、今年度までの調査結果を積み重ねる中で、障害の発生時期やスポーツを始める時期などにより、図表4-2に示すとおり、おおよそ12のスポーツキャリアパターンがあることが明らかになってきた。これらはアンケートによる量的調査ではなかなか明らかにできない点であり、多くの選手のインタビューを積み上げてきた成果の一つと言える。今回はその12のパターンについて説明する。

パラスポーツ選手のキャリアパターンは先天的障害者か後天的障害者かによって大きく2つに分かれる(A1～A6とB1～B6)。そして、それぞれはパラスポーツとしてスポーツを始

める前に、スポーツ経験がないパターン(A1、A2、B1、B2)とあるパターン(A3、A4、A5、A6、B3、B4、B5、B6)によってさらに2つに分けられる。次にパラスポーツとしてスポーツを始める前と同じスポーツをパラスポーツとして始めた人(A3、A4、B3、B4)と、違うスポーツをパラスポーツとして始めた人(A5、A6、B5、B6)の二つにカテゴライズされる。そして最後に、パラスポーツとして始めたスポーツを現在も行っている人(A1、A3、A5、B1、B3、B5)と、現在は違うスポーツを行っている人(A2、A4、A6、B2、B4、B6)に分けることができる。

もちろん、現在数種目を同時に実施している人や、現在もパラスポーツの大会と障害のない人のスポーツ大会の両方に出場している人などこのパターンに綺麗に全て収まるわけではないが、おおよそこの12のスポーツキャリアパターンに類型化することができる。

図表 4-2 パラスポーツ選手のスポーツキャリアパターン

先天的 障害者	A1		② パラスポーツ始める		現在	A1		
	A2		② パラスポーツ始める		③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A2	
	A3	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)		② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	A3	
	A4	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)		② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A4
	A5	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)		② ①と違うパラスポーツを始める		現在	A5	
	A6	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)		② ①と違うパラスポーツを始める		③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A6
後天的 障害者	B1		② パラスポーツ始める			現在	B1	
	B2		② パラスポーツ始める		③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B2	
	B3	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	障害 発生	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B3	
	B4	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)		② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B4
	B5	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)		② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B5	
	B6	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)		② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B6

A1、A2

A1 は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツとしてスポーツを始め、現在もその競技を行っている人である。今年度の調査対象者では 23-H、23-I、23-K、23-M、23-O、23-R の事例が典型的である。

A2 は先天的障害者で、いずれかの時点でパラスポーツを始め、その後他のスポーツを行うようになり現在に至っている人である。今年度の調査対象者では 23-L、23-P、23-Q、23-Y がその典型例と言える。

A3、A4

A3、A4 は先天性障害があるものの、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人であり、A3 は現在も同じスポーツ(パラスポーツ)をしている人で、A4 はその後違うパラスポーツをするようになり現在に至っている人である。今年度の調査対象では A3 の事例としては 23-F や 23-V、23-Z が挙げられる。

先天性障害が比較的軽く、一般の中学や高校などに進学しそこで部活動などでスポーツを始め障害のない人とともに試合などに出場していたが、ある時点で障害者スポーツとして同じ競技の大会にも出場するようになるのが典型的である。

A5、A6

A5、A6 は先天性障害があるが、A3、A4 と同様に、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツとは別のスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人で、A5 は現在も最初に始めたパラスポーツを実施している人、A6 はその後違うパラスポーツを実施するようになり現在に至っている人である。今年度の事例の中の 23-A、23-J は A5 の事例と言える。両事例とも大学までは他のスポーツを障害のない人とともにやっていたが、大学で他のスポーツ(パラスポーツ)に転向した事例である。

B1、B2

B1、B2 は後天的に障害を持つようになり、パラスポーツを行うようになるが、障害を持つ前は特にスポーツは実施していなかったパターンである。B1 は最初に始めたパラスポーツを現在も実施している人で B2 はその後違うスポーツを始め、現在に至っている人である。今年度の調査対象者では 23-D がその例である。

B3、B4

B3、B4 も後天的障害者である。障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後に障害発生前と同じスポーツをパラスポーツとして行うようになった人で、B3 は現在も同じスポーツをしている人、B4 はその後、違うスポーツを行うようになり、現在に至っている人である。今年度の調査対象者の中では 23-C、23-E、23-U が B3 の事例となる。また過年度の事例ではあるが障害発生前からスノーボードをやっていて、障害発生後も同じスポーツを

継続して行った事例などはここにカテゴライズされる。

B5、B6

B5、B6 は後天的障害者で、障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後は障害発生前とは違うスポーツをするようになった人で現在もそのスポーツを実施している人が B5、その後異なったスポーツを実施するようになり現在に至っている人が B6 である。本年度の調査対象者では、23-N、23-S、23-T、23-W、が B5 の事例で、23-B、23-G、23-X が B6 の事例である。

今後はこれらのスポーツキャリアパターンごとのパラスポーツ参加に関わる特徴を明らかにしていきたい。

(藤田紀昭)

※1 調査時の雇用形態を示している過去に選手雇用があった場合も含む
 ※2 現在を含めパラスポーツとして主として取り組んできたもので、現在実施している競技と異なる場合もある

■図表 4-3 キャリア調査インタビュー一覧

項目	23-A	23-B	23-C
調査年度	23	23	23
識別記号	51	52	53
生まれた年	1994	1995	1990
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	四国
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	0	13	19
障害内容	肢体	視覚	視覚
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A5	B6	B3
主実施競技 ※2	パラ陸上競技	ゴールボール	柔道
パラスポーツ開始年齢 ※3	大学2年生	14	大学3年生
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	中学と高校ハンドボール部顧問教師 大学女子ハンドボール部監督 大学陸上競技部監督	I先生(当時男子ゴールボール日本代表監督)、Eさん(当時女子ゴールボール代表監督)	町道場の先生 ゴールボールの指導者(→柔道関係者につないだ)
パラスポーツ開始場所 ※3	大学の陸上競技場	H盲学校	町道場
パラスポーツ情報提供者 ※3	ハンドボール部教師 大学の障害者スポーツ専門教員	I先生(当時男子ゴールボール日本代表監督)	ゴールボールの指導者
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3	自ら		
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	大学陸上部の本人担当コーチ	T先生(T大学附属視覚特別支援学校高等部) A選手(ゴールボール女子選手)	コーチ
パラスポーツ継続状況	担当コーチが様々な指導やケアをしてくれた。陸上部のメンバーもウォーミングアップの仕方から、試合参加方法のイロハまで教えてくれた。国際大会でメダル獲得後スランプ気味であったが現在はパリパラリンピックを目指している。	教員免許をとりたかったので、ゴールボールをしながら通えるということでR大学に進学。練習場所は国リハと附属、大学のトレジムも使った。 東京大会後、ゴールボールの代表を引退し、所属先A社からはパラを目指さないのであれば、選手としての雇用はできないと言われ、アスリート雇用から一般就労になった。	A社では半日勤務で会社が契約しているコーチが所属する高校で週5日程度練習。 A社に1年半所属後結婚を機に現居住地に転居し、B社に転職。地元の高校および大学が練習拠点。 B社は単年契約で、東京パラ後の雇用継続に不安があったため、C社に転職し、前職と同様の練習環境で競技を継続。
支援			勤務先
将来ビジョン	パリパラリンピックで有終の美を飾りたいと考えている。 2023年度で現在の仕事の任期が切れるため、その後の身の振り方を現在、監督とも相談している。 将来的には何らかの形でパラスポーツに関わり、普及などに関わりたいたいと考えている。	今は2つ目の競技として、ブラインドサッカーにチャレンジしている。 視覚障害児教育があったから、今、自分があるという思いがあるので、視覚障害児教育に何らかの形で携わりたい。	2024年のパリパラリンピック出場枠の獲得が当面の目標、パラリンピック後は一度休憩して、またやりたいと思えば復帰を、もう満足していたら現役を引退するかもしれない。 C社は現役引退後も所属可能であり、セカンドキャリアとして社業に専念するか、所属しながら柔道に関わる活動をするかは、まだ決めていない。
その他特記事項	先天的な障害がありながらハンドボールという障害のない人のスポーツでトップクラスの選手となり、そこからパラスポーツのトップ選手になるという稀有な選手と言える。	小5からアイスホッケー、中学の部活は陸上部だが並行してやっていた。見えなくなっていくことが増える中、盲学校で「スポーツができる」と感じたことが大きい。 ゴールボールで「体を張る」動きなどは、アイスホッケーの経験が生かされている。陸上部の厳しい練習経験はきついことへの慣れや基礎体力の向上につながっていると思う。東京パラリンピックの後、ブラインドサッカーを始めた。	小学校5年生から柔道を始め、高校時代はインターハイに出場。障害受傷後、受け入れてもらえる道場を探すことが難しかったが、受け入れてもらった道場の先生に理解があり、スムーズに練習に参加できた。

※3 パラスポーツとして始めた最初のスポーツに関して示している。詳しくは 177 ページ参照
 ※4 先天的障害者の場合は「なし」としている

項目	23-D	23-E	23-F
調査年度	23	23	23
識別記号	54	55	56
生まれた年	1984	1996	1988
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	5	中学生の頃	0
障害内容	視覚	視覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通	普通
スポーツキャリアパターン	B1	B3	A3
主実施競技 ※2	ゴールボール	水泳	柔道
パラスポーツ開始年齢 ※3	16	19	18
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	盲学校チームメイト、盲学校コーチ	高校水泳部の上腕欠損のM選手(同級生) 妹(当時は現役の水泳選手)	同郷の大学の先輩
パラスポーツ開始場所 ※3	盲学校の体育、部活動	父親が指導者をしているスイミングスクール	大学の柔道場
パラスポーツ情報提供者 ※3	盲学校のT先生(部活の勧誘)	高校水泳部の上腕欠損のM選手(同級生)	同郷の大学の先輩
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	チームメイト、代表選手、部活動の指導者、代表のコーチ	妹(当時は現役の水泳選手)	大学の同級生、海外の対戦相手と一緒に活動している仲間(視覚障害者)と一緒に柔道を研究している友人(視覚障害者)
パラスポーツ継続状況	大学進学後も卒業した盲学校の部活動で競技を継続。 大学1年時に日本代表合宿に参加するが、合宿を辞退し、数年間、競技からも離れた。 大学4年時にゴールボールを再開。パラリンピックを目指す。2年後の2008年、北京パラリンピック大会に出場。 大会終了後、国内の普及活動に注力するのが自分の役割と考え、引退。	パラ選手として競技を始めていきなり日本記録を出した。 2018年の春に海外遠征をして世界のトップとの差を知らされ、その後の国際大会でも勝てず、本腰をいれるようになった。 現在、週4日練習、スイムは1回、1時間半から2時間くらい。その他にウェイトトレーニングなどを行っている。	中学、高校と晴眼者相手に練習し、一般の試合に出場。視覚障害者柔道を始める際も抵抗なく取り組めた。 始めた年に日本選手権で優勝、いきなり日本一になったことで葛藤が生まれ、一時期、競技から離れる。 再開後、初の国際大会では初戦敗退。アジア大会では自分だけメダルを獲得できず、メダルへの想いが強くなった。
支援		勤務先	
将来ビジョン	パラリンピックを目指した競技継続ではなく、これからゴールボールを始める人や、競技を始めて間もない人たちのサポート役として、国内大会にも出場しながら、普及面で貢献したい。	パリパラリンピックまでは今のように頑張りたい。その後のことは未定。 将来的には水泳に何らかの形で関わりたい。指導者がパラ水泳を発信できる立場になりたい。現在地元の中学校の部活指導員として指導や大会の引率をしている。	トップアスリートとしての競技力向上が見込める限り、パラリンピックは常に目指していく。 クロスカントリースキーに取り組んでいる。柔道と異なり、接触やそれに伴う怪我がないので、長く継続できると感じている。可能であれば冬季パラリンピックにも出場してみたい。
その他特記事項	競技に復帰した時は、自身がパラリンピックに出場したい、注目されたいという気持ちはなく、自分が頑張ること、関わることで周囲の人たちが幸せになってくれることが目的になっていた。その頃は、チームメイトの存在も重要であったが、体験会に参加する子供たちの存在や反応が大きな継続理由になっていた。ゴールボールとの出会いにより自分の世界が大きく広がった。	水泳一家に生まれ、幼い頃から水に親んでいた。スイミングスクールのコーチである父親や、元選手の母親、選手の妹、母親のことを語る祖父母の影響を受け、水泳を小学校3年から本格的に始めた。障害を持つ前からのスイミングスクールを現在も拠点にできているというレアなケースである。	全盲の人にとって柔道の上達にはスキルの言語化が必要であり、自身の主観的事実と指導者の客観的事実をすり合わせてテキスト化する作業に、自らの身体を研究材料にしながら取り組んでいる。

項目	23-G	23-H	23-I
調査年度	23	23	23
識別記号	57	58	59
生まれた年	1973	1996	1988
性別	女	女	女
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	8	0	0
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通→特支	普通	普通→特支
スポーツキャリアパターン	B6	A1	A1
主実施競技 ※2	バイアスロン、クロスカントリースキー	水泳	水泳
パラスポーツ開始年齢 ※3	21	9	小学校4年生
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	盲学校時代のW先生(日本障害者スキー連盟のアドバイザー)	母親(障害者スポーツに関する情報を持っていた。プールまでの送り迎えをしてくれた)	高等部から進学する盲学校のT先生
パラスポーツ開始場所 ※3	T短期大学	S県障害者交流センターのプール	地元のスイミングクラブ
パラスポーツ情報提供者 ※3	盲学校時代のW先生(日本障害者スキー連盟のアドバイザー)	母親	高等部から進学する盲学校のT先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		母親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	ヘッドコーチAさん ガイドのKさん	パラ水泳選手のSさん	コーチ、タッパー
パラスポーツ継続状況	雪で滑れるトレーニング環境を求め仕事をやめ練習に集中したが費用が底をついた。H社にスキー部が設立され、障害者のノルディックスキー選手が複数所属したことで、トレーニング環境やサポート体制が整い、金銭的な負担をすることがなくなった。	高校に入ってから部活動で障害のない生徒と一緒に練習するようになった。自分がうまくついていけるレベルであったことも大きく、その結果タイムも伸びた。リオ大会は選手になれず、東京大会に出場。この間クラスや泳法の変更にも直面した。 現在はNTCで月、火、水、金、土が練習日、朝8時半から12時～12時半まではプールにいる。昼食後、基本的にはウェイトトレーニングをしている。	就職後はフルタイムで仕事をした後、障害者スポーツセンター等で練習していた。その後転職し、当初は午後練習していたが、のちに競技に専念できるようになる。 今年からパラリンピアンやオリリンピアンへの指導経験のある新たなコーチに師事し、タッパーは3名ほどが協力してくれており、チーム体制でシフトを組んで練習している。このようなチームメンバーがいるので競技が継続できている。
支援	勤務先	公的機関、スポンサー	勤務先
将来ビジョン	するスポーツとしては、伴走をお願いして走っている。仕事としては、主に障害者スキー連盟の理事、ノルディックスキー副委員長として普及にも携わっている。アスリート発掘だけでなく、ガイド発掘と、スタッフを増やすことである。	現在は2024年のパリパラリンピックを目指して集中している。 その後のことまではわからないが、今後ライフイベントで子供ができるなどの大きな出来事で、水泳に100%力を注ぐことができなくなる状況になった時は、引退についてシビアに考えるかもしれない。	競技の第一線は来年のパリパラリンピックで終えたい。 その後は視覚障害の子供たちが水泳を楽しむ機会をつくと同時に、選手たちの競技環境づくりを進めていきたい。 競技引退後はフルタイムで働きながら障害者の雇用促進に関わりたい。
その他特記事項	弱視となって盲学校に転校した後も、要所所で重要な他者との出会いがあり、長野パラリンピックの開催が決定したことで、バイアスロンという新たな競技環境へと進んでいった。さらに企業がパラアスリートをバックアップする体制ができたことで、金銭的な負担を気にすることなく競技に専念することができた。 引退後は結婚、出産を経て、子育てと共に日本障害者スキー連盟で裾野を広げる役割を担っている。	現在企業で週半日から1日ではあるが、会社で他の社員と一緒に働いている。自分の気に入ったブランドの会社なので引退した後も同じ会社で働きたいと考えている。	3歳から水泳を始めて、小学校4年生から障害者水泳の大会に出場するようになった。中学生までは地元のスイミングクラブで活動し、高校から地元を離れて他校の盲学校に進学し、水泳部で活動していた。

項目	23-J	23-K	23-L
調査年度	23	23	23
識別記号	60	61	62
生まれた年	1997	2002	1998
性別	女	男	女
居住地域	関東	関西	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	その他	選手雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通→特支
スポーツキャリアパターン	A5	A1	A2
主実施競技 ※2	アルペンスキー	卓球	ゴールボール
パラスポーツ開始年齢 ※3	19	小学校5年生	16
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	N大学の障害者スポーツ専門のN先生	女子日本代表選手であるA氏 パラ卓球男子日本代表のB氏	(中学校の時に卓球なども経験しているがここではゴールボールに関して) 顧問T先生 チームメイトのTさん
パラスポーツ開始場所 ※3	海外遠征(2016年、ニュージーランド)	地域の卓球クラブ	T大学附属視覚特別支援学校
パラスポーツ情報提供者 ※3	N大学の障害者スポーツ専門のN先生	日本代表選手であるA氏・B氏	顧問のT先生 チームメイトのTさん
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		両親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	・なし	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	弟、全日本チームのコーチのIさん、大学の先輩でアスレティックトレーナーなどを行っているKさん、日本代表チームのメンバー	両親	ゴールボール代表監督Iさん
パラスポーツ継続状況	8月～12月中旬までは海外遠征が断続的にある。1月に入るとワールドカップ。その後4月のシーズン終了までは国内と海外の合宿試合が複数回。 シーズン終了後は国内でNTCを利用してトレーニング。今は午後2時間のリハビリ、2時間のウェイト、1時間半の有酸素系トレーニングをしている。有酸素系はバイクを漕ぐとか、インターバル、低酸素室トレーニング。	中学校入学後、平日は毎日卓球部で活動し、土日は中学校の外部コーチから紹介されたクラブで練習。 高校進学後、平日は毎日卓球部で活動し、土日は自宅で練習。 大学進学後、平日は週に1回程度大学の卓球サークル、2回程度高校時代の外部コーチと練習をし、土日は他の車椅子選手やコーチと練習。	高等部3年の時に受験で1年間部活動を休み、大学進学後は隣接するT技術大学のゴールボールサークルにて週2回程度競技を続けていた。 2016年7月のジャパンパラで注目され、その後強化指定選手となり、T地区と都内での日本代表としての2拠点練習をしていた。
支援	公的機関、スポンサー	大学	勤務先
将来ビジョン	次のイタリアマラノでのパラリンピックに集中。そのあとのことは決まっていないが、できれば37歳(ミラノの次の次の大会)までは現役でやりたい。 現在の会社は引退後も雇用してくれる可能性があるため、アスリートの人たちに会社の商品を通して貢献できることはないかと考えている。	2028年のロサンゼルスパラリンピックの出場を最終目標、その過程で、来年のバリの可能性が出てくれば、そこを目指していきたい。 大学卒業後は仕事と卓球の両立を目指しアスリート雇用は考えていない。引退後は卓球にこだわらず障害者スポーツ認知向上や環境改善に関わりたい。	T大学大学院修了後、S社に就職(正社員)し、アスリート支援の会社方針のもと、全面的なバックアップがあり、アスリートとして2024年のパリパラリンピックを目指して競技を継続。
その他特記事項	スポーツ一家で育ち、子供の頃から様々なスポーツを経験している。中でもラグビーが専門で他のスポーツはラグビーに生かすために実施したという。 精神的不調から大きな怪我を負ったが、これもポジティブに捉え、新たな可能性を本人が感じられるようになっていく点、アスリートとしての成長の途上だと言える。	小学校5年生頃からパラ卓球を始め、中学校2年生頃から国内外の大会に出場。中学・高校と卓球部と学外のクラブで活動し、自宅練習場も拠点となっている。 大学入学後は学内の卓球サークルと、パラ卓球選手との活動を並行して行っている。大学卒業後は、仕事と競技を両立しながら2028年のロサンゼルスパラリンピックを目指していきたいと考えている。	弱視という状況で育ったが、体を動かすことに対して積極的な姿勢があり、地方から都内へと自らの意思で活動の場を広げていった。 強化指定選手に選出されたことをきっかけに、様々な経済的・社会的支援を受けることができている。

項目	23-M	23-N	23-O
調査年度	23	23	23
識別記号	63	64	65
生まれた年	2001	1990	1986
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	中学校3年生	0
障害内容	視覚	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	特支
スポーツキャリアパターン	A1	B5	A1
主実施競技 ※2	ゴールボール	車いすラグビー	ゴールボール
パラスポーツ開始年齢 ※3	16	高校3年生	16
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	国内上位	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	クラスメイトのSさん(現男子日本代表選手)	競技開始当時チームメイトであった、日本代表のW選手	学校の教員T先生
パラスポーツ開始場所 ※3	国立障害者リハビリテーションセンター	地元の車いすラグビーチーム	高校のクラブ活動(特別支援学校体育館)
パラスポーツ情報提供者 ※3	クラスメイトのSさん(現男子日本代表選手)	リハビリテーションセンターで声をかけられた選手	学校の教員T先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	ポジティブ	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	I監督(女子代表監督) K先生(国リハ担任)	所属先企業、家族	ゴールボール日本代表選手
パラスポーツ継続状況	寄宿舎生活だったので体育館の使用が容易であった。朝食前後での朝練、昼休みもゴールボールの自主練習、放課後は部活や国リハで練習、授業以外の全ての空き時間はゴールボールに費やしていた。 日本選手権初出場の時から、パワーがある代表合宿に声をかけられ、上を目指して、世界と戦っていこうと思った。	現在は週に3~4日程度チーム練習をし、それ以外の日は自宅でストレッチやトレーニング。 練習は複数チームの合同練習はパラアリーナで行っており、移動に不都合はないが、平日夜のチーム練習は行けないこともある。 国内大会は年3~4回あり、それ以外に各チーム主催のオープン大会が年3回程度実施されている。	入部して3か月で当時の日本代表と練習試合を行った。1点も取れずに負けて、日本代表の強さに衝撃を受けた。自分も代表選手のように速いボールを投げたい、強いボールを投げたいという思いが大きくなり、ゴールボールにのめりこんでいった。 継続できたのは周囲のサポートがあったから。ゴールボールがあったから、現在の仕事にも就けている。
支援	勤務先	勤務先	
将来ビジョン	H社に所属し、パラアスリートが業務と両立して世界を目指すという部署で業務と競技を両立して世界を目指す。	チームの日本選手権出場が第一目標。個人としては強化指定選手への復帰を目指している。 何歳までプレーするという具体的な目標はないが、生涯スポーツとして体力づくりを兼ねてラグビーを続けていきたい。	いつまで現役が続けられるかわからないが、パリパラリンピックに出場することが目標。 引退後も、現在の所属先で勤務を続け、若い選手の指導やサポート、育成に関わってきたい。 プレーヤーとしての経験の還元などに加えて、マッサージなどで選手の身体的ケアにも貢献したい。
その他特記事項	見えないことで劣等感を抱き、スポーツとは無縁だった幼少期から、盲学校で自分以外にも見えない人がいること、見えなくても積極的に動くことができたと気づいた。 ゴールボールを始めたことで、スポーツや運動が楽しいと思えるようになり、それに伴って性格も積極的に自分の意思で動くようになった。	中学校3年生の体育祭の時の事故で頸髄を損傷し、3か月入院後復学し、卒業後約1年間リハビリ入院をした。 障害受傷後、リハビリテーションセンターで選手から声をかけられて車いすラグビーを始めた。	仕事をしながらゴールボールを続けたい思いが強く、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の資格を全て取得して、所属している障害者スポーツ選手雇用センターと民間保険会社では現在も講演活動や体験会、ヘルスキーパーとしてのマッサージ業務を行っている。いずれも引退後を見越し、自分が社会に貢献できる方策を常々考えている。

項目	23-P	23-Q	23-R
調査年度	23	23	23
識別記号	66	67	68
生まれた年	2001	2003	2003
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分 ※1	一般雇用	その他	その他
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支→普通	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A2	A2	A1
主実施競技 ※2	自転車(トライシクル)	ボッチャ	水泳
パラスポーツ開始年齢 ※3	高校1年生	15	11
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	(最初経験したスポーツは水泳だが、ここでは自転車について) 現在のナショナルチームの監督	(最初経験したスポーツは水泳(療育として)だが、ここではボッチャについて) ボッチャ協会のスタッフ	様々なパラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会のMさん、 送迎や様々なサポートをしてくれた母親
パラスポーツ開始場所 ※3	選手発掘事業 K陸上競技場～サイクルスポーツセンター	県立の障害者スポーツ体育館	Oスイミングスクール
パラスポーツ情報提供者 ※3	県障害者スポーツ協会のNさん	ボッチャ協会のスタッフ	様々なパラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会のMさん
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3		母親	家族
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	ナショナルチームの監督やコーチまた チームの仲間 本人の雇用者としての母親		障害の特性に応じた指導をしてくれる コーチおよびトレーナー、練習場所への送迎をしてくれる家族
パラスポーツ継続状況	合宿中は午前中自転車練習、午後は自転車練習とウェイトトレーニング、合宿がない時は午前中練習、午後1時から6時半まで仕事、その後再度練習するような生活。週6日練習している。	中学校の時にパラスポーツ体験会でボッチャを体験。その頃、県にボッチャ協会ができ、声をかけてもらったのをきっかけに、ボッチャを始めた。 高校生になり、県立の障害者スポーツ体育館ができ、高校1年からちゃんと練習を始めた。	小学校6年生の時、障害者の水泳クラブチームに入会。当初は週1回程度練習に参加。 中学生からは、週2回程度、高校生では週5回程度練習。クラブにはコーチが在籍しており、専門的な指導を受けることができた。 現在、大学に在籍し、週6回練習を行っている。大学にプールがないため、県立プールとスポーツクラブを利用。
支援	公的機関		
将来ビジョン	今現在は、2028年のロサンゼルスパラリンピックには出場したいと考えている。その後のことはあまり考えていない。それよりも今は目先のパリパラリンピックのことを一番に考えている。	現在、社会福祉士の資格取得を目指している。 将来は障害児の就学や就職支援に携わりたい。 ボッチャは大会でいい成績を残したいというようなのではなく、趣味として続けていきたい。	パリパラリンピックに出場しメダル獲得を目指す。その次のロス2028パラリンピックも視野にいれている。 愛知県で開催予定の2026アジアパラ競技大会にも出場したい。
その他特記事項	母親が経営する会社に勤務しており、その点で競技継続に関して職場の理解も得やすいし経済的な不安も解消されている。 特別支援学校でもっといろいろな競技が体験できる環境があると自分のような状況の人もスポーツに入りやすいと考えている。	障害のある普通の青年がやりたい仕事を 目指して勉強し、趣味としてスポーツを 続けているという姿が非常に頼もしく、 好ましく感じた。	様々なパラスポーツを体験することにより、自分に合った競技を選択することができた。しかし、小学校5年生までは体育の授業以外でパラスポーツに触れる機会はなく、情報もなかった。幼少期からパラスポーツに触れ、体験できる機会があればもっと早くパラスポーツを始めたいと考えている。

項目	23-S	23-T	23-U
調査年度	23	23	23
識別記号	69	70	71
生まれた年	1991	2000	2000
性別	男	女	女
居住地域	関東	東海	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	10	18	小学校5年生
障害内容	視覚	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン	B5	B5	B3
主実施競技 ※2	ゴールボール	卓球	卓球
パラスポーツ開始年齢 ※3	23	21	中学校3年生
主実施競技の競技レベル ※2	国際入賞	全国出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	国立障害者リハビリテーションセンターのゴールボール部のメンバー	陸上クラブの監督であったM先生、義理の兄	パラ卓球女子日本代表B選手、家族
パラスポーツ開始場所 ※3	国立障害者リハビリテーションセンター	知人の職場の卓球クラブ	アスリート発掘プログラム(パラ卓球)
パラスポーツ情報提供者 ※3	国立障害者リハビリテーションセンター		
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ		ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	東京パラリンピック後、会社に残ることを勧めてくれた今の上司。 親(親に迷惑をかけた分頑張っている姿を見せてお返しをしたい。そのことがモチベーションになっている)	一緒に卓球をする役所のメンバー	コーチ、所属先企業
パラスポーツ継続状況	2017年、国リハを卒業と同時に現在の会社に選手雇用(正社員)として入社。東京パラリンピックが終わり、引退したが上司のアドバイスもあり、会社には残った。引退後、育成コーチを1年間やった後、現役に復帰した。 合宿中は午前中練習、午後フィジカルトレーニングか練習、合宿がない時は午前中にNTCイーストでフィジカル、午後練習がある時は強化拠点施設で練習。	車椅子になってから卓球を始めたので、それが生活リズムをつくっている。仕事が終わって卓球をすることが生活リズムなので、それがなくて生活が崩れてしまう。 卓球を継続するにあたって、職場の理解があること、一緒に卓球をする仲間の理解があることが大きい。	高校では卓球部に入らず、パラリンピック卓球に専念、大学では卓球部に入り他の部員と練習した。現在はパーソナルコーチのもとでほぼ毎日練習をしており、1日2時間～3時間程度、マンツーマンの指導を受けて、さらに3時間程度、コーチの指導している他の選手たちとともにグループで練習を行っている。
支援			勤務先
将来ビジョン	選手としてはロサンゼルスパラリンピックまではやりたいと考えている。 最終的には代表チームの監督をやりたいと考えている。いつのことになるか見通しがあるわけではない。	日本代表として国際大会に出場すること。その次は国際大会でメダルが取れる選手に、ロールモデルは同じクラスのCさん。昨年の全日本パラ卓球選手権大会で対戦し、オーラを感じるとともに憧れでもあり、そして勝ちたいという競技へのモチベーションにもつながっている。	直近の目標は、10月末に開催されるアジアパラ大会での優勝。来年のパリパラリンピックについては、ダブルスでの出場を目指している。 何歳頃まで現役を続けられるかわからないが、今のところは2028年のロサンゼルスパラリンピックまでは競技を続けたいと思っている。
その他特記事項	専門学校に入学、就職するが、視覚障害の壁に当たり、4年間に在籍した後、国リハに入学した。国リハに入ったことが転機となり、視覚障害を受け入れ、前向きな気持ちになった。	卓球を通じた仲間との出会い、さらには初級障がい者スポーツ指導員の資格も取得することになる。卓球が生活のリズムをつくっていると云えるほど、競技環境、職場、日常生活が充実しており、日本代表として国際大会の出場、さらにはメダリストを目指している。	障害受傷後、中学校時代に日本代表選手との出会いでパラ卓球の世界を知り、その後大会等に出場するようになった。

項目	23-V	23-W	23-X
調査年度	23	23	23
識別記号	72	73	74
生まれた年	2000	1970	1969
性別	男	女	男
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分 ※1	選手雇用	その他	一般雇用
障害発生年齢	0	25	34
障害内容	肢体	視覚	肢体
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン	A3	B5	B6
主実施競技 ※2	卓球	サウンドテーブルテニス	車いすカーリング
パラスポーツ開始年齢 ※3	12	38	40
主実施競技の競技レベル ※2	国内上位	国内上位	国際出場
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	お互い本音で語り合える幼少期からの友達、障害をマイナスに捉えずプラスの方向に考えることを教えてくれた祖父、一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者	サウンドテーブルテニスに最初に参加した時の審判員(指導員)の方 S市の点字教室で視覚障害者協会の行事に誘ってくれたIさん	車いすバス、スキーをやっていた車椅子メーカーの方(最初の競技車いすバスケットに関して)
パラスポーツ開始場所 ※3	中学校の体育館	T市内の身体障害者福祉センターの体育館	K市の一般体育館(バスケット用車椅子が当時から10台くらい置いてあった)
パラスポーツ情報提供者 ※3	一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者		車いすバス、スキーをやっていた車椅子メーカーの方(最初の競技車いすバスケットに関して)
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3			
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	ライバルでもある同じクラスの選手、落ち込んだ時などに相談に乗ってくれる両親、障害に応じた指導をしてくれるコーチ	一緒にプレーしている視覚障害の仲間 S市を中心に応援してくれるボランティア SSピンポンに関しては、協会の会長Mさん	地元でカーリングホールがあること。健常者と一緒に試合ができること。選手権やパラリンピックといった目標の一つ一つが大きな動機付け。スポンサーとして経済的支援をしている企業。
パラスポーツ継続状況	大学4年生で出場した全日本パラ卓球選手権大会後に行われた選考会を経て、次世代育成候補選手に選出。大学卒業後はT社に就職。クラブチームに所属し、日本代表を目指している。一般の卓球大会をはじめ、多くの卓球大会に出場し試合経験を積むことにも力を入れている。	障害発生後、各種制度の中でサウンドテーブルテニスの情報を収集し、自ら仲間を増やしたり、卓球台の購入を要望したりするなどしてプレーの機会が徐々に増えた。2015年にSSピンポンという競技を始めた。これはSTTTのルールを修正したもので、視覚障害のない人も一緒にプレーすることが前提。聴覚障害があっても参加可能。晴眼者のペアでのダブルスも可能。現在、この競技の普及の中心的人物である。	2007年1月にチームをつくり、翌年に初めて日本選手権に出場して2位。2012年に新チームを立ち上げ、2014年秋に世界選手権に出場。2016年、2022年は日本で優勝してフィンランドの世界選手権に出場。現在、フレックス制で勤務。カーリングは週に1回～2回の練習、現在車いすバスケットボールを有酸素運動のトレーニングとしてやっている。
支援	勤務先		スポンサー
将来ビジョン	強化指定選手の枠を獲得し、国際大会に出場できる選手になること。	サウンドテーブルテニスでは全国優勝。SSピンポンを普及させたい。今後はSSピンポンに関してはスポーツ推進委員と連携して広めていきたい。学校で運動はしたいのだけれど苦手だったりする子供たちのためのレクリエーション的な部活動に入れてもらえたら良いと思う。そのため動きかけをやりたい。	車いすカーリングのチームはどこもメンバーが集まらずに苦労しているが、所属チームは若い選手を含めて5人揃っている。札幌パラリンピックの招致がなくなった今、選手としてどこまで競技カーリングがやれるかわからないが、世代交代していく中で貢献したい。競技の一線は退いたとしてもエンジョイカーリングをやっていると思う。
その他特記事項	SNSを使って、日頃の練習のことなどの配信を始めたところ、フォロワーが徐々に増えている。自分を応援してくれる人がいることがモチベーションアップにつながっている。	新しいスポーツSSピンポンを開発し、障害のない人とともにスポーツを楽しむだけでなく、一緒にスポーツを楽しむ仲間として視覚障害によりできない部分をサポートしてもらうなど、スポーツを通した「共生社会」の実現を実践していると言える。	障害を持つ前にラグビーをしており、そこで培われた精神力や体力が現在に好影響を与えている。K市はある意味カーリングの町で、有名チームの本拠地でもある。町全体がカーリングに関心を持って応援しており、行政や企業、大学などが車いすチームも同じように応援・支援してくれている。

項目	23-Y	23-Z
調査年度	23	23
識別記号	75	76
生まれた年	1998	1991
性別	女	男
居住地域	北海道	東海
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0
障害内容	肢体	肢体
障害程度	重度	中度
学校種別	普通→特支	普通
スポーツキャリアパターン	A2	A3
主実施競技 ※2	車いすカーリング	卓球
パラスポーツ開始年齢 ※3	中学校入学前後	24
主実施競技の競技レベル ※2	国際出場	国内上位
パラスポーツ開始時の重要な他者 ※3	(最初の競技はチェアスキーだがここではカーリングに関して)カーリングに誘ってくれた、チェアスキーを教えてくれた人。送り迎えなどしてくれた両親	障害者卓球関係者
パラスポーツ開始場所 ※3	T町にあった旧カーリング場	障害者卓球大会(日本肢体不自由者卓球協会主催のジャパンオープン)
パラスポーツ情報提供者 ※3	近隣の車いす利用者	障害者卓球関係者
パラスポーツ開始場所へのアクセス ※3	両親	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	カーリングチームメンバー(パラリンピック出場という目標)	中学校の時の卓球部のメンバー、他校のライバル、高校の先輩 大学卓球部のOB会会長、大学クラブのメンバーや他大学の選手 障害者卓球の役員のYさん
パラスポーツ継続状況	中学生で日本選手権、高校2年生で世界大会に出場。高校卒業後2年間専門学校に通い、様々な資格を取得。その後、地元医療機関からT町役場に転職。専門学校在学中に車の免許を取り移動の制約がなくなる。現在、週2～3回練習するが、リーグ戦中は週4回の時もある。	現在はローカルな大会を含めると月に1回くらい試合に出場している。ほとんどは健常者の大会。 以前は週3回程度コンスタントに練習していたが、今は仕事が忙しいこともあり、週1回程度、試合前に2回か3回無理して練習。ほとんど障害のない人とやっている。
支援	公的機関	・なし
将来ビジョン	続けられるうちはカーリングを続けたい。札幌パラリンピックに出場するという夢もあったが大大会開催が難しい状況で、どこまで自分が続けられるかはわからない。できれば今よりもうまい選手になりたい。	今後も卓球を続けていく気持ちはあるが、トップ選手との差は歴然としていて、そこまでは行きつかない気がしている。自分の目標を設定してやっていきたい。今年の全国障害者スポーツ大会に出場し、非常に良い体験ができた。それまで断り続けていた県の障害者卓球協会役員の依頼を受けることにした。
その他特記事項	まずはカーリング場があったこと、スキーのような恐怖感もないこと、チームメンバーに温かく迎え入れられたことなどからカーリングを始めることができ、また、継続することができている。札幌でのパラリンピック開催が怪しくなってきたことから、ややこの先の目標の掲げ方が定まっていなかった印象を受けた。	幼稚園、小中高校、大学と一般の学校に通学し、中学校の部活で卓球を始めた。障害者の大会に出るという認識は大学卒業までなかった。高校2年で一旦卓球から離れるが、大学に入って再開。その後障害者手帳を取得し、障害者卓球大会に出場したが自分より障害の重い選手に負け衝撃を受ける。全国障害者スポーツ大会で他の障害のある人たちと出会い、刺激を受け、競技を続ける一方で障害のある人の卓球の普及や振興にも携わろうと考えている。

氏名 23-A さん

インタビュー実施日時 2023 年 2 月 15 日 15:00-17:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1994 年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:右前腕欠損 2 種 3 級
略歴	小学校 5 年からハンドボールを始める。高校総体ベスト 8、国体出場。スポーツ推薦でスポーツ系学部に進学後、2015 年大学 2 年時にパラ陸上競技(短距離 100m~400m)を始める。パラリンピック 2 回出場
競技基本情報	競技:パラ陸上競技短距離 クラス分け:T47 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:20 歳 パラ陸上競技 幼稚園~小 4 までクラシックバレエ、小 5~大学 2 年までハンドボール
障害発生から 障害者スポーツ 開始まで	経緯: ・幼稚園から小 4 までクラシックバレエ(姉の影響もあり、始める) ・転校を機に小 5 からハンドボール(担任がハンドボールクラブの指導者だった) ・中学校でも特別な扱いを受けることなくハンドボール部に入部。1 年間はボールキャッチの練習が多かった。中 1 冬からスタメンで出場。ハンドボールは小学校からの仲間の支援が継続に大きく影響している。中学で全国大会出場。 ・体育の授業も他と同じように参加した。運動は得意だった。 ・高校は親元を離れて関東のハンドボール強豪校に。家族はもとより様々な人の支援を受けながら下宿生活をした。プレーでは右前腕がない分、足と左利きであることを生かした動きを工夫してプレーした。高校でのプレー継続には家族、友人の家族、下宿の大家さん、チームの監督が重要な他者。 ・推薦でスポーツ系学部に進学。寮生活が始まる。大学 1 年次は高校の時の怪我の影響でリハビリ中心だった。1 年後半から試合に出るようになった。 ・大学 2 年の夏にハンドボール部の先生から 4 年間ハンドボールした後パラスポーツに行ってみようかという話をもらった。その後大学の障害者スポーツ専門教員と話をし、身体計測・体力測定を受けることにした。

	<p>スキーへの道もあったが、怪我した膝が心配だったので陸上競技に進むことに。大学 2 年の 2～3 月に陸上競技部で陸上を始める。3 年生の 12 月までは陸上部とハンドボール部両方で練習をした。</p> <p>・障害はあるものの障害者としてではなく、他の選手と一緒にスタメンとして試合に出ているのになぜ障害者スポーツにという思いが最初はあった。障害者は何もできないというイメージが自分の中にあっただからかもしれない。その後、障害者スポーツ専門の先生にオリ・パラ両方に出ている卓球選手の話の聞いたり、パラ陸上の世界選手権に出て山本篤選手の表彰式を間近で見て感動し、メダルを取らなくてはこうした感動を伝えられないと考えるようになった。リオ・東京とパラリンピックがある中で今しかできないことはないかと考え陸上競技を選択した。競技を経験するのは体育教師になった時に生かせるという思いもあった。大学 3 年の 12 月に陸上競技部に転部した。</p> <p>・メダルを取りたかったのでその可能性がある 400m を選んだ。</p> <p>始めた場所: (ハンドボール) 小学校、(陸上競技) 大学の陸上競技場 重要な他者: (ハンドボール) 小学校のハンドボール指導者(学級担任) (陸上競技) 中学校と高等学校のハンドボール部の顧問教師(相談した時に背中を押してくれた) 陸上競技部の監督(早くどちらにするか決めなさいというようなことは一切言わなかった。自己決定することを大切にしてくれた) 大学の女子ハンドボール部の監督(頑張るよう後押ししてくれた)</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京パラリンピック開催が決定していたこと ・パラリンピック選手の発掘事業が実施されていたこと ・障害者スポーツ専門の教員が大学にいたこと ・ハンドボール部、陸上競技部の連携が取れていたこと
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンドボールでトップクラスの選手であったことが身体的には大きなプラスだったと思われる。コーチから言われたことなどすぐにできることが多く、ハンドボールをしていたおかげだと思う。 ・現在、走り幅跳びの練習をしているが、踏切は絶対に合う。ファールはほ

	<p>とんどない。ハンドボールもラインを踏んではいけなかったのでそんなところも生かされていると思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それだけにハンドボールからパラの陸上競技に転向する際には自分の中で納得する答えを出すのに時間がかかったように思われる。 ・トップ選手で国内でもトップクラスのスポーツ系学部に進学していたこと自体がパラ陸上競技への道を開いたとも言える。
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> ・担当コーチが様々な指導やケアをしてくれた。陸上部のメンバーもウォーミングアップの仕方から、試合参加方法のイロハまで教えてくれた。 ・3年生で転部したのはいいタイミングだったかもしれない。1、2年生の時だと他にも様々な苦労があったかもしれない。 ・リオ大会でメダルを取って帰ってきて、生活が一転したようだった。雑誌に出たり、華やかなことを経験したり、泥臭い400mの練習に戻るといいう精神状態になかなか出来なかった。一方で走れない自分を周りの人に見られたくないという気持ちもあった。2017年の世界選手権ではもう一度メダルを取りたいと思ったが、そうした精神状態が続き、葛藤があった。 ・陸上部の監督の後押しもあり、ぎりぎりのタイミングで練習を開始することができた。(世界選手権は400m/3位) ・その後様々なことがあり、スランプに陥ったが心機一転しパリパラリンピックを目指すことに。 ・この間経済的には様々な支援が受けられ、苦勞することはなかった。 <p>重要な他者:陸上部で本人を担当していたコーチ(陸上競技に関するだけでなく日常生活から体のケアのことまで気にかけてくれた)</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・目標となる大会(世界選手権やパラリンピックの存在) ・東京パラリンピック決定後、経済的支援が受けやすい環境であった。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・パリパラリンピックで有終の美を飾りたいと考えている。そのためには今年(2023年)の世界選手権の成績が重要になる。 ・今年度で現在の仕事の任期が切れるため、その後の身の振り方を現

	<p>在、監督とも相談しているところである。将来的には何らかの形でパラスポーツに関わり、普及などに関わりたいと考えている。</p>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校からハンドボールを始め、中学・高校では全国大会に出場するほどの選手であった。 ・右前腕の欠損でありながら両手のボール操作が大きな比重を占めるハンドボールでトップクラスの選手であった。自分の特徴を生かしたプレーを探し、磨いていくという姿勢と、周りの多くの人の支援によりこうした選手になったと思われる。 ・東京パラリンピック開催が決まり、選手発掘等の事業が展開される中で陸上競技への道が開かれた。障害があることは認識しているが「障害者」としてプレーしていたわけではなかったため、パラ陸上競技への転向には気持ちの折り合いをつけるのに少し時間がかかったようである。 ・パラリンピックでのメダル獲得という目標達成後に、周囲の変化や華やかな世界を経験したことから次へのモチベーションをつくるのに時間がかかったものの、2017年の世界選手権では3位入賞を果たした。 ・その後、様々なことがあり、一時期スランプに陥るが心機一転しパリパラリンピックを目指すことにした。 ・パリパラリンピックの後のことを考え、現在次の仕事を検討している。 ・先天的な障害でしかも視認しやすい欠損があるにも関わらず、それを隠さずに育ってきた。当然のようにスポーツにも挑戦し、日本のトップクラスまで上り詰めた選手である。インタビューをしていて両親の育て方の影響が大きいと感じた。両親も、ハンドボール、陸上競技の指導者とも本人の自己決定を大切にする点が共通していた。 ・先天的な障害がありながら障害のない人のスポーツでトップクラスの選手となり、そこからパラスポーツのトップ選手になるという稀有な選手と言える。

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-Bさん

インタビュー実施日時 2023年3月4日 10:00-11:30 場所 都内貸会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1995年 性別:女性 障害発生年齢:13歳 障害状況:視覚障害(全盲・光覚)、1種1級 リハビリ期間:6か月(通級指導、盲学校編入当初)
略歴	中学2年生でH盲学校に転校、ゴールボールを開始、T大学附属視覚特別支援学校高等部3年でロンドンパラリンピックに出場しメダルを獲得した。R大学を経てA社に勤務、日本代表としてリオ大会、東京大会に出場。現在はブラインドサッカー選手として活動。教員免許、あん摩マッサージ指圧師、鍼灸師の国家資格を取得している。
競技基本情報	競技:ゴールボール クラス分け:視覚障害 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:14歳 競技:ブラインドサッカー、ボート クラス分け:視覚障害 主な戦績:これから 競技開始年齢:26歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・中学2年生で疾病により視覚障害となり、地域の中学校からH盲学校に転校、ゴールボールと出会う。 始めた場所:H盲学校 重要な他者: 競技開始期:I先生(当時男子代表監督)、Eさん(当時女子代表監督) 部活期:T先生(T大学附属視覚特別支援学校) 自主活動期:A選手(ゴールボール選手)
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・	・H盲学校在学中に、当時男子日本代表監督のI先生と出会い、翌年開催予定のワールドユース出場選手を探していたことから、「ゴールボールやらない?」と声をかけてもらった。ゴールボールをやって、続

条件	<p>けてみようと思った。大会に出るぞと言われて日本選手権の予選にゴールボールを始めて半年後の中3の7月に出場、10月に二次予選、11月に本戦と進み、そこで視察に来ていた女子の代表監督から12月の代表合宿への打診があった。気づいたら代表に呼ばれていた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・結構活発でガシガシタイプ、体幹バランスも良かった。小5からアイスホッケー、中学の部活は陸上部だが並行してやっていた。見えなくなってできないことが増える中、盲学校で「スポーツができる」と感じたことが大きい。ゴールボールで「体を張る」動きなどは、アイスホッケーの経験が生かされている。陸上部の厳しい練習経験はきついことへの慣れや基礎体力の向上につながっていると思う。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・T 大学附属視覚特別支援学校高等部に進学すると、T 先生から部活としてのゴールボールに誘いがあった。それ以外に陸上競技もしていて全国障害者スポーツ大会に出場し優勝した。高等部は寄宿舎だったので、ずっとゴールボールか走っているか、合宿だった。 ・ロンドンパラ終了後は、附属に女子選手がいなくなりチームがなくなったことから、新たな環境を求め、関東近辺でチームをつくるというA選手の誘いにのった。 ・同時に教員免許もとりたかったのでゴールボールをしながら通えるということでR大学に進学した。練習場所は、国リハと附属、そして大学のトレーニングジムも使った。最初、大学側は嫌々という感じだったが、ジムスタッフに受け入れてくれる方が日替わりで現れ、最終的にはいつ行っても使って大丈夫という雰囲気変わった。 ・東京大会が延期になり、NTCに籠っていた。それでひたすら本番に備えたという感じ。でも本番はコンディショニングの失敗だった。大会後、ゴールボールの代表を引退し、所属先A社からはパラを目指さないのであれば、選手としての雇用はできないと言われ、アスリート雇用から一般就労になった。 <p>主な実施場所：T 大学附属視覚特別支援学校、国リハ、R 大学、</p>

	<p>NTC</p> <p>重要な他者:T 先生、A 選手</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ロンドンパラでチーム優勝して、それはそれですごく嬉しかったが個人の成績を見ると、全然役に立てなかつたと感じた。今までの大会と全然雰囲気が違う、すごく悔しいなという思いと決勝でスタメンの K 選手や A 選手がすごく楽しそうにプレーしていた。私もこういうところでこういう試合ができる選手になりたいという思いがより強くなった。結局 A 選手とその後、一緒に練習するようになったので、師匠みたいな感じ。 ・リオ大会は全然ダメだったので悩んだ。ゴールボールはやりたい、悔しい思いもあるがこんな状況で本当にできるのかというモヤモヤ感がすごくあった。でもやめたいわけではなかつたし、悔しい思いがすごくあったので、東京大会まで続けようとなつていった。 ・国リハで鍼灸免許を取るのと並行して A 社に入社、クラスメイトが選手としての自分を応援してくれていることが嬉しく、できるってすごく楽しい、楽しさをもっと表現したい、頑張ろうというモチベーションになった。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京大会が終わった後に、一般就労になった。今は2つ目の競技にチャレンジしているところ。将来は何かこう、すごくぼんやりしているが人の役に立つとか、困っている人とかの助けになれるような仕事とか、そういう活動をしているところに携わりたいなという気持ちもある。 ・あとは視覚障害児教育、やっぱりすごくそこが大事、そこがあったから、今、自分があるのだなという思いもある。視覚障害児教育に何らかの形で携われたらとも思っている。
<p>まとめ</p>	<p>・「手術後目覚めると見えなくなっていた」ところから、視覚障害者である自分にとって、スポーツは「できること」を実感できる貴重な場となっていた。そこに気づかせてくれた視覚障害児教育は、スポーツへの誘いに欠かすことができないものであった。視覚障害の前後を体験した選手だからこそ気づいたことがある。スポーツって、見えていないからこそ、どうやって情報を補うとか、周りの人がそれをどうサポ</p>

	<p>ートするのかというところが大事。でも結局やるのは自分だし、考えてやるのも自分、コートの中では自由である。そういった、生活で見えないがゆえの制約等を全部とっばらって、自分たちでできることを感じられるのが醍醐味というか、楽しさの一つだと思っている。</p>
--	---

(作成者名)齊藤まゆみ

氏名 23-C さん

インタビュー実施日時 2023年3月30日 14:00-15:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:四国地区 生年月日:1990年 性別:女性 障害発生年齢:19歳 障害状況:視覚障害
略歴	小学校5年生から柔道を始めて、高校時代はインターハイに出場した。大学入学後に病気による視覚障害を発症し、大学3年生の頃から競技を再開し、現在も選手として活動している。
競技基本情報	競技:柔道 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:10歳 小学校5年生
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・柔道が題材の漫画の主人公に憧れて小学校5年生から柔道を始めた。スポーツは全般的に苦手で、学校体育は嫌いであったが、柔道は楽しく続けることができた。 ・大学1年生の時に病気の治療で入院した際に視力低下に気づき、両目の手術後、数か月リハビリテーションセンターに入所し、退所後に別の大学に転学をした。 ・視覚障害者柔道の存在は障害受傷前から知っていたものの、実際にどこで活動できるのかがわからなかったが、視覚障害者の訓練施設職員に誘われてゴールボールの試合に行った時に、ゴールボールの指導者が柔道連盟関係者と知り合いで、そこから話をつないでもらい柔道を再び始めることになった。 ・(転学後)大学に入学した当初は、高校まで厳しい環境で柔道をしていたので、柔道以外のことを楽しみたかったが、障害があるがゆえにできないことが多く、「もう一度自分が何か一生懸命になりたい」と考えた時に、自分にとっては柔道であったので、もう一度始めてみようと思った。 ・大学3年生頃から週に1回程度、町道場に通いながら、月に1回程度視覚障害者柔道の合宿に参加するようになった。 ・視覚障害者が参加できる道場を探すことが大変であったが、受け入れてもらった道場の先生に理解があり、練習の時に組んだ状態から

	<p>始めてもらうなど、スムーズに受け入れてもらうことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(視覚障害者柔道を始めてから)柔道以前に、自分が視覚障害のある人と関わることが少なく、視覚障害で大変なことを共感してもらえ友人がいなかったのも、そういった話がお互いのできる場が自分にとって大きかった。 ・当時は「柔道がしたい」という思いで再開したが、大学3年生の時に初めて出場した全国大会で、関係者からいきなり「世界大会目指して頑張ろう」と言われ、(高校生の時は全国大会に出場することさえ大変だったので)当初は戸惑っていた。 <p>始めた場所:町道場 重要な他者:道場の先生、ゴールボールの指導者</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・道場の先生や仲間たちに理解があり、すぐに受け入れてもらうことができたことが大きかった。 ・ゴールボールの指導者が柔道連盟に問い合わせをした後、監督がすぐに会いに来てくれ、「一緒にやりましょう」と言ってくれたことも柔道を再開するにあたり大きな影響を与えた。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・もともと柔道をやっていたが、組んだ状態から始めることがすごく難しく、「見た目は一緒だけど違う競技だな」という印象を受けた。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業後に、柔道を仕事とするか悩んだが、他にも視覚障害のある柔道選手を雇用していたA社に就職した。 ・A社では半日勤務で、会社が契約しているコーチが所属している高校で週に5日程度練習をしていた。 ・A社に1年半所属後、結婚を機に現居住地に転居し、B社に転職(アスリート雇用)をし、地元の高校・大学が練習拠点となっている。 ・B社は単年契約となっており、東京パラリンピック後の雇用継続に不安があったことから、C社に転職(アスリート雇用)し、前職と同様の練習環境で競技を継続している。

	<p>・高校までの厳しい環境や、柔道はとにかく真面目にやらなければならないという考えが自分の頭の中にあり、視覚障害者柔道の世界に入ってから、柔道を楽しめていないと感じていたが、コーチが楽しんで柔道をするタイプで、「楽しく笑いながらやったほうがいいよ」と言われ、気持ちが楽になり、現在まで続けてこられている。</p> <p>・C 社からは競技支援金が支給されており、連盟と所属先からの支援で、競技に関する自己負担はほとんどない。</p> <p>・自分自身はもともと柔道をやっていて、現在も練習環境が整っているほうであるが、視覚障害の選手が新しい場所で受け入れてもらうことが難しく、「障害があると危ない」「(付き添いがいないと)受け入れられない」というところが未だにある。</p> <p>・一から視覚障害者に柔道を教えてくれる場所がないので、受け入れ先や、視覚障害に理解のある指導者が増えていけば、競技の裾野が広がっていくと思う。</p> <p>主な実施場所:地元の高校・大学 重要な他者:コーチ</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・B 社に転職時に転居し、競技環境が変わったが、知り合いの伝手をたどって競技環境を整えることができた。</p> <p>・現在所属している C 社の支援が大きい。</p>
今後のスポーツ実施	<p>・2024 年のパリパラリンピックの出場枠を獲得することが当面の目標であり、パラリンピック後は一度休憩をして、その後またやりたいと思えば復帰をして、もう満足していたら現役を引退するかもしれない。</p> <p>・C 社には現役引退後も所属可能であり、セカンドキャリアとして社業に専念するのか、所属しながら柔道に関わる活動をするのかについては、まだ明確になっていない。</p>
まとめ	<p>・小学校 5 年生から柔道を始め、高校時代はインターハイに出場。障害受傷後、受け入れてもらえる道場を探すことが難しかったが、受け入れてもらった道場の先生に理解があり、スムーズに練習に参加できた。</p> <p>・結婚を機に転職、転居をし、現在は地元の高校・大学を練習拠点とし</p>

	ている。パリパラリンピックの出場を目指しており、パラリンピック後の生活の仕方はまだ具体的に考えていない。
--	--

(作成者名)河西正博

氏名 23-D さん

インタビュー実施日時 場所 2023 年 4 月 10 日 14:00-16:00 場所:都内貸会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1984 年 性別:女性 障害発生年齢:5 歳 障害内容:網膜色素変性症 (先天性) 1 種1級 リハビリ期間:なし 5 歳時に視力が著しく低下して病院で診断を受ける。今も徐々に視力は下がり続けており、現在は明暗がわかる程度の視力。生まれた時から見えにくさを抱えており、中途障害ではなく、先天性の障害と捉えている。
略歴	小学校は一般校、中学校から盲学校に通う。高校は地元を離れ、都内の盲学校に進学し、高校 1 年時にゴールボールと出会う。その後、都内の私立大学に進学する。2008 年の北京パラリンピック出場後、引退。一般企業に約 2 年勤務した後、1 年間、一人で欧米 10 か国を旅し、各国のゴールボール事情を視察した。2016 年に現役復帰し、2018 年のインドネシアアジアパラ競技大会で入賞した。2021 年に再び引退。現在は、一般企業で働きつつ、これまでの経験を生かし、国内でゴールボールの普及活動や講演活動などを行っている。
競技基本情報	競技:陸上競技 競技成績:全国大会出場 競技:ゴールボール 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:16 歳 盲学校の体育授業で出会った
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校(一般校)は吹奏楽部、中学校(盲学校)では演劇部を自ら設立。スポーツにはあまり興味がなかったが、陸上だけは好きだった。 ・高校の盲学校で視覚障害者のスポーツとして、サウンドテーブルテニス、フロアバレーボール、ゴールボールを体験した。なかでも、ゴールボール選手の立ち姿が格好良く、ルールもシンプルだったので自身も進んで取り組むようになった。翌年、助っ人としてゴールボールの国内大会に出場してから本格的に競技に取り組むようになった。

	<p>始めた場所:盲学校の体育、部活動</p> <p>重要な他者:チームメイト、コーチ</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	特になし
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	特になし(受傷・発症した認識は持っておらず先天的障害と捉えている)
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学進学後も卒業した高校(盲学校)の部活動で競技を継続。 ・大学1年時に日本代表合宿に参加するが、周囲の選手と自身のモチベーションに差があり合宿を辞退。数年間、競技からも離れた。 ・大学4年時にゴールボールを再開。人生を賭けて取り組みたいと決意し、パラリンピックを目指す。 ・2年後の2008年、北京パラリンピック大会に出場した。 ・大会終了後、国内の普及活動に注力するのが自分の役割と考え、選手を引退した。 <p>主な実施場所:卒業した盲学校の部活動</p> <p>重要な他者:チームメイト、代表選手、部活動の指導者、代表のコーチ</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツを継続する上では身近な地域にある定期的な練習環境が重要である。視覚障害者対象のスポーツの選択肢が複数ある中(フロアバレーボール、サウンドテーブルテニス、ゴールボールなど)、定期的に練習環境(場所、実施頻度)があったのはゴールボールだけだった。 ・大学進学時に定期的に練習する環境(高校の部活動)から疎遠になってしまったのも、競技から離れるきっかけになった。
今後のスポーツ実施	・パラリンピックを目指した競技継続ではなく、これからゴールボールを始める人や、競技を始めて間もない人たちのサポート役として、国

	内大会にも出場しながら、普及面で貢献したい。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・競技を一度引退しているため、現役復帰した際には、競技に対する目的や姿勢が大きく異なっていた。 ・2008年の北京パラリンピックを目指している時は、自分のため、自分の目標達成が大きな目標であり、その目標達成に向けて、同じ方向に向かって手を取り合うチームメイトは信頼できる重要他者であった。 ・2016年に競技に復帰した時は、自身がパラリンピックに出場したい、注目されたいという気持ちはなく、自分が頑張ること、関わることで周囲の人たちが幸せになってくれることが目的になっていた。その頃は、チームメイトの存在も重要であったが、体験会に参加する子供たちの存在や反応が大きな継続理由になっていた。 ・ゴールボールに出会ったことで、コミュニティが広がり、多くの人と出会い、海外遠征に行ったり、海外に一人旅に出かけたり、現在の就職先での活動にもつながっており、全てがプラスに働いている。 ・勝負の世界なので、他人と比べられて評価され、代表に選ばれることや外れる経験もしてきた。他者との比較について、ゴールボールを通して深く考えられるようになった。

(作成者名)小淵和也

氏名 23-E さん

インタビュー実施日時 2023 年 4 月 11 日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日 1996 年 性別:女性 障害発生年齢:中学校の頃から徐々に 障害内容:視覚障害。黄斑ジストロフィー:進行性、視力 0.03 程度 1 種 2 級 リハビリ期間:なし
略歴	小中高校と普通校に通い、大学に進学。大学を中退し、現在、企業の契約選手。小学校 3 年からスイミングスクールに通い、高校まで競技選手として活動。中学の時から視力が落ち始め、2018 年にパラ選手として競技デビュー。2020 東京大会にも出場。
競技基本情報	競技:水泳 クラス分け:S13 SB13 SM13 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:8 歳 小学 3 年生(当時は晴眼)、19 歳からパラ選手
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・父親はスイミングスクールの指導者、母親も元水泳の選手 ・小学校低学年の頃から泳ぎたいと思っていたが、妹の世話をする必要があったこと、スイミングスクールが比較的遠いところにあったことから、小学校 3 年生になってから本格的に始めた。その前から、お風呂でクイックターンをしたり、週末に近くのプールに行ったりしていた。 ・小学校 3 年生で父親が勤務するスイミングスクールに通い始めた。 ・中学校から少しずつ視力が衰え始め、中学、高校と怪我が続く。 ・高校水泳部に上腕欠損の M 選手(同級生)がいた。高校卒業後、彼女から「もっと視力が悪くなったらパラに来ればいいじゃん」と言われる。 ・高校ではインターハイに出場したが、結果は予選落ちだった。 ・高校卒業後怪我のこともあり、一旦、本格的な競技からは離れる。 ・ブランクの 2 年間はこれまでできなかった様々な経験や大学で自分の体のことなども学び非常にプラスになっている。また自分がやるべきことについても考えられた。が、体力的にはかなり落ちた。 ・大学に入って、障害者手帳を取得したり、M 選手に言われたことを思

	<p>い出したり、当時水泳の現役選手だった妹の応援などを行っているうちに、パラリンピックでやってみようかと考えるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラ水泳、視覚障害者の水泳のことは M 選手から聞いて知っていた。 ・2 年間のブランクを経て、2018 年にパラ選手として水泳を始める。父親の勤務するプールで受け入れてくれた(もともとその選手だった、見た目が他の人とそれほど変わらない、知っている選手がまだそこにいた、父親がいるなどが影響したのではないかと考えている。一般のスイミングクラブで視覚障害の選手がいるところは少ない)。 ・元いたスイミングクラブで、標準記録を切れば、一般の大会にも出場でき、レース数が多くなり良かった。一人でやるよりもモチベーションも保てた。 <p>始めた場所:父親が指導者をしているスイミングスクール。パラリンピック水泳として始めたのも同じプール。現在も拠点としている。</p> <p>重要な他者: 子供時代、最初に水泳を始めた時は両親、祖父母 パラ選手として競技を始めるに際しては M 選手、妹</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・父親がスイミングスクールに勤務していたこと。 ・同じスイミングスクールでパラ選手として競技を再開できたこと。 ・東京パラリンピック開催が決まっていたこと。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スイミングスクールに通い競技選手として活躍していた。 ・その延長線上(2 年間のブランクはあったが)で競技を再開できたことは大きいと考えられる。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パラ選手として競技を始めていきなり日本記録(自分の練習タイムくらいだった)を出した。そのことによりメディアにも騒がれたことなどが重なり、初めの頃はパラ水泳を少しなめていたところがあった。 ・2018 年の春に海外遠征をして世界のトップとの差を知らされた。その後の国際大会でも勝てず、本腰をいれるようになった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・東京パラリンピックに出たいというよりは自分の高校時代の記録を破りたいという気持ちが大きかった。 ・いくつかの種目で高校時代の記録を超えることができたことが大きい。超えられたことがモチベーションにつながっている。超えられなければ「もういいや」となっていたかもしれない。 ・海外遠征時に他国の選手と交流できることが楽しい。海外の選手と波長が合う。そういうことが楽しい。 ・中学 1 年の時から同じコーチに指導を受けているが、コーチが喜んでくれることもモチベーションになっている。 ・自分は健常者と一緒に練習ができています。しかし多くのパラ水泳の選手はこういう環境で練習できていない。他のパラ選手も私のような環境で練習できると良いと思う。 ・現在、週 4 日練習、スイムは 1 回、1 時間半から 2 時間くらい。その他にウェイトトレーニングなどを行っている。 <p>重要な他者: 妹。高校まではライバルでもあり比較されることもあり、仲がいいとは言えなかったが、今は一番自分のことをわかってくれていて支えてくれている。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生の頃から通っているスイミングスクールがあり、そこで障害のない人たちと一緒に練習ができる。 ・東京パラリンピックが決まり、障害者選手に対する雇用状況が良くなってきたこと。企業と選手雇用契約を結ぶことができおり、パリパラリンピックまでは継続されることになっている。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パリパラリンピックまでは今のように頑張りたい。そこが一つの区切りだ。その後のことは考えていないし、見通しも立てられていない。 ・視覚障害の自分がその後就職できるのかどうか不安を持っている。 ・ただ将来的には水泳に何らかの形で関わりたい。指導者か、パラ水泳を発信できる立場になりたい。現在地元の中学校の部活指導員として指導したり、大会の引率をしたりしている。 ・障害のある子供たちが水は怖くないことをわかること、そうした普及活動もしていきたい。

<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水泳一家に生まれ、幼い頃から水に親しんでいた。スイミングスクールのコーチである父親や、元選手の母親、母親のことを語る祖父母の影響を受け、水泳を小学校 3 年から本格的に始めた。 ・中学校は水泳部がなく吹奏楽部に入った。水泳はスイミングスクールで継続した。この頃から視力が衰え始めた。 ・高校では水泳部に入り、スイミングスクールでも練習。インターハイにも出場。同じ水泳部に同級生パラ水泳選手の M 選手がおり、パラ水泳の情報を得ることができた。 ・高校卒業後、一旦競技生活から離れ、アルバイトなどこれまでできなかったことを経験したり、大学で体のことを学んだりできた。 ・パラ水泳の同級生の M 選手の言葉や水泳に対する気持ちが高まってきたこともあり、以前通っていたスイミングスクールに復帰し、2018 年にパラ水泳大会にデビュー。 ・いきなり日本記録を出し、メディアで騒がれたりして少し天狗になった時期があったが、海外遠征でトップ選手との差を認識し、練習に打ち込むようになった。 ・やがて、高校時代の記録を破ることができ、そのことが水泳を続けるモチベーションとなっている。また水泳を続けるにあたって、以前はライバルでもあった妹の存在が大きい。 ・現在、企業契約で水泳を続けている。パラリンピック水泳連盟等からの助成金も受けている。 ・パリパラリンピックで一区切りと考えている。その後のことはまだ見通しが持てないでいるが、パラ水泳の普及や環境の改善に関わりたいと思う一方、その後の雇用のことなどを不安に感じている。 ・障害を持つ前からのスイミングスクールを現在も拠点にできているというレアなケースである。
------------	--

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-Fさん

インタビュー実施日時 2023年4月14日 13:30-15:30 場所 都内貸会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1988年 性別:女性 障害発生年齢:先天性。9歳時に病名がわかる。 障害内容:視野狭窄・視力障害 1種1級 リハビリ期間:なし 幼少期から進行性の病気である「網膜色素変性症」を患い、見えにくさを抱えていた。9歳までは診断名が付かずに検査し続ける日々だった。
略歴	小学校、中学校、高校は一般校に通った。兄の影響で中学から柔道部に入部、高校でも柔道を継続。大学に進学し、先輩から視覚障害者柔道に誘われ、入学と同時に視覚障害者柔道を始める。その年の日本選手権で優勝。2012年、ロンドンパラリンピックに出場し入賞。大会終了後、盲学校専攻科に3年間通った。2016年、リオパラリンピック、2021年、東京パラリンピックにも出場、東京大会終了後、一度競技から離れて2020年より働いている会社の一般社員として就労し、2022年5月に同社のアスリート採用として柔道を再開した。
競技基本情報	競技:柔道 競技開始年齢:13歳 中学、高校と柔道部に所属していた。 競技:視覚障害者柔道 競技クラス:2019まで/B2クラス、2019~2021/B1クラス、 2023から/J1クラス(全盲) 競技成績:国際大会入賞 パラ競技開始年齢:18歳 大学進学時に始めた
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: 中学、高校と柔道部に所属して、晴眼者と練習を行い、試合も一般(晴眼者)の部門で出場していた。晴眼者との練習では組み手争いに苦勞していた。大学入学時に先輩に誘われて視覚障害者柔道を始めた。相手と組み合った状態から始まるため、新たな可能性を感じた。 始めた場所:大学の柔道場 重要な他者:同郷の大学の先輩

<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>特になし</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・中学、高校と晴眼者相手に練習し、一般(晴眼者)の試合に出場していたので、視覚障害者柔道を始める際も抵抗なく取り組めた。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況①: ・視覚障害者柔道に出会った年に日本選手権で優勝。晴眼者相手では県大会で敗退していたのに、いきなり日本一になったことで葛藤が生まれ、一時期、競技から離れる。同級生が柔道をやっていたため、自然と柔道場に足が向き再開した。 ・初の国際大会 2010 年、IBSA 柔道世界選手権大会は初戦敗退。「上には上がいるな」と実感。同年のアジアパラ競技大会では柔道日本選手団の中で自分だけメダルを獲得できず(順位は 3 位だったが、総当戦人数規定によりメダルなし)、悔しくてメダルへの想いが強くなった。 主な実施場所①:大学の柔道場 重要な他者①:大学の同級生、海外の対戦相手</p> <p>継続状況②: ・高校まで晴眼者の世界で生きていたので、同じ視覚障害の世界で出会った仲間は非常に大切。見えないことを隠さず、ありのままにいられる安心な空間を与えてもらった。同じ視覚障害者で日本代表でも一緒に活動している友人(弱視)は、一緒にいて、共通言語が多くあり、説明不要で思いを理解してくれ、何気ない言葉に癒やされている。 主な実施場所②:柔道場 重要な他者②:一緒に活動している仲間(視覚障害者)</p>

	<p>継続状況③:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全盲の人にとって柔道の上達にはスキルの言語化が必要であり、自身の主観的事実と指導者の客観的事実をすり合わせてテキスト化する作業に、自らの身体を研究材料にしながら取り組んでいる。 <p>主な実施場所③:柔道場</p> <p>重要な他者③:一緒に柔道を研究している友人(視覚障害者)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2022年1月にIBSA(International Blind Sports Federation:国際視覚障害者スポーツ連盟)の国際クラス分けルールが変更となり、これまで全盲から弱視までの選手が障害の程度に関わらず、男女の体重の階級別のみで対戦したのが、現在は、全盲(J1)と弱視(J2)のクラスに分け、男女の体重階級別になった。これまで不利であった全盲の人にとっては、新たな可能性が広がった。 ・2011年に東日本大震災、2019年の台風19号で、大きな被害のあった地元に戻るたびに、メダルを獲得して頑張っている姿に励まされるとの言葉をもらってからは、誰かの励みになるのなら頑張ろうという考えが変わった。「成績が全てではない、頑張っている姿を見せるのが大切だ」というのは理想論かと思っていたが、そうではないと感じている。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・トップアスリートとしての競技力向上が見込める限り、パラリンピックは常に目指していく。 ・クロスカントリースキーに取り組んでいる。柔道と異なり、接触やそれに伴う怪我がないので、長く継続できると感じている。可能だったら、冬季パラリンピックにも出場してみたい。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・未だに障害受容はできていない。日々葛藤するからこそ見えてくるものがあり、悩み続けることは必ずしもマイナスではない。自分が生きるためには、葛藤して悩むことは良い指標になると考えている。 ・視覚障害者柔道を始め、晴眼者に勝てなかった自分がいきなり日本一になった時に人生の大きな分岐点に立った。これまでは目が見える“普通”に憧れ、“普通”が目標だった。日本代表になることは、見えないことを公にすることである。なぜ、それを自分が背負わないといけないのか。受け入れるのに時間が必要だった。最終的には、どのカ

	<p>テゴリーにおいても、世界を目指せる挑戦は誰しもができるわけではないと考えた。その考えに至った時、生まれて初めて自分で自分を認めることができた。同時に白杖を持つ決意、パラリンピアンになる覚悟も決まった。パラリンピアン肩書を持つことで、“普通”の障害者でなくなることを受け入れた。</p>
--	---

(作成者名)小淵和也

氏名 23-G さん

インタビュー実施日時 2023年4月18日 10:00-11:30 場所 T 大学会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1973年 性別:女性 障害発生年齢:発症は幼少期。周囲が気づいたのが8歳くらいの頃。 障害状況:視覚障害、1種1級(黄斑部変性症、網膜色素変性症)
略歴	小学校3年生頃、周囲が視力低下に気づく。小学校6年の2学期から高等部まで M 盲学校を経て T 短期大学に進学。同在学中の1994年、盲学校時代の W 先生からの誘いで長野パラリンピックを目指してバイアスロンを始める。卒業後、特養に就職、1998年、24歳で長野パラリンピック、2002年のソルトレイクシティパラリンピックに出場。2004年に H 社に障害者アスリートのスキー部創部メンバーとして入社、2006年トリノパラリンピックに出場。トリノ大会後入籍、2007年に引退、2009年から I 県に在住、2019年より日本障害者スキー連盟理事/ノルディック普及委員、VI-WG リーダーとして活動している。
競技基本情報	競技:バイアスロン クロスカントリースキー クラス分け:B2(2002まで)、B1(それ以降) 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:21歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・視力低下に伴い、小学校での就学に支障が出てきたことから、小学校6年の2学期より M 盲学校に転校、そこで、フロアバレーボールや季節ごとにプールでの活動や運動会に向けての陸上競技などのスポーツを経験する。 ・体を動かすことは好きなので、抵抗なくいろいろなことをやっていた。進学した T 短期大学では、パラリンピック選手 M さんがいたので、一度だけタンDEM自転車に乗せてもらった。その他はインラインスケートのサークルを立ち上げ、体育館の中をくるくるまわりながら滑走していた。 始めた場所:M 盲学校 重要な他者:W 先生

<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・T 短期大学在学中の 1994 年に、盲学校時代の W 先生から「長野でパラリンピックがある」という誘いで長野パラリンピックを目指してバイアスロンを始める。 ・日本障害者スキー連盟のアドバイザーをしている W 先生とはずっと交流があり、とりあえずアルペンとクロスカントリースキーの両方に出場したところ優勝した。 ・そうしたら「クロスカントリーができるのならバイアスロンやってみよう」と言われ、視覚障害者でも銃が撃てるということに興味湧き、やってみたいと思った。 ・当時は実弾が出るエアライフルだったのでかなり貴重な体験だが、国内では銃を撃つことは制限され、国際大会が練習の機会だった。長野大会まで実際にエアライフルを撃つ機会は数回しかなかった。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の立地が自然豊かだったので、片道 3km の通学、学校で春・秋のロードレースに向けた長距離走、夏のプール、冬は校庭でのクロスカントリースキー、すぐそばの小さなスキー場では T バリフトがあり、ポールを立ててアルペンスキーを経験してきた。 ・とにかく体を動かすことが大好きだった。盲学校に転校後も、スキー経験があるということで、盲学校の先生が遊びに行く時にゲレンデに誘ってくれた。一人で滑るのは難しかったが、誰かが前で滑ってくればそれについていくことは全然可能だったので、体育の先生が滑降する後ろをついていくなど、怖さもなかった。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長野大会の後、一旦フェードアウトした感じだったが、合宿の通知を見て、スキーは嫌いではないし、みんなにも会いたいという気持ちと、自分とガイド分の費用負担の重さで継続に関する葛藤があった。 ・当時ガイドをしてくれた N さんが仕事の関係でガイドをやめることになり、どうしようと困っていたら、ヘッドコーチの A さんが北海道の K さんにガイドを依頼してくれた。そこで「ソルトレイク大会に向けて頑張ります」となった。 ・トレーニング環境を変えて、できるだけ雪の上で練習したいと思い、特養の職を辞して N 県に戻った。費用は持ち出しとなり、トリノ大会

	<p>を目指すトレーニング中に費用が底をつき、継続できない状況になった。</p> <p>・Aさんに相談したところ、2004年に新たにH社でスキー部が立ち上がる、そこで競技を継続する意思はあるかと確認され、移籍した。そこからは甘えられなくなり、最大限努力をしたつもり。</p> <p>主な実施場所:H社 スキー部</p> <p>重要な他者:Aさん、Kさん、W先生</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・競技環境としてH社にスキー部が設立され、障害者のノルディックスキー選手が複数所属したことで、トレーニング環境やサポート体制が整い、金銭的な負担をする必要がなくなった。</p>
今後のスポーツ実施	<p>・するスポーツとしては、伴走をお願いして走っている。仕事としては、主に障害者スキー連盟の理事。ノルディックスキー副委員長として普及にも携わっている。アスリート発掘だけでなく、ガイド発掘と、スタッフを増やすことである。</p>
まとめ	<p>・体を動かすことが大好きだった活発な幼少期、特にスキーを日常的な環境で経験できたことが大きい。</p> <p>・弱視となって盲学校に転校した後も、要所要所で重要な他者との出会いがあり、長野パラリンピックの開催が決定したことで、バイアスロンという新たな競技環境へと進んでいった。</p> <p>・さらに企業がパラアスリートをバックアップする体制ができたことで、金銭的な負担を気にすることなく競技に専念することができた。</p> <p>・引退後は結婚、出産を経て、子育てとともに日本障害者スキー連盟で裾野を広げる役割を担っている。</p>

(作成者名)齊藤まゆみ

氏名 23-Hさん

インタビュー実施日時 2023年4月19日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1996年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:肢体不自由(左上腕および右大腿骨欠損)1種1級 リハビリ期間:なし
略歴	小中高校と一般学校で学んだ後に大学へ進学した。小学校の時、水泳の授業を受けたいがために水泳を始める。体育はほとんど参加、中学校では水泳部がなかったため卓球部に所属。高校で国際クラス分けを受け海外の試合に出るようになる。大学でも水泳部で練習。卒業後は選手雇用の形態から社員としての雇用形態になる。
競技基本情報	競技:水泳(自由形・バタフライ) クラス分け:S7/SB7/SM7 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:9歳頃
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・体を動かすことが好きで、3歳くらいからスキーを体験したり、外で近所の友達と遊んだりしていた。 ・体育の授業は本当にできないものだけ見学でほとんど参加していた。 ・小学校の時、水泳の授業を受けたいがために水泳を始める。 ・母親が障害者関連の団体で働いていたことから障害者交流センターなどの情報を知っていたものと思われる。 ・中学校の時は部活動が終わってから母親に1時間かけて週3~4日プールに連れていってもらっていた。 ・小中学校の同学年に、もう一人障害のある生徒Hさんがいたため、学校も周りの子も特別なことという感じではなかったのかもしれない。 ・親は障害を特別視することなく普通に育ててくれた。そのため障害部位を隠すようなことはなかった。 始めた場所:S県障害者交流センターのプール

	<p>重要な他者：母親(障害者スポーツに関する情報を持っていた。プールまでの送り迎えをしてくれた)</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・母親が障害者に関わる仕事をしていたこと、障害者のためのスポーツ施設(障害者交流センター)があったこと。 ・普通学校で障害のない人と練習したが、適応できる内容の練習であったこと。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>先天的な障害のため記述なし。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の頃からパラリンピックの存在は何となく知っており、漠然とパラリンピックを目指したいと考えるようになった。この頃は部活動後に一人障害者交流センターで泳いでいた。 ・高校に入ってから部活動で障害のない生徒と一緒に練習するようになった。皆で泳ぐことは楽しかったし、いわゆる水泳の強豪校ではなく、自分がうまくついていけるレベルであったことも大きい。その結果タイムも伸び始めた。 ・高校 1 年でジャパンパラに初めて出場した。その時日本代表監督に声をかけてもらい障害者の水泳チームに初めて所属した。そこに S さんがいて、自分も同じようになりたいと感じた。 ・高校 2 年の春に国際クラス分けに行き、やっと国際大会デビューした。世界ランキングにも成績が反映され、自分がどのあたりなのかははっきりわかるようになった。その 10 月にアジアユースパラに出場し、1 種目で優勝、2 位が 3 種目だった。 ・大学でも水泳部に入り、練習していた。大学 2 年の時のリオパラリンピック大会には落選し、翌年の世界選手権は現地在震災で大会前に帰国、出場できなかった。 ・大学 4 年でクラスが S8 から S7 に変わった。このクラスはバタフライをやっている人が多くて大変だが、短距離種目のほうが好きなこともあり、少しずつランキングが上がっており、楽しい。 ・2018 年にはルール改正で泳法を修正する必要性が生じた。以前はバ

	<p>タフライで片腕だけ動かして泳いで良かったのが、両腕を動かさなくてはならなくなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・泳法変更から東京 2020 大会選考レースまで短いため、間に合わないかもしれないと思いつつ間に合わせるように頑張っていたところで大会延期が決まり落ち込んだが、間に合わないかもしれなかった自分のための延期だと考え、気持ちを切り替えた。 ・金銭的には高校、大学の頃はほとんど自己負担で、かなり親に負担をかけていた。今は県からの補助金や、スポンサーも水泳にはついてくれるので、だいぶ楽になってきた。そういう意味では今の若い選手は相当恵まれていると思う。 ・現在は NTC で月、火、水、金、土が練習日、朝 8 時半から 12 時～12 時半まではプールにいる。昼食後、基本的にはウェイトトレーニングをしている。 ・大学卒業後、最初は企業からのスポンサーという形だったが、会社や社員さんと少しでもつながりたいという気持ちもあって、今の会社に移った。週1日あるいは半日だけでも一緒に働く時間があり、他の社員とのつながりが持っている。 <p>重要な他者： S さんには憧れていた。自分もああいうふうになりたいと。そのおかげでもっと上に行ける選手になりたいという思いも生まれた。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京 2020 パラリンピック開催が決まったこと。 ・それ以降、障害のある選手も選手雇用や練習を業務としてみなす企業が増えてきたこと。 ・競技団体にスポンサーが多くつくようになったこと。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は 2024 年のパリパラリンピックを目指して集中している。 ・そのあとのことまではわからないが、今後ライフイベントで子供ができるなどの大きな出来事で、水泳に 100%力を注ぐことができなくなる状況になった時は、引退についてシビアに考えるかもしれない。 ・引退したとしても今の会社で働きたいという気持ちが大い。今の会社は自分の好きなブランドで大ファンでもあるので。

<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先天的な障害があったが、両親が普通に育てて、本人も普通に育ったという印象がある。 ・もともと体を動かすことやスポーツが好きで、スキーや外で友達と遊んだりしていた。 ・学校の体育のプールの授業に参加したくて水泳を習い始めた。中学に水泳部がなかったため卓球部に所属したが部活動の後、母親に障害者交流センターまで送ってもらい、週 3～4 日泳いでいた。 ・高校 1 年の時初めてジャパンパラに出場し、日本代表の監督に声をかけてもらい、育成選手となる。 ・高校 2 年で国際クラス分けを受け海外の試合にも出始める。 ・徐々にパラリンピック出場を意識するようになるが、2016 年、リオ大会には出場できなかった。 ・その後、泳法を修正しなくてはいけなかったり、震災(メキシコ)のため大会に出場できなかったりした。 ・東京パラリンピックが一年延びたことで一時落ち込むが、ポジティブに捉え練習し、翌年の東京パラリンピックに出場した。 ・現在企業で週半日から 1 日ではあるが会社で他の社員と一緒に働いている。自分の気に入ったブランドの会社なので引退した後も同じ会社で働きたいと考えている。 ・所属企業社員とのコミュニケーションをとってつながりを持つ中で競技生活を続けるなど地に足の着いた競技生活を送っている印象を受けた。
------------	---

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-Iさん

インタビュー実施日時 2023年4月20日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1988年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害状況:視覚障害、1級
略歴	3歳頃から地元のスイミングクラブで水泳を始めて、小学4年生の時から障害者水泳の大会に出場している。高校から地元を離れて現居住地の盲学校に進学し、タッパーを務めていた T 先生の指導を受けた。東京パラリンピックに出場し、パリパラリンピックの出場を目指している。
競技基本情報	競技:水泳 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:水泳:3歳/障害者水泳:9歳 小学校4年生
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・中学2年生で疾病により視覚障害となり、地域の中学校からH盲学校に転校、ゴールボールと出会う。 ・兄二人が地域のスイミングクラブに通っており、2歳頃から自然と一緒にプールに入っていた。 ・小学校時代の体育は、視野がほとんどないため球技は見学であったが、それ以外の種目は全て他の生徒と同じように取り組んでいた。 ・3歳から小学校6年生まで地元のスイミングクラブに通っていた。入会に際して、(当時は若干視力が残っており)クラブ側から何も言われなかったが、大会に行った時に何かあると責任が取れないのでということで、選手コースは遠慮してもらいたいと言われた。 ・小学校1年生頃から選手コースに入ることのできる泳力があつたが、クラブ側の意向でジュニアコース所属が続き、コース内ではいつも先頭で泳いでいた。 ・小学校4年生時に参加した障害児水泳教室で、障害者水泳に関わっている人と出会い、地域大会に出場したら全国大会があり、結果によってはパラリンピックを目指せると知り、地域大会に出場した。 ・水泳教室で、のちに高等部から進学する盲学校の T 先生と出会い、「ぜひうちに来ないか」と誘われたが、中学校は地元の盲学校に進

	<p>学。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進学した盲学校は自宅から離れており、中学生のうちは週末のみ地元のスイミングクラブで泳いでいた。 ・中学校では目の手術の影響で、フロアバレー等、目に衝撃を与える可能性のある種目は見学で、盲人卓球や陸上、スキーなどは通常どおり参加していた。 ・当時を振り返ると、小学生の頃から選手コースに入ることができたら、もっと自分の泳力を伸ばすことができたかもしれないと思う。もっと早く T 先生のようなパラ水泳のコーチに指導してもらってれば、自分自身の競技者としての現在地が変わっていたかもしれない。 <p>始めた場所:地元のスイミングクラブ 重要な他者:T 先生</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校は普通学校に通い、学校対抗戦などで優勝していたが、「他の人より見えない」という感覚が頭の片隅にあり、パラ水泳であれば同じ障害程度の選手と競い合えるということがモチベーションだった。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元の盲学校中学部卒業後、現居住地の盲学校高等部に進学し、T 先生の指導する水泳部に入部し活動していた。 ・大学進学後、大学に水泳部はなく、T 先生の主宰するクラブに入ったが、自宅から活動場所が遠かったことから、大学 2 年生の時に別の障害者水泳クラブに移ったが、それほど活発に活動しておらず、大学在学中はほとんど自主練習のような状態であった。 ・大学卒業後、M 社に正社員として入社し、会社の関連団体がプールを所有していたが、同伴者がいなければ利用できないと言われ、民間フィットネスクラブ等にも問い合わせをしたが、同様の返答をされ

	<p>利用することができなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平日はフルタイムで仕事をした後、障害者スポーツセンターや他県の障害者水泳クラブの練習に参加していた。 ・2017年に現所属のI社に転職し、当初は午前中勤務で午後から練習していたが、コロナ禍以後はほぼ競技に専念するようになり、現在はナショナルトレーニングセンターで、週6日スイム、週3日ウェイトトレーニングに取り組んでいる。 <p>主な実施場所:ナショナルトレーニングセンター 重要な他者:コーチ、タッパー</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今年からパラリンピアンやオリンピックの指導経験のある新たなコーチに師事し、タッパーは3名ほどが協力してくれており、チーム体制でシフトを組んで練習している。このようなチームメンバーがいるので競技が継続できている。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・競技の第一線は来年のパリパラリンピックで終えたいと考えており、その後は視覚障害のある子供たちが水泳を楽しむ機会をつくと同時に、選手たちの競技環境づくりを進めていきたいと考えている。 ・競技引退後はフルタイムで働きながら、障害者の雇用促進に関わりたいと考えている。また、自分自身がしっかりと働くことで、「障害があっても働ける」ということをアピールし、障害のある人たちの就業に関わるサポートをしていきたい。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・3歳から水泳を始めて、小学校4年生から障害者水泳の大会に出場するようになった。 ・中学生までは地元のスイミングクラブで活動し、高校から地元を離れて他校の盲学校に進学し、水泳部で活動していた。 ・大学卒業後、フルタイムで働きながら競技を続けていたが、2017年に転職(アスリート雇用)をし、パリパラリンピックを目指して競技を継続している。

(作成者名)河西正博

氏名 23-Jさん

インタビュー実施日時 2023年5月29日 10:00-11:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1997年 性別:女性 障害発生年齢:先天性左手指欠損 障害内容:2種3級 リハビリ期間:なし
略歴	5歳からラグビーを始め、様々なスポーツを行ってきた。全てラグビーの役に立つということがその理由。形としては大学4年生までラグビーをやっていた。大学に入ってラグビーをするために高校も付属高校に進学。大学1年の頃、大学の障害者スポーツ専門のN先生に声をかけられたのがきっかけで、アルペンスキーを本格的に始めた。高校時代にスキー検定2級を取得。大学3年の時、平昌パラリンピックで入賞、北京パラリンピックも複数種目で入賞し、大学、大学院と進学、2023年3月修了。修士論文は睡眠について。2021年からK社に所属。
競技基本情報	競技:アルペンスキー クラス分け:立位 LW6/8-2 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:パラスキーは19歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・5歳で始めたラグビーを皮切りに空手(小学3年から2年間)、器械体操(小学5年から1年間)、ボクシング(小学6年)、中学校は部活で陸上競技、高校ではサッカーと卓球で3年間。 ・スポーツ万能で、小学生の頃は常にクラストップだった。 ・その間ずっとラグビーはクラブチームで続けていた。高校3年生の時にはアンダー18の選抜チームに選ばれた。大学の所属チームでも優勝に貢献した。 ・スキーは2歳の時に初めて体験した。 ・大学1年生の時に大学の障害者スポーツのN先生から声をかけられ、その年のラグビーシーズン終了後に再度声をかけられ、アルペンスキーを開始。パラスポーツとしてスポーツをしたのはこの時が初めてだった。

	<p>・ラグビーをやりたい気持ちもあったが、一方で、壁を感じることもあり、この年齢で新しい競技を始めてもうまくいかないのではと思っていた。</p> <p>・ある意味強引に、海外遠征(2016年、ニュージーランド)に参加させられ、用具や旅費の援助もマネジメント会社等からしてもらった。これはやめられないということ、また、平昌パラリンピックも迫っていたことで、気持ちもスキーに向くようになった。一方でラグビーをしたい気持ちも引き続き持っていた。今思えば、外堀から埋められてしまった感じはするが、スキーに集中する環境をつくってもらえたと考えている。</p> <p>・競技のクラス分けを受けた時、様々な海外の選手を見てこの中で1番になりたいとなぜか思ってしまった。その後、平昌パラに出場し入賞。パラが終わってから2年間はラグビーに戻らせてもらい、4年生でラグビーは引退という形になった。</p> <p>・この間、何にでも挑戦したいという気持ちと、大学の同級生、コーチや先輩たちの後押しがあってスキーに専念できたと思う。</p> <p>・最初の海外遠征からマネジメント会社の金銭的支援を受け、その後の遠征では競技団体の育成選手に対する補助、その後についた企業スポンサー、大学のアスリート支援、Yスポーツ振興財団のスポーツチャレンジ助成などの支援をしてもらった。</p> <p>始めた場所： ラグビー：県のクラブチーム スキー：家族と蓼科高原スキー場 パラスキー：ニュージーランド遠征</p> <p>重要な他者： ラグビー：父親 スキー：(2歳時)母親 パラスキー：N大学N先生</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた</p>	<p>・ラグビーなどパラスキーを始める前までのスポーツに関しては家族の影響が大きい。父母ともスポーツ経験者で、スポーツ一家で育った。</p>

社会的状況・環境・条件	<p>・東京 2020 パラリンピック開催が決定して、選手に対する支援が手厚くなってきた時からパラスキーを始めており、金銭的支援に関してはそのことが大きなアドバンテージになっている。また出身大学がパラアスリートの強化にも乗り出したことが大きく影響している。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>先天的な障害のため記載なし。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>・現在アスリート雇用。所属競技団体のスポンサーでもあった会社が雇用してくれた。現在スポンサーはついていないが所属会社が遠征費など出してくれている。8月～12月中旬までは海外遠征が断続的にある。1月に入るとワールドカップが始まる。その後4月のシーズン終了までは国内と海外の合宿・試合が複数回ある。</p> <p>・シーズン終了後は国内で NTC を利用してトレーニング。ウェイトトレーニング、有酸素トレーニングなど。今は午後に 2 時間のリハビリ、2 時間のウェイト、1 時間半の有酸素系をしている。有酸素系はバイクを漕ぐとか、インターバル、低酸素室トレーニングをしている。メニューは JISS がつくってくれる。</p> <p>・2020 年の 3 月、精神的に落ち込むことがあり、その影響もあって、大きな怪我(前十字靭帯断裂)をした。</p> <p>・その後、実家で過ごしていたが、コロナ感染拡大の影響で帰ってきていた弟が、ボクシングジムでの練習に誘ってくれるなど、心の支えとなり、徐々に精神的にも立ち直ってきた。</p> <p>・この時までは周りの目を気にして生きてきたようなところもあったのだが、これを機に自分の思うように自由に生きようと思えるようになった。派手な髪の毛の色になったりしたのもこの時以降。</p> <p>・大きな怪我だったが、これを機に有酸素運動やウェイトトレーニングを取り入れるようになり、まだまだいけるという気持ちになったことを考えれば決して無駄ではなかった。マインドチェンジのきっかけとなった。</p> <p>・高速系の障害の軽いクラスの選手は、障害のない選手と同じような</p>

	<p>練習環境で練習しないと強くなれない。9月にチリに行って練習するようなことができないとダメ。健常者のチームと一緒に練習できればいいが、今はそれができない。また、海外遠征等に帯同してくれるコーチもいなくて、そこが問題だと思う。</p> <p>重要な他者： 弟、全日本チームのコーチのIさん、大学の先輩でアスレティックトレーナーなどをしているKさん、日本代表チームのメンバーは隠し事もない家族のような存在。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ開始の社会的影響と同様、東京2020パラリンピック開催決定後の社会的変化の影響が大きいと考えられる。 ・雇用もその流れの中でアスリート雇用されている。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は次のイタリア・ミラノでのパラリンピックに集中している。そのあとのことは決まっていないが、できれば37歳(ミラノの次の次の大会)までは現役でやりたいと考えている。金メダルを取るまではやめないと断言しているので・・・50歳、60歳までやっているかもしれない。 ・現在の会社は引退後も雇用してくれる可能性があるため、アスリートの人たちに会社の商品を通して貢献できることはないかと考えている。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ一家で育ち、子供の頃からラグビーをはじめとした様々なスポーツを経験している。中でもラグビーが専門で他のスポーツはラグビーに生かすために実施したという。 ・障害については父母の「強く育てよう」という教育方針がはっきりしており、まさに強く育ったという印象を受けた。手がないうことをからかわれた時に、父親から次は「お前には心がない」と言い返せと言われた、というお話は印象に残った。 ・パラスキーは大学入学後、障害者スポーツ専門の教員の誘いから半ば強引に始めたが、本人にチャレンジしようという気持ちが芽生えたことが気持ちをスキーに向けることができた要因ではないだろうか。 ・いずれにしろ、東京2020パラリンピック開催が決定して以降の社会

	<p>的な変化の影響を受けている。とりわけ経済面での影響は大きい。</p> <ul style="list-style-type: none">・精神的不調から大きな怪我を負ったが、これもポジティブに捉え、新たな可能性を本人が感じられるようになっている点、アスリートとしての成長の途上だと言える。・雇用先が引退後の雇用も考えてくれていることからセカンドキャリアの見通しも持っていると感じた。
--	--

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-K さん

インタビュー実施日時 2023 年 6 月 1 日 16:00-17:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:2002 年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害状況:先天性疾患による上下肢障害、1 級
略歴	小学校 5 年生頃からパラ卓球を始め、中学校 2 年生頃から国内外の大会に出場。中学・高校と卓球部と学外のクラブで活動し、大学入学後は学内の卓球サークルと、パラ卓球選手との活動を並行して行っている。現在、日本肢体不自由者卓球協会次世代育成選手に指定されている。
競技基本情報	競技:卓球 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:10 歳 小学校 5 年生
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・幼稚園から小学校、中学校、高校(全て普通校)まで体育授業や学内の運動、スポーツに関わる行事は見学せず、他の児童生徒と同様に取り組んでいた。 ・自分のできる方法を考えながら、サッカーの時には松葉杖で、マラソンの時には車椅子を使うなど、場面に応じて対応していた。 ・(幼稚園から高校までを振り返って)「障害があるから特別というのではなく、普通の一人の生徒として扱ってもらったのですごく楽しかった」と述べていた。 ・小学校 5 年生の夏休みに、両親にパラ卓球女子日本代表の A 氏の講演会に連れていってもらい、その後、地域の卓球クラブを紹介されパラ卓球を始めた。また、そのクラブの監督の後輩がパラ卓球男子日本代表の B 氏であり知り合った(のちのコーチ)。 ・(陸上と卓球を比較して)「自分は肘が伸びないので、陸上は難しい、限界を感じていた。卓球は最初やってみてすごく楽しかったのも、そこから好きになった」とのことであった。クラブには 10 人ほどのジュニア選手がおり、障害があるのは自分一人であったが、みんながフレンドリーに接してくれていたのも、楽しく参加していた。

	<p>・パラ卓球を始めるにあたっては、女子日本代表の A 氏と、現在のコーチである B 氏との出会いが大きかった。A 氏と出会う前は立位で踏み台に立ってプレーしていたが、大会では踏み台の使用はできないことを知り、その後車椅子に乗ってプレーするようになった。</p> <p>・父が体を動かすことが好きで、小さい頃からいろいろな所へ連れていってもらい、いろいろなことを体験させてもらっていた。陸上は他県のクラブであったが、連れていってもらっていた。</p> <p>・他の子供たちが自分と同じ環境にあるとは思わないので、障害のある子供たちが外出する機会が増える、スポーツに出会える環境が身近にあれば、「パラリンピックを目指したい」と思う人が増えてくると思う。</p> <p>始めた場所：地域の卓球クラブ 重要な他者：日本代表選手である A 氏・B 氏</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・陸上、バスケットボール、テニス、スキー等、幼少期から様々なスポーツに親しんでいた。</p> <p>・講演会で日本代表選手の A 氏、その後 B 氏と出会ったことが、現在の卓球の取り組みに大きな影響を与えた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <p>・中学校入学後、平日は毎日卓球部で活動し、土日は中学校の外部コーチから紹介されたクラブで練習をしていた。</p> <p>・高校進学後、平日は毎日卓球部で活動し、土日は自宅で練習していた(高校 2 年生の時に両親が自宅に練習場を設置してくれた)。</p> <p>・大学進学後、平日は週に 1 回程度大学の卓球サークル、2 回程度高校時代の外部コーチと練習をし、土日は他の車椅子選手やコーチと練習をしている。中学校 2 年生頃からパラ卓球の国内大会に出場するようになり、中学校 3 年生頃から国際大会に出場している。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・大学からは国際大会出場時に、遠征費の支給を受けている。 ・自分で車を運転できるようになったことで、練習場所や遠征先に自力で移動できるようになり、活動の幅が広がったことで、現在の取り組みに満足している。 ・障害のある人がスポーツを継続するにあたっては金銭面の支援が必要であると思う。いろいろな体験会に参加をし、パラスポーツを認知したとしても、「楽しかったな」で終わってしまう人が多いと思う。なぜかと言えば、スポーツ用車椅子等の用具代や活動場所までの交通費など、金銭的な負担がかかるので、その部分の支援があれば良いと思う。 <p>主な実施場所:クラブの練習場、大学、自宅</p> <p>重要な他者:両親</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・競技を続けるにあたっては、両親の存在がとても大きい。自分が学生の立場でお金を稼いでいない中、遠征費や用具費の負担、送迎など、快く支援してくれる家族がいなければ活動できていないと思う。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・2028年のロサンゼルスパラリンピックの出場を最終目標としており、ロサンゼルスを目指す過程で、来年のパリパラリンピックの可能性が出てくれば、そこを目指していきたいと考えている。 ・大学卒業後は仕事と卓球を両立し、アスリート雇用での競技継続は考えていない。卓球だけで食べていけるとは考えておらず、また、自分の体に何かあった時に卓球には戻れないので、ここまでは仕事、ここまでは卓球に集中するという形でメリハリをつけたい。 <p>現役引退後は、卓球だけにこだわらず、障害者スポーツの認知度向上や環境づくりに関わる活動をしていきたい。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・パラ卓球日本代表選手の講演会に行ったことをきっかけに、小学校5年生から卓球を始めた。 ・中学校、高校と部活動と外部のクラブで競技を続け、高校からは自宅に設置された練習場も活動拠点となっている。 ・大学入学後は、卓球サークルと学外でのコーチ、パラ選手たちとの練習が中心となっている。大学卒業後は、仕事と競技を両立しながら

	2028 年のロサンゼルスパラリンピックを目指していきたいと考えている。
--	--------------------------------------

(作成者名)河西正博

氏名 23-Lさん

インタビュー実施日時 2023年6月5日 14:00-15:00 場所 T大学会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1998年 性別:女性 障害発生年齢:先天性 障害状況:視覚障害、1種1級(網膜黄斑変性、網膜色素変性症)
略歴	T大学附属視覚特別支援学校高等部進学をきっかけにゴールボールと出会う。高等部2年より本格的に競技に取り組み、T大学へ進学。2016年のジャパンパラで国際大会デビューを果たし、2019年のアジアパシフィック大会ではセンターとして活躍した。その後、T大学の大学院生として東京パラリンピック大会でスターティングメンバーとしてプレーした。大学院修了後はS社所属として競技を行っており、現在、日本代表チームの主将。
競技基本情報	競技:ゴールボール クラス分け:視覚障害(光覚あり) 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:16歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・生まれつきの障害だったので、そんなに見えないと感じたことはなく、周りの人よりは見えていないというのがわかったのは幼稚園の頃。 ・小学生の頃は地域の小学校に通っており、弱視学級への通級経験はあるが、障害者スポーツに出会ったのはH視覚特別支援(盲)学校中学部の時である。 ・全国障害者スポーツ大会に卓球でエントリーするため、障害者手帳も1種1級を取得した。 ・盲学校を経験したことで高等部はT大学附属視覚特別支援学校を受験、寄宿舍で3年間を過ごした。 ・ゴールボールは1年の頃から声をかけられていたが、2年になって正式に部活動として競技を開始。この部活動は卒業生も交えた活動のため、夜間の活動であり、寄宿舍と体育館を行き来する生活であった。

	<p>始めた場所:T 大学附属視覚特別支援学校</p> <p>重要な他者:顧問の T 先生、チームメイトの T さん</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<p>・T 大学附属視覚特別支援学校には寄宿舍があり、生活環境と競技環境が隣接していることから、夜間の練習であっても継続できた。</p> <p>・当時の附属チームは日本のトップレベルの選手もいたが、高等部は初心者も交えないとチーム編成が人数的に厳しい状況にあったため、試合に出る必然性があった。</p> <p>・初出場の試合において、ペナルティショットを止めたことで、会場からの拍手喝采を浴び、嬉しさと面白さを感じ、競技へのモチベーションが形成された。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・小学校の体育では多くの運動を経験できたが、特別支援学校(盲学校)中学部では卓球、フロアバレー、水泳とマット運動しか経験できなかった。そのことが、高等部に進学してもっといろいろなスポーツがしたいという気持ちにつながった。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <p>・高等部 3 年の時に 1 年間大学受験で部活動を休み、大学進学後は隣接する T 技術大学のゴールボールサークルにて週 2 回程度競技を続けていた。</p> <p>・2016 年 7 月のジャパンパラで注目され、その後強化指定選手となり、T 地区と都内での日本代表としての 2 拠点練習が始まった。</p> <p>主な実施場所:T 技術大学体育館、H 盲学校ほか都内体育館</p> <p>重要な他者:代表監督 I さん</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・東京パラリンピック大会の強化指定選手となったことが大きい。強化合宿で監督の I さんに技術、戦術、体づくりなど多くのことを指導してもらい、それを T 市に持ち帰って練習するというパターンができた。</p> <p>・定期的に都内と T 市を往復することができる環境(若手アスリート助成、移動手段としての電車)があった。</p>

今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・T大学大学院修了後、S社に就職(正社員)し、アスリートを支援するという会社の方針のもと、全面的なバックアップがあり、アスリートとして2024年のパリパラリンピックを目指して競技を継続している。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・弱視という状況で育ったが、体を動かすことに対して積極的な姿勢があり、地方から都内へと自らの意思で活動の場を広げていった。 ・T大学附属視覚特別支援学校に進学したことを契機に、クラスメイトや顧問教員の誘いでゴールボールと出会い、指導者や仲間に恵まれて競技へと誘われていく。 ・その後は強化指定選手となることで、様々な経済的・社会的支援を受けることができている。 ・競技に専念できることでさらにパフォーマンスが向上するというプラスのスパイラルを生むこととなった。

(作成者)齊藤まゆみ

氏名 23-M さん

インタビュー実施日時 2023 年 6 月 9 日 13:00-14:15 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:2001 年 性別:女性 障害発生年齢:先天性 障害状況:視覚障害、1 種 2 級
略歴	高校までスポーツとは無縁だったが、2017 年に友人の誘いでゴールボールを始める。2019 年のジャパンパラ競技大会で国際試合に初出場。2021 年チーム最年少の 20 歳で同年 8 月開幕の東京パラリンピックに出場し、大会通算得点ランキング上位を記録するなど、メダル獲得に貢献した。現在は H 社所属、日本女子代表。
競技基本情報	競技:ゴールボール 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:16 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・網膜芽細胞腫により右目の視力はなく、左目の視力は 0.06 で光やシルエットがわかる程度。 ・高校までスポーツとは無縁だったが、H 学園高等部 1 年の終わり頃に、友人の誘いで国リハのゴールボール活動に参加したことがきっかけで競技を始める。 始めた場所:国立障害者リハビリテーションセンター 重要な他者:クラスメイトの S さん(現男子日本代表選手)
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・国リハの女子チームで日本選手権に出場できるからと誘いを受けて出場したものの、完敗(ボコボコにされた)したことで本気になった。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・幼児期から小学校低学年までは通常校だったことから、見えないことで劣等感が強く、目立ちたくないという思いがあり、体育も消極的でよく見学していた。 ・小学4年から T 大学附属視覚特別支援学校に転校し、自分以外にも見えない人がいることに気づけた。

	<p>・体を動かすというよりは、自分以外にも見えない人がいるということに、すごく救われた感覚があり、見えなくてもこれだけ動けるということで人生に前向きになった。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H 学園で寄宿舎生活をしていたので、体育館の使用が容易であった。朝食前後での朝練、昼休みも壁に向かって投球などゴールボールの自主練、放課後は部活や国リハで練習、授業以外の全ての空き時間はゴールボールに費やしていた。 ・日本選手権初出場の時から、パワーがあると代表合宿に声をかけられ、上を目指して、世界と戦っていこうと思った。 ・家族が一番のサポーターであり、応援してくれる。何度も手術や転移と失明の可能性という恐怖の中で育ててくれた両親に感謝している。 <p>主な実施場所:H 学園体育館、国リハ、NTC 重要な他者:I 監督(女子代表監督)、K 先生(国リハ担任)</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・盲学校に転校したことで、「自分にできることがある」「自分もチームの中で役に立てる、必要にしてもらえる」というところが嬉しいと捉えられるようになり、自己肯定感が高まった。 ・国家資格を取得することを進め、勉強を支えてくれた先生の存在。 ・東京パラリンピックの延期に伴う内定見直しで選出された。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・H 社に所属し、パラアスリートが業務と両立して世界を目指すという部署で業務と競技を両立して世界を目指す。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・見えないことで劣等感を抱き、スポーツとは無縁だった幼少期から、盲学校で自分以外にも見えない人がいること、見えなくても積極的に動くことができると気づいた。 ・そして高校生でクラスメイトのゴールボール選手 S さんとの出会いが、ゴールボールの世界へと誘った。 ・ゴールボールを始めたことで、スポーツや運動が楽しいと思えるようになり、それに伴って性格も積極的に自分の意思で動くようになった。控えめで引っ込み思案で周囲に流されていた自分から、自分の

	意思で行動し、戦術等でも自分の意見が伝えられる、コミュニケーションが取れるようになった。スポーツがこれほどまでに人を前向きにする力となることを見せてくれた。
--	--

(作成者)齊藤まゆみ

氏名 23-N さん

インタビュー実施日時 2023 年 7 月 6 日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1990 年 性別:女性 障害発生年齢:中途障害 障害状況:頸髄損傷による両下肢機能全廃、上肢麻痺 1 種 1 級
略歴	中学生の時に障害を受傷し、高校生の時から車いすラグビーを始めた。現在はアスリート雇用で競技に専念し、チームの日本選手権出場、自身の強化指定選手の復帰を目指している。
競技基本情報	競技:車いすラグビー 主な戦績:国内大会入賞
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校 2 年生から 6 年生まで地元のスポーツ少年団で柔道をしてきた。柔道自体は好きではなかったが、友達がいるから練習に行くような感じであった。 ・中学校では(柔道は中学生から締め技が入ることが嫌で)卓球部に入部した。学校行事が好きで、体育祭の応援や合唱コンクール等には熱心に取り組んでいた。 ・中学校 3 年生の体育祭の時の事故で頸髄を損傷し、3 か月入院後復学し、卒業後約 1 年間リハビリ入院をした。 ・退院後、高校へ入学し、2 年生までは親に送迎してもらっていたが、自動車免許取得後は、学校の許可を得て車で通学するようになった。 ・障害受傷後の体育授業について、他の生徒と全て同じように取り組むことは難しく、補助教員がついており、卓球やバドミントン等、自分ができるものに取り組んでいた。 ・大学は全体的にバリアフリーが進んでおり、友人のサポートや学校の配慮があり、不自由することはほとんどなかった。大学時代はラグビー中心の生活で、クラブやサークル等の活動はしていなかった。 ・リハビリ中に、車いすラグビー選手がたまたまセンターに来ており、「ラグビーは男女混合だから女子もできる」という話を聞き、YouTube で試合の動画を見るようになった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・練習の見学に行くのであれば、親の送迎ではなく、自分一人で行きたいと思っており、当時は自動車免許を持っておらず、声をかけてもらってから、見学に行くまでに半年ほどかかった。 ・自動車免許取得後、高校3年生の5月頃に練習見学に行き、いきなり競技用車椅子に乗せられて、タックルをされ、「うわ、こわ」と思ったが、競技自体がとても楽しく、その後練習に参加するようになった。(チーム内に女子は自分一人だったが)逆に女子が一人で珍しいから頑張ろうと思っていた。 ・競技用車椅子は選手から中古車を購入し使用していた。 <p>始めた場所: 地元の車いすラグビーチーム</p> <p>重要な他者: 競技開始当時チームメイトであった、日本代表のW選手</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリテーションセンターで選手から声をかけられたことが競技を始めたきっかけであった。 ・日本代表のW選手は自分と同程度の障害、同じポジションであり、プレーをいろいろと教えてもらい、大きな影響を受けた。 ・(スポーツに対して)「自分には無理」と思う人が多く、一緒にやろうと言っても「無理ですよ」と返されてしまう。そのような人たちがどうすればスポーツをやりたいと思えるのかを考えることが大事ではないか。もっと身近で試合観戦ができたり、選手と触れ合えたりできる環境づくりが重要であると思う。 ・移動面のサポートが重要である。自分自身が自動車免許を取るまでは活動に参加できず、活動できる場所を身近に増やしていくことと、移動のバリアをいかに解消していくのが重要である。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>特になし</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は週に3~4日程度チーム練習をし、それ以外の日は自宅でストレッチやトレーニングをしている。 ・練習は複数チームの合同練習はパラアリーナで行っており、移動に

	<p>不都合はないが、平日夜のチーム練習は自宅から距離があることから行けないこともある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内大会は年3～4回あり、それ以外に各チーム主催のオープン大会が年3回程度実施されている。 ・現在はアスリート雇用で競技を続けており、競技用車いす、トレーニング、交通費等は所属先が負担してくれており、現在はほとんど自己負担がない状況である。 ・競技を続ける上で家族の存在がとても大きい。子供が体調を崩して保育園を休んだ時には夫が面倒を見てくれており、子供が生まれてから、もっと頑張ろうという気持ちが強くなった。 ・競技を継続する中で、持ち点の近い日本代表選手には刺激を受けている。チームメイトのI選手はプレー面で自分にはないものをたくさん持っており、手本であると同時に自分が超えていかなければいけないライバルでもある。また、女子のK選手が日本代表で活躍しており、彼女が頑張っているから自分も頑張れている。 ・車いすラグビーはとてもお金がかかる競技であり、もし所属先のサポートがなければ活動は続けられず、「こんなにお金のかかる競技はやってられない」と思う。 ・(車いすラグビーで)ローポインター(障害の重い選手)は、スタッフがいなければ日常車から競技車への移乗ができず、それ以外のサポートについても人手が必要で、選手だけでなくスタッフをもっと増やしていく必要がある。競技の普及や認知度を上げていく活動が必要である。 <p>主な実施場所:チームの練習場、自宅</p> <p>重要な他者:所属先企業、家族</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・競技継続にはかなりの金銭的な負担が必要になるが、所属先の支援で活動できている。 ・家族の支援や子供の存在がとても大きく、活動のモチベーションになっている。 ・チームメイトの日本代表や女子選手の存在に日々刺激を受けてい

	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2012年のロンドンパラリンピックの車いすラグビー(3位決定戦で日本代表が敗れた試合)の映像で、選手たちが泣いている姿を見て、自分も頑張らなくてはと思い、競技へ取り組む姿勢が変わった。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・チームの日本選手権出場が第一の目標である。 ・個人としては強化指定選手への復帰(2021年3月まで強化指定選手であった)を目指している。 ・何歳までプレーするという具体的な目標はないが、日本代表を目指すというレベルでできなくなったとしても、生涯スポーツとして体力づくりを兼ねてラグビーを続けていきたいと考えている。 ・所属先と競技引退後の話は具体的にしていないが、引退後働ける環境はつくってくれるとのことなので、そこで働きたいと考えている。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・障害受傷後、リハビリテーションセンターで選手から声をかけられて車いすラグビーを始めた。 ・現在はアスリート雇用で所属先の支援、家族のサポートを受けながら競技を継続している。 ・現役引退後も生涯スポーツとしてラグビーは継続していきたいと考えている。

(作成者)河西正博

氏名 23-O さん

インタビュー実施日時 場所 2023年7月11日 14:00-16:00 場所 都内貸会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1986年 性別:男性 障害発生年齢:先天性 障害内容:先天性網膜芽細胞腫 1種1級 リハビリ期間:なし 生まれつき視力がほとんどなく、現在の視力は右 0.01、左 0。
略歴	小学部、中学部、高等部普通科、専攻科と同じ特別支援学校に通う。専攻科では、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師を養成する鍼灸手技療法科に進学し、卒業時には 3 つ全ての資格に合格した。卒業後、接骨院に1年半、製薬会社にヘルスキーパーとして3年半勤務したのちに、現在の所属先でもある障害者スポーツ選手雇用センターと民間保険会社にヘルスキーパーとして勤務する。中学校の体育でゴールボールに出会い、高等部 1 年時にゴールボール部に入部した。卒業後も選手を続け、日本選手権 3 連覇を果たす。2012 年には日本選手権 MVP、2016 年には日本選手権で得点王を獲得する。現在も就業する傍ら、ゴールボールの選手としても活躍している。
競技基本情報	競技:ゴールボール 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:16 歳 高等部のクラブ活動で本格的に始めた
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・中学校の体育でゴールボールを体験した。重いボールを投げるのが楽しかった。高校に入学して、T 先生からの勧めがあり、ゴールボール部に入部した。自分を必要として、誘われたことが嬉しかった。自分の居場所がここにあると思った。 ・誰かの指示を受けず、全員が見えない中で、自らの意思で戦略を立て、判断してプレーする競技性が魅力だった。 始めた場所:高校のクラブ活動 重要な他者:学校の教員 T 先生

<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>特になし</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>特になし</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況①:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入部して 3 か月で当時の日本代表と練習試合を行った。1 点も取れずに負けて、日本代表の強さに衝撃を受けた。自分も代表選手のように速いボールを投げたい、強いボールを投げたいという思いが大きくなり、ゴールボールにのめりこんでいった。 ・自分が挑戦し続ける環境で、目指すべき人、選手が身近にいるのが刺激になった。 <p>主な実施場所①: 高等部の体育館</p> <p>重要な他者①: 日本代表選手</p> <p>継続状況②:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴールボールを継続できたのは周囲のサポートがあったから。ゴールボールがあったから、現在の仕事にも就けているし、メディアに出て、世間に存在を知ってもらえたと考えている。 ・ゴールボールに出会えたから、日本代表にもなり、海外遠征にも行き、パラリンピックを目指している。現状、これまでお世話になった人たちに恩返しができている。パラリンピックに出場して、活躍する姿を見せて恩返しをしたい。 <p>主な実施場所②: 特になし</p> <p>重要な他者②: 指導者、所属企業の社員</p>

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	特になし
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・いつまで現役が続けられるかわからないが、パリパラリンピックに出場することを目標にする。 ・引退後も、現在の所属先で勤務を続け、若い選手の指導やサポート、育成に関わっていきたい。 ・プレーヤーとしての経験の還元などに加えて、マッサージなどで選手の身体的ケアにも貢献したい。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・就職した 2008 年当時、パラリンピックはそれほど世間に認知されておらず、アスリート雇用を考えている企業もほとんどなかった。 ・仕事をしながらもゴールボールを続けたい思いが強く、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の資格を全て取得して、ヘルスキーパーとして企業で働いている。自分で環境をつくる努力、苦勞をしている分、現在の環境に感謝している。 ・所属している障害者スポーツ選手雇用センターと民間保険会社では、現在も講演活動や体験会、ヘルスキーパーとしてのマッサージ業務を行っている。いずれも引退後を見越し、自分が社会に貢献できる方策を常々考えている。 ・ゴールボールに誘ってくれた T 先生の存在は非常に大きい。高校時代から、長年指導を受けてきて、プレーだけでなく、人としての立ち居振る舞い、社会との関わり方など多くを学んだ。その教師がいなかったら、ゴールボールを継続していることもなかった。結果での恩返しできていないので、パリパラリンピックに出場して恩返しをすることが、未だに競技を継続している大きな理由である。

(作成者)小淵和也

氏名 23-P さん

インタビュー実施日時 2023 年 7 月 14 日 15:00-17:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:2001 年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:脳性麻痺 1 種 2 級 リハビリ期間:なし
略歴	保育園は障害児受け入れ可の保育園、小中学校は特別支援学校、高校は普通校に通った。高校卒業後、関東で就職(1 年間)したが練習環境が整わないことから地元へ転職。現在、両親と妹の 4 人暮らし。仕事は地元で母親が経営する会社で放課後等デイサービスを行っている。日常生活で車椅子は基本的には使っていない。
競技基本情報	競技:自転車競技(トライシクル) クラス分け:T2 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:水泳/1 歳半 陸上競技/中学 1 年 自転車/高校 1 年
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・3 歳くらいまで定期的に母子入所で療育をしていた。運動やリハビリに関して嫌な記憶はない。 ・母親が水泳のインストラクターをしていたこともあり、1 歳半から水泳をやっていた。水の中は浮力もあり、動きやすかった。スイミングは母親が勤めていた場所で、最初は母親と水遊びのようなことから始め、母がそこを辞めてからは母親の同僚コーチが教えてくれた。一般のスイミングクラブだったので障害のない子供たちと一緒に参加。泳ぐ時に自分の後に泳ぐ人との距離を空けるなどの配慮をしてくれていた。 ・得意な種目は自由形(クロール)、腕には障害があまりないので。中学の時一度だけ試合(S 県障害者スポーツ大会等)に出たが、その後スイミングをやめた。 ・(余談)子供の頃は脚の拘縮がきつかったが、ウェイトトレーニングをするようになってからそれが緩和された。 ・保育園(一般)では高所など危険なところへは行かなかったが、友達と走り回っていた。小学校は家族と相談しつつも設備等の環境を重視して自分の判断で特別支援学校へ行った。

	<ul style="list-style-type: none"> ・長距離移動は疲れてしまうので小学校低学年の時から車椅子を使うようになった。 ・体にメスを入れるような手術はしなかったので、体を動かすことに影響しているということはない。運動することに抵抗はなかった。 ・子供の頃は PT とボイタ法(※)のほか、ST と OT によるリハビリを していて、じっとした姿勢をとることが多く、動きたいという気持ちが 強かった。 ・特別支援学校小学部の体育ではフライングディスクやサッカー、全 員四つ這いになってのハンドサッカーのような競技をしていた。運動 会は個人競技中心で実際に参加していた。授業も運動会も見学は なかった。うちに帰ってから近所の川沿いを走ったりしていた。 ・中学部に上がり、水泳をやめた後に、中学校 1 年の秋から陸上競技 を始めた。母親は陸上競技のコーチもしていたので(母親は体育短 大を卒業、陸上競技が専門、就職先のスイミングクラブで水泳も教え ていた)、地域の小学生から高校生で構成される陸上のクラブチーム に入った。地元の総合運動場で活動していた。短距離(50m)や投て き(ジャベリックスロー)などをしていた。 ・陸上で試合に出たのは中学1年の秋の記録会、その後、県大会や全 国障害者スポーツ大会にも出場。 ・中学部の 3 年生の時に学校に陸上部をつくった。 ・中学部でも体育の授業を休んだり見学したりすることはなかった。 ・大学に進学したいと考えていたことから、特別支援学校の高等部で はなく、一般高校に進学した。大勢で授業を受けたり、集団行動をし たりする経験が少なかったので不安はあったが、入ってみるとみんな よくしてくれた。体育の時間も気にかけてくれる友達がいた。 ・体育の先生は見学してもいいよと言ってくれたが、やれるところまで は自分でやりたいという気持ちがあった。周りの友達も最初は戸惑 っていたかもしれないが、自分から積極的に関わっていくことで馴染 んでくれたと思う。 ・高校 1 年の時(2016 年)、陸上競技大会開催時に人材発掘事業を やっていた。そこで初めて自転車を体験した。この時、県障害者スポ
--	--

	<p>ーツ協会の N さんが声がけをしてくれて体験することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自転車には小学校低学年から後ろが二輪の自転車(ママチャリ)に乗っていた。これで通学もしていたので自転車なら乗れるかと思った。 <p>始めた場所:</p> <p>(水泳)スイミングスクール</p> <p>(陸上競技)地域の陸上競技クラブ(S市の総合運動場・陸上競技場)</p> <p>(自転車)選手発掘事業 K 陸上競技場～サイクルスポーツセンター</p> <p>重要な他者:</p> <p>(水泳)母親</p> <p>(陸上競技)母親</p> <p>(自転車)現在のナショナルチームの監督:発掘事業で自転車をやらないかと声をかけてくれた。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・(水泳)母親が勤めているスイミングスクールがあった。 ・(陸上競技)地域の陸上競技クラブがあったこと。 ・(自転車)東京パラリンピック開催が決まり、国や自治体が選手発掘事業に予算をつけ実施していたこと。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>先天的障害のため記載なし</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発掘事業で自転車を経験して 2 週間後、県のサイクルスポーツセンターでの体験会に参加。ナショナルチームの監督やコーチ、トライシクルの選手が自転車の乗り方から、トレーニング方法まで指導してくれた。 ・その後、自宅にトレーニング用のワットバイクを貸していただき自宅でトレーニングをするようになった。練習は最初の頃は 1 日に 1～2 時間程度実施していた。 ・高校 3 年生の時に出場した日本選手権が初めての自転車の試合。自分のクラスで出場する選手が自分だけだったので、形の上では優

	<p>勝であったが、この時の目標は完走することだった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学進学を当初は考えていたが、練習環境を考えると難しそうだったため進学せず、2019年に自転車のナショナルチームの先輩がいた会社に就職。就職と同時に強化指定選手になり、練習頻度がかなり上がり、月の半分は合宿に参加し、外で練習したりするようになった。 ・強化指定選手になったことで金銭的な支援があり、経済的な面で大きく困ったことはない。 ・就職後、フィールド主体の実践的な練習をもっとする必要があると感じた。この時(2020年)コロナ感染が拡大し、練習ができなかったため、実家に帰り地元で練習し始めた。地元での練習が充実していたこともあり、会社を辞め、S県に帰った。S県では母親の経営する会社に入り、放課後にデイサービスの仕事などを行っている。 ・合宿中は午前中自転車練習、午後は自転車練習とウェイトトレーニング、合宿がない時は午前中練習、午後1時から6時半まで仕事、その後に再度練習するような生活。週6日練習している。 ・現在は強化指定選手としての支援、県からの支援等を受けている。 <p>重要な他者： ナショナルチームの監督やコーチ、またチームの仲間 雇用者としての母親</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京パラリンピック開催決定後の充実した選手強化費のおかげで経済的負担が少ない。 ・地元S県に自転車競技のバンクなどがあり、練習環境に恵まれている。 ・母親が経営する会社に勤務できていることで経済的な不安が少なく職場での理解も得やすい環境にある。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今現在は、2028年のロサンゼルスパラリンピックには出場したいと考えている。その後のことはあまり考えていない。それよりも今は目の前のパリパラリンピックのことを一番に考えている。

<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先天的な障害(脳性麻痺)であるが、体にメスを入れるような手術や痛い思いをするようなリハビリは経験していない。また母親がスポーツ関係の仕事をしていたこともあり、運動やスポーツには幼少(1歳半)の頃から親しめる環境があった。 ・また、運動を続けるための受け皿(スイミングスクールや地域の陸上競技クラブ)などがあり、スポーツを継続できる条件が整っている。 ・東京パラリンピックの招致決定後に実施されるようになった発掘事業で自転車に出会い、その後強化指定選手となり競技団体や県などから支援が受けられるようになった。 ・また母親が経営する会社に勤務しており、その点で競技継続に関して職場の理解も得やすいし経済的な不安も解消されている。 ・特別支援学校でもっといろいろな競技が体験できる環境があると自分のような状況の人もスポーツに入りやすいと考えている。
------------	--

(作成者名)藤田紀昭

※ ボイタ法は、小児神経科医のボイタ博士が1950～1960年代にかけて治療原理を確立した運動療法。子供にうつ伏せや仰向けの特定の姿勢(出発肢位)をとらせ、身体の特定の部位(誘発帯)を刺激することで全身に運動反応(反応)が繰り返し引き出される運動療法である。

氏名 23-Q さん

インタビュー実施日時 2023 年 8 月 5 日 13:30-15:00 場所 G 県アリーナ

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:2003 年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:脳性麻痺 1 種 2 級 リハビリ期間:1 歳の時、斜視の手術、4 歳の時、股関節と膝の裏を伸ばす手術、小学校 3 年の時、アキレス腱の手術(尖足の改善)。それぞれ入院を伴っていた。
略歴	保育園は一人のサポートがつく形で一般の園に、小学校は普通学校、中学・高校は特別支援学校へ通う。現在、福祉関連学部の大学 2 年生。療育の一環で住まいの近くのスイミングスクールで水泳を始める。中学 3 年の時、体験会でボッチャを体験し、同時期に設立された県ボッチャ協会に声をかけてもらったことを契機にボッチャを始める。
競技基本情報	競技:ボッチャ、水泳 競技成績:全国大会出場 競技開始年齢:水泳 2 歳、ボッチャ 15 歳(高校 1 年)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・(母親談)生まれてすぐ(5 か月くらい)の頃から療育に通い、そのメニューの中にプール活動があった。水泳中心でボバース法などをやっていた。その時に「ああ、この子は泳げるな」と感じた。その延長で水泳を始めた。 ・(母親談)療育は体の運動を中心にお願いをしていた。小さい頃は嫌がることもあったが、リハビリの先生がそのあたりは各種資格を持った資質の高いプロで、ほとんど嫌な思い出はないと思う。 ・プール活動を始めたのは保育園の年中か年長の頃からで、中学校 1 年か 2 年までスイミングスクールに通った。近隣のスイミングスクールに障害児を受け入れてくれるところがあったので、スイミングスクールでの受け入れには問題がなかった。障害児を指導できる指導者もいた。 ・このスクールには近所の子供たちも通っていたので自然と情報が手に入った。

	<p>・泳ぐことは嫌いではなかった。水の中であれば自由に動けるし、手術の前後など泳げないこともあったが、それ以外は継続的に泳いでいた。</p> <p>・小学校と中学校の時には記録会レベルのものだが大会にも出場した。</p> <p>・継続的なものではないが、車いすバスケットボールやフライングディスクなどの体験的な行事に参加したりしていた。これらの情報は特別支援学校に詳しい先生がいたため得られた。</p> <p>・小学校の時の体育はバレーボール、バスケットボールなどは参加できず、得点付けをしていた。マット運動やシャトルランなど個人種目はできる範囲で参加していた。全体で見れば6割くらいは参加していた。</p> <p>・小学校へは基本一人で通ったが、修学旅行のような郊外行事の時は父親または母親が付き添った。</p> <p>・運動会の徒競走などは距離を短くして参加した。</p> <p>・小学校から高校までいじめのようなものはなかった。</p> <p>始めた場所：県内の療育機関</p> <p>重要な他者： 母親、療育機関の指導者、スイミングスクールの指導者</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・療育施設の存在</p> <p>・療育施設での指導者の資質の高さ。</p> <p>・近隣に障害者の受け入れが可能なスイミングスクールがあったこと。また、その指導者が障害者の水泳に通じている人であったこと。</p> <p>・両親が手術を受ける病院などかなりリサーチしたこと。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>先天的障害のため記載する内容なし。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>・中学校は特別支援学校に行った。中学校でのスポーツと言えば体育でボッチャやフライングディスクを少しやるぐらいだった。</p> <p>・水泳は通っていたスイミングスクールの造りが古く、入り口の階段も</p>

	<p>きつかった。体が小さかった頃は一人で上れたが、体が大きくなると一人で上るのが危険になったことから、スイミングはやめたが、嫌いになったということではない。スイミングをやめてからは県立の障害者用プールで時々泳いだりはしていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水泳は自分の得意なことのひとつで、小学校の頃も体育の授業でスムーズに参加できたため、自信にもなった。そういうことから続けられたと思う。また、もともと喘息があり、脳性麻痺で体が硬くなりやすい傾向があり、そういうことに対しても水泳はいい影響があったと思う。 ・水泳の得意種目は背泳ぎ、それから平泳ぎ。自由形は背泳ぎで泳ぐ。バタフライ以外は泳げるが、足が使えないためクロールは厳しい。 ・特別支援学校で体育だけはほぼ参加できるようになったが、運動量や運動の質の面においては物足りなさを感じていた。 ・高校の部活動はパソコン部に入り、ブラインドタッチできるくらいになった。水泳は続けたが、たまに泳ぐ程度であった。中学校の時にパラスポーツ体験会でボッチャを体験。その頃、県にボッチャ協会ができて、声をかけてもらったのをきっかけに、ボッチャを始めた。 ・高校になり、県立の障害者スポーツ体育館(本人が通った特別支援学校等と共用)ができて、その頃(高校 1 年)からちゃんと練習を始めた。 <p>重要な他者： スイミングスクールの指導者(障害者の支援、身体に関する知識、水泳の指導方法、障害者との接し方などに優れた指導者) ボッチャを始めるに際して声をかけてくれたボッチャ協会のスタッフ。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピック国内開催が決まり、障害者スポーツの機運の高まりがあった。またそれまでは行われることが少なかったパラスポーツ体験イベントなどが開催されるようになっていたこと。 ・2016年のリオパラリンピックで日本がボッチャでメダルを獲得したことが刺激となった。 ・パラスポーツ体験会でボッチャを体験したこと、同時期に県ボッチャ協会ができたこと。

	<ul style="list-style-type: none"> ・県の障害者スポーツ体育館が造られたこと。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、社会福祉士の資格取得を目指している。将来は障害児の就学や就職支援に携わるような仕事をしたい。自分は特別支援学校に行ったが、同級生は数人と少なく、勉強も自分の納得がいく内容ではなかった。一般学校に行きたい子供が行けるように支援したい。 ・ボッチャは大会でいい成績を残したいというのではなく、趣味として続けていきたい。今は大学の勉強のほうも大変なので。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・先天的障害があり、年少の頃から手術や療育を受けてきた。リハビリなどを通して運動やスポーツが嫌いになるのではなく、自分の自信につながっていた。これは両親が良い指導者のいる施設(病院)等を探し、そこで障害児指導に関して資質の高い指導者による指導が受けられたことが影響している。 ・また、両親とも剣道をやっていたことから運動やスポーツには親しみと関心を持っていたと考えられる。 ・その後に入った地元のスイミングスクールにも障害児水泳の良い指導者がいたことで水泳を続けることができた。 ・残念ながらスイミングスクールの入り口前の階段の勾配がきつく、体の成長に伴い、上り下りが危険になってきたためスイミングスクールをやめざるを得なかった。 ・中学 3 年時にパラスポーツ体験会でボッチャを体験。同じ頃に設立された県ボッチャ協会スタッフに声をかけられボッチャを始めた。高校 1 年時に県の障害者スポーツ体育館が新しく造られ、競技を本格的にするようになった。 ・現在、大学 2 年生で社会福祉士を目指して勉強をしており、将来は障害児の就学や就労の支援ができる仕事に就きたいと思っている。スポーツでトップを目指すのではなく、趣味として続けたいと考えている。 ・障害のある普通の青年がやりたい仕事を目指して勉強し、趣味としてスポーツを続けているという姿が非常に頼もしく、好ましく感じた。

(作成者)藤田紀昭

氏名 23-R さん

インタビュー実施日時 2023 年 8 月 7 日 10:30-12:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:2003 年 性別:男性 障害発生年齢:先天性 障害状況:脳性麻痺、1 種 2 級 リハビリ期間:現在も柔道整復師の父に毎日施術してもらっている。 併せて専門の方から定期的に受けている。
略歴	小学校、中学校、高等部全て普通学校。小学校 4 年生の時に自分の障害は治らないことを自覚し、自殺を考えるぐらい落ち込んだ。その後、小学校 5 年生ぐらいから体を動かしたいという気持ちになった。障害者スポーツ協会の方から様々なスポーツを紹介されて体験した。近くの総合型地域スポーツクラブへも通った。その中で、自分の意思で行きたいところへ行ける喜びを感じた水泳を選んだ。小学校 6 年生からクラブチームで水泳を続けている。中学生後半からは車椅子を使用するようになった。高校生の時に教員になりたいという夢を持つようになり、教員免許が取得できる大学へ進学。大学にプールがないため、県立プール、スポーツクラブで週 6 回練習。現在は、パリパラリンピックでのメダル獲得を目標に取り組んでいる。
競技基本情報	競技:水泳 バタフライ(50m) クラス分け:S7(自由形・背泳ぎ・バタフライ)、SB6(平泳ぎ)、SM7(個人メドレー) 主な戦績:国際大会入賞 競技開始年齢:11 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校 5 年生までは特に何もやっていなかった。小学校 4 年生の時に自分の障害は治らないことを自覚した。人生で一番と言えるほどつらく、自殺を考えるぐらい落ち込んだ。その様子に気づいた周りの友達や家族、先生が声をかけてくれたり、外に連れ出してくれたりしたおかげで乗り越えることができた。 ・小学校 5 年生ぐらいから体を動かしたいという気持ちになった。母親の知り合いに障害者スポーツ協会の職員がおり、その人から様々

	<p>なパラスポーツを紹介された。</p> <p>陸上、水泳、車いすバスケットボール、テニスなどを体験した。地元の総合型地域スポーツクラブにも足を運び、マット運動や鬼ごっこなど様々な遊びを体験した。その中で、楽しい、自分の意思で行きたいところへ行ける喜びを感じたのが水泳だった。小学校 6 年生からクラブチームに入会し水泳を始めた。クラブにはコーチが在籍しており、障害の特性に応じた指導を受けることができた。</p> <p>始めた場所：Oスイミングスクール</p> <p>重要な他者：</p> <p>開始期：様々なパラスポーツ競技の体験をさせてくれた県障害者スポーツ協会の M さん、送迎や様々なサポートをしてくれた母親</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校、中学校、高等部全て普通学校。先生や周りの友達も協力的で、体育の授業ではルールなどを工夫し、できる限り参加した。 ・母親の知り合いに障害者スポーツ関係者がいたことで、様々なパラスポーツを体験することができ、自分がやってみたいと思う競技を選択することができた。 ・現地までは家族が送迎をしてくれた。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園から小学校までは 1 クラスで、長い期間を同じ仲間と過ごした。 ・特定の競技は行っていない。体育の授業はできる限り参加。先生や友達も協力的で、ルールなどを工夫してくれた。運動会も参加した。 ・近隣の総合型地域スポーツクラブでは、マット運動や鬼ごっこなど、様々な運動や遊びを行った。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校 6 年生の時、障害者の水泳クラブチームに入会。当初は週 1 回程度練習に参加。 ・中学生になってからは、週 2 回程度、高校生では週 5 回程度練習。クラブにはコーチが在籍しており、専門的な指導を受けることができた。 ・現在、大学に所属し、週 6 回練習を行っている。大学にプールがないため、県立プールとスポーツクラブを利用。

	<ul style="list-style-type: none"> ・民間スポーツクラブのプールでは、一般の利用者と共同でレーンを使用するが、定期的にご利用していることから顔見知りが多く、譲り合って使用することができており、練習環境としては問題ない。 ・しかし、プールの設置者によっては、車椅子を理由に断られることがあり、練習場所は限られている。 ・練習場所への送迎はいつも家族が交代で行っている。 ・パラリンピック出場へ向けて「チーム K」を結成し、指導面、トレーニング面など、様々な専門家にサポートしてもらっている。 <p>主な実施場所：県立プール、スポーツクラブ</p> <p>重要な他者：障害の特性に応じた指導をしてくれるコーチおよびトレーナー、練習場所への送迎をしてくれる家族</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2016年のリオパラリンピックで憧れている先輩が泳いでいるのを見て刺激になった。先輩からは直接メダルを見せてもらった。 ・2021年の東京パラリンピックでも先輩や知り合いが出場していて、とても刺激になり目標を持つきっかけとなった。 ・日本パラ水泳連盟の強化指定選手には入れていないが、県の強化指定選手に選ばれた。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パリパラリンピックに出場しメダル獲得を目指す。2028年のロスパラリンピックも視野にいれている。 ・愛知県で開催予定の2026アジアパラ競技大会にも出場したい。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツを始めるにあたっては、障害者スポーツ協会の職員、送り迎えや様々なサポートをしてくれた母親が重要な他者として挙げられた。 ・様々なパラスポーツを体験することにより、自分に合った競技を選択することができた。 ・しかし、小学校5年生までは体育の授業以外でパラスポーツに触れる機会はなく、情報もなかった。幼少期からパラスポーツに触れ、体験できる機会があればもっと早くパラスポーツを始めていたと考えている。 ・継続の条件としては、週6回継続して行える練習環境、障害の特性

	<p>に応じた指導ができるコーチやトレーナー、送迎をしてくれる家族のサポート、ロールモデルとなる憧れの先輩の存在が挙げられた。</p> <p>・直近の目標はパリパラリンピックに出場しメダルを獲得すること。</p>
--	--

(作成者名) 兒玉友

氏名 23-S さん

インタビュー実施日時 2023 年 9 月 15 日 15:00-16:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1991 年 性別:男性 障害発生年齢:10 歳 障害内容: 視覚障害 1 種 2 級、視力障害および視野狭窄、網膜色素変性症 リハビリ期間:なし
略歴	小・中・高校と H 県の一般学校に通う。小学校 4 年生の時に網膜色素変性症を発症し、以降視力、視野が落ちる。小学校 1 年から高校 3 年までは剣道をやっていた。3 段。県インターハイベスト 4。高校卒業後、関西の調理師学校に通い調理師免許を取得。その後、中華料理店に就職したが、視覚障害により退職した。退職後すぐに、国立障害者リハビリテーションセンター(国リハ)へ入学し、ゴールボールと出会う。国リハでは鍼灸あんまマッサージの資格を取得した。国リハを卒業後、現在の職場に正社員として選手雇用される。2023 年(今年)パリパラリンピック出場権を獲得した。
競技基本情報	競技:ゴールボール 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:23 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校 1 年生から高校 3 年生までは剣道をやっていた。剣道は 2 歳上の兄がやっており、自分も興味を持った。 ・小学校 4 年から徐々に目が悪くなり、暗いところで人とぶつかったりした。特に中学・高校では目が悪くなることで、精神的にもつらく、やり場のない気持ちを親、特に母親にぶついたりもした。 ・体育の授業では球技はボールが自分の視野の外にあるとどう対応していいかわからず、あたふたしてしまう。そういう姿をみんなの前で見せることが精神的にきつかった。 ・高校は推薦でスポーツの強い学校に行き、みんなスポーツがうまくハイレベルな中で自分はそういうわけにはいかず、体育は嫌いだった。

- ・高校卒業後は自立しなくてはいけないという気持ちがあった。料理が好きだったこともあり、地元を離れ関西の調理師学校に行った。
- ・調理師免許を1年で取り、中華料理店に就職した。最初の2年間は下積みでつらかった。その後の2年は料理を作らせてもらえるようになり、店の看板メニューを作るまでになった。しかし、視力の衰えから限界を感じ退職した。
- ・退職後ハローワークに行き、国立障害者リハビリテーションセンターのことを教えてもらい、すぐに願書を出した。
- ・2014年4月に入学、最初の頃は時間的にも大変だったが、生活のペースがつかめ、余裕ができ体を動かしたくなった。体育の授業などでブラインドサッカーや他の種目も経験したが、ゴールボールはパラリンピックスポーツということで夢もあると思って決めた。この年は指を怪我(骨折)したこともあり、翌2015年から本格的に始めた。
- ・この頃ゴールボールのチーム(クラブ)ができ、草野球レベルだったが、発足して間もないクラブチームに入り、ゴールボールに打ち込むようになる。
- ・続けているうちに、メンバーの気持ちも盛り上がってきて日本選手権を目指そうという感じになった。ほぼ毎日(週に5~6日)練習をしていた。その年に日本選手権に出ることができ、優勝はできなかったが日本代表が3人いるチームに勝つことができた。
- ・翌年の2016年、最終学年で日本選手権の予選で準優勝し、その大会でMVPをとったことがきっかけで、日本代表監督にスカウトされ代表チームに入ることになった。
- ・高校までは視覚障害がコンプレックスだったし、受け入れられず、荒れたりもした。しかし、国リハに入ってから視覚障害に対する考え方が全く変わった。国リハだと自分より見えない人もたくさんいて、それでも楽しそうに生活をしているのを見て、自分の視覚障害が馬鹿らしく思え、視覚障害であることを笑いのネタにしようと思った。笑いに変えるのが一番いいかなと思った。見えないということが恥ずかしいという感覚がその時に全部なくなった。白杖も使わなかったのが使うようになった。

	<p>始めた場所： (剣道)近隣の剣道場 (ゴールボール)国立障害者リハビリテーションセンター</p> <p>重要な他者： (剣道)兄、道場の指導者 (ゴールボール)国リハのゴールボール部のメンバー(クラブをつくってくれた)は、下手で技術はなかったが、みんなやる気に満ち溢れていた。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国立障害者リハビリテーションセンターの存在 ・東京 2020 オリ・パラの開催が決まっていたこと ・国立障害者リハビリテーションセンターにゴールボールクラブがつけられたこと
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・剣道で精神は鍛えられたと感じている。相手と対峙した時に精神的に負けないという気持ちの持ち方は剣道とゴールボールは通じるものがある。過酷な環境の中でも集中してやるという点でも役立っている。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2017 年、国立障害者リハビリテーションセンターを卒業と同時に現在の会社へ選手雇用(正社員)として入社した。 ・会社は代表チームのスタッフや女子日本代表チームでこの会社に雇用されている選手などの話も聞いて決めた。会社はよりゴールボールに打ち込める環境を第一優先として決定した。東京オリ・パラが盛り上がりを見せている時で、これは人生かけてやるべきことだろうと考えた。とにかく東京パラリンピックに出場するんだと。 ・会社ではマッサージをやりたかったのだが、場所の問題などもあり、アスリート活動と講演活動の2つを会社の仕事としてやっていくことになり、現在に至っている。 ・東京パラリンピックが延期された時、コロナ感染拡大で練習ができなくなった。代表監督も新しい人に代わり、この人のおかげで月の3分の2をナショナルトレーニングセンターイーストで合宿ができるようになった。合宿ができることに加えて、フィジカルトレーニングコーチがついてくれるようになった。男子が強くなったのはこの2つのこ

	<p>とが大きい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京パラリンピックが終わり、一旦引退した。(生活の)環境なども全部変えたいと思ったから。マッサージ師への転職を考え実際に就職活動もしていた。ゴールボールは引退したが上司のアドバイスもあり、会社には残った。 ・引退後、育成コーチを1年間やった。コーチになって自分が教えられるもの、材料が少ないと感じ、もう少し現役でやらなくてはと思った。代表選手からも戻ってこいと声もかけられ、そうしたことが積み重なって現役に復帰した。 ・合宿中は午前中ゴールボールの練習、午後フィジカルトレーニングまたはゴールボールの練習、合宿がない時は午前中に NTC イーストでフィジカルトレーニング、午後ゴールボールの練習がある時は強化拠点施設で練習。 <p>重要な他者： 東京パラリンピック後、会社に残ることを勧めてくれた今の上司。 親(親に迷惑をかけた分頑張っている姿を見せてお返しをしたい。そのことがモチベーションになっている)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2013年に東京オリンピック・パラリンピック開催が決まり、障害のある人の選手雇用が始まっていた。本人だけでなく他の選手も選手雇用されるようになり合宿の期間延長、平日の練習が可能になった。 ・ナショナルトレーニングセンターイーストの完成。 ・ナショナルコーチ制度ができ、専門コーチの指導を受けられるようになったこと。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・将来的なことは今のところ会社とは話をしていない。先のことをあまり考えるタイプではないのでその時その時の判断でと思っている。 ・選手としてはロサンゼルスパラリンピックまではやりたいと考えている。 ・選手としてこの先もやっていきたいと考えている伸びしろはまだまだあると感じる。最終的には代表チームの監督をやりたいと考えている。いつのことになるか見通しがあるわけではない。

<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・10 歳の頃から徐々に視力、視野が衰えていった。視覚障害特別支援学校がどのような世界かもわからず不安もあったため、一般高校に進学した。剣道の推薦でスポーツ強豪校に入学したものの、視覚障害の影響で思ったような動きやプレーができず悶々とする日々が続き、家族にもあたることが度々あった。 ・専門学校に入学、就職するが、視覚障害の壁に当たり、4 年間在籍した後、国リハに入学した。国リハに入ったことが転機となり、視覚障害を受け入れ、前向きな気持ちになった。 ・国リハでゴールボールに出会い、良い仲間にも恵まれ日本選手権に出場するなど力をつけていった。 ・東京オリ・パラ開催決定後で障害のある人の選手雇用等の機会が広がる中で就職(選手雇用・正社員として)した。ここで十分練習できる環境ができたこと、NTC イーストの利用が可能になったことやフィジカルコーチの指導を受けるようになったことでさらに力をつけた。 ・東京パラリンピックで入賞し、一旦は引退したが、コーチとして指導するにはもっと経験をすべきと考え 1 年後に復帰。 ・2023 年 8 月にパリパラリンピックの切符を取得した。 ・国リハに入学したこと、そこにチームができ継続してプレーできる環境が整っていたこと、障害のある選手の企業雇用の機会が広がりつつあったこと、NTC イーストの完成やナショナルコーチ制度が導入されたこと、地方自治体から選手強化費が出るようになったことなどの社会的な変化の影響を受けつつ今日の地位を築いてきたと言える。
------------	---

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-Tさん

インタビュー実施日時 2023年9月17日 13:30-14:45 場所 N市民活動支援センター

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:2000年 性別:女性 障害発生年齢:18歳 障害状況:脊髄損傷(T4/5)、1種1級 リハビリ期間:9か月
略歴	・交通事故により19歳の誕生日直前に脊髄損傷、短期大学を中退する。2021年卓球と出会う。初級障がい者スポーツ指導員資格取得、2022年N市役所に勤務、2023年よりG社勤務。
競技基本情報	競技:卓球 クラス分け:3 主な戦績:全国大会出場 競技開始年齢:21歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・交通事故により19歳の誕生日直前に脊髄損傷となる。 ・最初の1か月は手術をしたM大学病院、F医科大学のリハビリ病棟転院、コルセットが外れた頃から何かしたいとウズウズしていた。 ・退院後に何かスポーツをやろうと思ったが、車椅子になった自分を認めることができず、2年間は家に籠っていた。 ・入院当初からかつて所属していた陸上クラブの監督であったM先生が毎朝LINEや手紙で励ましてくれた。退院後も定期的に連絡が来て「陸上を教えに来ないか」と誘われ、外に出るようになる。 ・しかし実際に指導してみると体が動かず見本を見せてあげられないことでのもどかしさも感じ、走っていた頃のイメージが邪魔すると思い陸上競技をやろうとは思わなかった。 ・陸上以外のスポーツを求めて、まずは車いすバスケットボールの体験をしたが怖さを感じて違うと思った。 ・次に卓球とテニスを経験、テニスは暑い、卓球は室内で体温調整が難しい自分には体に優しい競技だと感じた。 始めた場所:知人の職場の卓球クラブ 重要な他者: ① リハビリ期:M先生

	② 卓球開始期:M先生、義理の兄
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・入院中の2019年夏に、東京パラリンピックが来年あると聞いていろいろ調べた。いいなという気持ちがウズウズした。その頃はコロナで延期になるとは思っていなかった。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小学校の頃から走るのが大好きで、運動会では毎回大活躍をしていた。短距離を得意とし、たまたまM先生が指導している場で走ってみたら、競技に誘われ頭角を表す。 ・県でも上位入賞できるまでになり、高校卒業まで競技を継続していたことから、受傷後のスポーツ実施意欲につながった。 ・しかし、受傷前の競技感覚が邪魔をして陸上競技をしようとは思えず、新たなスポーツとの出会いを求めた。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況: ・周囲の人がよく体のことをわかってくれているので、安心している。 ・不満とかは全然なく、やりやすい環境でできているので、この環境を崩したくない。卓球以外、例えば仕事の相談も普通に聞いてくれる。卓球のチームでご飯を食べに行く時は、自分が入れるところを探してくれたり、入れなかったら一緒に待ったりなども自然のことである。 主な実施場所:Mアリーナの体育館、T学園 重要な他者:一緒に卓球をする役所のメンバー
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・車椅子になってから卓球を始めたので、それが生活リズムをつくっている。仕事が終わって卓球をすることが生活リズムなので、それがないと生活が崩れてしまう。 ・卓球を継続するにあたって、職場の理解があること、一緒に卓球をする仲間の理解があることが大きい。
今後のスポーツ実施	・日本代表として国際大会に出場することを目標としている。 ・それが達成できたら次は国際大会でメダルが取れる選手に。ロールモデルは同じクラスのCさん。昨年の全日本パラ卓球選手権大会で対戦し、オーラを感じるとともに憧れでもあり、そして勝ちたいという

	競技へのモチベーションにもつながっている。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士資格取得を目指して短期大学に進学したが、交通事故により脊髄損傷となり日常生活で車椅子を使用することとなった。 ・スポーツへの誘いは小学生の頃大好きだったかけっこ、そして本格的に取り組んでいた陸上競技の指導者であったM先生の存在である。 ・受傷後も常に気にかけて連絡をくれ、スポーツの場に引っ張り出してくれたことが大きい。さらに東京パラリンピック開催が近かったこともあり、スポーツへの興味、関心を引き出せたことである。 ・2021年には、車いすバスケットボールやテニスなどの見学に誘われて体験をし、最終的に卓球を選択するに至った。 ・卓球を通じた仲間との出会い、さらには初級障がい者スポーツ指導員の資格も取得することになる。卓球が生活のリズムをつくっていると言えるほど、競技環境、職場、日常生活が充実しており、日本代表として国際大会の出場、さらにはメダリストを目指している。

(作成者名)齊藤まゆみ

氏名 23-Uさん

インタビュー実施日時 2023年9月22日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:2000年 性別:女性 障害発生年齢:中途障害 障害状況:脳梗塞による右上下肢機能障害 2種3級 リハビリ期間:半年ほど入院。のち、リハビリを半年強ぐらい実施。
略歴	小学校5年生の時に障害を受傷したが、5歳から取り組んできた卓球を継続し、中学校3年生頃からパラ卓球大会に出場し、東京パラリンピックに出場した。現在はアスリート雇用で競技に専念し、パリパラリンピックの出場を目指している。
競技基本情報	競技:卓球 主な戦績:国際大会入賞
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・姉が入っていた卓球クラブで5歳の時に競技を始め、チームが強豪クラブでジュニアの大会等で実績を残していた。小学校5年生の大会時に脳梗塞を発症、半年ほどの入院を経て復学。 ・リハビリ後、自宅の卓球台で練習を再開。親は卓球未経験であったが相手をしてくれ、時間のある時は姉にも練習に付き合ってもらっていた。もともと右利きで、障害の受傷で利き手交換をしたが、左手でプレーすることにほとんど違和感はなかった。 ・中学校入学後は、他のクラブには目もくれずに卓球部に入部し、部活動と併せてクラブでも活動。中学校時代の体育は、他の生徒と同じように取り組んだが、障害の関係で長時間歩くと足が内反してしまうことから、長距離走や長時間立位で取り組む活動には苦手意識があった。 ・小学校時代から所属していたクラブの監督が、パラ卓球女子日本代表のB選手と知り合いで、中学校2年生か3年生頃にその選手と引き合わせてくれ、その時に初めてパラ卓球の世界を知った。 ・その後、地元でアスリート発掘プログラムに参加し、様々な障害を持ったパラ卓球選手と知り合い、中学校3年生頃に初めてパラ卓球の試合に出場した。

	<p>・パラ卓球の見学に行った当時、どのような選手が競技するのか、クラス分け等も全く知らなかったが、「障害があっても卓球を頑張っている人たちがいるんだ、自分も頑張ろう」という気持ちになり、将来はパラリンピックを目指したいと思うようになった。</p> <p>始めた場所:アスリート発掘プログラム(パラ卓球)</p> <p>重要な他者:B 選手、家族</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・女子日本代表の B 選手に出会い、パラ卓球の世界を知り、アスリート発掘プログラムを経て、本格的に取り組んだ。様々な障害を持ったパラ卓球選手との出会いで、自分もパラリンピックを目指したいと考ええるようになった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・障害受傷後も、「また卓球やりたいな」という思いがあり、中学校入学後は迷わず卓球部に入り、競技を継続した。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>・高校入学後は卓球部には入らず、小学校・中学校時代に入っていたクラブチームと自宅で卓球を続けた。パラ卓球に本格的に取り組むなかで、「(部活側に)国際大会があるのでこの大会には出られません」となると、チームに迷惑をかけてしまうので、パラ卓球に専念するためにも部活動には入らなかった。</p> <p>・大学進学は東京パラリンピック招致が決まり、「もっと強い環境で競技がしたい」と考え、大学卓球界では関東のほうがレベルも高く、かつパラ卓球選手が在学していたことから、地元を離れて関東の大学へ進学。</p> <p>・大学では寮生活をしながら、他の部員と同じ練習に取り組んでいたが、入部当初、練習の質の高さやこれまで自分が取り組んできた練習との違いに戸惑うことがあった。</p> <p>・大学入学前後からパラ卓球協会の強化指定選手となり、年に数回の合宿に参加していた。日常的に他のパラ卓球選手とともに練習することはなく、大学での部活動が中心となっていた。</p> <p>・大学 3 年生の時に東京パラリンピックに出場したが、「もっと上位にいった」という思いが非常に強く、その経験からより練習を頑張ろう</p>

	<p>と思えるようになった。卒業後も競技を続けようと思い、4年生の秋頃にアスリート雇用を斡旋する求人サイトに登録し、現在の所属先に入社。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在はパーソナルコーチのもとでほぼ毎日練習をしており、1日2時間～3時間程度、マンツーマンの指導を受けて、さらに3時間程度、コーチの指導している他の選手たちとともにグループで練習を行っている。 ・現在のコーチとは、昨年の国際大会時に知り合い、他の選手のコーチをしていたが、たまたま自分とコーチの自宅が近く、練習に誘われたことがきっかけで指導を受けるようになった。 ・コーチ費用や用具代、遠征費等は会社から支援を受けており、自己負担はほぼない状況である。現在の活動環境には非常に満足している。 <p>主な実施場所：コーチが手配する練習場 重要な他者：コーチ、所属先企業</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在のコーチには的確な指導をしてもらい、本当に感謝している。また、所属企業の関係者はいつも気にかけてくれ、結果を出さなければと思っている。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・直近の目標は、10月末に開催されるアジアパラ競技大会の優勝。来年のパリパラリンピックについては、ダブルスでの出場を目指している。 ・何歳頃まで現役を続けられるかわからないが、今のところは2028年のロサンゼルスパラリンピックまでは競技を続けたいと思っている。 ・引退後は純粋に海外旅行を楽しんでみたいと思っている(大会の遠征では全く観光ができず試合のみで帰国しているので)。 ・引退後の卓球との関わりについては、海外に関心を持っているので、指導者等の公式の立場ではなく、海外の人々と卓球を楽しみたい、交流を深めていきたいと考えている。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・障害受傷後、中学校時代に日本代表選手との出会いでパラ卓球の

	<p>世界を知り、その後大会等に出場するようになった。</p> <ul style="list-style-type: none">・現在はアスリート雇用で競技中心の生活を送り、パーソナルコーチのもとでほぼ毎日練習をしている。・2028年のロサンゼルスパラリンピックまでは現役を続けたいと考えており、現在の目標は2024年のパリパラリンピックの出場権を獲得することである。
--	---

(作成者名)河西正博

氏名 23-Vさん

インタビュー実施日時 2023年9月23日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:2000年 性別:男性 障害発生年齢:先天性 障害状況:脳性麻痺による左上肢機能の著しい障害、下肢機能の軽度な障害、2種3級 リハビリ期間:幼少期から定期的に通っている
略歴	小学校、中学校、高等部全て普通学校。中学校で卓球を始め、高校1年生の時にクラブチームへ。2017年の全国障害者スポーツ大会に県代表として出場し、身体一般卓球の部で優勝。大学4年生時に出場した全日本パラ卓球選手権大会の後、選考会を経て、次世代育成候補選手に選出される。大学卒業後、T社に就職。現在はクラブチームに所属し、日本代表を目指して練習に励んでいる。
競技基本情報	競技:卓球 クラス分け:立位 クラス9 主な戦績:国内大会入賞 競技開始年齢:12歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・幼少期は体が弱く、何度か救急車で運ばれた。小学校低学年頃までは時々、てんかん発作を起こしていた。 ・体育の授業は、無理しないでいいよと声をかけてくれる先生が多かった。しかし、中には難しい運動や動作を無理にさせ、できないことを指摘するような先生がいて、嫌な思いをすることがあった。 ・小学校3年生から硬式テニスを始めた。テレビで松岡修造さんを見て面白そうだと思ったのがきっかけだった。しかし、中学校には硬式テニスがなく続けられなかった。中学校では同じラケット競技である卓球を選び入部した。入部の際は近所の友達も一緒だった。 ・中学校2年生の時に卓球部の生徒からいじめられ、卓球をやめようと思っていたが、中学校3年生で出場した中体連の予選大会に、たまたまF県内で障害者に卓球を教えている指導者が来ており、声をかけられた。高校1年生の時にクラブチームに入り、本格的に卓球を始めた。

	<p>始めた場所：中学校の体育館</p> <p>重要な他者：</p> <p>開始期：お互い本音で語り合える幼少期からの友達、障害をマイナスに捉えずプラスの方向に考えることを教えてくれた祖父、一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者</p>
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビで松岡修造さん(元プロテニスプレーヤー)を見て、テニスをやってみたいと思ったこと。 ・一般の大会で、パラ卓球の指導者から声をかけられたこと。 ・県内にパラ卓球のチームがあったこと。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校 2 年生までは、体育の授業以外で運動やスポーツをすることはなかった。 ・小学校 3 年生で始めたテニスは中学校の運動部活動にはなかったが、同じラケット競技をやりたいと思い、卓球を選んだ。
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校 1 年生の時にパラ卓球チームである「T ジュニアクラブ」に入った。 ・初めて出場した全国障害者スポーツ大会の県の予選会では、ベテラン選手のテクニックについていけず、結果が残せなかった。 ・全国障害者スポーツ大会以外にパラ卓球の大会がないか探したところ、日本肢体不自由者卓球協会が主催の大会がいくつかあることがわかり、パラ卓球の大会に出場するようになった。 ・高校 1 年生の時に行われたジャパンオープン・パラ卓球選手権大会で 3 位に入った。その大会をきっかけにメダル獲得に向けて本格的に取り組むようになった。 ・大学に入ってから新型コロナウイルスの影響でほとんど練習できない状況が続いたが、4 年生で出場した全日本パラ卓球選手権大会立位男子シングルのクラス 9 でベスト 8 に入った。 ・大会後に行われた選考会を経て、次世代育成候補選手に選出された。 ・大学卒業後は T 社に就職した。クラブチームに所属し、日本代表を

	<p>目指して練習に励んでいる。一般の卓球大会をはじめ、多くの卓球大会に出場し試合経験を積むことにも力を入れている。</p> <p>主な実施場所：G 県内、N 市内の複数の体育館</p> <p>重要な他者：ライバルでもある同じクラスの選手、落ち込んだ時などに相談に乗ってくれる両親、障害に応じた指導をしてくれるコーチ</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・パラ卓球の同じクラスの選手の存在は大きい。 ・指導者であるパラ卓球のナショナルコーチがサーブの仕方やボールの捉え方など障害の程度に応じた指導をしてくれたこと。 ・協会内に次世代育成候補選手規定が設けられ、自分自身が選ばれた。 ・SNS を使って日頃の練習のことなどの配信を始めたが、フォロワーが徐々に増えている。自分を応援してくれる人がいるのはとても嬉しい。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・強化指定選手の枠を獲得し、国際大会に出場できる選手になること。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツを始めるにあたっては、お互い本音で語り合える幼少期からの友達、障害をマイナスに捉えずプラスの方向に考えることを教えてくれた祖父、一般の大会で声をかけてくれたパラスポーツ関係の指導者が重要な他者として挙げられた。 ・県内で通える範囲にパラ卓球のチームがあったこと、パラ卓球の同じクラスの選手の存在は継続に影響している。 ・SNS を使って、日頃の練習のことなどの配信を始めたところ、フォロワーが徐々に増えている。自分を応援してくれる人がいることがモチベーションアップにつながっている。 ・直近の目標は強化指定選手の枠を獲得し、国際大会に出場できる選手になることである。

(作成者名) 兒玉友

氏名 23-W さん

インタビュー実施日時 2023 年 9 月 27 日 場所 M 県視覚障害者支援センター

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1970 年 性別:女性 障害発生年齢:発病 25 歳 (多発性硬化症)、 障害発生 28 歳 障害内容:視覚障害 1 種 1 級
略歴	小中高校、大学と普通校に通う。25 歳の時に病気で視覚障害となり、28 歳で全盲。その後 38 歳でサウンドテーブルテニスに出会い、徐々に仲間を増やす。全国障害者スポーツ大会に 3 回出場、サウンドテーブルテニス全国大会入賞。現在はサウンドテーブルテニスとともにユニバーサルスポーツと言える SS ピンポンの普及にも力を入れている。
競技基本情報	競技:サウンドテーブルテニス クラス分け:なし 競技成績:国内大会入賞 競技開始年齢:38 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校の時は同じ学校の仲間とバレーボールをした。バレーボール部ができてみんなと一緒に入部するといった形であった。中学校では卓球部。バレーは背も低かったし今度は卓球と思ったため。高校では茶道部。大学ではスキーやテニス等のサークルで様々なスポーツを行った。 ・M 県内で就職、入社 3 年目で多発性硬化症を発症。その後、治療と再発を繰り返す。28 歳 8 回目の再発で両目の視力を失う。初めて再発した時に会社を変わったが、視力を失った時に仕事を辞めた。自分が障害者になるとは思っていなかったし、視力の衰えや身体の機能低下などがあり、この間は、何のために生きているのか、どうやって生きていけば良いのか、などと考え精神的にもつらかった。 ・退院後、医師の勧めもあり点字を習い始める。自宅で自分にできることを少しずつやるという感じだったが、家の中にいることが多かった。2~3 年後、S 市の社会福祉センターの中途視覚障害者対象の点字教室に通うようになった。S 市の視覚障害者友の会という組織にも入り、教室や友の会などで同じ中途視覚障害者の人から音声

	<p>パソコンのこと、グラウンドゴルフやサウンドテーブルテニス(以降STT)の体験教室のことなどを知った。38歳でSTTに出会った。中学で卓球をやっていたので、見えない人がどうやって卓球をするのか興味を持ち、参加したのが最初である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めての体験の時は審判をしている人がプレーの様子をいろいろと教えてくれた。玉から音が出るのに驚いた。やってみるとラケットに当てるのが難しく、当たると嬉しく、この後もやってみたくと思った。 ・その後、審判員の練習会に2か月に1度程度ガイドヘルパーと一緒に出かけ、プレーするようになった(生活面では家族や友人がガイドしてくれるが、自分の用事で遠方に出かける時はガイドヘルパーを利用することが多い)。 ・視覚障害があることは徐々にではあるが受け入れられるようになった。スポーツを始めてからは特に受け入れが進んだと感じている。最初は上達しなかったが、やりたいことが見つかって、目標ができたことが大きい。 ・その間も病気を再発していたが、入院していても「私、こんなところで寝ている場合じゃない」と思えるようになり、やりがいができ体も変わってきたような気がする。STTに出会う前は病気のことばかり考えていた。 <p>始めた場所:T市内の身体障害者福祉センターの体育館 重要な他者: STTに最初に参加した時の審判員(指導員)の方 S市の点字教室で視覚障害者協会の行事に誘ってくれたIさん</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・福祉領域における各種組織や事業があったこと(視覚障害者支援センター、身体障害者福祉センター、点字教室など)</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・もともとスポーツ好きだった。中学校の時は卓球部だったためSTTに関心を持った。プレーの構造が卓球とは違うので卓球の経験が直接のSTTにつながるということはないが、後述のSSピンポンのダブルスでペアが交互に打つ時の移動などには役立っている。</p>

<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2009 年から STT を始め、県内の大会に出始めた。全国障害者スポーツ大会にこの競技があることを知り、出場したいと思い、練習を始めた。翌年 2010 年の千葉大会に出場した。その後、2014 年(長崎大会・フライングディスク)、2016 年(岩手大会・STT)にも出場した。 ・自ら積極的に動き、T 市身体障害者福祉センター、I 市福祉健康センター、S 市社会福祉センター(2010 年 10 月からは月 2 回程度)などで練習を実施。S 市の体育館ではフレームを作り(大工の友人の手作り)、一般の卓球台に取り付けて練習をした。 ・その後 STT 卓球台を各所(N 市、K 町)などで購入してもらい、練習頻度も増えていった。始めた頃は選手が少なく、翌年の体験会には点字教室の人など周りの人に声がけをして少しずつ増えていった。当初県内には 10 名程度の人しかプレーしていなかったが少しずつ増えた。 ・現在はメンバー 3 人～4 人程度で練習することが多い。週に 1 回～2 回練習。10 時～15 時くらいまでやれる時にはやっている。ウェイトトレーニングのようなことは特にしていない(体調の関係もあるので)。 <p>【SS ピンポン(生涯スポーツピンポン)について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2015 年に SS ピンポンという競技を始めた。これは STT のルールを修正したもので(ダブルヒットあり、アイマスクはつけない、サーブ時にボールが動いても良いなど)、視覚障害のない人も一緒にプレーすることが前提となっている。聴覚障害があっても参加可能。晴眼者のペアでのダブルスも可能。 ・また晴眼者も同じプレーヤーということで障害のない仲間が自然とガイドヘルパーの役割を果たすケースも出てくる。台は一般の卓球台にフレームを取り付けて行うことから、STT 台の有無に関係なく、一般の卓球台のあるところであればどこでも誰でも参加できるというユニバーサルスポーツとしての特徴を持つ。 ・SS ピンポンは、晴眼の子供がアイマスクなしで STT に参加したこと
------------------------	--

	<p>をきっかけに STT 選手仲間で話し合っできたスポーツ。当初は 5 人で始めたものが、現在では県内を中心に約 2,000 人の愛好者がいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A 県は障害者スポーツセンターがあるが STT 人口は増えていない。練習時などにガイドヘルパーの利用が必要なことが足かせになっているのではないか。 ・移動時には一緒に楽しむ仲間がガイドをしてくれるため、ガイドヘルパーを依頼する頻度が減った。現在は小中学校の福祉関連授業で紹介している。練習は STT の練習時に調整しながら一緒にやっている。 ・見える人と一緒にやるのでラリーが続き、視覚障害者にはもってこいの練習となり、実際に STT の全国大会では上位入賞をするようになった。 ・現在は SS ピンポンの協会(NPO 法人 2019 年～)をつくり活動。 ・全国障害者スポーツ大会のデモンストレーション競技に採用されていた(コロナ感染の影響で大会自体が開催されなかったが、デモンストレーション競技は開催することができた)。デモンストレーション競技に選ばれたことをきっかけに NPO 法人を立ち上げた。 <p>必要な支援:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害という点から言うと、移動に対する支援が必要だと思う。 ・スポーツを体験できる機会(体験教室)などをもっと行うことで障害のある人のスポーツ参加が増えると思う。 <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一緒にプレーしている視覚障害の仲間 ・S 市を中心に応援してくれるボランティア ・SS ピンポンに関しては、協会の会長 M さん(視覚障害者)が会の始まりの時からリーダーシップをとってくれた。
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全国障害者スポーツ大会でのデモンストレーション競技採用 ・Y 市社会福祉協議会からの福祉授業の依頼 ・STT の県大会、地方大会、全国大会の例年の開催

<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・STT では全国優勝を目指したい。 ・SS ピンポンを普及させたい。今後は SS ピンポンに関してはスポーツ推進委員と連携して広めていきたい。 ・学校で運動はしたいのだけれど苦手だったりする子供たちのためのレクリエーション的な部活動に入れてもらえたら良いと思う。そのための働きかけをやっていきたい。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・障害発生が 25 歳で、それまでは一般の小中高校、大学に通っていた。障害発生前からスポーツは好きなほうで、小学校の時はバレーボール、中学校では卓球、大学ではスキーやテニスなどをサークルに入っていた。 ・障害発生後、病気の再発が繰り返され、精神的にも身体的にもつらい時期があった。退院後に医師の勧めで点字教室に通うようになり、視覚障害者友の会にも入り、そこで様々な情報を得るようになる。その一つが STT に関するものであった。 ・38 歳の時、T 市で行われていた STT 初心者教室に参加し STT を体験した。この時 STT の面白さを認識し、継続してプレーするようになった。全国障害者スポーツ大会(全スポ)出場という目標ができたこともあり、障害受容も進んだ。STT 卓球台があるところが限られているため練習の機会も少なかった。翌年の全スポ・千葉大会に参加した。 ・その後、自ら声をかけ、STT の仲間が増えていった。練習場所も STT 卓球台を購入してくれるところが一つ、二つと増え、プレーの機会も当初は月に 1 回程度から現在では週に 1 回から 2 回と増えた。 ・2015 年には障害のない子供と STT をプレーしたことなどがきっかけとなり SS ピンポンを開発、プレーするようになる。障害のない人も一緒にプレーできるだけでなく、同じスポーツをする仲間としての障害のない仲間が増え、ガイドヘルパーを依頼する頻度が減った。 ・全国障害者スポーツ大会開催が決まり、デモンストレーション競技となったことをきっかけに SS ピンポンの組織を NPO 法人化した。仲間 5 人で始めた SS ピンポンだが、現在は県内を中心に、約 2,000 人の愛好者がいる。今後は STT で全国優勝を狙うとともに SS ピン

	<p>ポンをさらに普及していきたいと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none">・障害発生後、各種制度の中でSTTの情報を得、プレーするようになった。自ら仲間を増やしたり、卓球台の購入を要望したりするなどしてプレーの機会が徐々に増えた。・さらに新しいスポーツ SS ピンポンを開発し、障害のない人とともにスポーツを楽しむだけでなく、一緒にスポーツを楽しむ仲間として視覚障害によりできない部分をサポートしてもらうなど、スポーツを通じた「共生社会」の実現を実践していると言える。
--	---

(作成者名)藤田紀昭

23-X さん

インタビュー実施日時 2023 年 10 月 14 日 13:00-14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:北海道 生年月日:1969 年 性別:男性 障害発生年齢 34 歳 障害状況:脊髄損傷(1 種 1 級) リハビリ期間:約半年
略歴	中学は柔道部だが、ほとんど練習はしていなかった。高校からラグビー部に入り、高校卒業後は家業の酪農を継いだ。34 歳でバギーのレース中の事故で脊髄損傷になった。障害を持った後、車いすバスケットボール、チェアスキーを経て、車いすカーリングを本格的に始める。2008 年に初めて日本選手権に出場し入賞、2011 年以降複数回、世界選手権に出場している。
競技基本情報	競技:障害前:ラグビー、障害後:車いすバスケ、スキー、カーリング クラス分け:下肢障害(脊髄損傷) 競技成績:国際大会出場 競技開始年齢:車いすバスケットボール 35 歳、車いすカーリング 40 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・小学校は全校生徒 16 人程度の学校で、スケートは速いほうだった。 ・中学校は柔道部だったが、ほとんど練習しないような部活だった。 ・高校は(バイク好きだったので)バイク通学が認められている B 高校普通科に入り、仲の良かった中学からの先輩の誘いを受けてラグビー部に入部した。その後 20 キロ痩せるぐらい猛練習をした。その頃からスポーツに向けての気持ちが強くなった。人生が変わるくらい打ち込んだ。ラグビーが盛んな B 町で、同じ町の出身の先輩たちにも誘われた。 ・高校卒業後は家業の酪農(肉牛飼育)を継いだ。卒業後も社会人チームでラグビーを続けた。 ・34 歳の時、バギーのレース中の事故で脊髄損傷になった。今後歩けないことがわかった時は落ち込んだが、もう人生終わりだというほどのことは思わなかった。これからどうしようかと考えた。約半年間

	<p>入院してリハビリを行ったが、酪農はやめることになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入院中に会った車椅子リース業者の方(車いすバスケットやスキーをやっていた人)が誘ってくれて、退院してからすぐに車いすバスケットボールを始める(2004年4月)。 ・K市のチームに入り、そこで段差の越え方など日常生活に必要な様々なことを学んだ。車いすバスケットはチーム登録しておらず、試合に出ることはなかった。 ・仕事は、B町からK市に引っ越して、代理店として車椅子の販売、また、地元企業で障害者雇用のアルバイトをしていた。そして2022年に現在のA社に雇用された。現在はデュアルキャリアという形で、仕事も競技もやるという形態である。引退後も社員として残ることができる。 <p>→チェアスキー、カーリングは障害者スポーツ継続の状況に記載</p> <p>始めた場所:</p> <p>車いすバスケット:K市の一般体育館(バスケット用車椅子が当時から10台くらい置いてあった)</p> <p>カーリング:T町の屋内カーリング場</p> <p>重要な他者:</p> <p>車いすバスケット:車いすバスケット、スキーをやっていた車椅子メーカーの方</p> <p>車いすカーリング:O氏、T町のカーリングの普及に多大な貢献をし、カーリング界では有名な方。この人からスキー場に向かっている途中に電話があり、カーリングを始めることになった。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・車椅子リース、販売会社の方が車椅子利用者でスポーツ選手だった。 ・K市に車いすバスケットのチームがあったこと。体育館の使用等に関してこのチームの実績があり、使いやすい環境であった。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・障害を持つ前にラグビーをやっていたことはプラス以外の何ものでもない。ラグビーに真剣に取り組む中で負けず嫌いの気持ちが培われた。

	<p>・体力的にも腕力等ラグビーをやっていたことが好影響している。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>・2004年の12月にチェアスキーを体験。乗り物が好きでスピード系の競技が好きだということがわかっていたのではまってしまうと思いき、スキーに誘われても拒否していたが、結局、はまってしまった。最初うまくいかなかったことで逆に火が付いた。最初は週1回くらいのペースで滑っていた。翌年からは週4日くらいのペースで滑っていた。</p> <p>・スキーは北海道では何度か優勝したが、全国では世界トップクラスの選手がいて勝てなかった。40歳までは競技スキーをやり、それ以降はエンジョイスキーをやろうと決めた。</p> <p>・2006年にK市で車いすカーリングの体験会があり、2回ほど体験をした。まだこの時は車いすバスケもスキーも本格的にはやっていなかったものの、カーリングにはあまり関心は向かなかった。40歳で競技スキーをやめたらカーリングをやろうと考えた。</p> <p>・バギーは基礎をやらずに怪我をしたので、スキーでは基礎をしっかり身につけようと思いき、チェアスキーの2級、1級、指導員、検定員などの資格を取得。</p> <p>・2007年1月にK車いすカーリングというチームをつくった。翌2008年に初めて日本選手権に出場し入賞。</p> <p>・2011年に東日本大震災の影響で単独チームではなく、混成チームとして初めて世界選手権に出場(予選会ができなかったため)。</p> <p>・2012年にKFというチームを立ち上げた。K車いすカーリングチームは大人数だったが、世界で勝てるチームを目指したいという思いのもと、集まったメンバーで結成。2014年秋に世界選手権にチームKFとして出場。</p> <p>・2016年、2022年は日本で優勝してフィンランドの世界選手権に出場。</p> <p>・現在、フレックス制で勤務しており、練習日はその時間に合わせて仕事を切り上げている。カーリングは週に1回~2回の練習、現在車いすバスケットボールを有酸素運動のトレーニングとしてやっている。</p>

	<p>重要な他者：</p> <p>地元カーリングホールがあること。日本選手権、世界選手権、パラリンピックといった目標の一つ一つが大きな動機付けになっている。</p> <p>健常者と一緒に試合ができることも動機付けになっている</p> <p>チームにスポンサーとして経済的支援をしてくれている企業。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・カーリング場が近くにあったこと ・K 市はカーリングが盛んで有名チームの存在が大きい。日本代表にもなったことのある車いすのチームにも支援をという機運がある(逆にカーリングホールが少ないことが普及面の壁になっている)。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・車いすカーリングのチームはどこもメンバーが集まらずに苦勞しているが、K カーリングクラブは若い選手を含めて 5 人揃っている。札幌パラリンピックの招致がなくなった今、選手としてどこまで競技カーリングがやれるかわからないが、世代交代していく中で貢献したい。 ・競技の一線を退いたとしてもエンジョイカーリングをやっていると思う。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・障害を持つ前にラグビーをしており、そこで培われた精神や体力が現在に好影響を与えている。 ・車いすバスケットボールは入院中に知り合った車椅子の販売リース会社の方が車いすバスケットボールやスキーをやっている人で、この人に誘われたことが大きい。 ・カーリングに関しては K 市で行われた体験会に参加したことが最初の経験となっている。その後、K 市にカーリングを広げた O 氏に誘われたことがきっかけとなっている。 ・K 市はある意味カーリングの町で、有名チームの本拠地でもある。町全体がカーリングに関心を持って応援しており、行政や企業、大学などが車いすチームも同じように応援・支援してくれている。

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-Yさん

インタビュー実施日時 2023年10月19日 19:00-20:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:北海道 生年月日:1998年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:二分脊椎 1種1級 リハビリ期間:赤ちゃんの時から療育に通っている。幼少期の頃は訓練というよりは遊んでいるような感じ、小学校の頃から歩行訓練などが入ってきた。
略歴	保育園、小学校、中学校と普通校に通学、高校は特別支援学校。専門学校に進み、医療機関に就職後、現在の職場に転職した。チェアスキーや車いすマラソンなどをやったが、恐怖心の少ないカーリングを中学生の頃から始め、高校生の時、初めて世界選手権に出場。専門学校の人に車の免許を取り移動が自由になった。現在は公務員として働きながら週2~3回練習している。
競技基本情報	競技:車いすカーリング クラス分け:下肢障害 競技成績:国際大会出場 競技開始年齢:中学校入学前後
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・保育園、小学校、中学校、大学と普通学校に通園、通学した。高校のみ特別支援学校に通学。小中学校の時は学校行事(遠足など)で一人での参加が難しい時は親が付き添った。 ・小学校の授業でスキーがあり、授業に参加できるように保育園の頃に地元のスキー場でチェアスキーを体験した。 ・小さな地区で学校は複式学級、上に姉と兄がおり、周りの子供も大人も知っている中で普通に受け入れられた。小学校は入学前に新しい校舎になり、バリアフリーだった。進学するに従って様々な対応(校舎やカリキュラムなど)を自治体や先生方がしてくれていた。 ・障害の影響で水頭症治療として小さな頃からシャントが入っていたが、これによる運動制限のようなものはなく、成長とともに抜去し現在はない。 ・小学校の体育の授業では縄跳びなど跳んだり、立ったままのもの時だけは見学したが、とりあえず何でも挑戦はした。水泳にも参加し

	<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分にはなぜ障害があるのだろうと思ったこともあったが、両親や兄弟が普通に育ててくれたこと、地域で小さい時から受け入れられて育ってきたことから、いつの間にか障害の受け入れもできていたと思う。 ・中学校の体育の授業はだんだんと体力的な差がついてきてきついものがあった。中学校の時は吹奏楽部でクラリネットを演奏していた。 ・小学校の時にチェアスキーを本格的に体験するようになったが、怖さもあり、あまり好きではなかったのでやめた。車いすマラソン(短い距離)も体験した。その後いろいろな人から車いすバスケットボールやカーリングなどのスポーツを紹介され、勧められた。 ・カーリングは車いすバスケットボールと同時に紹介され、やりたいと思い、親に頼んで車で連れていってもらうようになった。 ・初めてカーリングをしたのは T 町にあったカーリング場で今は使用されていない。自宅からは車で 1 時間強かかる。一般的に女性が初めてカーリングをすると腕力のなさもあり、ストーンをハウスまで届かせることができないが、自分は普段から車椅子で移動していることもあって、ハウスどころか後ろの壁まで届いた。そんなこともあり、周りの人から褒められ、スキーと違って恐怖感もないので続けることにした。 ・当時、夏場はカーリング場が使えないので冬場、月に 2～3 回程度練習していた。 <p>始めた場所:T 町にあった旧カーリング場</p> <p>重要な他者:</p> <p>カーリングに誘ってくれた、チェアスキーを教えてくれていた人 送り迎えなどしてくれた両親</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小中学校とも一般学校の受け入れに大きな問題がなかったこと(自治体の支援があったものと考えられる)。 ・近隣に車椅子利用者でスポーツをしている人がいたことでスポーツ

	<p>に関する情報が入ってきやすかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カーリング場があったこと。
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・先天的障害であるが、日頃から車いすを利用していることなどがカーリングを始めるにあたって有利に働いたことが推察される。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校は親から離れて過ごしたいという気持ちもあり、寮が整備されていた特別支援学校に入った。寮生活は親の付き添いがなくても、行きたいところに行けるようになって良かったところもあるが、様々な拘束(例えば携帯電話の利用に制限があるなど)、良くなかったところもあった。勉強も自分のレベルに合ったものではなく面白くないと感じることがあった。自分自身と同じ先天性の障害がある友達や先輩と関わるができる環境だったことは良かった。 ・体育の授業は一人ひとりに合った道具を使って参加するようなものがほとんどだった。具体的にはサッカーやゴロバレー、ボッチャ、卓球などをやった。部活動はアーチェリー部に入っていたが部活よりも委員会の図書委員の活動を好んでしていた。 ・カーリングは長期休暇など実家に帰った時に不定期でやっていた。競技を始めてまもなく試合に出たが、最初の頃は自分の思ったとおりに行かず、悔し涙を流すことが多かった。 ・中学校の時に日本選手権に出場するようになった。競技を続けていくうちに道内ではいい成績を残せるが、全国大会となると表彰台に行けるか行けないかのところだった。T 町に新しいカーリング場ができ、通年で使えるようになってから全国で上位を狙える位置につけるようになった。高校 2 年生の時、世界大会に出場した。 ・高校卒業後専門学校に 2 年間通い、様々な資格を取得。専門学校に在学した後、地元の医療機関に勤務。その後、T 町役場に転職し、現在に至る。 ・専門学校在学中に車の免許を取り、移動の制約がなくなる。現在、週 2～3 回練習するが、リーグ戦中は週 4 回の時もある。

	<p>・カーリングを続けている理由の一つはパラリンピックに出てみたいという目標があることである。また、異性が含まれていないといけないというルールがあり、競技人口が少なく男性比率が多いため女性の選手となると尚更必要で、責任感もある。また、チームメンバーは自分の親世代の人もいて、ある意味、居心地が良いということで続けやすいかもしれない。</p> <p>・障害のある人がスポーツをするためには、まずは本人がスポーツをやりたいという意思を持つことが重要だと思う。そのためには小さい時から(障害があるから)これはダメ、あれもダメということではなく、外に出してあげて、もっとポジティブな気持ちにしてあげることが必要だと思う。</p> <p>・スポーツにかかる経費は大会によって国から助成金が出たり、自治体の助成金があったりするが、個人出費もないわけではないのでもっと支援の輪が広がり活動しやすい環境になればと思う。</p> <p>重要な他者:カーリングチームメンバー(パラリンピック出場という目標)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・カーリング場とカーリングチームの存在</p> <p>・地元企業からの支援金があること</p> <p>・東京パラリンピック開催決定以降、自治体等の助成金制度がつけられたこと</p> <p>・札幌パラリンピック招致がなくなったこと</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>・続けられるうちはカーリングを続けたい。札幌パラリンピックに出場するという夢もあったが大会開催が難しい状況で、どこまで自分が続けられるかはわからない。できれば今よりもうまい選手になりたい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>・両親が他の兄弟(兄、姉)と同じように接し、育ててくれたこと、幼少期から他の子供たちと一緒に遊んだりして、そうした関係のある中で小中学校と進学し、また自治体の支援等もあったことで、普通に受け入れられ成長してきた様子がうかがわれる。</p> <p>・カーリングはまずはカーリング場があったこと、スキーのような恐怖</p>

	<p>感もないこと、チームメンバーに温かく迎え入れられたことなどから始めることができ、また、継続することができている。</p> <p>・札幌でのパラリンピック開催が怪しくなってきたことから、ややこの先の目標の掲げ方が定まっていない印象を受けた。</p>
--	--

(作成者名)藤田紀昭

氏名 23-Zさん

インタビュー実施日時 2023年11月7日 19:00-20:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1991年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:肢体不自由(骨形成不全症・右肘関節なし)2種4級 リハビリ期間:なし
略歴	幼稚園、小中高と普通校に通学、中学校の部活で卓球を始め、高校2年まで続けたが、体の不調などが重なり一旦卓球から離れた。一浪後、大学で卓球を再開。大学卒業後2年間フリーターで自由に過ごした後、市の職員に採用された。フリーターの時に障害者手帳を取得し、障害者の卓球大会に出場するようになったが、最初の大会でコテンパンに負けたことで衝撃を受け、のめり込む。現在、練習や試合の多くは障害のない人と一緒に行い、障害者卓球大会にも併せて出場している。
競技基本情報	競技:卓球 クラス分け:クラス10(軽いほうから2つ目) 競技成績:国内大会入賞 競技開始年齢:中学1年。障害者卓球は24歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・幼稚園、小中高校と一般校に通学。障害を意識することなく他の子供と同じようなことをして育った。親の考えもあり、障害者手帳はすぐには取得しなかった。 ・小学校の頃は空手や水泳を習ったが、低学年でやめた。体育の授業も他の子供と同じように受けていたが、跳び箱やマット運動は障害の関係で苦手だった。それでも友達がいろんなやり方を提案してくれたりして雰囲気は良かった。いじめなども一切なかった。 ・中学校に入学してすぐに、友達に誘われて卓球部に入り、3年間続けた。両手を使うスポーツは避けたかった。競技成績は地区大会予選で負けるようなレベルだった。卓球をやるに際して障害の影響はこの当時はなかった。中学校でも体育の授業は工夫をしつつ普通に受けていたが、両手を使うバレーなどは苦手だった。 始めた場所:中学校の体育館

	重要な他者：卓球部に誘ってくれた友人
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	一般学校に通学し、他の多くの子供と同じように中学校で部活動を始めた。その競技が卓球だった。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	先天的な障害のため記述なし。
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> ・中学 3 年の大会が終わっても中高一貫校だったので高校の先輩などと練習をしていた。高校でも迷わず卓球部に入った。 ・高校 2 年の時に卓球の成績の伸び悩み、側弯の影響、腰痛など様々なことが重なり、キャプテンだったが、一旦練習に出ることをやめた。 ・1 年浪人の後、大学に入学。大学の体育の授業で卓球を選択した。クラスにいた卓球部の先輩に誘われたが、大学に 2 時間かけて通学していたこともあり、週何回かの練習参加という条件で、夏ぐらいに入部。 ・大学 2 年から徐々に卓球にどっぷりとはまるようになった。入学した大学が第 1 志望でなかったことで劣等感もあり、何か一つ大学で頑張るものを見つけてそれをやりたいと考えた。それが卓球だった。身体のケアのための整骨院も見つけ、週 2 回ほど通いながら競技を続けた。 ・大学 3 年か 4 年の頃、地元で練習している時に障害者卓球関係者と知り合い、障害者卓球の存在を知った。障害者卓球への誘いを受けたが、障害者手帳を取得する気持ちもなかったので断っていた。 ・大学卒業後 2 年間フリーターだった。その間も大学のクラブや地元のサークルで練習。フリーター 1 年目の頃、障害者手帳を取得して大会に出てみないかと再度誘いを受け、障害者手帳を取得した。その後、障害者卓球の練習会などに出て、フリーター 2 年目の 3 月に初めて障害者卓球大会(日本肢体不自由者卓球協会主催のジャパンオープン)に出場した。実力の低いほうのクラスに出場することになり、最初は自分が優勝するのかと思っていた。しかし、蓋を開けたら予選敗退、自分よりも障害の重い選手に負けたことに衝撃を受け、

	<p>また卓球にのめり込み始めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在はローカルな大会を含めると月に 1 回くらい試合に出場している。ほとんどは健常者の大会である。 ・以前は週 3 回程度コンスタントに練習していたが、今は仕事が忙しいこともあり、週 1 回程度、試合前に 2 回か 3 回無理して練習。ほとんど障害のない人とやっている。 <p>重要な他者：</p> <p>中学校の時の卓球部のメンバー、他校のライバル、高校の先輩 大学卓球部の OB 会会長、大学クラブのメンバーや他大学の選手 障害者卓球の役員の Y さん</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全国障害者スポーツ大会の開催が予定されていたこと(卓球を含む様々な障害者スポーツが活性化しており、障害者手帳を取得する時に大会への出場のこととも言われた)。 ・全国障害者スポーツ大会に出場したことで、障害者卓球の普及に関しても目が向くようになった(次の項目参照)。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も卓球を続けていく気持ちはあるが、トップ選手との差は歴然としていて、そこまでは行きつかない気がしている。自分の目標を設定してやっていきたい。 ・今年の全国障害者スポーツ大会に出場し、非常に良い体験ができた。精神障害や知的障害の人と一緒に、彼らがこの大会に出場できるというのは大変に有意義なことではないかと感じた。こうした人たちが卓球できる環境は非常に重要だと感じ、それまで断り続けていた県の障害者卓球協会役員の依頼を受けることにした。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・障害があったものの、幼稚園、小中高校、大学と一般の学校に通学し、中学校の部活で卓球を始めた。障害者の大会に出るという認識は大学卒業までなかった。体調不良や成績の伸び悩み等が重なり、高校 2 年で一旦卓球から離れるが、大学に入って再開。 その後障害者手帳を取得し、障害者卓球大会に出場したものの自分より重い障害の選手に負けてしまい衝撃を受ける。 ・現在、練習や試合の多くは障害のない人と一緒であるが、障害者卓球の大会にも併せて出場している。

	<p>・全国障害者スポーツ大会で様々な他の障害のある人たちとも出会い、刺激を受け、自分の競技を続ける一方で障害のある人の卓球の普及や振興にも携わろうと考えている。</p>
--	---

(作成者名)藤田紀昭

附録

ユニ★スポ調査票

『チャレンジ！ ユニ★スポ』1回目アンケート』(事前学習前) ←

Q1. あなたの性別は？(どれかに○) 男 女 こたえたくない ←

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 _____ 年生 ←

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○) ←

- 1) 障害のある人と仲良くなる？ ←
はい ・ いいえ ・ わからない ←
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？ ←
はい ・ いいえ ・ わからない ←
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれる？ ←
はい ・ いいえ ・ わからない ←

Q4. パリ 2024 オリンピック・パラリンピックに興味ありますか？(どれかに○) ←

- () どちらも興味ある () オリンピックだけ興味ある ←
() パラリンピックだけ興味ある () どちらも興味なし ←

Q5. 知っている障がい者スポーツがあれば種目名を書いてください。(知っている人だけ) ←

Q6. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○) ←

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要 ←
() 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ ←
() 自由に動けない () できることがある () 車いす ←

Q7. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。 ←

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい ←
() 不便 () 激しい () 障害者のためのもの ←

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。 ←

※Q4 のオリンピック・パラリンピックに対する興味は、2021 年度まで「東京大会」、2022 年度より「パリ大会」で尋ねている。

Q8. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
- () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
- () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに〇)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- () あまりボールを渡さないようにしてあげる
- () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
- () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生日 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ ユニ★スポ』 2回目アンケート (体験会直後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. ボッチャの感想であなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(いくつでも)

- () 思っていたより面白かった () 思っていたとおりがたかった
- () 思っていたほど面白くなかった () 面白くなかった
- () 友達とボッチャをやってみたい () ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
- () 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
- () 自由に動けない () できることがある () 重いです

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
- () 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
- () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
- () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- () あまりボールを渡さないようにしてあげる
- () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
- () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前最初の文字(平がな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前最初の文字(平がな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ ユニ★スポ』3回目アンケート (体験会から数ヵ月後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
- () 不便なことがある () そのひらしさ () リハビリ
- () 自由に動けない () できることがある () 単いす

Q5. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
- () 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

Q6. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
- () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
- () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- あまりボールを渡さないようにしてあげる
- みんなが車いすにのって、車いすバスケをする
- 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前の最初の文字(平がな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前の最初の文字(平がな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ユニ★スポ』アンケート (体験会から約1年経過後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 年生

Q3. ボッチャ体験会のあと、ボッチャをやる機会がありましたか。(どれかに○)

1) やる機会があった。 ・ なかった ・ 覚えていない。

↓

2) やる機会があった人は、何回ぐらいやりましたか？

1～3回ぐらい ・ 4～6回ぐらい ・ 7回以上

Q4. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

1) 障害のある人と仲良くできる？

はい ・ いいえ ・ わからない

2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？

はい ・ いいえ ・ わからない

3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？

はい ・ いいえ ・ わからない

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

() 困っている () 個性的 () 手伝いが必要

() 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ

() 自由に動けない () できることがある () 単いす

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

() 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい

() 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
 () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
 () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
 () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
 () あまりボールを渡さないようにしてあげる
 () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
 () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
 () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

調査報告書の各種データについて

本報告書の各種データは当財団ホームページにて公開しています。

報告書のPDFデータの他に、調査票データ等も公開予定です。

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

当財団について スポーツ体験促進事業 チャレンジ支援事業 調査研究活動

未来を、拓こう。

スポーツのちからで。
挑戦するところで。

スポーツ体験促進

チャレンジ支援



スポーツ体験促進事業
体験を通じてスポーツの素晴らしさを伝える事業領域

詳しく見る →



チャレンジ支援事業
スポーツを通じて未来人材の成長を支援する事業領域

詳しく見る →

2023(令和5)年度
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

－ 競技団体の実態、大学の現状、ユニ★スポ体験の効果、選手のキャリアに着目して －

2024年3月 発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)
〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500
TEL 0538-32-9827 FAX 0538-32-1112

ISBN 978-4-9910824-5-0

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しをYMFSにご送付ください。



公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9910824-5-0

2023(令和5)年度
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究
— 競技団体の実態、大学の現状、ユニ★スポ体験の効果、選手のキャリアに着目して—